
十色のキセキ

旅がらす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十色のキセキ

【Nコード】

N4885I

【作者名】

旅がらす

【あらすじ】

ジョウト地方、ワカバタウンの町外れにある『ポケモン屋敷』に住む少女・トイロ。考古学者である父の帰りを待つ彼女にやって来たのは、父が消息を絶ったという知らせだった。父は何故、消えたのか。一体、何を調べていたのか。父を探すため、少女は小さな田舎町から世界へと旅立つ決意をする。これは、数々のポケモンたちと、それに関わる少年少女たちのキセキの物語。

Prologue 父と娘（前書き）

はじめての方ははじめまして。お久しぶりな方はともです。な旅がらすです。

今更ですが、今作はポケットモンスター金銀リメイク記念作品のもりで書いてます。

でも、作者は超がつくくらいに遅筆ちゃんなので、なかなか物語が進まないかもです。（そのせいか、一話一話が長かったり……）

最近、DS版で『GBプレイヤー』なるものを手に入れ、昔懐かしの音楽を楽しんでいます。

特に、エンジュシティとヒワタウンがお気に入り。ボールはフレンドボールが一番好きです。

ポケモンは赤緑時代にお菓子のオマケでついできたシャワーズのシールに惚れて以来、RPGの王道であると信じて疑わない旅がらすのポケモン小説。

お楽しみ頂ければ、幸いです。

Prologue 父と娘

なにかの始まりを告げる風が吹く町、ワカバタウン。

「る、る、るー」

ワカバタウンの町外れ。カントー地方との境であるトージョウの滝がよく見える場所に、一軒の家が建っている。

洋館に近い造りをした、二階建てで少し大きな家。その一階、台所に当たるところで、一人の少女が鼻歌を口ずさみながら、火に掛けられた鍋を覗き込んでいた。

「んー。美味しそー！ ルーくん、お料理うまくなったのだねー！」
真つ白なボブヘアに蒼い花卉の花を模した髪飾りをつけた、まだ十にも満たないであろう少女は、鍋の中味 シチューのようだけに満足そうに頷くと、後ろで皿を並べているポケモン エルレイドに声をかけた。

「エルツ！ エルルツ！」
声をかけられたエルレイドは、少女が台を使って鍋を覗き込んでいる様を見ると、慌てた様子で少女に近寄り、台の上から少女を下ろした。そして、少し険しい目で少女の頭を軽く叩く。

「イタツ！ ……むうう。ケガなんかしてないし、するつもりもないのだよー」
「……………」

叩かれたことに不服を述べる少女を、エルレイドは静かに見下ろした。その険しい目付きに、少女はエルレイドが自分を心配しているのだと理解し、申し訳なさそうに俯く。

数秒後、エルレイドは少女の反省している仕草に僅かに微笑みを溢すと、鍋の火を弱めて少女を食卓に座らせた。食卓には、もう一匹、別のポケモンが座っている。

「りーるー？」

「うう。ルーくんって、優しいのか怖いのがよく分かんないのだよー。ね、まあちゃん？」

叩かれた頭をまだ擦りながら、少女はもう一匹のポケモン　マリルに視線を投げた。濃い水色に白いお腹、毬のような体つきをしたマリルは、少女の言葉が理解できないのか、小さく体を斜めに傾げながら少女の話を聞いていた。

そこへ、シチューの入った鍋を持って、エルレイドが食卓にやってきた。先程、テーブルの真ん中に用意しておいた鍋敷きの上に、熱々の湯気が立ち込める鍋をゆっくりと置く。そして、静かな面持ちで壁に掛けられた時計に視線を移した。

「……パパ、ちょっと遅いね……」

エルレイドが時計を見た意味を理解している少女は、ポソリと小さく呟くようにエルレイドに話しかけた。エルレイドも、小さく頷く。そして、恐らくもうお腹を空かしているであろう少女を気遣い、少女の目の前に置かれた皿を手にとってお玉でシチューを装る仕事をした。

しかし、少女は首を小さく横に振った。

「今日は久しぶりにパパが帰ってくるのだ！　ちょっとくらい、我慢できるのだよ！　ね、まあちゃん」

「りるる〜」

少女の言葉に、マリルも笑顔で肯定の意を述べるように頷く。ニコニコと微笑みながらエルレイドを見上げる少女に、エルレイドは優しく微笑むとその頭を今度は優しく撫でてやった。

そこで、何やら騒がしい音が一人と二匹の耳を叩いた。玄関の方からだ。

数秒後、

「スマン！　遅くなった！」

玄関に続くドアが開いて、一人の男が食卓に飛び込んできた。如

何にも探検家が着るような薄茶の服に身を包み、頭にこれまた薄茶の帽子を被せ、毛布やら角灯ランタンやらをぶら下げたリュックを背負った男　少女の父が、帰宅してきたのだ。

「パパ！　おかえりなさいなのだ！」

久しぶりに帰ってきた父に、少女はすぐさま駆け寄り、抱きついた。それを、線は細いながらにしっかりとした体つきの父が受け止める。

「ただいま。良い子にしてたか？　トイロ」

父の言葉に、少女　トイロは大きく頷いた。

「うん！　ルーちゃんとまあちゃんがいたから、大丈夫だったのだよ！」

トイロの笑顔に、父は安心した表情で自身のパートナーであるエルレイドに目を向けた。

「そうか。エルレイド、ありがとうな」

「エルツ！」

主人の言葉に、エルレイドもニッコリと微笑みながら頷く。そして、トイロを父から離すと父が背負っている荷物を慣れた手つきで受け取った。

「パパ。早く席につくのだ！　今日はルーくんがパパのだーいすきなシチューを作ってくれたのだよ！」

「そうかそうか。じゃあ、冷めないうちに食べようか。……あ。そうだ、トイロ。お土産があるんだよ」

「シンオウ地方のお土産！？　なんなのだなんなのだ！？」

「ふふふ。きっと喜ぶよ、トイロ」

「えー。勿体ぶらないで、教えてくれてもいいじゃんかー」

「るーりー」

「ハハハ。ご飯を食べながら、父さんの旅の話をしながら、教えるよ」

「ふふふ。楽しみなのだー！」

仲良く喋りながら、食卓に着く父と娘。それを優しく見守るエル

レイド。娘の楽しそうな様子と一緒にってはしゃぐマリル。

幸せな家族が、そこにはいた。

Prologue 父と娘（後書き）

メインタイトルの『十色』は、『といる』とお読みください。
四文字熟語の『十人十色』から来ています。『たくさんの色（人）』
という意味合いです。

主人公の名前も、同じ意味を込めています。

『キセキ』は『奇跡』『軌跡』二つの意味を込めました。

あい。分かる方が大半かと思われませんが、あの超有名感動ソングが
元ネタです。旅がらすは超大好きなんです、あの歌。聞くだけで泣
きそうになります。

では、また次回お会いしましょう（・・）ノシ

P・i 放蕩娘のポケモン屋敷(前書き)

章番号の『P・i』は、『ページ目』という意味です。

ポケモンらしくないポケモン小説。ちよつとの間、こんな感じで物語は進みます。

そんなこんなで、記念すべき第一話です。

P・1 放蕩娘のポケモン屋敷

数年後

ワカバタウンの町外れ。トージョウの滝を一望できるその場所に、一軒の洋館が建っていた。

レンガ造りの二階建ての洋館では、今日も美しい花々が咲いている。

「さあ、みんな。ご飯の時間なのだよー」

朝日が昇ってから少しした頃、洋館から大きなバスケットを持った少女が現れた。麦わら帽子に白いレースがあしらわれたノースリーブ、蒼いフレアスカート、それに白いサンダルを履いた少女の後ろを、ビニールシートともう一つのバスケットを提げたエルレイドと更にもう一つバスケットを担いだマリルが続く。

少女は、適当な所で止まるとバスケットを地面に下ろした。

「今日はここにしよう。ルーくん。シートを引いてくれたまえー」
「ルー！」

少し偉そうな口調の少女の言葉に、エルレイドは素直に従った。

綺麗に刈られた芝生の上に、一人と一匹では少し、いや、かなりの面積を持ったビニールシートが敷かれる。

少女はサンダルを脱いでシートの上に座ると、庭をグルリと見回した。

「みんな、出ておいでー。ご飯にするのだよー」

少女の一声。その一声で、洋館の景色が一変した。

屋根の上から顔を出したのは、十羽程の“ことりポケモン”のポツポにオニスズメ、“こツバメポケモン”のスバメ。庭に造られた家庭菜園からは、“ざっそうポケモン”のナゾノクサ、“わたくさ

ポケモン”のハネッコ、“たねポケモン”のヒマナッツ、“みはりポケモン”のオタチが顔を出す。更には、洋館の脇から“こくまポケモン”のヒメグマに“ながはなポケモン”のゴマゾウなど、最早数えきれないくらいに沢山のポケモンたちが現れた。

それを確認した少女は、笑顔で自分の傍らに座るマリルに声をかける。

「まあちゃん。スバメたちのご飯をそこに撒いてくれたまえー」

「るりるー！」

少女の言葉に頷いたマリルは、持ってきたバスケットから小さく砕いたポケモンフーズにパンくずを混ぜたものを取り出して、シートの上のすぐ横にばら撒いた。すぐに、屋根から降りてきたスバメたちがそれを啄む。

「他の皆もシートの中においでー。今日はサンドイッチなのだよー」少女が声をかけると、姿を現したポケモンたちが次々と駆け寄ってきた。慣れているのか、列になって少女とエルレイドの前に並ぶ少女とエルレイドは、持ってきたバスケットから小分けにしたサンドイッチを取り出すと、それをポケモンたちに配っていった。

サンドイッチを貰ったポケモンたちは、銘々に好きな場所でサンドイッチを頬張る。少女たちと同じようにシートに座るヒメグマもいれば、家庭菜園のそばまで戻って再びみはりをしながらサンドイッチを食べるオタチもいる。

しかし、総じてどのポケモンも少女たちからあまり離れすぎた場所でサンドイッチを頬張ることはなかった。少女たちが、ポケモンたちから好かれて何よりの証拠である。

サンドイッチを配り終えた少女とエルレイド、それにマリルは、周りのポケモンたちが全員ご飯を持っていることを確認すると、自分たちのサンドイッチに手を伸ばした。

そこへ、

「相変わらず、すげえ光景だなー」

不意に、少女の上に影が落ちた。見上げると、少女と同じくらい
十四、五の少年が、腰を曲げて少女を見下ろしている姿が視界
に入ってくる。男の子にしては少し長い、しかし白髪ポブカットの
少女よりは短めの黒髪をワックスで整えた少年は、少女がよく見知
っている人物だった。

今にもサンドイッチを頬張ろうと口を開けていた少女は、少年の
顔を見るなり口を閉じて少々ムツとした様子で少年を睨み上げる。

「朝っぱらから何の用かねー？ サトル」

少女のムツとした様子に、サトルと呼ばれた少年は、ニヤリと口
端を上げて笑みを作った。

「オレはお前んとこのリーフィアに招待されて来たんだよ。な、リ
ーフィア」

「ファイ！」

サトルはそう言うと、足元にいるポケモン リーフィアに声を
かけた。リーフィアは小さく頷くと、自身の主人である少女を見つ
めてくる。

サトルの言葉に、少女は目を見開いたが、サトルの足元で不思議
そうに自分を見るリーフィアに気づくと、小さくため息をついた。

「アーくん。いないと思ったら、またサトルのところに行っていた
のかねー。こいつはただの幼なじみで、家族ではないといつも言っ
ているではないかー」

「ファイ？」

主人である少女の言葉に、リーフィアは小さく首を傾げている。
ほぼ赤ん坊の頃からよく見知ってしまったせいで、リーフィア
はこの憎たらしい幼なじみも、自分の『家族』であると認識してい
るようだ。

少女は小さく息を付きつつも、傍らに置いていたバスケットから
二人分のサンドイッチを取り出す。どうやら、最初から予想はして
いたらしい。

少女からサンドイッチを受け取ったサトルは、ニコニコと笑いながらビニールシートに乗った。

「よっと」

「……どうしてそこで、君はボクの背中に寄りかかるのかねー。重いではないかー」

自分の横に座って優雅な仕草でサンドイッチを口にするリーフィアの頭を撫でながら、少女は自分に寄りかかるサトルに悪態をついた。しかし、サトルはそこから動こうとしない。

「いやあ。そこに寄りかかるのにちょうどいいものがありや、寄りかかるだろ？」

「意味が分からないのだよー」

「ま、あれだ。こうすることで、ちょっと偉ぶった口調の軽く生意気なトイロちゃんを征服しちゃってる？ みたいなね」

「……こんなことでボクは屈したりはしないのだよ。どきたまえ、このド変態」

振り返り、サトルを強く睨む少女　トイロ。背中でサトルを押して退けようとするが、サトルの方が力は強いらしく、簡単に返されてしまう。

「やだね。オレはお前にはドSで行くって決めてんだから。……ま

あちゃん、オレにもお茶ちょーだい」

「るりっ」

「まあちゃんもアーくんも、どうしてこんな男の言うことを聞くのかね……?」

もう正すのも面倒になったらしく、そのままの体勢でトイロはサンドイッチを頬張った。サトルも楽しそうにマリルが淹れてくれたお茶を口に含み、小さく息をついた。

「……にしても、また増えた？ ポケモン」
サンドイツチを半分程食べ終えたところで、サトルは周囲を見回した。彼らを囲んでいるのは、三十は軽く超えているであろうポケモンたち。

トイロと共に洋館から出てきた二匹とリーフィアを除き、すべて野生のポケモンである。

「また拾ったのか？」

「怪我をしていたから、連れてきたまでさ。リハビリが終われば、野生に帰しているのだよー」

サトルの言葉に、トイロは何の疑問も感じずに答えた。しかし、サトルの口から漏れたのは、とても小さなため息。

「……どうしたのかねー？ サトルがため息なんて、今にも槍が降ってきそうだ」

「お前、ここが何て呼ばれてるか、知ってるの？」

トイロの冷やかしにも答えないサトルの声は、どこか薄暗いものがあった。その声に、トイロも口をつぐむ。

数秒後、トイロは小さく呟くように言った。

「……別に、何と呼ばれようと、ボクは痛くも痒くもないのだよ」
トイロも、ちゃんと分かっていた。学校にも通わず、探検家であり学者である父が仕送りしてくる金で傷ついた野生のポケモンを養う彼女を、町の人々が何と呼んでいるかも。

『放蕩娘のポケモン屋敷』

それが、トイロの住む洋館

オトナシ家の今の姿だった。

だが、トイロは確かにそれに対し、さほど気にしていたりなどはしなかった。

「そんな放蕩娘の所に毎日来てくれる、憎たらしいが憎めない幼なじみがいるし、そのご両親も良しなにしてくれるからねー」

「……そーですかー」

背中合わせにしているため、サトルの表情は伺えない。ただ、先程のような薄暗い声ではないことだけは分かった。

「るりりー!!」

そこで、トイロの傍らに座っていたマリルが、突然トイロに抱きついてきた。『私だっているじゃない!』とでも訴えるかのように、ジツとトイロを見上げている。もう片方でも、リーフィアがジツとトイロを見つめていた。

ポケモンたちの愛くるしい姿に、トイロの口元が思わず綻ぶ。

「ハハハ。ごめんごめん。まあちゃんにアーくん、それにルーくんだっているもんね。ボクは幸せ者なのだよー」

「るー!!」

「フイー!!」

「……エルツ」

トイロの言葉に、マリルとリーフィアが笑顔で答える。少し遅れて、クールぶった様子でエルレイドが小さく頷いた。

トイロとポケモンたちが笑顔で戯れる姿に、サトルの口からも、自然と笑みが溢れる。

「……んなら、オレも安心して旅に出れるな」

「……え?」

サトルの言葉に、トイロは思わず彼を振り向いた。再びサンドイツチを頬張っていたサトルが、それを呑み込んでから話を続ける。

「オレ、明日にでも町を出ようと思うんだ」

「……いきなりとてつもなく突拍子もないことを言うのだね、君は」

最初は冗談かと思い、トイロも軽く受け流そうとした。

しかし、サトルの真剣な表情にトイロも彼が本気で言っていることを悟る。

「……いつから決めていた？」

「ちよいと前から。旅に出るつつうのは、昔っから考えてはいたけど」

この世界では、大体十歳を超えると、旅に出ることを許されている。少し早い、一人前として認められる。と言うことだ。

その理由は一つ。この世界に生きるもう一つの命、ポケモンにある。

ポケットモンスター、縮めてポケモン。この世界に生きる、不思議な生き物の総称だ。

ポケモンと人は、古来より助け合いながら生きてきた。それは現代でも変わらず、特に昨今はポケモンが生まれつき持ち合わせている戦闘本能を用いて、自身のポケモンを鍛え、また互いに競わせるポケモントレーナー。ポケモンの持つ魅力を最大限に見出し、人々を魅了させることを目的としたポケモンコーディネーター。はたまた、ポケモンの運動能力をフルに活用させ、バトルやコンテストとは違った形で人々を熱狂させるポケスリートなど、様々な分野では人はポケモンたちと関わり、また互いに支え合いながら生きている。そうしてポケモンと心を通わせ、互いに助け合っていくため、また、人としても成長を促せるために、『十歳を超えるとポケモンを扱うこと、また旅に出ることを許可する』という制度が生まれた。

まあ、もちろんタダで言うわけではない。ポケモンと上手く心を通わせるには、それなりの能力が必要とされる。そのため、十歳を迎えた子供たちは、ポケモン協会によって定められたおよそ半日の講習と簡単な試験をクリアし、漸くポケモントレーナーとしての証『トレーナーズライセンス』を手に入れるのだ。

いくらか面倒な制度ではあるが、一人旅をしている間は（一応制

限はあるものの、学校の授業を免除されたり、ポケモンセンターなどの町の施設を無料もしくはそこそこにリーズナブルな値段で利用できるため、大体の子供が十歳を超えた時点でライセンスを取得し、町を出ていくのである。

しかし、サトルとトイロは既に十五を超えている。二人とも十歳の時点でライセンスを取得してはいたが、旅には出ていなかった。

「ボクにはパパを待つって目的があった訳だけど、確かにサトルが今まで旅に出なかったのはおかしいよねー」

「ハッ。オレはもう四年以上も仕送りだけ送っただけで帰ってくる気配すらない小父さんを待ち続けてるお前を待つてたせいで、ここまで延びただけだよ」

トイロの疑問に、サトルが毒づく。言葉には冗談染みた言い方も含まれていたが、表情は真剣そのものだった。

サトルの言葉に、トイロは小さくため息をつく。

「何度も言わせなくてくれたまえー。ボクは旅に出る気はない。パパが戻るまで、家を守らなければならぬから。旅に出たいなら、一人で行けばいい」

「てめえを置いてか？ たった一人で、友達もオレくらいしかいない変わり者のくせに」

「……否定する気は毛頭ないが、ならば何故君はその変わり者を何度も旅に誘うんだい？」

今まで何度も繰り返し返されてきた会話だった。だから、トイロはその後サトルが言う言葉を知っている。しかし、敢えてトイロはいつも通りの言葉を言った。

そして、サトルもいつもと同じ答えを言ってきた。これまたいつものように、頭をガシガシと掻きむしりながら。

「……そんな変わり者に惚れてるからに決まってるんだろ」

だがしかし、その後はいつも通りではなかった。

「例えば……こうしちまいたくなるくらいにな！」
「っ!？」

一瞬の出来事だった。サトルがいきなりトイロに振り向いたかと思ったその瞬間、トイロの右肩と腰に手を添えて、トイロを仰向けに倒したのである。麦わら帽子がトイロの頭から落ち、ビニールシートの上に倒れたトイロの真っ白いボブヘアが、小さな扇形を形成していた。

何が起こったのかわからないトイロの視界を、彼女の身体を跨がるようにしたサトルのが顔が埋める。逆光で少し見辛いが、サトルの表情は今までになく攻撃的な感じがした。

「……………」

「ハハツ。結構軽いのな、トイロ」

顔を挟むようにしてビニールシートの上に置かれていた両手。その右手が、トイロの顎を捕らえた。いつもは挑戦的な態度を取るトイロだったが、初めて見る幼なじみの表情に、幾らかの不安と恐怖を覚える。

「…………いや…………」

怯えた声で、トイロが呟いたときだった。

「っ!」

首元に突如出現した緑色の刃に、サトルの動きが止まった。視線だけを動かして、刃の元を追う。

それまで静かに二人の会話を聞いていたエルレイドが、肘から出現させた刃でサトルを牽制していたのだ。刃に触れないように首を動かすと、更にその横で、マリルが片手を引いて気を集中させている姿が映る。リーフィアはと言うと、何が何だかわからない様子でおろおろとサトルとエルレイドたちをキョロキョロと見ていた。

続けて、サトルが感じたのは数えきれないほどの殺気。おそらく、

屋敷にいるポケモンたちのものである。それは、全てサトルに向けて放たれていた。

さすがに命の危険を感じたサトルは、小さくため息をつきながらトイロの身体から手を離れた。

「わり。ちよいとやりすぎたわ」

おどけたように両手を上げ、降参の意を示すサトル。しかし、エルレイドたちはまだ構えを解こうとはしなかった。少し重たい空気が、その場に流れる。

「みんな。ボクなら大丈夫だよー」

そこへ、漸く起き上がったトイロの声が響いた。エルレイドは肘の刃を展開したまま心配そうな瞳でトイロを見たが、トイロが小さく微笑むと刃を収めた。それを皮切りに、サトルに集中していた殺気も消えうせていく。

殺気が無くなると、サトルは大きく息を吐いた。

「ハハハ。死線、彷徨ったか？」

「君の実力でそれを言うのもおかしい話だと思うがね」

軽く笑うサトルに、トイロは呆れたような声を出した。サトルだつて、一応トレーナーだ。その実力を、トイロもよく知っている。

おそらく、現在ワカバタウンで彼に敵うトレーナーはほとんどいないだろう。

が、サトルはそれに対して小さく肩を竦めた。

「オレのガーディだつて、あんだだけの殺気を相手取することはできねえよ。何より今はアイツ、家で留守番してるしな」

「……ま、ボクは君がどうなるかと知ったことではないけど」

サトルの自分の実力に自惚れぬ発言に、トイロは少々肩透かしを喰らいながらも、ニヤリと笑いながら軽口を叩いた。自信家のサトルにしては珍しい発言だ。明日の旅立ちを前に、今から緊張でもしているのだろうか。

そこまで考えて、トイロは目の前にいる少年がもうすぐいなくなるのだということを読み出した。先ほどの会話がトイロの頭の中で繰り返される。

(もう、サトルと朝ごはんを食べることも無くなるのか……)

彼女の『当たり前』が、もうすぐ一つ消えてしまふ。しかし、それも致し方のないことだ。世界は日々変わるもの。不変など、この世にはあり得ることなどない。

彼が旅立つたら、少し静かになるのだろうか。トイロが思ったそのときだった。

「……ん？ おい、門の上で何か騒いでるぞ」

「ふえ？」

サトルの言葉に、トイロは現実に引き戻された。言われて門の方を見上げると、門の支柱で見張りをしていたオタチが何かに向かって鳴き声を上げている。それに呼応するかのように、門の近くを旋回する鳥ポケモンたちも下に向けて鳴き声を発していた。

「何だ何だ。また傷ついたポケモンか？」

「とにかく、行かなきゃ」

おどけるサトルの横で、トイロはサンダルを突っ掛けて門の方へと走り出した。見ると、門のすぐ下で青い何かが横たわっているのが見える。小さい。多分ポケモンだ。

倒れていたのは、リオルというポケモンだった。青い体躯に、アイマスクのように引かれた黒のライン。四肢は間接の辺りから黒い毛で覆われている。

リオルは、酷く傷ついていた。身体の所々に切り傷が見られ、気を失っているのかぐったりとしたままピクリとも動かない。

「わ。リオルかよ。オレ生で見たのはじめて」

「そんなことを言っている場合か！ 酷い怪我……。ルーくん、救急箱を！」

暢気にリオルを見下ろすサトルに叱咤しながら、トイロはエルレ

イドに呼びかけた。エルレイドは無言で屋敷の中へと戻っていく。トイロはエルレイドが戻ってくるまでに怪我の状態を見ようと、リオルを抱きかかえてビニールシートまで戻った。少し重いが、何とか運びきる。

遅れてきたサトルが、リオルをまじまじと見た。

「こいつ、どこから来たんだろうな」

「分からない。けど、相当長い距離を歩いてきたみたいだね」

サトルの問いかけに答えながら、トイロは持っていたハンカチでリオルの身体に付着した泥や埃を払う。傷ついた身体の中でも、特に足の裏は酷かった。可愛い肉球が擦り切れ、血が滲んでいる。固まってしまった血を拭おうと、バスケツトの中の水筒に手を伸ばしたとき、トイロの膝に乗っていたリオルの身体が少しぐらついた。

それまで握られていたリオルの右手が、その拍子にゆっくりと開く。その手の中から、何か光るものが転がり落ちた。

「…………え？」

リオルの手の中から落ちた『それ』を見たトイロは、言葉を失った。何故ならそれは、トイロが幼い頃から何度も目にしたことがあるものと全く同じ形をしていたからだ。

美しくエメラルドグリーンに目映く、小さな石が付けられた金色のペンダント。

「…………これ、パパの…………」

それは、トイロの父 オトナシ博士が、いつも肌身離さず首に下げていたペンダントだった。

P・1 放蕩娘のポケモン屋敷（後書き）

今回のテーマ。

『数えきれないポケモンたちとの朝食』

『刃で牽制するエルレイド』

この二つです。

ポケモンたちとは無理でも、牧場とかで動物に囲まれながらランチを楽しんでみたい旅がらすです。

エルレイド。初めて見た瞬間に思ったのは、

『旅がらすだけじゃなかつたんだ……サーナイト に哀愁を感じたのは』

でした。（ひでえ……）

そんな彼も、そしてサーナイトも、今は旅がらすお気に入りポケモンです。通信相手のいない旅がらすにとって、エーフィと並ぶ最強のエスパタイプ。特に、モロ物理タイプのエルレイドは戦闘の幅が広がる広がる。フハハハ。つるぎのまいからのつじぎりやリーフブレードは最早反則だと思います。（気持ちいいので多用しますけど）

作中でマリルが使用しかけた技は……バレてると思いますが、内緒です。

ジョウト地方にリーフィアがいる理由もまた後々のお楽しみということ。

では、また次回お会いしましょう。

P・2 始まりの風（前書き）

……うわっ、この更新速度懐かしっ（うおい）

ども。

今回は、皆様おなじみのあの方が登場します。

そして、オリ設定もちらほら。

……え？ 前回でもオリ設定出てるって？

……あれは『電撃！ピカチュウ』を参考にしているんです（何）
あれが一番現実的っぽい感じがしたので。

何故か、ワカバタウンやマサラタウンにはポケモンセンターが似合
わない気がする旅がらすです。

そんなこんなで第二話です。どぞ。

P・2 始まりの風

ワカバタウン、ウツギポケモン研究所

若年ながら、ポケモン進化の権威と称されているウツギ博士。その博士の研究所のとある一室で、トイロとサトルは二人掛けのソファ―に座り、神妙な面持ちでウツギ博士の知らせを待っていた。

「……………」

サトルは、辛気くさい空気というものが大の苦手だった。何だか両肩に重りを乗せられた気分になるし、何より息苦しい。サトルの家は、こういった空気とは無縁だから尚更だ。早いところ逃げ出してしまいたいとまで思ってしまう。

そんな彼が今この部屋を出ていかないのは、リオルの持っていたペンダントを握りしめて隣に座る幼なじみの顔色が、あまりに優れないからであった。

(……………にしても、あのリオルは一体何者なんだ？　なんで、トイロの親父さんのペンダントなんて持っていた……………？)

トイロが握りしめるペンダントには、サトルも見覚えがあった。『めざめいし』と呼ばれる希少な宝石の欠片をペンダントトップにした金色のそれは、トイロの父　オトナシ博士が肌身離さず持ち歩いていたペンダントである。

あの後、リオルの怪我に応急処置を施したトイロたちは、ワカバタウンで唯一ポケモンの回復設備が整っているこの研究所にやってきた。そのまま、リオルはウツギ博士に託され、トイロとサトルは博士の助手に案内されたこの部屋でウツギ博士の知らせを待つことになったのである。

リオルが預けられてから、トイロは一言も言葉を発してはいなかった。両手に握られたペンダントに視線を落としたまま、微動だにしない。

サトルは小さく息をつく、ウツギ博士の助手が淹れてくれた紅茶を口に含んだ。

「おまたせ。トイロちゃん、サトルくん」

そこへようやく、二人が待っていた人物が部屋に入ってきた。まだ三十前後にしか見えない、眼鏡をかけた若い白衣の男。この人こそ、ポケモン進化の権威と名高いウツギ博士その人である。

ウツギ博士が部屋に入ってきたことに気づいたトイロは、待ってましたと言わんばかりの勢いでソファから立ち上がった。

「博士、リオルは？ 怪我は大丈夫なんですか！？」

ウツギ博士は、トイロが口調を正して接する数少ない人間の一人だ。ペンダントを握り締め、居ても立ってもいられない様子のトイロを、ウツギ博士は落ち着かせるように両肩に手を添え、もう一度ソファに座らせた。

「落ち着いて、トイロちゃん。リオルなら大丈夫だよ」

そう言って、ウツギ博士はトイロたちの向かい側にあるソファに腰掛けた。ウツギ博士の言葉に、トイロも安心したかのように大きく息をついてソファに凭れかかる。トイロのその様子に、サトルも幾分かの安心感を覚えた。

と、そこへ、

「は、博士！ 大変です！」

トイロたちのいる部屋に、一人の青年が飛び込んできた。ウツギ博士の助手だ。酷く慌てているらしく、肩で大きく息をしている。

助手のただならぬ様子に、ウツギ博士は目を丸くして立ち上がった。

「どつしたんだい！？」

「さっきのリオルが、とつぜぎゃっ！」

助手の言葉は、最後まで続かなかった。突然横から何かに飛ばされて、助手の姿がトイロたちの視界からいなくなる。

「助手さん！」

「おい、あいつ、さっきのリオルだ！」

ドアの前にいたのは、先ほどのリオルだった。怪我はほとんど治っており、顔色もいい。だが、その目は興奮しているのか大きく見開かれている。

助手を吹き飛ばしたりオルは、トイロたちのいる部屋の中を物色するように見回し、トイロの方に視線を向けた瞬間、トイロを強く睨んだ。次の瞬間、トイロたちの視界からリオルの姿が消える。

「きゃあつ！」

「トイロ!？」

突然、トイロから悲鳴が上がった。トイロの両手から、ペンダントが無くなっている。三人が気づいたときには、ウツギ博士の後方にペンダントを握り締めたりオルが現れていた。

「なっ……!？」

(まさか、“でんこうせっか”であの速度を出したって言うのか!?)

正直に、サトルは驚いていた。“でんこうせっか”は、その名の通りものすごいスピードで先制攻撃を与える技だ。しかし、あれほど速い“でんこうせっか”など、今まで見たことがなかった。

(畜生。ガーディは家に置いてきちまったって言うのに……)

トイロの家からウツギ博士の研究所まで直行してきたので、サトルは相棒のガーディを連れてきてはいなかった。今更だが、途中で家に寄って連れてくれば良かったと後悔してしまう。

しかし、その横で、トイロが動いた。腰につけたトレーナーズベルトから、一つのモンスターボールを取り出す。

「お願いするよ、アーくん！」

トイロの手から放られたモンスターボールから出てきたのは、リーフィアだった。ポケモンの出現にリオルの表情が更に険しくなり、それに怯えたリーフィアが身を竦ませている。

(って、レベルの低いリーフィアでどうするって言うんだよ!?)

サトルの見当違いでなければ、あのリーフィアはバトルが不得手のはずだ。バトルをするのであれば、マリルの方が合っている気がする。

リーフィアが、トイロの方を見てきた。トイロはそれに、無言で頷いている。それを確認したリーフィアは突然四肢を折り、地べたに腹と顎をつける体勢。所謂『伏せ』の体勢を取って、リオルを見つめた。

「ちょ、トイロ！ お前なにさせてんだよ！」
「サトルは黙っていたまえ」

トイロの声は、とても静かだった。その声に、サトルも口を噤む。トイロのこの言い方は、何度も聞いている。ポケモンを心から信頼し、やるべきことを見据えたときに出す声だ。

リーフィアが無防備な体勢をとったことに、リオルの瞳が動揺に揺れた。一方、リーフィアはリオルから目を逸らさずに、ただじつと見つめている。

どれだけ睨み合っていただろう。やがて、リオルの瞳から敵意が消えていった。リオルはゆっくりとした足取りで、トイロに近づいてきた。

二人の視線が合う。トイロは、両手を大きく広げて微笑んだ。

「おいで。リオル」

その一言が、リオルを笑顔にした。それまでの緊張した空気が霧散し、リオルはソファアによじ登ると、トイロの膝に座ってトイロに笑顔を向けた。

「あ、このリオル！ トイロの上に乗るのはオレの専らぶあっ」

「……黙れ、このエロガキが」
リオルの行動に声を荒げたサトルをトイロが暴力の名の下に叩き伏せる。その光景を、ウツギ博士とリーフィアが苦笑いを浮かべながら見ていた。

「……あの、僕って一体……」

廊下で伸びていた助手を気遣うものは、特にいなかった。

「それにしても、このリオルは一体どこから来たんだろうねえ」

復活した助手がお茶菓子として出してくれたクッキーを摘みながら、ウツギ博士が不思議そうに首を傾げた。リーフィアは既にポールに戻っており、リオルは相変わらずトイロの膝の上に乗っている。サトルはまだ伸びたままだった。

ペンダントを大事そうに握るリオルの頭を撫でながら、トイロも首を傾げていた。

「ボクとしては、この子の持っているペンダントの方が気になるんですけどね……」

「やっぱりそれ、オトナシ博士のなのかな……」

ウツギ博士も、見覚えがあったようだ。しかし、本当にこれがオトナシ博士のものであるか、確証はない。

そこで、トイロは『賭け』を試みることにした。

「リオル。ボクの言葉が分かるかね？ 分かれば首を縦に振ってはくれないかー？」

トイロの言葉に、リオルの首が縦に大きく振られた。それを見て、トイロも小さく頷く。

「自己紹介をしよう。ボクの名前は、オトナシ トイロという。ワカバタウンの外れ、トージョウの滝が一望できる洋館で、暮らしている」

「！？」

トイロの言葉に、リオルが反応した。そして、ペンダントを一度だけ見下ろしたリオルは、振り向いてそれをトイロに渡してきた。

「……やっぱり、これはパパのなのだね」

リオルからペンダントを受け取ったトイロは、リオルに聞こえないように小さく呟いた。二人の予想は、当たっていたのだ。

「……？ リオル？ 一体何をしているのかね？」

ペンダントについて考えを纏めていようとしていたトイロは、リオルの次の行動に目をぱちくりとさせた。リオルがトイロの額に両手を当て、念じるように目を閉じている。

しかし、しばらく時間が過ぎても、何も起こることはなかった。目を開けたリオルは、自分の両手を見下ろして目を丸くしている。もう一度同じことを繰り返したが、結果は同じだった。

何をされているのか全く見当のつかないトイロは、困ったような表情でウツギ博士に視線を動かす。

「えっと、博士？ 一体この子は何を……」

「うーん。多分、“波導”を出しているつもりなんじゃないかな？」

「“波導”？」

ウツギ博士の口から紡がれた聴きなれない言葉に、更にトイロの疑問は深まった。

と、そこで、

「“はもんポケモン”リオル。そいつは体中から“波導” 簡単に言えば生命エネルギーを放出することで、仲間間で声を出さずともコミュニケーションをとる能力ちからを持っているんだよ」

ようやく目を覚ましたサトルが、ウツギ博士に変わって説明をした。トイロは何もなかったかのようにサトルに視線を動かし、

「ようやく起きたか、馬鹿者めー」

「てめえが や っ た ん だ ろ う が ！」

軽口を叩いたせいで、サトルから拳骨を受けてしまった。その拍子に、再三“波導”の送信を行おうとしていたリオルもバランスを崩す。

“波導”の送信を邪魔されたリオルの鋭い眼光が、サトルを捕らえた。

「うお、なんだなんだ!？」

「リオルー。そのの猛獣に“はっけい”なのだよー」

「ちよつと待て全く状況把握できてなくほっ」

状況を半分も理解していないサトルに、トイ口とリオルの容赦ない鉄槌が再び下る。

そう。サトルのとても大事なところに

「!?!??」

意外な場所に決めてしまい、リオルが声にならない悲鳴を上げた。

「あちゃー。リオル、そこはまずい、非常にまずいよ」

まずいと言いながら、確実に笑っているためそれを頭を抱える仕事で隠すトイ口。

「……………」

とにかく唾然とするしかできないウツギ博士。

しばらくして、リオルがサトルを殴った自分の右手を見つめ、次にトイ口の方へと視線を移した。

数秒後、リオルの瞳から大粒の涙が滝の如く溢れかえった。その様子に、笑っていたトイ口の表情も固まる。

「え、うわー！ まさかりオル、君は女の子だったのかい!? それだダメだ！ 非常にダメだ！ 博士、お手洗いを貸してください！」

「え、ああ、トイレならこの部屋出てすぐ右……って、サトルくんは!?」

「そんな猛獣ボクは知りません！ ごめんよりオル！ すぐに洗いに行かねば！」

シヨックを受けるウツギ博士をよそに、リオルを抱えた状態でトイ口は部屋を飛び出していった。リオルの瞳からは、まだ大粒の涙が溢れていた。

数秒後、ウツギ博士がソファーに目を向けると、そこには数秒おきに痙攣するように身体をびくつかせる少年が一人。

何も言ってこない。麻痺しているようだ。

「……サトルくん、ドンマイ」

何故か、麻痺するサトルにグーサインを送る、ウツギ博士であった。

数分後、

「どうやら、ここに来るまでに何らかのショックを受けたようだね。このリオルは今、“波導”を使えなくなっている」

最早動けないサトルを別室に運んだあと、再び紅茶を啜りながらウツギ博士が言った。

結局、あの後も何度かリオルはトイロに“波導”の送信を試みていたのだが、そのすべてが失敗に終わったのである。

“波導”を使えなくなってしまうことにショックを受けたのだろう。リオルが先ほどとは別の意味で瞳を潤ませていた。その頭を、励ますようにトイロが優しく撫でる。

「博士。どうにかして、この子の意思を知る術はないでしょうか？」

リオルは、ボクに何かを伝えようとしている気がするんです」

苦い顔をしている博士に、トイロは懇願した。リオルが伝えようとしていることは、父のことかもしれない。そう思うと、トイロも居ても立ってもいられない気持ちに駆られるのだ。

ウツギ博士はしばらく黙りこんでいたが、ふと何かを思いついたように両手をポンと叩くと、ソファから立ち上がって部屋の隅にある機械へと歩み寄っていった。

「トイロちゃん、ちょっと待ってて」

ウツギ博士はそう言うと、部屋の隅に置かれた機械を操作し始め

た。数秒後、機械から一つのモンスターボールが排出される。ウツギ博士はそれを手に取ると、再びソファアに戻ってきた。

「……………」

「頼むよ、ラルトス」

ウツギ博士の声にに応じて、モンスターボールから一匹のポケモンが飛び出してくる。

子供のような体型と真っ白い体躯に袴を引き摺っているかのような脚部。頭の上半分を赤い半円状の角を頂いた緑色の帽子のような物体で覆ったポケモン。別名“きもちポケモン”と呼ばれるラルトスだ。

「あの、博士？ この子で一体何を……………」

「エルレイドが家族にいるトイロちゃんなら知っていると思うけど、ラルトスたちの赤い角は、周りにいる生物の感情を受信するアンテナのようなものなんだよ」

ウツギ博士がそう説明している間に、ラルトスはトイロたちに歩み寄り、右手をリオルの額に、そして左手をトイロの額に添えてきた。

「……………」

「このラルトスの特性は“シンクロ”。主に特定の状態異常に陥った際、そうさせた相手を同じ状態にするっていう風に知られているんだけど、実は最近の研究でこの特性を用いて他者と意識の同調を図れることが分かってね。もしかしたらと思っただよ」

ウツギ博士の説明が終わるよりも早く、トイロはその能力を目の当たりにしていた。ラルトスが意識を集中し始めたその瞬間に、トイロは何かを引きずり込まれるような感覚に陥ったのだ。

(トイロ、どっ……………?)

トイロは、真っ暗な空間の中にいた。どこが上で、どこが下なの

かが分からない。そもそも、今自分が大地を踏みしめている感覚すらなかった。

『見つけた！ 遂に、×××××を！』

「っ！ パパ!?」

暗闇の中で、突然オトナシ博士の声がトイロの耳を叩いた。その瞬間に、ここがどこなのかを直感する。

ここは、リオルの意識の中なのだ。これが、リオルがトイロに伝えようとしていることなのだろうか。トイロは呼吸すらも聞き逃すことのないようにと耳をすませた。

『よくやった、リオル。……さて、もうここで調べられることは尽きたか。あとはワカバに戻って、家の資料とこれとを見比べる必要があるな……』

どうやら、父は調査を終えてワカバに帰ろうとしているらしい。その言葉を聞いて、トイロの胸に安堵感が流れ込んでくる。

だが、突然リオルの意識にノイズが走った。それは、リオルと同一調しているトイロにも伝わってくる。頭を真つ二つにされるのではないかと思うくらいに酷い頭痛に襲われたのち、トイロが耳にしたのは父が必死に叫ぶ声だった。

『行け！ 行くんた、リオル！』

『（いや！ いやです、行きたくない！）』

父の後に聞こえてきた、幼い少女のような声。まるで頭に直接響くようなこの声は、リオルのものなのだろうか。

しかし、トイロが考える時間もなく、父の声が再び聞こえてきた。

『リオル、これを』

『（え……、博士！ これは博士の大事な！）』

『ああ。それを、ワカバにいる私の娘 トイロに渡してほしい』

『（博士！ 博士も一緒に！）』

『駄目だ！ 私にはやるべきことがある。だから、行ってくれ、リオル！』

（何、コレ……。パパは一体……）

声しか聞こえないせいで、今父たちがどのような状況に追いやられているのかが分からない。

数秒後、何かに体を押されるような感覚がトイロを襲った。

『（あ……）』

リオルの呆けたような声。それと同時に背中に感じる強風。

『頼んだぞ、リオル』

『（博士……いやあああああああ！）』

最後に聞こえたのは、父の頼もしい声と、リオルの悲痛な叫び声だった。

自室のドアをノックする音で、トイロは目を覚ました。枕が酷く濡れている。どうやら自分は泣いていたようだ。

電気の点いていない部屋の中、手さぐりで探し当てた時計は夜の八時を指していた。帰ってきたのは昼過ぎだったのに、まるで一気に時間が流れてしまったような気がする。

ウツギ博士の研究所から酷い顔で戻ってきたトイロを心配して、エルレイドが何度か部屋を見に来てくれたことを覚えていた。だが、トイロはそれをすべて拒絶した。今は誰の顔も見たくない。トレーナーズベルトは帰ってすぐにリビングに放ってきたので、今ここにはマリルとリーフィアもいなかった。

不意に、ドアの方から破壊音が鳴り響く。

「だーもー！ いるならいるって言え、バカトイロ！」

部屋の中に入ってきたのはサトルだった。チンピラよろしく、両手をジーンズのポケットに突っ込んで仁王立ちでトイロを見下ろしている。鍵を閉めたのに、とトイロがドアに目をやると、蝶番が完

全に外れ、最早ドアとしての意味を為さない板きれと化した物体が床に転がっていた。

「どうやら、鍵がかかっているのを見て蹴破って入ってきたらしい。」

「……貴様、家屋損壊の現行犯で警察を呼ぶぞ」

「は？ オレはてめえの忘れもんを届けに来ただけだよ。むしろ感謝してほしいね」

「忘れ物？」

サトルの言葉に首を傾げるトイロの視界に、新しい影が入ってきた。

リオルだ。恐る恐るといった表情で、リオルはサトルの足に半身を隠してトイロを見ている。リオルを見て、トイロは彼女を研究所に置いてけぼりにしてしまったのだと思います。

だが、トイロはリオルから目を逸らした。ただでさえ、誰とも会いたくないというのに、中でも一番会いたくない相手がリオルだったからだ。

それが、ただのわがままであることは分かっていたが、トイロは自分の感情を抑えることができなかった。

「パパは……どこに行ったのさ……」

トイロの言葉に、リオルの表情が陰った。視界の隅で、リオルが項垂れているのが分かる。

『ごめんなさい』

言葉が分からなくても、そう言っているのは分かった。

父が、帰ってこないかもしれない。もう二度と。どれだけトイロがこの家で待っていていようと。

傷ついてここまで来たリオル。断片的ではあったが、垣間見えたリオルの記憶から、そう判断できた。トイロがここにいる意味の大半であったものが、無くなってしまった。

「トイロ」

サトルが、自分の名前を呼んでいた。しかし、答える気力など既にトイ口にはない。無視して、トイ口は寝返りを打った。

瞬間、腕を掴まれる。無理矢理に仰向けにされたトイ口は、もう片方の手も簡単に取られてしまった。目の前にサトルがいる。トイ口を跨るようにしてベッドに上がってきたサトルは、いとも簡単にトイ口の両手を片手でベッドに縫い付けた。

「ちょ、何をす……っ！」

突然のことに抗議しようとしてサトルを見上げた瞬間、トイ口は言葉を失った。続けて、言いようのない恐怖がトイ口を包み込む。

サトルが、無表情のままトイ口を見つめていた。何を考えているのが、全く分からない。怖い。朝も感じたことだったが、今はそれ以上の恐怖がトイ口に流れ込んでくる。

朝以上の恐怖感に声も出せないトイ口の耳を、サトルの声が叩いた。

「壊してやろうか？ トイ口」

「……え？」

驚いた。無表情なサトルの口から出たのは、恐ろしく優しい声だった。

戸惑うトイ口を余所に、サトルが言葉を続ける。

「親父さんが死んだかもしれないけど、ここにいる意味がなくなっちゃったんだろ？ どうせ、やりたいこともすべきこともないんだ。

悲しいばっかの毎日を過ごすくらいなら、ここでぶっ壊れて何も考えられなくなっちゃった方が、楽なんじゃないのか？」

その方法なら、いくらでも知っている。だから、壊してほしいならそう言え。サトルの言葉に、トイ口の目が見開かれる。

壊れる。それはトイ口を選択肢になかった言葉だ。だが、サトルの言う通りかもしれない。いる意味もなく、ただ父を失った悲しみに身を包んで生きるくらいなら、壊れて何も感じなくなってしまう。

ワカバタウンには、トイ口の居場所はない。サトルの両親も、ウ

ツギ博士もトイロに良くしてくれる。だがしかし、彼らは結局他人でしかない。トイロにとつて、父こそが何よりも強い心の支えだったのだ。もうその父も、いなくなってしまうた。

壊れてしまいたい。壊してほしい。

トイロの口が開こうとしたそのときだった。

「……リオル？」

サトルの空いている腕に、リオルがしがみついていた。リオルの小さな首が大きく横に振られる。何度も、何度も。何かを必死に訴えるように、リオルは首を横に振り続けた。

「……？」

「どうやら、お前に壊れてほしくない奴がたくさんいるみたいだな」

「あ……」

どこから入ってきたのだろう。ドアの向こうに、洋館にいるポケモンたちが集まっていた。その中にはマリルとリーフィアもいる。

全員が、トイロを心配そうに見つめていた。

「みんな……」

「トイロ。親父さん、本当にいなくなっちゃったのか？」

呆けるトイロに、サトルが訊ねてくる。訊かれて、トイロはとっさに首を横に振った。

そう。確かにトイロはリオルの記憶を垣間見ていたし、父がペンダントをリオルに託したということは、その可能性は極めて高かった。

だが、可能性は限りなく百パーセントに近いだけだ。わずかではあるが、父が生き残っている可能性だってある。

そう思っって首を振るトイロに、サトルが笑いかけた。

「じゃ、もうお前がすべきことは分かってるよな？」

「……」

トイロの目が、見開かれた。その表情からトイロの考えを読み取ったのか、サトルがゆっくりと身を引き、ベッドから降りていく。サトルと入れ違いで、リオルがトイロの胸に飛び込んできた。

「じゃあな、トイロ」
数秒後、トイロが我に返ったときには、既にサトルの姿はなかった。

オトナシ家の洋館を出て、サトルは門に向かって歩いていった。その足取りは、どこか軽い。

「お、荷物持ちサンキュー」

門に凭れかかってサトルを待っていたのは、エルレイドだった。その手にはサトルのメツセンジャーバッグが提げられている。エルレイドの足元では、サトルの相棒であるガーディがちょこんと可愛らしくお座りをして主人を待っていた。

「よしよし。待たせたな、ガーディ」

ガーディの頭を軽く撫でてやり、サトルはエルレイドからメツセンジャーバッグを受け取った。

（サトル。お嬢様のこと、礼を言おう）

ふと、サトルの頭に声が響いてきた。エルレイドのテレパシーだ。エルレイドの言葉に、サトルはニヤリと笑う。

「べつつにー。オレとしては、どっちかつつーとあのまま襲いたかったんだけどね」

（貴方はそんなことをする人ではないだろう。少なくとも、お嬢様があんな状態では）

サトルの軽口を真面目に否定するエルレイド。それに対し、サトルは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「へいへい、純粋なこと。つつーかよ、前から思ってたんだが、テレパシーできるならそれでトイロを説得すりゃよかったんじゃないね

えの？」

（テレパシーには相性がある。私としては皮肉な上に腹立たしいことなのだが、どうやら私のテレパシーは貴方へのみ伝わるようなのだ）

丁寧ではあるが、あからさまにサトルを嫌っていると言張するエルレイドの言葉に、サトルの口から思わず笑みがこぼれた。

「あらら、そいつは残念。ま、やっぱり姫を守る騎士^{ナイト}じゃあ、王子さまには敵わないっつーことかね？」

（ほざけ。貴方は王子と呼ぶには凛々しさも品格も足りないし、何より貧相すぎるだろう）

「……今この場に瞬間接着剤があったら、迷わずてめえの口を塞いでやりてえよ」

（誠に残念なお知らせだが、口を塞がれてもテレパシーには何の影響もない。ざまあみろ）

「……お前、結構黒いのな、性格」

このままでは朝までやつても收拾がつかなくなりそうな言い争いに一応のケリをつけるため、サトルは小さく肩を竦めると一歩歩き出した。お座りで二人の言い争いを見ていたガーディがそれに続く（……一人で行くのだな）

エルレイドの声が、サトルの頭に響いた。振り向かず、サトルは一度だけ頷く。

「オレはついて行っても良いんだけど、アイツの性格からしてそれは嫌がられるだろーしな」

トイロがわざと偉そうな口調で人に接するのは、何も他人を下に見ているからではない。むしろ、自分の事情に他人を巻き込みたくなくて、彼女は敢えて他人が自分から離れていくようにああいう話し方をしているのだ。

それが彼女の強みであり、また弱みでもあるのだが、それはまた別の話だ。

「ま、アイツも多分、親父さん探すために旅に出るだろうし、多分

また逢うだろうよ。そのときは、オレも気が向いたら協力くらいはするさ」

(重ね重ね、済まない)

「気にすんなって」

エルレイドの本当に申し訳なさそうな言い方に、思わず笑いそうになってしまう。サトルはそこで、何かを思い出したかのように両手をポンと叩いてエルレイドを振り向いた。

「代わりについて言うのもなんだが、リビングのテーブルに箱が置いてあると思うんだ。それ、アイツに渡してくんない？」

(? ……分かった、見つけたら渡しておこう)

「サンキュ。じゃあな、エルレイド」

もう、振り向くことはなかった。再び前に向き直り、サトルは前へと歩き出す。その後ろを、ガーディがちょこちょここと続いてきた。

不意に、一陣の風がサトルの頬を撫でた。柔らかい、心地よい夜風。

ふと、サトルはワカバタウンの『別名』を思い出す。

なにかの始まりを告げる風が吹く町

自然と、サトルの口から笑みがこぼれていた。

少しだけ、歩幅も広くなった気がした。

P・2 始まりの風（後書き）

今回のテーマ

『サトルくん、ドンマイ』

『ざまあみる』

実は、この話今日の朝に投稿したのですが、間違えて削除してしまつた話です。

ハハハ。書いた話を思い出して、何とか携帯の戻る機能を駆使しつ
つ一日かけて修復しました。

今日は別の話書く予定だつたのに……orz

いやしかし、サトルはとんでもないところに技を受けちゃいました
ね

実際にあそこに“はっけい”を喰らつたらどうなるんでしょう。

とりあえず、リオルだから良かったものの、カイリキーとかニョロ
ボンだつたら死んでましたね（じゃねえ……）

そして、サトルとエルレイドの会話。

今回の話で一番書いてて楽しかった場面でもあります。騎士と王子
のくだりからは特に。

あの二人は実は結構似た者同士。

サトルは不良でエルレイドは執事（紳士）ですけど。

エルレイドのイメージは、ポケモンキャラで言うところのクランさんっ
ぽい感じですよ。トイロはカトレアお嬢様とは全然違いますけど。

感想、批評、アドバイス、誤字報告など、じゃんじゃん受け付け中
です。

来たら、旅がらすは踊りだすくらいの喜びを文章で表現……したら

軽くうしろいので、抑え目に喜びます（心の中ではポルカ・オドルカ
を口ずさみながら踊りますけど）

では、また次回（・・・）ノシ

P・3 今、歩き出す（前書き）

どもー。もうすぐ危険物の試験だけど勉強したくねええ！ な、ダメ人間の旅がらすです。

今回もちょっとオリジナル入ってます。

いつも思いますが、サトシたちの荷物はどうしてあれだけで事足りてしまうのでしょうか。不思議です。

まさか四次元ポケットくあ！？ と思いつつな第三話。
楽しんで頂けたら幸いです。

P・3 今、歩き出す

一週間後。

「ん〜と。替えの服に雨よけ用のタープ、寝袋、洗顔セット……タオルも何枚が必要だね〜」

オトナシ家 通称『ポケモン屋敷』と呼ばれる洋館の一室で、トイロはお気に入りの服やタオルなどを部屋の中央に纏めていた。

「ん〜。このくらいかな？ しかし、旅と言うのはかなり荷物を必要とするのだね〜」

少し丈長の白いTシャツの上に、青いチェックのベスト、そして薄色のダメージデニムの半パンとトレッキングシューズを履いたトイロは、とりあえず纏め終えた荷物を一瞥し、小さなため息をついた。

父を待つだけの生活は、もう終わりだ。これからトイロは、父を探すためにこの町を旅立つ。

サトルに諭され、トイロはそう決意したのだ。

父は何故、リオルをここへと導いたのか。

リオルと別れる前、一体父は何を調べていたのか。

その答えが導かれたその先に、きっと父はいる。トイロはそう信じていた。

「さてと、後はこれをバッグに詰めるだけだね〜」

荷物の脇に置かれているのは、トイロが唯一持っているポストンバックだった。

キャメルのポストンバックは、少し大きめに作られてはいるが、どれだけ鼻屑目に見てもせいぜい一泊分が精一杯のように見える。

ましてや、荷物の中にはタープや寝袋も含まれている。入れられ

るものなら入れてみる。と言われているようなものだ。

そこで、トイレはボストンバックの中から手のひら大の大きさのカプセルを取り出した。そして、それを寝袋にかざすように当てる。数秒も待たずに、カプセルから小さな電子音が聞こえてきた。

『アイテム“寝袋”を認識しました。残り容量は、あと十七キログラムです』

機械的な声がトイレの耳を叩いた瞬間、カプセルが開き、その中にテントが吸い込まれていった。

「おお。さすがはシルフカンパニーの商品なのだ。機構は全く分かんがね〜」

はじめて使った『それ』の便利さに、トイレは思わず感嘆の声を漏らした。

『カプセルバッグ』

つい数年前に、カントー地方のヤマブキシテイに本社を構える大会社　シルフカンパニーが造った代物だ。モンスターボールをパソコン内にデータ化させて収納を可能にさせた機構を参考にされたそれは、赤外線を内臓されたカプセルの認識部分にかざした物体をカプセル内に収納するという、とてもハイテク且つ便利な道具である。

子供に一人旅をさせる上で、一番ネックとなるのが荷物だ。親は子を心配し、服に毛布に保存食にと様々な荷物を子供に持たせようとす。

だが、たかが十歳の子供が一人でそれらを全て持って歩けるかと訊かれれば、その答えはノーとしか言い様がない。小さな体躯で大きな荷物を背負い、更に長い距離を歩くなど、かなりの無理を要してしまう。

他にも、ポケモンの為の回復薬であったり、ポケモンを捕獲するためのモンスターボールも入れなければならぬのだ。結果として、必要最低限のものしか持たせることができず、親は不安でやきもきし、子供は不測の事態に備えきれなくなってしまう。

そこで提案されたのが、この『カプセルバッグ』というわけだ。『カプセルバッグ』が世に出回ったことで、子供の一人旅は以前に比べてかなり安全なものとなった。

カプセルが最低二つはあれば、野営用の道具に着替え、そしてもしものときの保存食を収納できる。その上、カプセルの大きさはちょうど手のひら大程度だ。かさ張らないし、何よりポケモンたち用の道具を入れるスペースが大幅に増える。

親からすれば、子供に重い荷物を持たせずに済むし、子供からすればポケモンたちの道具を今までよりもたくさん持って歩ける。正に、世の中のニーズに応えた一品。というわけだ。

トイロは纏めておいた荷物を全てカプセルバッグに収納すると、ポストンバックを肩に掛け、部屋を出てリビングに向かった。

リビングでは、エルレイドがテーブルの上に食料品や調理器具を並べていた。飯盒に小さなフライパン。折りたたみ式の先割れスプーンに箸、碗にマグカップ。卵、乾パン、米、小麦粉、野菜や肉の缶詰、紅茶の茶葉と角砂糖のセット、エトセトラ……。

「む。ルーくんはやっぱ気が利くね。手間が省けたよー」

エルレイドの気遣いに、トイロは顔を綻ばせた。エルレイドは無言で首を横に振ると、トイロの首の後ろに両手を回す。トイロの首に、“めざめいし”のペンダントが下げられた。

ペンダントを首に下げたトイロを、エルレイドがじっと見つめた。その意図を汲んだトイロは、エルレイドに向かって小さく頷いてみせる。

「家のこと。ポケモンたちのこと。よろしく頼んだのだよ」

エルレイドは、オトナシ家に残ることになっていた。

オトナシ家は、代々続く考古学者の家系だ。父の話では、高祖父のそのまた高祖父の代から、オトナシの人間は古き時代について学び続けてきたのだという。

そのため、父が死んだ祖父から受け継いだ書齋には、数々の貴重な蔵書が遺されているのだ。

更に、今の洋館にはリハビリを終えていない野生のポケモンたちもいる。まだ全快していないポケモンたちは、泥棒やハンターにとつては格好の餌食だ。

エルレイドは、ポケモンたちとオトナシ家の蔵書を守るため、オトナシ家に残ることになったのである。

「ルーくんなら、任せられるんだ。ボクたちが帰ってくるまで、家とポケモンたちをよろしく頼むよ」

不服なのだろう。かつて父の一番のパートナーであったエルレイドがここに居る理由は、父　オトナシ博士の一人娘、トイロを守るためなのだ。それなのに、これから旅立つトイロを守る役目ではなく、家の番をしなければならぬ。

エルレイドの気持ちは、よく分かっていた。分かっている上で、トイロはそう頼んだのだ。

「お願い、ルーくん」

下手に理由づけることはない。トイロの想いを、エルレイドは理解してくれるはずだ。

真剣な瞳で自分を見てくるトイロに、遂にエルレイドが折れた。小さくため息を一度だけつくと、エルレイドはテーブルの荷物をカプセルバッグに収納させていった。

エルレイドの無言の優しさにトイロは淡く微笑むと、気を取り直すかのように小さく息を吐き、辺りを見回した。

「リッチちゃん、どこにいるのかねー？　出てきたまえ」

リビング全体に聞こえるように、トイロは言った。しかし、目的の相手は一向に出てこない。

どうしたものかと首を傾げるトイロの耳を、突然騒がしい乱闘音

が叩いた。

「ん？」

音のした方 階段だ へと駆け寄ると、そこには本を抱えて
仰向けに倒れるリオルと、その上に馬乗りになってリオルの持つ本
を引つ張るマリルがいた。

「こらこら。やめたまえ。本が傷ついてしまうではないかー」

一向に本の引つ張り合いを止めない二匹を見かねて、トイロは二
匹の頭を同時に軽く叩いた。叩かれたことに気づき、二匹が動きを
止めた隙に間に挟まれていた本を抜き去る。

「ん？ これ、おじいさまの本ではないかー」

二匹が取り合っていたのは、祖父が記した書物だった。各地方に
伝わる、ポケモンに纏わる神話を纏めたもの。

ざつと三十年近く前に書かれた本は、保存方法が良いのかページ
が色褪せているくらいで、他に痛んでいるようには見えない。

「しかし、今はよくない。非常によくはないよ。階段から転がした
上に引つ張り合いなんて、本をどんどんダメにしてしまう見事なコ
ンボではないか」

トイロの言葉に、マリルとリオルが気まずそうに顔を歪めた。

「何があつたか知らないが、ボクの目の前で本を傷つけるのは言語
道断。二人とも、猛省したまえー」

『猛省』という単語に、リオルは素直にシユンと顔を俯けたが、
マリルはまるでプリンのようにムツとした表情で身体を膨らませる。
マリルの言いたいことは分かつていた。今トイロが持っているこ
の本も、オトナシ家が所有する大切な書物の一つなのだ。それを、
つい最近現れたばかりのリオルが持ち去ろうとしたのを見て、泥棒
だと勘違いしたのであろう。

トイロは、長年のパートナーであるマリルの頭を優しく撫でた。

「まあちゃん。リツちゃんは記憶の大半を失くしてしまっている。

もしかしたら、これが何かのキツカケになるかもしれないではない
か。許してやりたまえー」

トイロはそう言ってマリルを宥めつつ、つい数日前のことを思い出していた。

数日前、ウツギ研究所。

「記憶喪失……？」

先日、リオルを置いて飛び出してしまった非礼を詫びにウツギ研究所を訪れたトイロは、ウツギ博士の言葉に眉をひそめた。

それに対し、ウツギ博士はゆっくりと頷く。

「うん。トイロちゃんが飛び出していった後、ラルトスがテレパシーで教えてくれたんだ。リオルの記憶は声だけのもので、それに酷くノイズが走っていたって」

エスパーポケモンはそんなことまでできるのか。と目を丸くするトイロを他所に、ウツギ博士は話を続けた。

「……で、一応と思って、リオルに旅していたときのこと 通った町や、その時期なんかを、地図とかカレンダーとかを使って訊ねてみたんだけど……」

「ほぼ全ての質問に、答えられなかった。……そういうことですか？」

ウツギ博士の言葉に続けるようにトイロが言うと、ウツギ博士は小さく頷いた。

「ただ、トイロちゃんの見た記憶 どういったものかは分からないけど、とにかくそれみたいには、断片的に覚えていることもいくつかあった。オトナシ博士の顔はしっかり分かっていたからね。ただ、

自分の生まれや博士と出逢った時期。旅した道のりなんかは、ダメだったよ」

つまり、リオルに父の場所まで導いてもらうことはできない。そういうことだった。

唯一の手がかりが無くなってしまったことに、トイロは小さく唸る。

「困りました。これでは本当に手探りでやるしかない……」

「そのことについて、僕から提案が一つ」

ウツギ博士の『提案』という言葉に、トイロは顔を上げた。

「提案……ですか？」

「うん。トイロちゃん、ポケモンじいさんと呼ばれるおじいさんを訪ねるんだ」

ウツギ博士の提案に、トイロは首を傾げた。言っている意味がよく分からない。とても言いたげなトイロに、ウツギ博士は簡単にポケモンじいさんについて教えてくれた。

ポケモンじいさんとは、ヨシノシティの少し北、30番道路沿いに家を構える一人暮らしのおじいさんで、珍しいモノを見つけてきては『大発見ですよ！』と大騒ぎをする、珍品マニアなんだとか。ウツギ博士もそれで何度か呼び出されているらしく、ちよくちよくいろんなモノ　ポケモンのタマゴとか、タマゴとか　を渡されるのだと言う。

「はあ……。それで、そのポケモンじいさん……とパパに、一体どのような関係が？」

一見、父の手がかりとは程遠い『ポケモンじいさん』の存在に、トイロは更に眉根をひそめる。しかし、ウツギ博士は先ほどと同じ表情で、話を進めていく。

「オトナシ博士はポケモンじいさんのお気に入りの一人だね。考古学関係の発見は、みんな博士に連絡を入れていたらしいんだよ」

「っ！」

思わず、立ち上がってしまった。考古学関係の発見は、すべてオトナシ博士に連絡を入れていたというポケモンじいさん。

つまり、ポケモンじいさんがこの四年の間に父に連絡を入れていたとすれば……。

「パパの足取りが、掴める……」

「そういうことだよ」

かくして、トイロの旅の道筋 最初の目的地は決まったのであった。

(しかし、どうしてリツちゃんはこの本を……?)

二匹から取り上げた本を見ながら、トイロは小さく首を傾げた。

確かに、この祖父が手掛けた本は、考古学の立派な学術書として有名だ。リツちゃん リオルの記憶に残った、僅かな欠片。それとこの本に、何の関係があるのだろうか。

(……まあ、考えていても仕方ない、か)

とにかく、父の手がかりになるのであれば、何でも拾う。いち早く父の安否を知るには、どんな小さなものも見逃すわけにはいかないのだ。

荷物を纏め終えたエルレイドが、トイロのポストンバックを持ってドアの向こうから顔を出したのを見て、トイロは大きく頷いた。

「よし。二人とも、そろそろ行くよ」

エルレイドから荷物を受け取り、青い毛糸のベレー帽を被ると、トイロはマリルたちに声をかけ、玄關に向かって歩き出した。

「こんにちはー」

ワカバタウンの小さな商店街、その角にあるパン屋にトイロは立ち寄っていた。トイロの後ろで、リオルが物珍しそうに店内を見回している。

カウンターにいた女性が、トイロの顔を見るなり暇そうにしていたその表情を明るくさせた。

「トイロちゃん。久しぶりねえ！」

「お久しぶりです。おばさま」

トイロがペコリとお辞儀をすると、女性　サトルの母はトイロを呼び寄せるように手招きをした。

「あらもう！　そんなに畏まらないでいいのよ！　旦那は配達ではないし、サトルの馬鹿はどこにいるのか連絡一つ寄越しやしないから、すつごく暇だったの！」

かなりテンションが高く、真つ直ぐで明るい人。それがサトルの母のトイロから見た印象だ。サトルの父親はそれに比べ、寡黙であり口を聞かないが、たまにユーモアのある一言を言ってくれる、実に面白い人物だ。この二人に育てられて、どうすればああもひねくれた性格にサトルがなったのか。それはトイロにとってある意味一生の謎である。

サトルの母の言葉に、トイロは少し表情を暗くした。

「やっぱりサトル、連絡入れてきていないのですね」

「必要最低限のことしかしないのは、旦那そっくりなんだけどね。サトル、トイロちゃんにポケギアをプレゼントしたんでしょ？ それにも連絡入ってないの？」

トイロのボストンバックにストラップでくり付けられた、白地にピンクの線が入った携帯端末を指差し、サトルの母がそう訊ねてきた。それに対し、トイロは首を横に振る。

ポケギア。正式には、ポケモンギア。

これまた、シルフカンパニー特製のポケモントレーナー用携帯端末だ。特定の機能をインストールしたデータカードを差し込むことで、時計、地図、電話、ラジオなど、様々な用途に使える、超便利な道具である。

(サトル……)

あの日、サトルが旅立った翌朝にエルレイドからそれを渡されたトイロは、ただただ驚くしかできなかった。

ポケギアには、既にサトルの番号が登録されていた。そして、ポケギアの入っていた箱の中に、一緒に入っていたサトルからの短い手紙。

『何かあったら電話しろ。苛めてやる(笑)』

サトルらしい言葉だった。素直じゃないなあ。と小さく吹き出しながら、サトルの優しさが嬉しかったのを覚えている。

「じゃあトイロちゃん。おばさんからはコレ！」

「ふえ？ わわっ！」

きよとんとするトイロの両手に、サトルの母は一袋の紙袋を手渡してきた。中から、甘い匂いがする。

「おばさま、これ……」

「お昼に食べなさいな。ポケモンたちの分もあるからね」

パンだった。クリームブレッドにチョココルネ、あんパン、レーズンロール、ほかにもいっぱい。

「それと、モモンとナナの実を使ったフレッシュジュース。痛みやすいから、早めに飲んじやいなさい」

それから、水筒を渡されて、トイロは顔を上げた。

「おばさま……あの」

「ノンノン！ お礼なんていらないわよ、トイロちゃん」

礼を言おうとしたトイロの口を、サトルの母は人差し指を当てて止めた。

「……………」

「カズくんとは、私たちも付き合いが長い。彼の娘は、私たちの娘と同じなのよ。母親が娘にお弁当を渡すなんて、普通のことですよ？」

淡く微笑むサトルの母の言葉に、トイロの目尻がほんの少し、熱くなった。

「おばさま……」

「トイロちゃん。しんどくなったら、いつでも帰ってきなさいな。」

私たちは、いつだってあなたを待っているからね」

サトルの母が、カウンターの向こうから、ゆっくりとトイロを抱きしめた。トイロは一度だけ目を瞑ると、何かを決意したような瞳で自分から身体を離すサトルの母を見つめた。

「……………行ってきます！」

「うん。行ってらっしゃい」

トイロは、サトルの母に一度だけペコリとお辞儀をすると、パン屋を駆け足で出ていった。それに、パン屋を物色していたリオルが、慌ててついていく。

しばらくして、サトルの母は小さなため息をついた。

「ここも、しばらく静かになっちゃうなあ……………」

それから、カウンターの下に置いてある、写真立てを手に取った。まだ若い自分と、自分同様に若いのが、今と変わらずがっしりとした体型の夫。そして、夫と比べて線は細いが、しっかりとした身体つきのオトナシ博士。その腕に抱かれた、赤子のトイロ。自分の腕には、サトルが抱かれている。

「あれからもう十五年、か……」

写真の頃を思い出しながら、サトルの母はカウンターに突っ伏した。

同時刻、オトナシ家の洋館。

午前中の日課である芝の手入れをしながら、エルレイドはオトナシ家を見上げた。

(博士 否、オトナシ家の研究テーマ……)

エルレイドは、かつてはトイロの父、オトナシ博士と共に、様々な場所を旅していたポケモンだ。トイロと出逢い、トイロの祖父

オトナシ博士の父が亡くなるまで、エルレイドはオトナシ博士の右腕として、時には博士の研究を手伝い、時には博士の身の安全を護ってきた。

だから、オトナシ博士 オトナシ家が、先祖代々研究してきたそのテーマを、彼は知っていた。

(この世界の起源。『無』から生まれた『有』。イレギュラーであるはずの現象から誕生した、更なるイレギュラーがもたらすもの……)

時間も、空間も無かったとされる『無』から、世界が生まれた理由。それがもたらす意味。それを探求することが、オトナシ家の研究テーマだ。

エルレイドは、自分の両手を見つめた後、周りでのんびりと過ごす野生のポケモンたちへと目を向けた。

（博士の説が正しければ、私も、ここに根づく生命　博士やお嬢様も含め、それらは本来はあり得ない存在だったはず）

何故、世界は創造されたのか。何百年もの間、オトナシ家が探し求めてきた真実は、どこにあるのだろうか。

（博士は、もしかして……）

エルレイドの中に生まれていた、一つの仮説。確証はないが、確信に近い感情を覚えるそれ。

（……やめよう。考えていても仕方ない。私は私のすべきことを為すまで）

いつか帰ってくるであろう、主人とその娘の為に、この洋館を守り抜く。それが、今のエルレイドの役目だった。

二人が帰ってきたら、みんなでシチューを食べよう。あの二人の共通した大好物を腕によりをかけて作るう。きつとそこにあるのは、かつてあった、オトナシ家の幸せな光景のはずだ。

そう、エルレイドが考えていたときだった。

「おじゃまします」

後ろから、声を掛けられた。来客など珍しいな。とエルレイドは首を傾げながら声のした方を振り向いた。

後ろに立っていたのは、美しい女性だった。

長い金髪に、漆黒のコート。その下には、身体の線に合ったこれまた漆黒の上下を着ていた。

右目は、長い前髪に隠れて見えない。だが、むしろそれが女性の

醸し出す『覇気』を更に強いものとさせていた。

(只者ではない……な)

戦意を感じたわけではないが、何が起きても良いように、エルレイドは肘から刃を出現させた。

エルレイドが戦闘態勢を取ったことを見た女性は、それまで発していた『覇気』を霧散させるように、両手をわたわたと顔の前で懸命に振った。

「ちょ、ちよつと待って！ 私は決して、怪しい者でもないし、悪人でもないから！ 同業者よ、同業者！」

(……?)

突然雰囲気の変わった女性にクエスチョンマークを浮かべながらも、構えを解かないエルレイド。

すると、女性は小さくため息をつきながら、その場にどかつと胡座をかいて座った。同時に、コートとズボンに装着していたトレーナーズベルトを取り去り、手の届かない場所に放り投げる。

「!?!」

「『相手の警戒を解くには、こちらに戦意がないことを伝える』……私は丸腰よ。戦うつもりは毛頭ないわ。だから、その刃をしまつてくれない？」

素直に、驚いた。女性が言った言葉は、遺跡を調べる際に、遺跡を守る人々の信頼を得るためにオトナシ博士がよく口にしていた言葉だったからだ。

数秒の睨み合いの後、エルレイドは刃をしまった。その様子に女性性はホッと胸を撫で下ろし、胡座をかいたまま再びエルレイドを見上げた。

「私は、シンオウ地方の神話や古い伝承を調べている、カンナギタウンのシロナ。オトナシ博士にお会いしたく、馳せ参じました」

物語が、動きだそうとしていた。

P・3 今、歩き出す（後書き）

今回のテーマ

『リオルとマリルの取っ組み合い』

『胡座をかくシロナさん』

SSはうずまきじまが面倒くさくて進めていない、旅がらすです。

オリジナル要素のカプセルバッグは如何でしたでしょうか。

できればこんなの商品化してほしいな！。とか考えています。

圧縮袋より優秀だぜ！？ 旅行で行きから荷物パンパンの旅がらすには嬉しい商品。

そしてそして、出ちやいましたよシンオウチャンピオン！ 初の女性チャンピオンで一番主人公との絡みが多い彼女が大好きです。

そんなシロナさんに胡座をかいてほしかったので、エルレイドには刃を出してもらいました。

……何故胡座か？ だって、正座のシロナさんより胡座のシロナさんの方がカッコよかったから（何）

今回はトイロが隣町に行きます。さてさて何が起こるかな？

では、また次回！。

P・4 花咲く町(前書き)

作者の遅筆炸裂！

一週間とちよいぶりです。

こんなんで書いてて、きちんと完結するのかしらこの話……。

新キャラ登場。そして……！ な第四話。お楽しみください！

「トレーナー一人。ヨシノシティまで乗せてほしいのだよー」

ワカバタウンの西側。ヨシノシティへと続く29番道路の入り口にある停留所の受付で、トイロは係員にトレーナーズライセンスを差し出した。係員の女性はトイロの身分証明を確認すると、素敵な笑顔（営業スマイル）で、トイロにライセンスを返す。

「承りました。一番乗り場からご乗車ください」

「どうもなのだよー。リツちゃん、ついてきたまえー」

受付嬢に軽く会釈をすると、トイロは『1』と書かれた看板に向かって歩き出した。物珍しそうに辺りを見回していたリオルが、慌ててそれについていく。

「おお。これが馬車か」

『1』と書かれた看板の下には、緑色に塗られた屋根を頂いた馬車だった。それを引く一頭のポニータと、トイロの目が合う。

ポニータのつぶらな瞳に、トイロは顔を綻ばせた。

「うわあ。すっごく可愛いのだ。ボクはトイロ。これからよろしく頼むよー」

挨拶代わりに、トイロはポニータの耳の後ろを撫でるとポニータは気持ち良さそうに目を細めた。

町から町への移動手段は、主に三つある。一つは自分の足。もう一つは定期バス。そして最後の一つが、今トイロが利用しようとしている、ポニータなどのポケモンが引く乗合馬車だ。

ワカバタウンは小さな町のため、定期バスは運行していない。そのため、人々の移動手段は専らこのポニータの馬車であった。

更に、十八歳未満のトレーナーなら身分証明書を示せば無料で利用できるのですが、中にはポケモンジムがあるキキョウシティまでの直通車を利用する若手トレーナーも少なくない。

「嬢ちゃん。そろそろ出発するから、客車に乗ってくれえ」

ポニータを撫でていたトイロに、この馬車の御者らしき老人が声をかけてくる。トイロはそれに頷くと、後ろのドアから客車に乗り込んだ。

客は、トイロ一人だけのようだ。トイロとリオルが乗ったのを確認した老人は、手綱を取るとそれをポニータに打ち付ける。背中に手綱を打たれたポニータは、短く嘶いてからゆっくりと歩き出した。「おお。結構乗り心地いいのだ」

初めて乗る馬車に、トイロは感動の声を漏らした。大都市間ともなれば、リニアモーターなども充実しており、これに比べれば速さなども比べ物にならないが、やはりこれはこれで情緒があるし、何より楽しい。

リオルも同じことを感じていたようだ。窓の向こうの景色に感動しているのか、楽しそうに飛び跳ねている。

「おじさん。他のポケモンたちも出して良いかい？ この乗り心地をボクとリツちゃんだけで味わうのは勿体無いのだ」

トイロが御者の老人に声をかけると、老人は気を良くしたのが大きな声で笑った。

「構わんさ。今日はお嬢ちゃんの貸しきりじゃからな！」

「ありがと、おじさん」

気前の良い老人に礼を言い、トイロは腰のトレーナーズベルトから二個のモンスターボールを取り出した。

「出ておいで。アーくん、まあちゃん！」

トイロの掛け声と共に、モンスターボールが開く。中からリーフイアとマリルが飛び出してきた。

「まあちゃんもアーくんも、馬車は初めてであろう？ 思う存分堪能したまえー」

「リーファイー！」

「るりー！」

二匹とも、外に出られたことではしゃいでいるようだ。マリルはトイロの向かい側の座席で跳ねて遊び始め、リーフィアは窓から射し込む日射しの下で横になり、日光浴をしている。

トイロはリオルと共に窓からの景色を眺めながら、久しぶりに出る外の世界へと様々な想いを馳せていた。

ワカバタウンを出て一時間弱。トイロの乗る馬車は隣町のヨシノシティに到着した。

トイロは御者の老人とポニータに別れを告げ、町の中を軽く散策する。後ろを歩くのは、先ほどの興奮がまだ冷めていないリオルとマリルだ。

ヨシノシティは桜で有名な町だ。町の名前の由来でもあるソメイヨシノの花は、既に満開を過ぎており、葉桜になっている。

「むー。残念だ。非常に残念だ。もう少し早ければ、満開の桜が楽しめたのになあ」

花が好きなトイロは、満開シーズンを逃したことに小さく愚痴を溢した。

しかし、田舎育ちのトイロは人混みが大の苦手だ。ヨシノシティは、町自体はそこまで大きくないが、満開のシーズンは観光客と露店で賑わう。

それを想像すると、満開の桜を楽しむ前に人混みに酔って倒れるかもしれないという結論に到ってしまった。

「まあ、葉桜も葉桜で綺麗だし、良しとしようかー」

「るーりー？」

トイロの一人言に、マリルが不思議そうに首を傾げた。それに対し、トイロは何でもないと首を振る。

そこでトイロは、あることに気づいた。

トイロの後ろをマリルと一緒に歩いていたはずのリオルが、いつの間にかいなくなっていた。

何となく嫌な予感がしたトイロは、恐る恐るマリルに訊ねた。

「……………まあちゃん。リツちゃんはどこに？」

「る？ ……………るりー！」

今、気がついたらしい。マリルもリオルがいなくなったことに驚いていた。

マリルの反応に、トイロは頭を抱える。

「まずい、非常にまずいぞ。リツちゃんは記憶喪失な上に、この地はじめてのはずだ。パニックになって逆に酷く迷いすぎてなければいいが……………」

目を離していた時間は、そう長くないはずだ。元来た道を戻れば、まだ近くにいるかもしれない。

「それに、リツちゃんはもう一つ厄介な“問題”を抱えているし……………」

……………まあちゃん。急いでリツちゃんを探そう」

「るりー！」

トイロの言葉に力強く頷いたマリルに笑顔を向け、トイロは元来た道を戻り始めた。

一方リオルは、トイロたちから少し離れた桜並木でおろおろとしていた。

しまった。とりオルはうなだれていた。はじめて見る桜の美しさに見惚れている間に、トイロたちとはぐれてしまった。

「う……、うー！」

まだ近くにいてもかもしれない。そう思ったリオルは、トイロたちに気づいて貰おうと声を上げた。

しかし、その口から出るのは、リオルにしては変な唸り声のようなものだった。もう一度叫ぶと、近くにいた人間の二人組が怪訝そうに首を傾げる。

「ねえ、あのポケモンなあに？ はじめて見るわ」

「……あ、あれ、リオルだよ。珍し」

「ふーん……。リオルってああ鳴くのね」

「いやいや。リオルは普通ああは鳴かないよ。ちょっと変だな」

「えー。じゃあ、リオルじゃないんじゃないの？」

「そうかなあ……。確か、前に雑誌で見たリオルのまんまなんだけど……」

リオルは、とても賢いポケモンだ。人間たちの会話を聞いて、リオルは一端鳴くのを止めた。

続けてやって来るのは、羞恥心と自分へのあまりの情けなさに対する苛立ち。

このリオルは、先天的に声帯に障害を抱えている。彼女の喉から出るのは、リオルの鳴き声とは全く異なる唸り声だけだ。

ずっと恥ずかしかった。どのような羞恥を受けたかまでは忘れてしまっていたが、彼 オトナシ博士に出逢うまでは、常に羞恥心を抱え、いつしか声を出すことすら躊躇うようになっていたことははっきりと覚えていた。

いいじゃないか。それがリオルなのだから。

ほとんど失った記憶の中で、僅かに覚えているオトナシ博士の言葉。オトナシ博士は、自分の声を聞いても笑顔でそう言ってくれた。

リオル、自分を決して嫌いになつてはいけないよ。君自身が、君の一番の味方なんだからね。

オトナシ博士によつて、リオルは心を救われたのだ。この人をずっとずっと守っていききたい。そう、思えたのだ。

リオルは、二回ほど両頬を平手で打った。今は感傷に浸つたり、羞恥心に苛まれていたりしてはいけない。

失くした記憶をいち早く全て思い出し、トイロをオトナシ博士の元へと導かなければならない。

リオルは再び、声を張り上げた。

「うー！ うー！」

とにかく、叫ぶ。きつと、トイロなら気づいてくれる。そう信じて、リオルは鳴き続けた。

しかし、いくら待つてもトイロがこちらにやってくる気配が感じられない。もしかしたら……。という不安がリオルの中を過る。

そんな暗い考えをしてはいけない。そう考えたリオルは、俯きそうになつた顔を上げ、もう一度鳴いた。

「うー！」

「……どうしたんだい？」

不意に、後ろから誰かが声をかけてきた。

「リッちゃん！」

「るりー！」

「うー！」

数分後、トイロとマリルは漸くリオルと再会することができた。淋しかったのだろう。リオルの瞳には涙がうつすらと滲んでいる。

トイロはひとしきりリオルを愛でた後、顔を上げて一人の少年を見上げた。

「ありがとう。お陰で助かったよー」

「ううん、いいんだ。僕はただ、この子と一緒にいただけだから」
トイロと目の合った少年は、トイロの言葉に小さく首を振っていた。確かに、その顔には特に迷惑そうな感情は浮かんではいない。

リオルを探すため、元来た道に戻っていたトイロとマリルは、桜並木の間置かれたベンチでリオルが少年と座っている姿を見つけた。もしかと思って名前を呼んでみたところ、見事にビンゴというわけだったのだ。

構わないと答える少年に対し、トイロは立ち上がって首を横に振った。

「そんなことはない。君がいたから、リッちゃんを見つけることができた。お礼をさせてほしい」

「え、でも……」

トイロの申し出に、少年は小さく唸った。あまり欲のない性格らしい。少し困っているようだ。

と、そこで、

きゅっうっうっ……。

「あ……」

少年のお腹が、可愛らしい鳴き声を上げた。少年が恥ずかしそう

に俯く。

その様子に、トイロは両手に抱えた紙袋の中身を思い出した。少年が口を開く前に、トイロは少年に訊ねる。

「そうだ。君、パンは好きかね？」

「え？ ……好きか嫌いかと聞かれたら、好きだけど……」

決まりだ。少年の答えに、トイロは大きく頷いた。何も知らない少年に、パンの入った紙袋を差し出す。

「ここにパンがある。幸い、ボクとポケモンたちだけでは食べきれない量だ。良ければ近くの公園でランチを一緒にしないかね？」

「……………」

トイロの提案に、少年は少し面食らっているようだ。男の子にしては円らかな瞳をぱちくりとさせながら、トイロを見つめている。

暫しの見つめ合いの後、少年は漸く首を縦に振った。

「へえ〜。では、アリアはもう随分と長く旅をしているのだねー」
ヨシノシテイの中央公園で、トイロはベンチに腰かけてレーズンロールを頬張っていた。

トイロの隣では、先ほどの少年　アリアが小さく頷きながらメロンパンにかぶりついている。そのすぐ傍で、トイロのポケモンたちがそれぞれに好みのパンに舌鼓を打っていた。

トイロの提案に乗ってくれたアリアは、今までの旅のことをトイロに話して聞かせてくれた。

何でも、アリアはハウエン地方出身のポケモントレーナーで、十歳の頃から一人旅をしているのだという。現在はトイロよりも二つ上の十七歳。

年下なのに、どこか上から目線のトイロの口調に嫌な顔一つ示さずに、アリアは笑顔を浮かべた。柔らかい薄茶の短髪が、それに合わせてふわふわと揺れている。

「うん。ヨシノシティには桜を見に来たつもりだったんだけど、ちょっと遅かったみたいだ」

ちなみに、アリアのポケモンたちはちょうどポケモンセンターで休んでいるらしく、今はいない。暇な時間に桜を楽しもうとも思っていたようだ。

本当に残念そうに小さく息をつくアリアに、トイロは笑いかけた。「でも、葉桜もまた風情があるよ。満開シーズンは人でごった返すから、ボクの場合は桜など楽しめずに終わってしまいそうだよー」「はは、それ同感。僕も人混みはちょっとなあ……………」

「お。ボクたち気が合いそうだねー。ふふ。リツちゃんを見つけてくれたのが君で良かったよー」

人混みという言葉に苦笑いを浮かべるアリアに、トイロも笑みを溢す。

ポケモンたちと一緒にとはいえ、一人旅はやはり少し淋しいし、トイロには同年代の知り合いがそもそもサトルくらいしかいない。なので、気が合いそうなアリアとの出逢いは、トイロにとってとても良いものだったのだ。

しかし、アリアはトイロの言葉に少し驚いたらしい。きよとんとした表情で、トイロを見つめている。

そんなアリアの表情に、トイロも首を傾げた。

「……………? どうしたのかね? アリア」

「……………トイロって、『天然』とかってよく言われたりしない?」

「……………」

アリアの質問の後、暫し流れる沈黙。

数秒後、

「……………何故それを?」

トイロはもう一度、首を傾げるのであった。

「じゃあ、僕はこれで。ごちそうさま、美味しかったよ」

話も終わり、しばらくの間のんびりと過ごしていたのだが、不意にアリアがそう言って立ち上がった。その言葉に、アリアとの別れを今更のように実感してしまった。

「そうか。仲良くなれたのに、少し残念だよー」

「同感。僕もポケナビじゃなくて、ポケギアを持っておけばなあ…」

トイロの言葉に、アリアも残念そうに肩を竦めてくれた。

アリアのいたハウエン地方では、ポケギアよりもポケナビ（ポケモナビゲーター）という端末の方が普及している。機構が違っため、二人の連絡手段とはなり得ないのだ。

「しばらくはジョウトにいるのかね？」

「そのつもり。結構見たい場所はあるからね」

ジョウト地方には、文化遺産や自然の壮大さを示すに相応しいスポットが多い。ジム戦で町を巡りながら、そういった場所を観ていくトレーナーたちも少なくないと言うが、アリアもその一人なのだろう。

アリアの言葉に、トイロは大きく頷いた。

「ボクも多分、しばらくはジョウトにいるつもりだ。世界は広いよ
うで狭いと言うし、縁があればまた逢えるだろう」

「僕としては、縁があることを祈りたいよ」

「ボクもだよ」

アリアの言葉を嬉しく思ったトイロは、それに笑顔で頷いた。一方、アリアはまた面食らったかのように目を見開き、ポソリと「やつぱり天然……」と呟く。

アリアの呟きを聞き取れなかったトイロは、小さく首を傾げた。

「？ 何か言ったかね？」

「んーん。別に何も。……じゃあ、『またね』、トイロ」

「うん。『またね』、アリア」

再会を約束するように言うアリアに、トイロも同じように答える。

アリアは一度だけ微笑むと、その場を去っていった。

アリアがいなくなった後、トイロはゆっくりとベンチに凭れかけた。

風が心地好い。良い出逢いだった。何故か、もう一度逢いたいと強く願える出逢いだった。

「うー？」

不意に、リオルがトイロの横に座ってきた。不思議そうな目で、トイロを見上げている。

「ん？ どうしたのかね、リツちゃん」

「う、う？」

小さく首を傾げるトイロの頬を、リオルが軽く引つ張る。肉球が少し気持ち良い気もしたが、トイロはその手をゆっくりと離れた。

「何をするかねー？ ……って……」

「るー？」

「フイ？」

抗議の声を上げようとしたのに、同じようにトイロの頬を突っつくマリルによって遮られてしまう。足下では、リーフィアがトイロたちを不思議そうに見上げていた。

「……君らは何が言いたいのかね？」

ポケモンたちの真意が分からず、トイロは小さくため息をついた。

その時だった。

突然、トイロたちの真上に影が差す。

おかしい、今日は雲一つない快晴だったはずなのに。

そう、トイロが思った瞬間、

「ケツキングう〜。 “かわらわり”〜」

少女の拙い声が、トイロたちの耳を叩いた。瞬きすら許されぬスピードで、トイロたちの座っていたベンチに大きな手が落ちてくる。

「っ!?!」

トイロは、マリルとリオルを抱えて横に跳んだ。直撃は免れたものの、衝撃はまともに喰らってしまった、上手く着地できずに転んでしまう。

トイロの腕の中で、マリルたちが悲鳴を上げた。

「るり!?!」

「う!?!」

「イタタタ……。大丈夫、別段問題はないよー」

リオルたちを地に下ろし、トイロはゆっくりと立ち上がった。そして、ベンチのあった場所を強く睨む。

ベンチが元あった場所にいたのは、ケッキングというポケモンだった。

茶色い毛皮で全身を包んでいるが、顔と手足の先には毛がない。

頭頂には真っ白な毛を頂き、その相貌は“ものぐさポケモン”の名に相応しく、如何にもだるそうな半目でトイロを睨んでいた。

「おかしいな、非常におかしいよ。ボクはケッキングに喧嘩を売った覚えはないのに……」

相変わらずの口調で言いながらも、トイロの全身は冷や汗でいっぱいだった。

身体中のセンサーが警戒している。今日の前にいるケッキングに立ち向かうべきではない。身体が動くなら即逃げるべきであると。

「うわー。マジKYな女」。あーあ、手間増えちゃってマジだるなっただけだ」

するとそこへ、トイロよりも少し幼い少女が木陰から現れた。白と黒のツートーンで彩られたフリルの可愛らしいファッション

所謂ゴスロリ を着た少女は、本当にだるそうにトイロを一瞥してくる。

少女 恐らくはケッキングのトレーナーの出現に、トイロの背中にも更なる悪寒が走り寄る。

この子、ただのトレーナーじゃない。

「……何者だ。名を名乗りたまえ」

どうにか恐怖心を抑えてそう言うトイロに対し、ゴスロリ少女はツンとそっぽを向いた。

「上から目線で人のこと呼ぶ女に名乗るの超ダルいからパース。アタシはただ……」

ゴスロリ少女がそっぽを向いたまま、視線だけを動かす。

その先にいたのは、リオルだった。

「そのリオルをアンタから奪っちゃいたただけだし！ ケツキング！」

「っ！ 戻って、リツちゃん！ アーくん、“リフレクター”！」

少女のケツキングが駆け出したのとほぼ同時に、トイロはリオルをモンスターボールに戻す。トイロを守るように前へ出たリーフィアが、不可視の壁を形成した。

だが、

「甘いつての！ “かわらわり”！」

「ケツキーン！」

ゴスロリ少女の一声に応じて、ケツキングが手刀を振り下ろす。

そこから降されるのは、不可視の壁をも貫く一撃。

「アーくん、“でんこうせっか”！」

しかし、すかさずトイロも次の一手を指示する。

ケツキングが“リフレクター”をかち割ったのと同時に、リーフィアがケツキングの腹部に“でんこうせっか”を決めた。ケツキングはスピードのついたリーフィアの一撃をまともに喰らい、少し後ろに後ずさった。

だが、

「ケツキング、“いわくだけ”」

ゴスロリ少女の静かな声。鳴り響くは大地を割りかねない程に凄まじい轟音。

次の瞬間にトイロが目にしたのは、ケッキングの足下に横たわるリーファイアの姿だった。

「アーくん！」

「ケッキングの攻撃力を舐めないでよねえ。接近戦なら負ける気無いし。弱いなら弱いなりにさっさとリオルを渡しなつての。マジダールいんだからさ」

嘲笑の混じった少女の言葉に、トイロの闘争心に火がつく。

「戻つて、アーくん。……行くよ、まあちゃん！」

「るりりー！」

モンスターボールに戻つたリーファイアと入れ替わるように、マリルが前へと出る。ファイティングポーズを取るようにシャドーボクシングをするマリルを見たゴスロリ少女の眉間に、小さな皺が寄つた。

「マジダルいつて言ったのに……。ケッキング、さっさと終わらせな」

「ケッキング！」

ゴスロリ少女の苛立ちを更に強く示すかのように、ケッキングがドラミングをする。

トイロのマリルが、ケッキングに向かって駆け出した。ケッキングはその場に構えたまま、動かない。

二人の少女が、互いのポケモンの技を唱える。

「アクアテール」！

「かわらわり」！

蒼に輝くマリルの尾と、ケッキングの手刀がぶつかり合った。両者は互いに譲らず、睨み合いとなる。

行けるかもしれない。そうトイロが思ったときだった。

「……クスッ」

ゴスロリ少女が、口元に手を添えて笑っている。

「……何が可笑しいのかね？」

「アンタのマリルがアタシのケッキングに勝つわけないし。ケッキ

ング、潰しな！」

「ケツキーン！」

ゴスロリ少女の力強い声に、ケツキングが答える。次の瞬間、鏝
迫り合いになつていた手刀が、マリルを尾ごと地面に叩きつけた。

「なっ！」

「アハハハハ！ 超弱い。マジウケる！ そんなアンタにリオル
は勿体無さすぎだし！」

驚愕するトイロを見て、ゴスロリ少女が高らかに笑う。

「ケツキング、そのままあの女からリオルのモンスターボールを奪
うんだよ！」

ゴスロリ少女の声に応じて、ケツキングがトイロに近づいてくる。
だが、トイロの顔に浮かんでいたのは、負けたことに対する悔し
さでも、リオルを奪われそうになっていることに対する絶望感でも
なかった。

「ボクがいつ……」

「……？」

トイロの小さな呟きに、ケツキングの動きが僅かに止まる。

それは、トイロの“最良の一手”を打つに十分な隙となった。

「ボクがいつ、そのマリルを“まあちゃん”と呼んだかね？」

「は？ ……っ！？」

トイロの言葉に首を傾げるゴスロリ少女。だが、すぐに地面に視
線を移し、目を見開いた。

地面に叩きつけられたマリルが、突然霞のように消えたのだ。

「“みがわり”？ まさか！？」

「“きあいパンチ”！」

ゴスロリ少女が上空を見上げたのと同時に、トイロの力強い声が
公園に響き渡った。

“みがわり”を盾にして尾で上へと跳んでいたマリルの“きあい
パンチ”が、ケツキングの脳天に直撃する。咄嗟のことに対応でき
なかったケツキングは、その場でふらついていた。

(まあちゃんの“きあいパンチ”をまともに受けて立てるポケモンはない。そのまま倒れる！)

トイロはそう強く願った。

だが、

「…………マジウザい」

ゴスロリ少女の暗い声に、トイロの身体が硬直する。

ゴスロリ少女が、とてつもなく暗い表情でトイロを睨みつけていた。

「ケツキング、女を潰しな」

ゴスロリ少女の声に、ふらついてたケツキングが応じる。焦点が合っていない目でトイロを睨み付けたケツキングの張り手が、トイロを地面に叩きつけた。

「がはっ！」

「るり！」

肺の中の空気が一気に押し出される。咳き込むトイロに向かって、マリルが駆け出した。

しかし、

「ウザいって言ったじゃん。ケツキング！」

「ケツキーン！」

「るうっ！」

ケツキングの裏拳が、マリルに直撃する。圧倒的な体重差によって、マリルは為す術なく吹き飛ばされる。

「まあ…………ちゃん…………」

「ポケモンの心配より、自分の心配したら？」

いつの間に、そこにいたのだらう。ゴスロリ少女がトイロの傍まで来ていた。

ダメだ。動かなければ。

トイロの全身がそう警告しているのに、肝心の身体は指一本動きやしない。

動け、動けよ！

いくら念じようとも、トイロの身体は既に満身創痍の状態なのだ。立つことすらできない。

「じゃ、リオルは貰ってくわね」

ゴスロリ少女が、身を屈めてトイロのトレーナーズベルトに手を伸ばしてきた。

そのとき、

「ルカリオ、“はどうだん”！」

突然響いた女性の声。次の瞬間、ゴスロリ少女のケッキングが後方に吹き飛んでいく。

「なっ!？」

「女の子を地面に叩きつけるなんて、感心しないわよ」

驚愕するゴスロリ少女に、先ほどの女性の声が語りかける。

(……だ、れ……?)

既に視線すら動かせないトイロは、その声を聞いたのを最後に、意識を手放した。

P・4 花咲く町（後書き）

今回のテーマ

『天然トイロ』

『初バトル』

バトルは描写が難しいです。

モンハンもなんですけど、臨場感を醸し出すのがかなり大変。
想像してるときはものすごく楽しいんですけどね……。ん、ムズい。

感想、アドバイス、批評なんでも来てください！

旅がらすは叩かれてようやく伸びようとす基本ぐうたらさんなの
で（ダメじゃん）。

では、また次回！

P・5 少女の望み（前書き）

もうすぐHGがプレイ時間100時間行きそうなのに、SSは未だに30時間も超えていない旅がらすです。

金銀のときもそうだったけど、ジョウト編はレベル上げがキツイ……。野生のポケモンレベル低いし経験値少ないし……。やっとニドリーノがどくづき覚えたので、キングに進化させました。他はまだレベル40にも行っていない……。

もうラプラスの『ほろびのうた』で強行突破しちゃおうかしら四天王。

とか考えてます。

そんなこんなでHGもプレイ時間に対して最高レベルは60なんですけどー。な、第五話です。どぞ。

P・5 少女の望み

時折、本当に時折しか見ないのだが、すごく印象に残っている夢がある。

夢では、トイロはいつも何かに運ばれているのだ。周りはまるで万華鏡のように美しい風景で、虹のラインがいくつもいくつもトイロの横を流れていくのだ。

『……………ごめんなさい』

それなのに、景色はこんなにも綺麗なのに、いつもトイロの耳を叩くのはとても痛々しい声だった。

『ごめんなさい……………ごめんなさい……………！』

ねえ、どうして貴女はいつも、そんな風に謝るんだい？

そう訊ねたいのだけど、トイロの口からその言葉は出てこない。

『どづして……………、どうして、この子なの……………！？』

声の悲痛な問いかけと共に、視界が晴れ、そしてトイロは夢から目覚める。

それが、いつもの夢の終わり方だった。

「……………ん」

目を覚ましたトイロの視界に最初に飛び込んできたのは、ベッドの床板だった。どうやら、自分は今二段ベッドの下端にいるようだ。だが、おかしい。トイロの記憶はあの公園で終わっている。いつ、どうやってここまで来たのだろうか。

「ここは……………？」

「あ。目、覚めた？」

疑問を口にしたトイロの耳を叩いたのは、透き通るような女性の声。トイロは首を捻って声が聞こえてきた方へと視線を移す。

視線の先にいたのは、長い金髪の美しい女性だった。黒一色で統一させた上下に身を包んだその女性は、椅子に腰かけて本を読んでいた。

女性はトイロの視線に気づくと、読んでいた本を閉じ、トイロに歩み寄ってくる。それから、ベッドに腰かけてトイロを見下ろしてきた。

「はじめまして。私はカンナギタウンのシロナ。貴女と同じ、ポケモントレーナーよ。よろしくね」

突然の自己紹介にきよとんとしながらも、女性の屈託のない笑顔にトイロは口を開いた。

「あ、ボクはトイロ。オトナシ トイロ。……………あの、それでここは？」

「ここはヨシノシティのポケモンセンター。安心して。君のポケモンは三匹とも無事。君は全身を強く打ち付けているから、今日は絶対安静だけだ」

シロナと名乗った女性の言葉に、トイロの意識が覚醒する。

そうだ。あのとき、自分はそのゴスロリ少女にリオルを奪われそうになって、そのとき、誰かが助けに来てくれたのだ。

「……………貴女が、あの子を？」

「そんなとこ、かな。と言っても、あの子は私が来た途端に舌打ちしてどこかに行ってしまったのだけだね」

トイロの質問に、困ったように微笑みながらシロナが答える。
と、そこで、トイロは小さく首を傾げた。彼女の名前には、聞き覚えがある。そう、それも、一回ではない。

シンオウ地方で、若いトレーナーに出逢った。まだ二十歳にも満たないと言うのに、彼女は非常に博識でね。カンナギタウンまでの道中はとても楽しかったよ。

トイロの頭を過つたのは、数年前にシンオウ地方での調査から帰ってきた父の土産話。そういえば、あるとき父が話してくれたトレーナーの名前は……。

「……もしかして、シロナさんの職業は考古学者かね？」

「ええ、一応ね。君がオトナシ博士の娘、トイロちゃんね？」

シロナの問いかけに、トイロはゆっくりと頷いた。するとシロナは、そつとトイロの耳元へと顔を寄せてくる。

「君の家のエルレイド、立派な番人ね」

「ルーくんに会ったのか？」

「ええ。いきなり刃を出されたから、ちょっと驚いちゃった」

「……ルーくん、気を張りすぎだよ……」

容易に想像できたその姿に、トイロは小さくため息をついた。あのエルレイドならやりかねない。

しかし、シロナは特に気を悪くした訳ではないようだ。頭を抱えるトイロを見て笑っている辺り、間違いない。

しばらくして、シロナは突然真剣な表情で部屋を睨んだ。

「……でも、やっぱりオトナシ博士は居なかったわね」

「……え？」

意外な言葉。シロナの言った「やっぱり」という言葉が、トイロに重くのし掛かる。

「あの、それ、どういう……」

「オトナシ家の娘なら、知っているわよね。あの家が昔から探し求

めている『テーマ』を」

トイロの言葉を遮って、シロナが訊ねてきた。その手にあるのは、一冊の古びた本。

トイロが家から持ってきた、祖父の本だ。

「……一応は、『無』から生まれた『有』という、本来ならば変則イレギュラーであるはずのモノから成り立つ世界。その『有』である世界に存在する全生命の起源と生まれた理由を探ること。……そう、父から聞いている」

父が、否、オトナシ家が先祖代々より追い求めているテーマ。トイロは考古学にはあまり関心を抱いていないが、父は懸命にそのテーマを追い続けていた。

トイロの答えに、シロナはゆっくりと頷いた。

「そう。君のお父さんやお祖父さんは、特にポケモンに注目していた。お祖父さんが書いたこの本は、私も初版を持つてるの。様々な地方に伝わるポケモンの神話を纏め、独自の解釈を加えた本は、考古学や民俗学を学ぶ人には正に『聖書』と呼べる一品だわ」

「はあ……」

シロナの話に、トイロは特に興味を持ってなかった。

生前、祖父はトイロにあまり関わろうとこなかった。食事は必ず一緒に取ってくれはしたが、それだけだ。トイロが覚えている祖父は、書齋ですつと閉じ籠っている老人でしかない。

そんなトイロの表情を読み取ったのか、シロナが苦笑いを浮かべた。

「ごめんごめん。つまらなかつたかしら」

「いえ、別に。……あの、それで……」

「お父さんが失踪した理由」

また遮られた。シロナは祖父の本を開き、ページを捲り始める。

本の四分の三を超えた辺りで手を止めたシロナは、そのページを

トイロに見えるように示してきた。トイロはそれを何とか覗きこむ。「上から三行目。読んでみて」

シロナに言われ、トイロは文章を追った。

「……………“そうぞうポケモン”、『アルセウス』？」

そこに書かれていたのは、一体のポケモンについての記述であった。

曰く、世界がまだ宇宙すら存在していなかった頃、突如として現れたタマゴから生まれ落ち、全てを創造したと言われる、まさしく“神”と呼ぶべき存在。

「……………これと父に、一体何の関係が？」

だが、所詮は作り話。トイロはそう認識していた。

何もなかったのに、突如として現れたタマゴ。

そこから生まれたという“創造神”。

正直に言って、どれも信じがたい話でしかない。

だが、シロナは首を横に振った。

「アルセウスは存在するのよ。君のお父さんは、それを発見した」

「……………は？」

今度は、言葉を失うしかなかった。しかし、呆気にとられているトイロを余所にシロナは話を続ける。

「アルセウスはシンオウ地方の神話によく出てきていたから、私もその関係でちよくちよく博士とは連絡を取り合っていてね。でも、博士は数週間ほど前、ある連絡を境にして音信不通となってしまう……………」

「っ！？」

思わず、目を見開いていた。父に繋がる手がかりが、思わぬ場所から出てきたのだ。

「オトナシ博士は、アルセウスに繋がる『遺跡』の場所を示す『何か』を発見したらしいの。そして、それが確かなものであるという証拠を掴むため、ワカバタウンに帰ろうとしていた」

シロナの話は、リオルが見せてくれた記憶とほぼ一致していた。

見つけた！ 遂に、xxxxxxを！

あのとき、父が見つけたものが、アルセウスに繋がる『何か』であるとしたなら。

それを探しだしたその先に、父がいるはずだ。

と、そこへ、

「こら！ 病院で走り回らないで！ 待ちなさい！」

部屋の外から、ジョーイさんの声が聞こえてきた。続けて、部屋の自動ドアが開く。

「るりるー！」

「フィー！」

「うー！」

「まあちゃん！ アーくんにリツちゃんも！」

ドアの向こうから飛び出してきたのは、マリルとリーフィア、それにリオルだった。三匹ともしっかり回復しているようで、何処にも悪そうな箇所は見られない。

ポケモンたちの元気な様子に、トイロは安堵の息をついた。

「良かった……。みんな、無事だったのだね」

「無事を通り越して、元気百倍という感じね」

うつすらと涙ぐむトイロの横で、シロナが淡く微笑む。マリルたちもニッコリと笑った。

だが、

「それでも、マナーは守ってくださいね」

にこやかな表情の、だが確実に怒気を纏わせているジョーイさんが、マリルたちを見下ろしている。マリルたちは気まずそうに目を合わせた。

マリルたちから反省の色を見たのだろう。ジョーイさんは小さくため息をつくとき、トイロの方へと歩み寄ってきた。

「気分はいかがですか？」

「大分良くなったよー。早く動けるようになりたいな」

「しっかり休息をとれば、すぐに良くなりますよ。晩ごはん、後でラッキーたちが運んできますから」

「どうも。何から何まで済まないのだ」

トイロの偉ぶった口調にも特に嫌な顔一つ見せず、ジョーイさんはニコリと微笑むと部屋を出ていった。その様子に、何故かシロナが笑いを堪えている。

そんなシロナに疑問を抱いたトイロは、怪訝な表情でシロナを見上げた。

「……一体何が可笑しいのかね？」

「え？ ……ああ。ちよつと博士の話进行を思い出してね。本当にそんな口調で話してるなんて、ちよつと信じられなかったから」

その言葉に、トイロは少し機嫌を悪くした。まるで、子供扱いを受けている気分だ。

まあ、年齢から考えれば、トイロはまだ十分に子供であるし、シロナは大人であるのだが。

シロナは一頻り笑うと、本をトイロの枕元に置いて立ち上がった。「博士の行方を知りたいなら、『アンノーン』を追いなさい」

「……え？」

シロナの言葉に、トイロは首を傾げた。シロナの静かな瞳が、トイロを射抜く。

「オトナシ博士が調べていた中で、最も深く関わっていたポケモンよ。数々の古代文明に深く関わる、謎めいた存在。私に最後に連絡をくれたときも、博士はアンノーンのことを話していた……」

「……アルセウス……、アンノーン……」
父が追っていた、謎のポケモン。アルセウス、そして、アンノーン。

一体、それらは何なのだろうか。オトナシ家が追い求めてきた『答え』を、それが持っているというのだろうか。

増えるばかりで解決しない謎に頭を抱えなくなってきたトイロの耳を、シロナの声が叩いた。

「あと、今日貴女を襲った女の子。多分、また貴女を狙ってくるはずよ。いなくなる前に、そんなことを言っていたから」

「……!?!」

シロナの言葉に、トイロはあのとくに抱いた屈辱を思い出した。思わず、布団の中で拳を握りしめてしまう。

その様子に何を感じとったのだろう。シロナが不敵に微笑んでいた。

「トイロちゃん、強くなりなさい。口だけでなく、心も。ポケモンたちと一緒に」

シロナはそれから、コートの内ポケットに手を伸ばし、ペンとメモ帳を取り出した。メモ帳にペンを少しだけ走らせると、それを干切って枕元に置いた本へと挟み込む。

「……?」

「私のポケギアの番号よ。私の力で良ければいつでも貸すから、そのときに連絡をちょうだい」

シロナはそう言うと、静かにドアまで歩いていった。そして、ドアの所で一度立ち止まると、トイロを振り向いてきた。

「あ、でもね。一人で何でも抱え込むのは、強さじゃないわよ。勘違いしないようにね」

先程までの静かな瞳とは違う、最初の頃に見せていたにこやかな笑顔をトイロに向けたシロナは、コートを翻して部屋を出ていった。

その姿はあまりにも凜々しく、美しい姿だった。

夜。

ベッドに横になっていたトイ口は、ゆっくりと寝返りを打った。視界が、上段のベッドの床板から、部屋の真ん中へと移る。

部屋の真ん中では、マリルたちが身を寄せ合って眠りについていて、何とも微笑ましい光景だ。トイ口の口から、思わず笑みが溢れる。

トイ口には意外なことだったが、三匹の中で一番寝相が悪いのは、どうやらリオルらしい。先程からしきりにマリルの尻尾をベシベシと叩いている。マリルは眠りが浅いのか、リオルに叩かれる度に苦悶の表情を浮かべていた。

と、そこで、リオルが突然、マリルの尻尾に噛みついた。当然ではあるが、噛みつかれたマリルは痛みに跳ね起きる。

「るうりいいー！」

「わっ。まあちゃん！ 叫んでは駄目だよ！」

何とか身を乗り出してマリルの口を塞いだトイ口は、おそろおそろドアを見つめた。

だが、しばらく経っても誰もドアを叩いてこない。ホッと胸を撫で下ろしてマリルから手を離すと、マリルは涙目で噛みつかれた尻尾を擦った。

そんなマリルの様子に、トイ口は小さな安心を覚える。

「大丈夫かね？ まあちゃん」

「るりっ」

トイ口の問いかけに、マリルは笑顔で答える。ふと、トイ口の脳

裏に昼間の戦闘の様子が過った。

(……ボクは、この子を守れなかった……)

最初のリーフィアとケツキングの打ち合いで、自分たちとケツキングとの実力差は目に見えていた。だから、トイロはマリルに“みがわり”を命じ、隙を狙う作戦に出たのだ。

だが、それも通じなかった。最強の一手ですら、あのケツキングを倒すには至らなかったのだ。

あのとき、そこまで見据えていれば、トイロは逃げるという選択肢を取れたはずだった。だが、自分の力を過信していたせいで、マリルは傷ついてしまった。

「……ごめんよ、まあちゃん」

「る??」

いきなり謝ってきたトイロに違和感を覚えたのか、マリルが身体を斜めに傾げた。その姿に、トイロの目につつすらと涙が滲む。

「ボクが、あのとき君をボールに戻していれば、君は傷つかなかったのに……!!」

それだけではない。ケツキングに恐怖を覚えた時点で、トイロは逃げるべきだったのだ。リーフィアやマリルでは太刀打ちできないと感じた瞬間に全員をボールに戻していれば、リーフィアもマリルも傷つくことなどなかった。

「ごめん。ごめんね、まあちゃん……!!」

限界だった。トイロの両目から、次々と涙が溢れては落ちていく。大切なものを守れなかった悔しさと、自分に対する不甲斐なさが、トイロの心を責め立てる。

だが、不意にトイロの胸に飛び込んできた温もりが、トイロの涙を拭った。

「っ!?!」

「る……」

涙を拭いたのは、マリルだった。いつの間にかベッドに登っていたマリルは、小さくつぶらな瞳でトイロをじっと見つめていた。

「まあちゃん……？」

涙を拭い、トイロをじっと見つめるマリルに、トイロは小さく首を傾げていた。

（謝らないで、トイロちゃん。むしろ、謝るのは私の方）

マリルは悲しかったのだ。長年連れ添ってきたパートナーである少女がこんな風に謝ってきたのははじめてだ。そして、そうさせているのは、他の誰でもない、自分自身であった。

「るり、るりるー」

だから、そんな意味を込めてマリルは身体を横に振った。

だが、少し逆効果だったらしい。身体を横に振るマリルに向けられたのは、更に涙でぐしゃぐしゃになったトイロの顔だった。

トイロは何を思ったのか、マリルを胸に抱き寄せた。マリルは大人しくそれに従う。二人はそのままベッドに横になった。

（懐かしいなあ……）

ふと、マリルはトイロの幼い頃を思い出した。昔はよく、こうして二人で眠ったものだ。

五年ほど前、少女の父がシンオウ地方から連れてきたリーファイアが来るまでは、トイロのパートナーはマリルだけだった。寡黙でありトイロと関わりうとしなかった、でも、本当は孫思いの不器用な老人によつてトイロと引き合わされてから、マリルは十年近く少女と時間を共にしてきた。

喜びも、悲しみも、すべての感情を分かち合ってきたからこそ、

マリルはトイロが今、どんな感情を抱いているのかを正確に察知していた。

(私も悔しいよ、トイロちゃん)

自分にもっと力があれば、トイロがこんな思いを抱くことなどなかったのに。

悔しさに包まれたマリルの中に、強い願いが流れ込んでくる。

(強く、なりたい……)

大切なものを守れるように。二度と、少女にこんな涙を流させたりはしないために。

マリルは、強くそう望んだ。

「まあちゃん……」

そこへ、マリルの耳をトイロの声が叩いた。もう泣き声の混じっていない少女の声に、マリルは顔を上げる。

マリルの目の前にいたのは、強い光を瞳に秘めたトイロだった。マリルを抱きしめたまま、トイロが全身に力を入れているのが分かる。

「ボク、強くなるよ。まあちゃんもアーくんもリツちゃんも、みんな守れるように」

「……」

驚いた。トイロもマリルと同じことを考えていたのだ。

驚きで言葉を失っているマリルを他所に、トイロは再び口を開いた。

「だから、協力して。ボク一人じゃ強くはなれない。一緒に、強くなって……」

(トイロちゃん……)

続けてマリルにやってきたのは、表現できないくらいに大きな喜びだった。

あの、何でもかんでも一人ですべて抱え込もうとばかりいた少女が、自分を頼ってきてくれた。共に強くなるうと、言ってくれた。

「……まあちゃん？」

返事を返さないマリルを不思議に思ったのか、トイロがマリルの顔を覗き込もうとしてきた。

いけない。今、絶対に自分はものすごくにやけている。

マリルは、顔を隠すように、トイロの胸に顔を埋めた。

「わわっ。……まあちゃん？ どうしたのかねー？」

突然のマリルの行動に驚きながらも、トイロはマリルの頭を撫でてきた。マリルはその温もりを、しっかりと身体に刻み込む。

(トイロちゃん……。絶対、守るから)

意を決したマリルは、トイロの顔を見上げた。今、自分にできる最高の笑顔を浮かべながら。

「るり！」

『任せて！』 そんな気持ちを込めてそう頷いたとき、トイロが淡く微笑んでくれた。

同時刻、30番道路。

ホーホーも寝静まる頃、一人の少女が道路沿いにある林の中に建てられた一軒の民家に入った。

「あー。だる。マジめんどい」

民家の中に入ってきたのは、昼間にトイロを襲ったゴスロリ少女だった。可愛らしい顔を陰鬱な表情で暗くした少女は、チラリと台

所に目をやる。

「……相変わらずね、グーラ。アンタ、マジで食べてばっかじゃない」

そう言っただけ息をつく少女の視線の先にいたのは、一人の小男だった。身長は少女とあまり変わらないだろう。既に成人している男性にしては非常に小柄な男は、台所の冷蔵庫の中身を文字通り『漁って』いた。

「だってー、お腹が減っちゃったんだなー。食べても食べてもちつとも足りないんだなー。アセディアもどう？」

痩せた体軀からは信じられない食欲を見せる男　グーラは、そう言っただけをゴスロリ少女　アセディアに差し出してきた。ちなみに、生卵である。

「……いらぬわよ。卵、嫌いだし。下手物も食べれるアンタと一緒ににしないで」

明らかに年上であるグーラに対し、かなり辛辣な言葉を浴びせたアセディアは、そのまま部屋の中を見回した。

この民家は、通称ポケモンじいさんと呼ばれる老人が暮らしている家だ。部屋は今二人がいる台所と目の前にあるリビングのみ。部屋の隅には質素な造りの木製ベッドが置かれ、テーブルとソファの他には何とも妙ちきりんな物体がところ狭しと置かれている。そのどれもが、うっすらと埃を被っていた。

既に家主が消えてから『数日が経過』している部屋を見回したアセディアは、相変わらず冷蔵庫を漁り続けているグーラに視線を戻した。

「……イラは？」

アセディアの問いに、グーラは手を止めずに答える。

「じいさんの足取り探しをしているんだなー。でも、多分……」

「あー！　畜生がマジでふざけやがって俺様を誰だと心得ていやがるんだ！」

グーラの答えが終わる前に、一人の男がドアをぶち抜いて部屋に入ってきた。こちらはグーラとは打って変わって、かなりの巨体だ。体格も細身の二人とは違い、かなりがっしりとしている。

ドアをぶち抜いた男を見て、アセディアはげんなりとした表情を見せた。

「……ちよつとイラ。ドアぶち抜いたら怪しまれるじゃない。誰が直すのよ……」

「ああ！？　んなこと誰が知るか！　俺様は今、超絶にぶちギレてんだよ！　この怒りは今この家を粉々にぶち壊したって足りねえくらいさ！」

最早言うまでもないが、男　イラは相当に機嫌を悪くしているようだ。その様子に、結果を知ったアセディアは表情を更に暗くさせる。

「人のこと言える立場じゃないけど、足取りは掴めなかつたみたいね」

「ああそうさ！　あのジジイ、見事に姿を眩ましやがったぜ！　……つてグーラ！　てめえ何をのんきに食い漁ってやがる！　俺様にも寄越せ！」

「ああ！　その魚肉ソーセージは楽しみに取っていたんだな。駄目なんだなー！」

「うっせえ！　働かざるもの食うんじゃねえよ！」

大柄なイラに押さえ込まれたグーラは、ぐずつきながら逃れようと暴れるが、単純な力では敵わないらしく徒労に終わっている。それを端から見ていたアセディアは、めんどくさそうに小さくため息をついた。

と、そこへ、

「ウフフ。筋肉に組み敷かれる草食クン……素敵な構図だわあ。ああ、二人とも食べちゃいたい……」

あからさまに危ない発言をしながら、今度は妙齡の女性が民家に

入ってきた。

胸元を大胆に開いたツナギ姿という、あまりに奇抜なファッションの女性は、文字通りのダイナマイトボディを誇示するかのよう、モデル歩きで三人へて歩み寄ってくる。

新たな登場人物に、アセディアは帰りたいたい衝動に駆られていた。

「何でよりによってアンタが連絡係なのよ、ルクリア」

「あらあん。可愛い顔が台無しよ、アセディア。オネーサンがマッサージしましょうか？」

「スルーするな、めんどくさいんだから」

明らかに気持ち悪い動きをする女性　ルクリアの手から逃げるように後退すると、ルクリアを強く睨み上げた。それに対し、ルクリアは残念そうに肩を竦める。

「つれないわねえ」

「……スペルは何て？」

今度はアセディアから無視した。本題にしか興味を抱いていない少女に本当に残念そうにため息をつく、ルクリアはツナギの胸ポケットから一枚のメモ用紙を取り出した。

「しばらくは様子見。あのリアルは記憶喪失らしいから、泳がせることにするとのことよ。ポケモンじいさんも、大した情報は持ってないらしいから、追わなくて良いですって」

「あああ！ マジかよそれあのクソリーダー！　俺様は無駄にストレス貯めただけじゃねえかオイ！」

「……それには同意見ね。アタシも無駄にダルい思いしただけじゃない」

ルクリアの報告に、イラとアセディアは不満を漏らした。だが、ルクリアはそれには応じない。

「とりあえず、私たちも“強欲”くんと同じようにこの地方を洗うわよ。アルセウス、もしくは伝説級のポケモンに関する情報が手に入り次第、スペルに報告すること。いいわね？」

ルクリアのそれまでとは違う、逆らうものなど許さない、槍の如

く鋭い視線が三人を射抜く。

程なくして、漸くイラから解放されたグーラが最後に残っていたリンゴを丸々一気に頬張った。

「了解なんだな。ぼくは指示通り、ヒワダタウン周辺を洗ってみるんだな」

適当に咀嚼をしてリンゴを飲み込むと、グーラは外へと出ていく。そして、腰につけたモンスターボールの一つから、“みずどりポケモン”のペリッパを出現させた。

「ペリッパ」

“暴食”のグーラ。お先に失礼するんだな」

グーラはそう言うと、ペリッパの足に掴まり空へと飛んでいった。

それを見送った後、次に動いたのはイラだった。先ほどまでの騒がしさから打って変わって、無言でモンスターボールからリザードンを出現させる。

“憤怒”のイラ。チョウジタウンを探りに行くぜ」

イラも短くそれだけ言うと、リザードンに乗って空の彼方へと消えていった。

残ったのは、アセディアとルクリアだった。ルクリアが、楽しそうな顔でアセディアを見下ろす。

「アナタはしばらくお休みだそうよ。“怠惰”のアセディア。私は

“色欲”のルクリアは、アナタをスペルの元へ送り次第、イデアと合流するから」

「……あっそ。じゃ、とつと送ってちょうだい」

もう考えることすら放棄しようとしているのか、気のない返事をするアセディア。しかし、そんな少女に嫌な顔一つせず、ルクリアはケーシィをモンスターボールから出した。

“テレポート”

「シッ」

ルクリアに指示を出されたケーシィが短く鳴いた時には、二人は

既に民家から消えていた。

P・5 少女の望み（後書き）

今回のテーマ

『シロナさん』

『マリル視点』

『喰らう小男、キレル巨漢』

ゲスト出演です。手持ちポケモンは一匹だけ名前と技しか出してません。

ゲストですから。あまり目立たせる訳にもいかないので。つてか、あの方を目立たせたら主人公いなくなります。そのくらいにあの二人には差があります。

けれど、トイロに『何か』を気づかせたくて、彼女には色々やって貰いました。

先輩トレーナーキャラの大切さを知りました。

そして、ルーくんでもやっていますが、ポケモン視点。今回はまあちゃんです。

ポケモンって普段何を考えてるんでしょうね。

無印アニメのときにサトシたちとはぐれたピカチュウたちの話を思い出しながら書いてます。

『俺たちは捨てられたんだあ！ byフシギダネ』

『人間なんてよお……。なあ、オヤジ……』

いつかポケモンたちオンリーで座談会やらせてみたい。

更に更に、新キャラ一気に三人登場。ついでにゴスロリちゃんの名前も判明。

グーラは最初、『鋼の錬術師』に出てくる暴食キャラをイメージしていたのですが、ギャップを書いてみたくて痩せ型小男に変更。他は初期設定そのままに書いてます。ルクリアさんの服装はある意味犯罪。

彼らがこれからの物語にどう関わるかはまだ内緒ですw

ヨシノシテイ、あともう一話続きます。
では！

P・6 強くなるために(前書き)

ども。旅がらすです。

またまた少し間が空きました。

今回はバトル描写ありです。

毎回バトルを書く度に思いますが、躍動感溢れる書き方って難しいです。

頭の中では生き生きしてるのに、いざ書くと『んん？』と首を傾げることもしばしば。

そんなこんなですが、楽しんでいただけたら何よりです。

それでは、どぞ。

P・6 強くなるために

『ああ？ 強くなるにはどうすりゃいいか、だど？』

ポケギアを持つトイ口の耳を叩くのは、久しぶりに聞く幼なじみの声。相変わらず、憎たらしく腹の立つ言い方をする男。

……訊いて早々、トイ口は後悔していた。そして、外の世界とあまり関わろうとしなかった今までの自分を恥じる。もしタイムマシンがあつたら、即過去へと遡り、昔の自分を張り倒したくなつたらいい。

それほどに、幼なじみ サトルに電話をかけたことは、トイ口にとつて嫌なものであつた。

ゴスロリ少女との戦闘^{バトル}の翌日。復活したトイ口は、ポケモンセンターにあるカフェコーナーで朝食を摂った後、新聞を片手にサトルに電話を掛けていた。

電話を掛けた理由は一つ。『強くなるにはどうすれば良いのか』だ。悔しいことこの上ないが、トイ口が今すぐ頼れて自分より強いトレーナーはサトルだけだったのである。

トイ口は今すぐに会話の終了ボタンを押したい衝動に駆られつつも、何とか言葉を絞り出す。

「そう。旅に出て、ボクは自分が如何に井の中の蛙であるかを思い知った。もうあんな屈辱は二度とゴメンなんだ。だから強くなりた。その方法を教えてほしい」

『んなの簡単だ。経験積む。以上』

「……貴様に訊ねたボクが馬鹿だったよ」
あまりにも当たり前過ぎる返答に、トイ口は思わず脱力してしまつた。

そんなことは百も承知だ。だが、経験を積むと言っても様々な方

法がある。その中でも特に『速い』方法を知りたいと言うのに。その旨を説明すると、サトルが面倒くさそうにため息をつくのが聞こえてきた。間違いなく、頭をバリバリと掻いているだろう。

『手っ取り早く強くなるって……。お前なあ、ローマは一日にしてならず』って言うだろ？ トレーナーだっておんなじだ。親父さんが心配な気持ちに分からない訳じゃねえけど、いきなりは無理だ
って』

「う……」

サトルにしては珍しく、正論を言ってきた。思わず反論できずに言葉が詰まってしまう。

それに、と、サトルは話を続けてきた。

『お前の親父さんは強いよ。下手すりゃジムリーダーや四天王が束になってかかったって、勝っちまうって。それはお前が一番よく知ってるだろ？』

確かにそうだ。父はかなりのアウトドア派であり、やたらと凝り性なためにポケモンの育成にも手を抜いていない。

若い頃は何度かリーグにも挑戦していたらしく、その際に手に入れたと言う楯も幾つか実家に置いてある。

つまりは、リーグ優勝だって何度か経験している『強者』なのである。

『オレも事情をしつかり把握しちやいないが、あの親父さんが負けてボロクソになってるのなんて想像できねえよ。あんまし構えんなって』

要は、焦らずにやれ。と言いたいのだろう。分かっている。分

かつてはいた。

だが、

(今のまま、あの子がまた来たら、今度こそやられる……)

トイ口の脳裏を過ぎったのは、昨日出逢ったゴスロリ少女。自分よりも幼いあの少女は、本来なら手懐けるにも時間のかかるケツキングを、まるで自分の手足を動かすような見事な戦い方をしていた。それに比べて、自分はどうかだろう。自身の実力の低さを浅く見てしまい、マリルたちの能力を最大限に引き出すことができなかった。

『……つと、わりい、トイ口。バトル申し込まれちゃった。電話切るぞ』

サトルの言葉で、トイ口は現実に引き戻された。そう言えば、サトルは現在『つながりのどつくつ』と呼ばれる場所で武者修行の最中だとか言っていたことを思い出す。

「ん。ああ、すまない。是非ともボロクソに負けて泣き寝入りでもしたまえー」

『おまつ……！ 次会ったらぜってえに泣かしてやる』

「やれるものならやってみろ。じゃあね」

短い憎まれ口と別れの挨拶を告げて、トイ口はポケギアを切った。そして、そのままテーブルに突っ伏す。

「うー……」

結局のところ、手っ取り早く強くなる方法など存在しない。という結論に至ってしまった。いや、この場合は『戻った』という表現の方が近いだろう。

だが、当たり前の話だ。サトルも言っていたが、ローマは一日にしてならない。こうしてテーブルに突っ伏す暇があるならば、さつさとバトルでも申し込んで経験を積んだ方がよっぽど良いのだ。

「道が険しい……。前途多難なのだよー」

旅に出たその日に出逢った強いトレーナーと彼女から徹底的なま

でに与えられた敗北感。トイロは既に心が不安で押し潰されそうになっただけ。

と、そこで、

「るりー！」

突然ベルトのモンスターボールが震えたかと思うと、マリルが飛び出してきた。

「まあちゃん？ 一体いきなりどうしたのかね？」

「るりりー！」

トイロが訊ねるのも聞かずに、マリルはカフェの入り口へと駆け出した。

数秒後、

「るりりー！」

「え、あ、うわあっ！」

「まあちゃん！？」

カフェの入り口の方から、マリルの声と誰かの叫び声が聞こえてきた。トイロは慌ててカフェの入り口へと駆け寄っていく。

そこには、

「あ………」

「あ、トイロ。おはよう」

昨日、ランチを共にした少年　　アリアが、マリルに飛びつかれて尻餅をついていた。

「そっか……。そんなことがあったんだね」

「うん」

モーニングセットを頬張りながら相槌を打つアリアに、おかわりしたコーヒ―に口をつけていたトイロは小さく頷いた。

その後、マリルが突然飛びついてしまったことに謝罪したトイロは、アリアの朝食に付き合っていた。マリルはというと、アリアにもう一度会えたことが嬉しいのかボールに戻らずにトイロの隣にちょこんと座っている。

トイロは、昨日アリアと別れた後のことを彼に話した。アリアが挨拶の後、トイロの顔を見るなり食事に付き合っしてほしいと申し出てきたのだ。そして、トイロが座っていたテーブルにつくなり、何があったのか訊ねられた。

どうやら、自分はポーカーフエイスができないようだ。流石にリオルや父のことは他言できるほど軽い話ではないため、公園でバトルを申し込まれ、完膚なきまでに叩きのめされた。と説明した。

「でも、てつきりアリアはもう町を出ていたと思っていたから、少し驚いたよー」

せつかくの爽やかな朝に暗い話はあまりよろしくない。少し重たくなった空気を払拭しようと、トイロは話題を変えた。

アリアもそれを察してくれたのか、笑顔で頷いてくれる。

「うん。僕もそのつもりだったんだけど、ちよっといういろいろあってね。出発を伸ばしたんだ」

アリアはトーストにかじりつきながら、腰のモンスターボールをいじっている。どうやら、それが『いろいろあつて』のことらしい。

「パートナー？」

「え？」

トイロが訊ねると、アリアは驚いたように顔を上げた。

アリアは無意識のうちをやっていたらしい。なので、トイロはアリアがいじっているモンスターボールを指さした。

「その子。さつきからずっといじっていたよ？」

「あ……。気がつかなかったよ。クセになってるのかな……」

恥ずかしいのか、アリアはいじっていた手で頬を掻いた。そしてもう一度、モンスターボールに手をやり、今度はベルトから外してトイロの前へと差し出してくる。

「……？」

「開けてごらん」

アリアの静かな声が、トイロの耳を叩く。トイロは言われるがままにアリアの手からボールを受け取り、ボールの開閉スイッチを押した。

ボールからそのポケモンが出てきた瞬間、トイロの頬を冷たい風が撫でた。

「うわぁ……。綺麗……」

ボールから出てきたポケモンを見たトイロは、その優美さに思わず感嘆のため息を漏らした。

薄い水色の体毛に、しなやかな体躯。雪の結晶をイメージしたような菱形の耳、身体の模様。無垢に輝く黒い瞳。

冷たいながらも、柔らかな美しさを持ったポケモン “ しんせつポケモン ” グレイシアの頭を、アリアが優しく撫でた。

「僕のパートナーで、名前はイコロ」

「イコロ？」

「うん。シンオウ地方の古い言葉で“宝”という意味なんだ」

イコロと呼ばれたグレイシアは、アリアの手が気持ち良いのか目を細めている。思わずトイロからも笑みが溢れた。

と、そこでトイロの頭に一つの疑問が浮かぶ。

「あれ？ でも、アリアは確かハウエンの出身ではなかったかね？」

「うん。確かに育ちはハウエンのキナギタウンだよ。でも、生まれはシンオウのキツサキシティなんだ」

「あ、そうなんだ……」

アリアの説明に、トイロは納得がいった。

グレイシアは、イーブイがシンオウ地方の217番道路に存在す

る『氷に覆われた岩』に触れることで進化するポケモンだ。その『岩』がある217番道路は、キッサキシティのすぐ近くにある。

つまり、このグレイシアはアリアと昔から一緒にいたポケモンということだ。

でも、とアリアが話題を切り替えてくる。

「トイロもリーフィアを持っているよね？ 生まれも育ちもワカバタウンだって、昨日は言ってたけど……」

アリアの疑問に、トイロは苦笑いを溢した。

「え？ ……ああ、アーくんは、パパがシンオウから連れてきた子なんだよ」

「お父さんが？」

「うん。パパが仕事でシンオウに行ったとき、ボクへのお土産にと知り合いから譲ってもらったイーブイのタマゴがハクタイの森で生まれちゃってさ。更に生まれた場所が『苔に覆われた岩』の上で、生まれてすぐに進化しちゃったんだって」

五年ほど前、その話をリーフィアを受け取りながら聞いたときは、父のあまりのドジ加減に思わず吹き出してしまったものだ。娘へのお土産を自分で孵化させてしまった上、進化までやってしまった父は、本当に申し訳なさそうにトイロに謝罪をしたのだ。

アリアもその話には驚いたらしい。目を丸くさせ、グレイシアの頭に手を置いたまま、凍りついていた。

「……何と言うか、トイロの原点を見た気がするよ……」

そんなアリアの咳きは、目の前の少女には届かなかった。

「そういえば、どうしてまあちゃんはアリアを見つけれられたのかな？」

「るりー？」

アリアの食事も終わり、三杯目のコーヒーを啜っていたトイレは、ふと思い出したようにそう呟いてマリルを見下ろした。マリルはと言うと、自分を不思議そうに見つめるトイレを同じような表情で見つめ返している。

そこへ、アリアが口を挟んできた。

「多分、僕の声が聞こえたんじゃない？ マリルは耳がすごく良いらしいし」

「え？ 声って、このテーブルから入り口まで、結構距離があるではないか」

ここはカフェコーナーと銘打ってはいるが、広さはかなりある。それに、今トイレたちが座っている席は、ちょうど入り口から対角線上のコーナー、つまりは一番遠い場所だ。入り口までは直線距離でも十メートル以上ある。

そんな場所において、しかも他にも客で賑わっているこの朝食時に、マリルは昨日会ったばかりのアリアの声を見事聞き分けたと言うのだろうか。

だが、納得のいかないトイレを、アリアはただ不思議そうに見つめるだけだ。

「……………イコロ。“かげぶんしん”」

「グッ」

突然、アリアがグレイシアに指示を出す。グレイシアは主人の意図を察したのか、瞬時に四体の分身を作り出した。

「……………え？」

「えっと……………まあちゃん、だっけ？ 今からイコロが尻尾を振る

から、本物を見つけてくれるかな？」

「るりっ！」

アリアの申し出に、マリルは「任せて！」と言わんばかりの得意気な表情で頷いた。一方、トイロは何が何だか訳が分からない表情でアリアたちを見つめる。

アリアが、人差し指を立てた。

「イコロ、しっぱをふる」

アリアの言葉に、グレイシアたちが答える。全員が一糸乱れぬ動きで尻尾を振り続ける。

マリルは、目を閉じて集中していた。耳が、微かにピクピクと動いている。

数秒後、

「るりりっ！」

「グー」

マリルが五体のグレイシアの内、右端の個体に飛びついた。マリルに体当たりされたグレイシアが、後ろに倒れ込む。

正解していた。驚くトイロの向かいで、アリアがニコリと微笑む。

「うん。正解」

「すごい……。ホントに正解しちゃった」

「るりりー！」

呆気にとられているトイロに向かって、マリルがエヘンと胸を張った。「どんなもんだい！」と言っているようだ。

トイロはまだ不思議に思いながらも、マリルを抱き上げてその頭を優しく撫でた。

「でも、何で本物が分かったのかね？ まあちゃん」

「尻尾を振るときに、微かに毛が擦れるんだ。その音を聞き分けたんだよ」

答えられないマリルの代わりに、アリアがトイロの疑問にそう答

えた。その言葉に、トイロは目を剥く。

「……毛が擦れる音って、どれだけ小さな音なのかね……」

「ものすごく微かな音。でも、イコロも意地悪して音がなるべく鳴らないようにしていたのに、それを見事に聞き分けるなんて、まあちゃんは凄いや」

真っ直ぐなアリアの感想に、マリルは照れくさいのか顔がにやけている。

今まで知らなかったマリルの性質に、トイロはある種の衝撃を受けていた。

「ポケモンバトルはね、技や能力、特性だけじゃ勝てないんだよ」

「え？」

不意に、アリアがそう呟いた。その呟きに、トイロは顔を上げる。目の前で、涼しげで柔らかな笑みを浮かべた少年がトイロを見つめていた。

「ポケモンの体型、性質、得意分野、苦手分野。知識、ポケモンへの信頼。バトルには他にもたくさんの要素が必要とされる。そして、それらを上手く網羅できれば、ちょっとしたレベルの差くらいなら簡単に凌駕することができるんだ」

バトルに すなわち、トレーナーに必要とされる能力。

アリアの言葉が、ゆっくりとトイロの中に浸透していく。

「ねえ、アリア……」

無意識のうちに、トイロはアリアに声をかけていた。

「ん？」

「ボクと、バトルをしてくれないか？」

トイロの突然の申し出に、アリアの動きが止まる。

だが、トイロは構わずに言葉を続けた。
「ボクは、キミと戦ってみたい。だから、ボクと戦ってくれないか
ー？」

この人と、戦ってみたい。とにかく、戦いたい。

今、トイロの中にあるのはその願っただけだった。理由など、思い
つきもしなかった。
数秒後、アリアがゆっくりと頷いた。

トイロとアリアは、ポケモンセンターの前にある広場で向かい合
っていた。

アリアが、トイロに微笑みかけてくる。

「使用ポケモンは一体。それで良いよね？」

「構わないよー。ボクはもう決めているが、アリアはどうかね？」

腰のトレーナーズベルトからモンスターボールを取り出したトイ
ロに対し、アリアは余裕のある表情で頷いた。

「大丈夫。僕も準備は万端だよ」

いつの間にか、二人の周りにはギャラリーの固まりができてい
る。娯楽の少ない田舎町では、若いトレーナーたちのポケモンバトルが、
一種の祭のようなものとして認識されているのだ。

ギャラリーの中から、マイクを握り正装をした男が現れた。

「話は聞いたよ！ このバトル、私がジャッジを務めよう！」

「どうやら、バトル好きの審判シムジヤンのようだ。男の登場に、ギャラリーが湧く。

「お願いするよ、まあちゃん！」
「るりりっ！」

トイロが選んだのはマリルだった。ボールから飛び出したマリルは、楽しそうに尻尾で跳ね回っている。

続けて、アリアもボールを放った。

「行くんだ、ダブル」

「ダブルッ」

アリアが放ったボールから出てきたのは、“えかきポケモン”のダブルだった。

ベレー帽を被ったような頭部に、白い二足歩行の犬のような容姿、長い尻尾の先は、絵筆のような形をしており、先端からは青いペンキのような液体が滴っている。

二人がポケモンを出したことを確認したジャツジマンは、右手を天に向けてビシィッ。と上げた。

「マリル対ダブル！ 入れ替え無しの1on1バトル、始めえっ！」

「まあちゃん！ “まるくなる”から“ころがる”！」

トイロの指示に、すかさずマリルが答える。身体を丸め、青い球体と化したマリルは加速しながらダブルへと突っ込んでいく。

「ダブル、“じゅうでん”」

アリアの静かな声が、バトルフィールドに響いた。静かに佇むダブルの身体を電気が迸る。

瞬間、転がるマリルのスピードが緩まった。トイロはそれを見逃さない。

「“ころがる”止めっ！ “バブルこうせん”で弾幕を張って！」

マリルが“ころがる”から元の姿に戻り、口から無数の泡 “バブルこうせん”を吐き出した。二匹の間に、無数の泡によって壁が出来上がる。

クスツ。と笑うアリアの声が聞こえた。

「よく分かったね。“ほうでん”もやっているって」

「まあちゃんが気づいてくれたんだ。ボクはそれに気づいただけ」

“ほうでん”。身体に貯めた電気を無差別に放つ、電気タイプの大技の一つだ。アリアのダブルは、“じゅうでん”をしながら同時に貯めた電気を僅かに“ほうでん”し、電気の鎧を作っていたのである。

トイロがそれに気づけたのは、マリルが一瞬だけ怯んだような仕草を見せたからだ。恐らく、大気中に電気が放電されている音を聞き取ったのだろう。

「へえ。早速生かしてきたね。マリルの聴力」

「まあね。ボクだって頭くらいは使うよー」

二人の間に交わされるのは、不適な笑み。

不意に、アリアが右手を上げた。

「その弾幕、消させてもらうよ。“チャージビーム”！」

「ドブツ」

ダブルが、身体に貯めた電気を直線上に放出する。“チャージビーム”が泡の壁の一部に当たった次の瞬間、連鎖反応によって一気に泡の壁が弾けて消えた。

だが、それでも“チャージビーム”の勢いは劣れない。

「あっ」

「そのまま貫くんだ！」

壁ができたことで安心していただけなのか、マリルは壁を張ったときと同じ場所にいた。“チャージビーム”が、そのままマリルに直撃する。

「るりーー！」

水タイプのマリルに、電気技の“チャージビーム”は効果抜群である。モロに直撃を受けたマリルは、その場にゆっくりとうつつ伏せに倒れた。

「……………」

「どうするの、トイロ？ まあちゃんはもう戦えないんじゃない？」
アリアが短く言い放つ。一方トイロは、呆けたようにその場に突っ立ったまま黙っていた。マリルとトイロを見て、ジャツジマンが右手を上げようとする。

「マリル、戦闘不の」

「違うよ」

しかし、ジャツジマンの声を、トイロが遮った。驚いたジャツジマンが発言を止め、トイロに視線を移す。アリアもトイロの浮かべた表情に疑問を抱く。

「……………何で笑ってるの？」

「ボクたちは、まだ負けていない」

トイロの声が、フィールドに響き渡る。その瞬間、倒れていたマリルが霞のように消えた。

次にアリアが目にしたのは、ギャラリーの中からダブルの背後へと飛び出してきた青い球体。

「“みがわり”！？」

「弾幕は囷さ。まあちゃん、“れいとうパンチ”！」
「るりっ！」

青い球体　マリルが、“まるくなる”を解除して冷気を帯びた拳をダブルに向けて振り抜く。

だが、

「しんそく」

アリアがそう唱えたのとはほぼ同時に、ダブルの姿が消え、マリルの“れいとうパンチ”が空振りに終わった。勢い余って体勢を崩すマリル。

トイロの頬を、嫌な汗が流れる。

「不味い。まあちゃん！」

「マジカルリーフ」

トイロが指示を出すより早く、アリアの声がフィールドに響く。

数秒後、トイロが見たのは、マリルの背後を取ったダブルの“マジカルリーフ”を喰らい、今度こそ本当に倒れてしまったマリルの姿だった。

「マリル、戦闘不能！ よってこの勝負、ダブルの勝ち！」

ジャツジマンの声が、バトルの終わりを告げた。それを聞いた人々が、元の生活へと戻っていく。

「……負けちゃったあ」

「るう……」

トイロはマリルを抱き上げ、その頭を撫でながら微笑を浮かべた。済まなそうに俯くマリルの頭をぺちぺちと叩く。

「まあちゃん。暗い顔しちゃダメだよー。キミはよくやってくれたではないかー」
「そうだよ。誰にも気づかれずに“ころがる”でダブルに近づいたときには、驚いた」

ドーブルをボールに戻し、トイロの横にやってきたアリアが、そう言うってマリルに微笑みかける。

だが、トイロはアリアの言葉に苦笑いを浮かべていた。

「バブルこうせん」と“みがわり”の罠には、気がついていたらだねー？」

「罠を使うのは、常套手段だからね。あの間にトイロが何か仕掛けてくるとは考えていたよ」

トイロは何も、ドーブルの“ほうでん”を防ぐだけのために“バブルこうせん”で壁を作った訳ではない。

マリルの得意分野 特性“ちからもち”によつて得られた攻撃力を生かすため、ドーブルに安全に近寄る手段を得るためでもあった。

そのため、“互いの姿が見えず”且つ“ダブルが“じゅうでん”で得た電気をすべて放出する”ように、あれだけの“バブルこうせん”を放たせたのだ。

更にそこで、“みがわり”による罠を作らせ、本物はギヤラリーの中へと隠す。アリアとドーブルの目がバトルフィールドに釘付けだったことと、ギヤラリーが疎らだったことも幸いし、トイロたちは思惑通りにドーブルの背後を取ることに成功した。

「でも、キミはそれを見越していた。“ほうでん”ではなく“チャージビーム”を使ったのは、“マジカルリーフ”への布石かね？」
「あ、なんだ。バレてたんだ」

トイロの指摘に、アリアは少し悔しそうに苦笑いを溢す。

トイロの囿には気づいていた。だからアリアは“バブルこうせん”に対し“ほうでん”よりも威力の低い　だが、余剰した電気エネルギーを自身の特殊攻撃力を上昇させることのできる、“チャージビーム”で貫いたのだ。

例えトイロのマリルがどんな手段で来ようとも、必中効果を持った“マジカルリーフ”で迎え撃つために。

更にもう一つ。トイロはアリアの“策”を見抜いていた。

マリルの“みがわり”に驚きの表情を見せながら、ドープルに示した静かで落ち着いた指示。トイロの“策”には気づいていたという言葉。

(優しい顔して、なかなかの道化師ヒエロではないか)

つまりは、バトル中に見せたいいくつかの表情と行動が引フエイクつ掛けであつたということ。

わざとトイロの“策”に溺れたかのように見せるため、マリルの“みがわり”に攻撃させ、まるで本物と勘違いしたかのように見せ、更にはそれが“みがわり”であつたと今更気づいたかのように振る舞つた。

すべては自分の“策”に溺れさせるための布石。罾を先に仕掛けたつもりだったが、そこにはアリアが仕掛けた更に大きな罾があつたというわけだ。

(……だが、得られたものは大きいね。うん、実に大きいよ)

アリアとの会話、そしてバトルを通して、トイロは自分に足りないものをいくつか知ることができた。

ポケモンたちのレベルはもちろんであるが、それと同じくらいに大事なこと。

「アリア。ありがとう。楽しかったよ」

だから、トイロはアリアに握手を求めた。アリアは最初は目を丸

くしたが、すぐに笑顔で応えてくれる。

「僕も楽しかったよ。またバトルしたいな」

「うん。そのときまでにうんと強くなつて、アリアをコテンパンにしてあげるから、覚悟しておきたまえー」

得られたものがあつたことですっかり元気を取り戻したトイ口の笑顔と偉ぶつた口調に、アリアが小さく吹き出した。

「じゃあ、僕が勝つたらそのときはデートでもしてもらおうかな？」

「ボクは構わないよ」。アリアとのデートも楽しみになりそうだが、それでもボクは勝つからね」

「……………」

アリアとしては、軽くふざけたつもりだったのだろう。

だが、トイ口はつい先日外の世界に旅立ったばかりの、所謂“箱入り娘”なのだ。無垢で無邪気なままに育った彼女には、冗談すら通じない。

笑顔を苦笑いに変えたアリアは、ふと何を思いついたのか、「そうだ」と呟いた。

「トイ口。目を瞑って」

「え？」

「いいから瞑って。強くなれるおまじない、してあげる」

「……………」

何が何だか理解できないままに、それでもトイ口は大人しく目を瞑った。

額に、柔らかい何かが優しく触れた。

「っ！？」

びっくりして目を開けると、視界いっぱいアリアの優しげな微笑みが映っている。

そこでトイ口は、額に触れたものの正体を知った。

「なっ……………」

「トイロ。気をつけた方が良いよ。外の世界には“ケダモノ”がいっぱいいるからね」

アリアはそれだけ言うと、腰から一つのモンスターボールを取り出して宙に放った。中から、“せいれいポケモン”のフライゴンが現れる。

「……………」

「じゃあ、『またね』。トイロ」

呆けるトイロをそのままに、アリアはフライゴンに跨がると空へと飛び去っていった。

胸に抱いたマリルに叩かれてトイロが我に返ったのは、それから数分後のことであった。

P・6 強くなるために（後書き）

今回のテーマ

『久々の幼なじみ』

『……にライバル登場!?!』

サトル。電話向こうですが、久々の登場です。

彼のちよつと口は悪いけど優しい普通の男の子な部分を書くのは非常に楽しいです。

旅がらすの書く話ではかなり珍しい『マジで平凡な男の子』ですが、今はそんな彼がお気に入り。

トイロとの絡みも実に書きやすい。

互いに主導権を奪い合いつつ良好な関係って『すげーなっ!』って思います（そう考えると、サトルはかなり良い奴なんだよな……）

ところが、そんな彼にアリアと言う名の超手強そうなライバルが!?!?!

最後の『おでこに……』はちよつとしたサトルへのジャブ……かな。サトル!。ツンデレ強調ばかりでなくしっかりとしたアプローチもしろよ!。

……だからと言って、誰もキミとトイロをくつつけようなんて考えてないんだけどね!（何）

トイロが誰とくつつくかはまだ決めてません!（ずどーん）

バトルは、ある意味ミュウと同格のポケモン、ダブルが大活躍。

固有技すら我が物にしてしまっ彼は育て方ではマジで最強になりうる……か!?!（能力的に難しいが）

ある意味ノコツチと並ぶすげーキャラ。
旅がらすはまず持っていませんけど。
捕まえに行くのがめんどい（ええ）
アルフの遺跡、そろそろ取材に行かねばな……。

また、お気づきの方もいると思われるが、旅がらすはポケモンたちの技を四つに制限はしていません。
ちよつと自由度が低くなる気がするので、あえてポケモンたちにはちよつと無理をしてもらってます。
その方が楽しいですし。
だから、アリアのダブルもまだまだ隠し要素いっぱいです。……
たぶん。

今回でヨシノシティはおしまいです。
次回のトイロの歩く道はどっちだ!?

では、また次回お会いしましょうー（・）（・）ノシ

Interval 少年の夢（前書き）

ども！

大して話が進んでない＆キャラも出揃ってないのにアナザー版を発売してしまつた旅がらすですw

アナザー版では読者様からのメッセージを募集しておりますので、良かったらどうぞ（何気なく宣伝しようとするなよ）

今回は番外編です。

でも、話にはちゃんと関係ありますよ〜。

『十色のキセキ』はトイロだけのお話ではないのです。

では、どうぞ。

Interval 少年の夢

同時刻。

32番道路、“つながりのどろくつ”前。

「ぬおおあつー！」

突然、言いようのない“何か”を感じたオレは、まるでケモノのような雄叫びを上げた。

その瞬間、真つ正面からオレと向き合っていた女子　ピクニックガールがピクウツと飛び跳ねる。

「ちょ、ちょつと〜。いきなりなんですかあ？　変な声を上げないでください〜」

「あ、わりいわりい。ちょいと悪寒つつか、予感？　みたいなものがしたからよお」

「はあ？　と首を傾げるピクニックガールを余所に、オレは考えを巡らせる。

自分で言うのも何だが、オレはかなり勘が冴える方だ。大概オレが寒気を覚えた瞬間と言うのは、パン屋で親父がくだらないシヤレを言ったり、お袋がとんでもない料理を開発したときと相場が決まっている。

だが、今回の悪寒はそれまでのとはなんだか“種類”が違うような気がした。

そう、まるで、今回は親父でもお袋でもない別の“誰か”のことを示唆しているような、そんな感じた。

(……まさか、トイロに男が!?)

オレの冴え渡る直感が、そう答を弾き出した。それは何故か、一瞬にして強い確信に変わる。

……あ、別にオレはエスパーではないからな。これは“愛の力”なんだ。

けれど、

(ま、あの鈍感箱入り娘のことだ。変に意識したりするようにはな
んねえだろ)

オレはそう、結論づけた。

実際、アイツはかなりの鈍ちんだ。旅に出て世界を知った程度で
治るようなモンじゃない。

だが、次に会ったら絶対に泣かそうとオレは心に決めた。

と、そこで、

「あのお〜。結局、受けて立ってくれるんですかあ？」

今まで完全に放置状態にしていたピクニックガールが、再びオレ
に話しかけてきた。

そこでオレは、彼女からバトルの申し出を受けていたことを思い
出す。

オレは少しこっ恥ずかしくなり、軽く頭を掻いた。

「わりいわりい。いいぜ、受けて立ってやる」

「うわあ。ありがとうございますう。じゃあ、ダブルバトルの20
n2でやりましょ〜」

そう言ってピクニックガールが腰のウエストポーチから二つのモ
ンスターボールを取り出した。

オレも、それに答えるように腰のトレーナーズベルトからモンス
ターボールを二つ選ぶ。

「行くのよ、コラッタ、オニスズメ！」

「ぶちかましてこい、ガーディ、ウパー！」

ボールが、空中へと放られた。

バトルスタートだ！

オレの名前は、ヤマシロ サトル。ジョウト地方の最東端、ワカバタウン出身の十五歳だ。

オレは今、強いポケモントレーナーになるため、修業の旅に出ている。

この世界では、不思議な生き物 ポケモンと人間が協力しあって暮らしている。まあ、いわゆる『共存関係』というやつだ。

そのためか、オレたち子供はポケモンとの触れ合いに慣れていくため、十歳を迎えるとポケモンを持つことを許される。

その後は、子供たちは各々の夢に向かってそれぞれに邁進していく。

例えば、オレのようにポケモンが生来持っている戦闘本能を生かし、ポケモンを鍛え、その“強さ”を磨くポケモントレーナー。

はたまた、ポケモンの魅力を最大限まで引き出し、人々を魅了する“美しさ”を磨くポケモンコーディネーター。

更には、ポケモンが持つ、技以外の能力を伸ばし、人々を熱狂の渦に巻き込む“逞しさ”を磨くポケモンアスリート（略してポケスリート）。などなど、その種類は千差万別。人の数だけの夢がある。つつーことで、子供たちはそれぞれの夢を叶えるため、今この瞬間も修業に励んでいるのである！

オレみたいだね。

「むむ。ガーディにウパーですかあ。相性を突くのは難しいですね」

オレの手持ちを見たピクニツクガールが、難しそうに眉根を寄せた。ピクニツクガールの手持ちはコラッタにオニスズメ。確かに相性を突くのは狙えない。

あ、そうそう。ポケモンつーのはまたこれが不思議なのだが、それぞれに『属性』^{タイプ}というものを持っている。これは、体の造りや生息地の環境、進化の過程で今の形を持つようになったらしく、現在では十七種類のタイプが確認されている。

ちなみに、オレのガーディは炎タイプでウパーは水と地面タイプ。ピクニツクガールのコラッタはノーマルタイプでオニスズメはノーマルと飛行タイプだ。

余談だが、ウパーやオニスズメのようにタイプを二つ所有しているポケモンも多い。まだこの二匹は普通の組み合わせだが、中にはどーすりやそんな組み合わせになるのか見当のつかない組み合わせも存在するらしい。

相性を狙えない。そう言ったピクニツクガールだったが、何故かその口元には笑みが浮かんでいた。

「でもでもお。有利なのは私の方ですね。オニスズメ、空に飛んじやって！」

ピクニツクガールがそう指示すると、オニスズメは上空へと飛んだ。

ふむ。確かにこいつは厄介だ。こっちの手持ちに空を飛べる奴はいない。オレはどうしようかと頭を捻った。

そこへ更に、ピクニツクガールの指示が飛ぶ。

「コラッタ、”でんこうせっか”！」

しまった。空を飛ぶオニスズメに気を取られて地上にいるコラッタのことを失念していた。

「ガーディ、”かえんぐるま”で応戦しろ！」

何とか間一髪でガーディに指示を出したが、速さではコラッタの

方が有利だ。火炎を纏う一瞬前に、コラッタの“でんこうせっか”がガーディに決まり、ガーディが少しのけ反る。

「ガーディ！」

「もう一匹のことを忘れちゃダメですよ。オニスズメ、上空から“つつく”攻撃！」

ピクニックガールの猛襲が、今度はウパーに襲い掛かる。

「ウパー、“マッドショット”で壁を作れ！」

「ウパー」

今度は間に合った。オニスズメは飛行タイプだから地面技でダメージを狙えないが、ウパーはオレの指示通りに目の前の大地に水を含ませ、それを尾で打ち上げることで自身とオニスズメの間に泥でできた壁を造り上げる。

オニスズメが怯んだその隙に、ウパーはとてとてと超スローペー
スでオレへと走り寄ってきた。

そして、何故かとても嬉しそうにオレの足へと擦り寄ってくる。

「ウパー。ウパー」

「あー。今はバトルに集中しろって。ホントにお前、呑気な性格だなあ」

こいつはこの32番道路で捕まえたウパーなのだが、これがまた超呑気な性格でバトル中でも自分のペースを崩さず、呑気に飯を食ったり眠ったりする。

こいつでキキョウのジムに挑んだときなんか、ジム戦の途中だといつのに鼻ちようちんを出して眠る始末だ。

……あのときはさすがに参ったぞ。

「うわあ。油断しすぎい。コラッタ、“かみつく”よー！」

「コラッタ！」

呑気にオレに擦り寄るウパーの尻尾に、コラッタが噛み付いた。ウパーの弾力性溢れる尾に、コラッタの前歯が食い込む。

オレは、そこで口元に笑みを浮かべた。

「噛んだな？」

「へ？」

オレの言葉に目を丸くするピクニックガールを余所に、オレはガーディを呼んだ。

「ガーディ、“てだすけ”しろ！　ウパー、“たたきつける”だ！」

「ガウツ」

「ウパ〜」

ウパーが渾身の力と遠心力が掛け合わさった尾を、コラッタごと地面に振るつ。

そのコラッタの首に、いつの間にかオレの元へと駆けて来ていたガーディの前足がちょうどヘッドロックをかけるように引っかかり、更にたたきつける力が増した。

「コラツ」

「コラッタ！」

二匹分の“たたきつける”を喰らったコラッタは、勢いをつけて地面を転がっていく。だが、オレたちから少し離れた場所で体勢を整えて立ち上がった。見かけに寄らず、意外とタフなようだ。

「まずはコラッタだ！　ガーディは“ひのこ”、ウパー、“みずでつぼう”！」

「ガウツ！」

「ウパ〜」

ウパーの“みずでつぼう”の周りをガーディの“ひのこ”が覆う。ウパーの口から放たれたときには冷たかったそれが、“ひのこ”の熱を受け、一気に熱水に変わる。

「“みずでつぼう”ならぬ“熱水鉄砲”ってどこだな。二匹とも、ぶちかませ！」

オレの掛け声に、二匹の技の勢いが増した。

よし、イケる！

オレがそう勝利を確信した瞬間、ピクニックガールが微笑んだのをオレの双眸が捕らえた。

「ダブルバトルってことを忘れちゃダメですよ。オニスズメ、オウムがえし！」

「チュンツ！」

それまで上空で待機していたオニスズメが、コラッタの前へと踊り出た。そして、不可視の盾を形成し、それでオレたちの技を跳ね返してくる。

「ウパー！」

「ウパー！」

跳ね返された技の直撃を喰らったのは、ウパーだった。ウパーはふらふらと千鳥足でその場をふらついている。

その様子に、ピクニックガールの笑みが更に明るさを増した。

「やりましたあ。そっちのガーディは見た感じサポート型みたいだし、スピードにはこっちに分があります。私の勝ちですねえ」

ブチイッ！

「……あ」

ピクニックガールの言葉に、オレの頬に冷や汗が流れた。

「おいおいマズいぜお嬢さん。その言葉はオレのガーディには“禁句”だったの。」

だが、オレがそう言う前に、アイツは怒りを爆発させた。

「コラツッ！」

「え？」

コラッタの短い悲鳴とピクニックガールの驚いた声。目を回すコラッタの前にはいるのは、火炎を纏ったタイヤのような物体 “かえんぐるま” を発動させたオレのガーディ。

だが、それだけでガーディの猛攻は終わらない。ガーディはその

ままオニスズメへと突っ込んでいった。ピクニックガールの顔に焦りが浮かぶ。

「まずう！ オニスズメ、上空に逃げ」

「ガアウツ！」

「チュンツ」

すかさず、ガーディはオニスズメに“ほえる”を行った。なんかついでにめちゃくちゃガンつけてやられたらしく、オニスズメの顔がめっちゃめっちゃに脅えてて涙目になっている。

あ、別にガーディは“こわいかお”とか覚えてないから。タマゴ技にもないし、レベルアップでも覚えたりはしない。きつとあれは“にらみつける”なんだ。うん、多分な……。

“ほえる”の効果はかなりあったようで、オニスズメはさっきと同じ位置に停滞している。ガーディはそのまま、無防備なオニスズメの片翼にガブリと噛み付いた。

「グルウウウ！」

「チュンツ」

あーあー、またガンくれちゃってるし。ダメだな、ありゃ。

オレのガーディは、決してサポート型ではない。がんばりやで血の気が多いアイツは、むしろ超攻撃型の戦法を好む。

だが悲しいかな。ガーディ自体の覚える技に補助技が多いのも事実だ。今回は“てだすけ”は元より“ひのこ”もウパーの技のサポートに回ってしまったから、きつと不満たらたらに違いないと思っていたが、まさかあんなにキレちまうほどだったとはな……。

片翼に“かみつく”を喰らったオニスズメは、バランスを崩して地面に落下する。

ガーディはというと、ちゃっかりオニスズメをクッションにして自分は無傷で空から生還してきやがった。

「うそぉ……」

自分の手持ちが二匹とも目を回す姿が信じられないだろう。ピクニックガールはポケモンをボールに戻すのも忘れて、その場に入り込んでいる。

そこでオレは、未だに千鳥足でフラフラしているウパーに声をかけた。

「ウパー、もう終わったぞー」

「ウパー？」

「って、ええ！？ そのウパー、戦闘不能だったはずじゃ……って
いうか、むしろ何か元気だし！？」

今度はウパーの様子にビビられた。まあ、ここまであつけらかなとされては無理もないのかもしれない。確かに、ウパーの肌は何故かさつきよりもつやつやしているし。

でも、その答えって意外とあつけないものなんだけだな。

「だって、オレのウパーは特性“ちよすい”だし」

“ちよすい” 受けた技が水タイプだった場合、逆にそれで回復してしまう特性だ。

オニスズメがウパーに跳ね返した技は、ガーディの“ひのこ”で強化されたとは言え、ウパーと同じ水タイプの“みずでっぼう”。

千鳥足はおそらく、こいつの完全なきまぐれに寄るものだろう。とりあえずふらつきたかった。とでも言っつきそうだな。

「そ、そんなあ〜」

オレの説明に、ピクニックガールは今度こそ本当にうなだれてしまった。

うん。騙したりしてごめん。つつつても、別に悪いとは思ってないけどね。

オレはガーディとウパーをボールに戻すと、ピクニックガールに手を差し延べた。

「そこそこに楽しかったぜ。ってなわけで、賞金よろしく」

「くうう〜。アナタを倒してその賞金でヒワダタウンの名物『ヤドンパフェ』を食べる目論見だったのにい〜」

ピクニックガールは、女の子としてはそれどうなのよ。と突っ込みたくなるような歯ぎしりをした後、渋々と二ヨロトノ型のがまぐち財布から五百円硬貨を出してオレに渡してきた。

……あー、世のお父様方から見たら、ちよつと荒んだ光景かもしれないが、これが野外バトルの一つ、賭けバトルなのだ。簡単に言えば、自身の勝利にお金を賭けて勝ち負けを争うバトル。

一応、十八歳未満のトレーナーは様々な施設を無料で利用できるとはいえ、食料の買い出しや新しい道具を買うにはお金がいる。

そこで、彼らは互いの小遣いを賭けてバトルをするのだ。勝てばポケモンの経験値が上がる上にお金も手に入る。正にポケモンにも自分にも嬉しい、一石二鳥のアイデアというわけだ。

それにしても、『ヤドンパフェ』ってどういう代物なんだ？ なんかめちやくちや気になるんですけど。

とりあえずオレは、ピクニックガールから賞金を受け取ると踵を返した。そろそろ“つながりのどうくつ”を抜けてヒワダタウンに行ってもいい頃合いかもしれない。

でも、まずは回復だ。オレはそう思い、近くに建てられたポケモンセンターへと向かう。

そのとき、不意に声をかけられた。

「強いな。キミは」

オレに声をかけてきたのは、二十代前半くらいの若い兄ちゃんだった。見た感じ旅をするにはかなり軽装にも見えたが、腰のポーチから顔を覗かせているモンスターボールから、トレーナーなんだろうなと判断する。

強い。そう言われても特にピンと来なかったオレは、小首を傾げた。

「んー。そうかあ？」

「俺はそう思うよ。嫉妬したくなつたね」

……うわ。なんだコイツ。ちょっと危ない人？

そいつの発言に少しばかり寒気を覚えたオレは、そいつを無視してポケモンセンターへと歩を進めようとした。

だが、

「話、終わってないよ」

そいつの腕が、オレの行く手を遮る。別に退けて前へ進んでも良かったのだが、ムカツ腹の立ったオレはオレよりも少し背の高いそいつを睨み上げた。

だが、オレの睨みに対し特に何も感じないのか、男は話を続けてくる。

「さっきの謙遜の仕方。まるでもつと強い奴を知っているような言い方だよ」

「……別に、上には上がいるのは当たり前だ。それに、オレは実際にまだまだヒヨツ子だしな」

「でも、キミが見据えているのは目先にいる“自分より少しばかり強い相手”ではないね」

「……」

「キミが目指しているのは、ずっと遙か遠くにいる“とんでもなく強い相手”だ。キミにとって、それ以外の相手は単なる布石ではない」

「何が言いたい」

オレは、男の話を遮った。

とにかく、この男とこれ以上会話を続けたくはなかった。なんだか心を見透かされているようで、気分が悪い。

男は何を考えたのだろうか。その顔には淡い微笑みを浮かべていた。「気を悪くさせたようだね。なに、キミのように良い“瞳”を持ったトレーナーに久しぶりに会ったから、ちょっと気になっただけさ」

……なんたる。マジで調子が狂いそうだ。

さっさと話を切り上げて男から解放されたかったオレは、男から

目を背け、虚空を見つめた。

「……オレの目標は誰にも教えねえよ」

「だろうね。キミは意志の固い人間のようだ。キミの夢は、誰にも語らないからこそ、美しく輝いているんだろうね」

男はそう言つと、ようやく腕を返してくれた。

ホツとしたオレは、そのままポケモンセンターへと歩き出す。

オレの夢……というか、目標。幼い頃からずっと見続けた、超えるにはデカすぎる背中。

サトルくん。トイ口をよろしくね。

行方知れずで、今も尚オレの想い人である生意気娘の心の大半を占めているアイツの親父さん。

あの人を超えたとき、オレはようやくアイツの視界に入れるかもしれない。

……あの男が言っていたのは、少し間違いだ。別にオレは、意志が固い訳じゃあない。

単に惚れた女に振り向いてほしいというくだらない願いをホイホイ言えるほど、オレは度胸の据わった人間ではないだけなのだから。

「……面白いな、“彼女”の周りにいる人間は」

そんなことを考えていたからか、オレの背中を見送る男が何かを呟いていたことに、オレは気づかなかつた。

Interval 少年の夢（後書き）

今回のテーマ

『サトル視点』

『ダブルバトル』

裏テーマに『キレルガーディ』……なんちゃって（笑）

今回はサトルくんの旅模様をピックアップしております。

前回でも記述しましたが、サトルのコンセプトは『至って普通の男の子』

だから、彼の夢も普通を意識しています。

惚れた女に振り向いてほしい。だから強くなりたい。

思春期の男の子って何か書いてて可愛く見えてきますw

今回は本編に戻ってトイロの新たな旅路のお話。

新しい町とキャラクター登場！？

トイロの明日はどっちだ！？

では、また次回〜。

P・7 魅せる者（前書き）

ども。ついにHGがプレイ時間100時間超えました。

そして、現在トイロのパーティで旅を勧めようとしている旅がらすです。

バランスの取れたパーティー編成に自分ではしたつもりでも、穴がありそうで怖い……。

実は草タイプを最強に育てたことがないので、リーフィアを育てることに多少の不安あり（何）

好きなんですけどね。イーブズ。

まともに育てたことがあるのはサンダースとシャワーズくらいです。

新しい挑戦だと思って頑張って育ててみます！

そんなこんなで、新キャラも登場の第七話です。
どぞ。

P・7 魅せる者

まず、開いた口が塞がらなかった。

トイロの目の前に張られているのは、『KEEP OUT』と書かれた黄色いテープ。ドラマでしか見たことがなく、ぶつちやけ本当に張られているとは思っていなかったそれが、今トイロの目の前にある。

数分後、漸くトイロは言葉を発した。

「……これはつまり、どういうことかね？」

30番道路沿いに建てられた家 主が行方不明となり、更に空き巣に入られたポケモンじいさんの家を目の前に、トイロはただただ目を丸くするしかできなかった。

数時間後。夕暮れ時。

懐かしい香りの町、キキョウシティ。

「……困るなあ。非常に困るよ。」

キキョウシティの名所 “マダツボミの塔”を一望できる橋の真ん中で、トイロは珍しく頭を抱えて悩んでいた。

「大体、ボクの周りはどうしていつもトラブルが後を絶たないのだ。不思議だ。非常に摩訶不思議だ」

「フイッ」

頭を抱えるトイロの足元では、リーフィアが呑気に水面を見つめている。夕暮れ色に染まる水面が、リーフィアの可愛らしい顔を映し出す。

半日前、アリアとのバトルを終えてすぐにヨシノシティを発ったトイロは、真っ直ぐにポケモンじいさんの家へと向かった。

だが、ポケモンじいさんは家にいなかった。更に、ポケモンじいさんの家は何者かによって荒らされた後で警察が入っており、トイロは近づくことすらできなかったのである。

その直後、ポケギアにウツギ博士からの電話を受け取り、ポケモンじいさんが数日前より行方不明になっていることを知らされたのだ。

『でも、聞いた話ではポケモンじいさんが出かけるのを目撃したトリーナーがいるそうなんだ。だから、誘拐とかの線は薄いつて見解のようだよ』

ウツギ博士は、ポケモンじいさんとは旧知の仲だ。そのため、いくらかの情報を警察から得ることができたらしい。

ウツギ博士の情報が正しければ、ポケモンじいさんは自分で何処かへと出かけてしまった可能性が高い。

いつ帰ってくるのかも分からない人物を待つのは慣れっこではあるが、今は一番選びたくない選択肢である。

町を出る際に持っていた父への唯一の手がかりを失ったトイロは、橋に凭れながら小さくため息をついた。

(パパ……)

不意に、トイロは父を思い出した。

研究に没頭し、トイロを置いてフィールドワークに行ってはなか

なか帰って来なかったが、それでも家にいるときだけはずっと一緒にいてくれた。

『トイロ！ 今日は何をしに行こうか』

『どうしたんだい、トイロ。悲しいことでもあったのかな？』

『トイロ。サトルくんが遊びに来てくれたぞ』

『こら。エルレイドをあまり困らせてはダメだよ。わがままもほどほどにだ』

いつだって、父は優しくかった。

だから、父が旅に出てしまっても我慢して待つことができた。

いい子にしていれば、きっとすぐに帰ってきて、また一緒にいてくれる。

それが、トイロにとって大きな心の支えであった。

「パパ……」

頬を冷たいものが流れるのを感じ、トイロは慌ててそれをぬぐった。

いけない。なんだか最近、涙腺が弱くなっている気がする。

弱気になってはいけない。そう思い、トイロはふるふると頭を振った。

と、そこで、

「ファイ〜」

突然、池から水流が迸り、リーフィアの顔面を襲った。リーフィアはびっくりしたのか、後ろに仰け反り、顔をふるふると横に振っている。

「アーくん？ ってきゃあ!？」

今度は、驚くトイロの横顔に水流が当たる。その勢いでベレー帽

が吹き飛び、池へと落ちる。

「あ、ボクの帽子！」

「ブイブイ！」

慌ててトイロが振り向くと、池の中には“うみイタチポケモン”のブイゼルがいた。

どうやら、彼が犯人のようだ。ブイゼルはトイロのベレー帽を口に咥えると、こちらを振り向き、意地悪そうな笑みを浮かべてくる。その態度にムツとしたトイロは、声を張り上げた。

「こらー、そのブイゼル！ それはボクの帽子だ。返したまえー！」

「ブイ〜」

しかし、ブイゼルは聞く耳を持たない。

まるで、「コイツは俺様のもんだい！」とでも言うように、トイロの青いベレー帽をクルクルと鼻先で回している。

その様子に、トイロの苛立ちは更に高まった。

「アーくん、ブイゼルを懲らしめるよ！ “はっぱカッター”！」

「ファイ！」

トイロの掛け声に応じてリーファイアが頭を振るい、“はっぱカッター”を放つ。

だが、

「ブイブイ〜」

ブイゼルは口から“うずしお”を繰り出し、リーファイアの“はっぱカッター”をすべて包み込む。

更に、

「ブイブイブ〜イ」

そこへ“ここえるかぜ”を加え、“うずしお”を見事な氷の彫刻へと変えてしまった。

「うわぁ……………！」

「……………ファイ〜」

ブイゼルの技の見事なコンビネーションと空中に造られた氷の渦

に、先程までの奇立ちを忘れ、ただただ魅入ってしまうトイロとリーファイア。

ブイゼルはというと、技の出来に納得しているのか、うんうんと頷きながら誇らしげに氷の渦を見上げています。

が、そう思ったのも束の間、氷の渦がゆっくりとトイロたちのいる橋の方へと傾き出した。

「……へ？」

ゆっくりと、だが確実に自分の方へと倒れてくる。

考えてみれば、当たり前の話だ。“うずしお”には支えるものがなく、独楽状のそれが空中にいつまでも漂っているはずもない。

だが、そんなことを冷静に考えられるほどの余裕などもちろん今のトイロにあるはずがなく、

「きゃあああああああ！」

「フィィイ~~~~~！」

ただ絶叫するしかできないトイロとリーファイア。ブイゼルがきょとんとした表情で見つめる中、徐々にスピードを上げて落下して行く氷の塊。

ぶつかるところの話でなく、マジにガチで死ぬとトイロが思ったその瞬間だった。

「ミミィ、スカイアッパー！」 サルのすけ、“マツハパンチ”

突然響き渡る、透き通った声。トイロとリーファイアの前に躍り出したのは、“うさぎポケモン”のミミロルと“やんちゃポケモン”のモウカザルだ。

「ミミィ！」

「キッキー！」

二匹のポケモンは、高く跳躍をすると各々の耳やら拳やらを氷塊

へと振り上げる。

二匹の攻撃がぶつかった瞬間、“はっぱカッター”を包み込んだ“うずしお”型の氷の塊は粉々に砕け散り、いくつかは池へと落ちていった。

だが、まだ危険は去りきっていない。砕けた氷のいくつかは、まだトイロたちのいる橋へと向かってくる。

そこでようやく、トイロは平静を取り戻すことができた。

「アーくん。“アイアンテール”で弾いて！」
「ファイ！」

まだ空中にいて対応の取りきれない二匹に代わり、リーファイアが前へと躍り出る。リーファイアの硬化した尾が、小さくなった氷塊を池へと落としていく。

数秒後、リーファイアの尾が元の柔らかさに戻った時には氷塊もすべて池に落ち、橋もトイロたちも傷一つつくことはなかった。

「ふわああ。間一髪だったのだよ」
「ファイイ〜」

何とか難を退け、橋の上で脱力するトイロ。リーファイアも緊張が解けたのか、トイロに同調するようにその場にへたり込んだ。

「その子！ 大丈夫だった？」

そこへ、脱力するトイロたちの元へと一人の少女が駆けて来た。

どうやら、ミミロルとモウカザルのトレーナーのようだ。

腰にまで届くアッシュブロンドのポニーテールに蒼い瞳の少女は、二匹をモンスターボールへと戻すとトイロに視線を合わせるようにしゃがみ込んでトイロの顔を窺ってきた。

「ハハハハ。なんとかね〜。でも、ちょっと腰が抜けてしまったよ」

「ファイ〜ファイ〜」

少女の問いに苦笑いで返すトイロと、それに合わせて頷くリーファイア。

そこでトイロは、ブイゼルに奪われたままの帽子のことを思い出

した。

「あ、ボクの帽子!」

「帽子? …… ああ。ブイのすけの持つてるベレー帽のことね」

トイロの言葉に少女は首を傾げたが、池で泳いでいるブイゼルに目を向けると納得したように頷いた。

一方、トイロは少女の言葉に小さな疑問を抱く。

「ブイのすけ? あの子は君のポケモンなのかね?」

てっきり野生だと思っていたブイゼルへと少女と同じようにトイロが目を向けると、少女は小さくため息をついて頷いた。

「ええ。生意気ないたずらっ子で、目を離すとすぐどこかに行ってしまうの。……ブイのすけ!。戻ってらっしゃい」

「ブイブ〜イ」

少女の呼び声に、ブイゼルが答える。

ブイゼルは優雅に橋へと泳いでくると、そのままジャンプで橋の上へとやってきた。少女はブイゼルと向き直ると、困ったように口を開いた。

「ブイのすけ。人のもので遊んじゃダメでしょ? ちゃんと返さないさい」

「ブイブイ!」

少女がブイゼルからトイロのベレー帽を取ろうとしたが、ブイゼルは応じない。まるでトイロの帽子を気に入ったかのようにギョッとその胸に抱いている。

さすがにブイゼルの態度はよろしくないと感じたのか、少女は声を張り上げた。

「ブイのすけ! それはここに……え、え〜と……」

だが、トイロの名前を知らない少女は、ブイゼルに帽子の持ち主を示そうとしつつ、どう言えばいいのかと戸惑った。

「あ、ボクの名前はトイロだよ。オトナシ トイロ」

「うん、トイロちゃんね。……ブイのすけ。その帽子はトイロちゃんよ。貴方のじゃないの。だから返しなさい」

「ブイ！ ブイブイブイ！」

少女が帽子とトイロを交互に示して説明をしたが、ブイゼルは首を横に振るだけだ。

なんだろう、このブイゼル。所謂『オレのものはオレのもの。お前のものもオレのもの』的なジャイアニズム思想の持ち主なのだろうか。

トイロがそう首を傾げる横で、少女は更に声を張り上げた。

「ブイのすけ！」

「ブイブ〜イ！」

怒る少女から逃げるように、ブイゼルはトイロの背中に戻った。

トイロの背中越しに少女を見るブイゼルは、抱いていた帽子を自分の頭へと乗せる。人間サイズに作られたベレー帽は、ブイゼルには少し大きいらしく、少しぶかぶかしている。

「……気に入ったのかね？ その帽子」

「ブイ！ ブイブイ！」

トイロの問いかけに、ブイゼルは「その通り！」とでも言うように元気良く頷く。その様子に、少女が再びため息をついた。

「ああ、もう！ そんな我が儘な子は、明後日のコンテストには出さないわよ？」

「ブイ！ ブイブイブイブイ！」

少女の怒気のコもった言葉に、ブイゼルの表情が一変した。「そんなのヤダよ！」とでも言うように、しきりに首を横に振っている。「ブイのすけ」。明後日のコンテストかその帽子か、十秒以内に決めなさい」

少女の言葉に、ブイゼルが頭を抱えだす。被っているトイロの帽子と主人である少女とに何度も視線を移しては、まるでこれから人生最大の決断をしようとしているのかのように、必死になって悩んでいる。

数秒後、ブイゼルはおずおずとベレー帽をトイロに差し出した。

ブイゼルから帽子を受け取ったトイロは、先程の少女の言葉に首

を傾げる。

「コンテスト？ キミはコーディネーターなのかね？」

「え？ ……あ、ええ、そうよ。私はクロイワ シレン。シンオウ地方、ミオシティ出身のポケモンコーディネーターよ。よろしくね」
少女 シレンはそう自己紹介をすると、トイロに淡く微笑みかけてきた。

「へえ〜。では、シレンは所謂ハーフというヤツなのだね。通りで瞳が蒼い訳だー」

数時間後、トイロとシレンの二人はポケモンセンター内にある宿泊所の一室にいた。

トイロの納得したような声に、シレンはニコニコとした笑顔で頷き返す。

「うん。パパは海の方こう フィオレ地方の出身なの」

実は、シレンの本当の名前はかなり長い。

『シレン』というのも愛称であり、本当は『セイレーン＝クロイワ＝フローレンツ』と言うのが本名なのだという。『シレン』とは、『セイレーン』の名前をローマ字読みした呼び方なのだ。

「何だか神々しい名前だね」

「父さんは、美しい歌声で船乗りを誘惑する海の精霊の名前から取ったって言ってたわ」

「精霊の名前！ 素敵ではないかー」

シレンの名前の由来に、トイロの目が輝く。偉ぶった口調で一人称も女の子らしいとは言えないトイロだが、感性は年相応の少女のものなのだ。

トイロの反応に、シレンが苦笑いをこぼす。

「んー。でも、私もトイロの名前、好きよ？ トイロって『十の色』って意味でしょ？ 父さんが言ってたけど、この国の人は、大きな数字に『たくさん』 つまりは無限の意味を込めてるらしいじゃない」

例えば、『八百万やっぴやうぢゆうの神』と言う言葉がある。神道しんどうというこの国で古くから信仰されている考え方で、『万物のすべてに神が宿っている』という考えだ。

ちなみに、『八百万』とは実際の数ではなく、『たくさん』という意味を指している。

「つまり、トイロの名前には『たくさんの色』 無限の可能性って意味が込められているんですよ。そっちだって素敵な名前じゃない。トイロのお父さん、きっとロマンチストなんだろうなあ」

「そうかなあ。そうなのかなあ」

同年代の女の子とこんな風に話すことは、トイロにはじめての経験だった。どんなに小さな話題でも、飽きることなく盛り上がる。すごく、楽しい。トイロはそう感じていた。

話はやがて、互いの自己紹介から明後日この町で行われる『イベント』へと移っていった。

「そういえば、シレンはコーディネーターなんだよね？ 明後日、この町でコンテストが行われるって言ってたけど」

「うん。そうなの！ 市民公園に特設会場を設けて行われる野外コンテストなのよ！ スッゴク楽しみ！」

ポケモンコーディネーター。

ポケモントレーナーの中でも、特にポケモンの持つ“魅力”を最大限に伸ばすことを主とした育て方を選んだトレーナーの事を指す言葉だ。

彼らの目的は、ポケモンをより魅力的に“魅せる”こと。技の威力、凄まじさだけでなく、ポケモンの毛並みの美しさやそのポケモ

ンが持っているかつこよさ、たくましさなどを魅せ、人々を魅了させる。

ポケモン本来の戦闘本能に基づいて行うバトルと違い、コンテストを見ている人々を如何に自分たちの世界へと引き込ませるかが鍵となるため、ある意味ではバトルよりも高度な技術や能力、そして戦略を問われるのだ。

シレンはそのポケモンコーディネーターとして旅をしており、この町にもそのために訪れていた。

「ジョウトでコンテストが行われるようになったのはここ数年の話で、まだそこまで広まっていないのよね」

「そうなんだ」

「うん。やっぱりアレなのかな。ジョウト地方独特の雰囲気、コンテストに合わないのが原因かも」

ジョウト地方には、古くから伝わる歴史的遺産や自然遺産が他の地方に比べて数多く存在する。

今ではカントーやハウエンに見劣りしてしまう面が多いが、元々はこの国の中心であった場所なのだ。後世に伝え行くべきものが多い点で、ジョウト地方は他の地方に比べて閉鎖的に感じる部分も多い。

確かに、古き良さを守ろうとするジョウト地方には、コンテストの煌びやかさは少しそぐわないのかもしれない。

「でもね。私、だからこそここでグランドフェスティバルへの挑戦権を獲得したいの！」

古き中へ新しさを取り込ませたい。たくさんの人に、コンテストの素晴らしさを知って欲しい。

それが夢なのだ、シレンは熱弁した。

「ポケモンとの関わり方って、一つじゃないもの。バトルだけじゃない。育てるだけでもない。もっともつと、人とポケモンは関わりあっている。それを伝えたい。たくさんの人に、伝えていきたいの！」

そう熱く語るシレンに、トイロは一種の憧れに近い感情を得ていた。

(すごいな……)

夢に向かつて邁進するシレンの姿は、とても強く輝いていた。楽しそうで、生きていること自体が輝いているように見えた。

そんなことを考えていたからか、トイロを見たシレンの顔に少しだけ影が差したことに、トイロは気づけなかった。

「あ、そうだトイロ！ 私の演技、パフォーマンス見てくれない？」

「ふえ？」

突然の申し出に戸惑うトイロの手を、シレンが取った。

「そ！ トイロはコンテストを見たことないんでしょ？ はじめて見る人の意見が聞けると、ここでの魅せ方の勉強になるから。ね、お願い！」

可愛らしく両手を合わせての『おねがい』のポーズ。それにウインクも加えられたシレンの姿はなんとも可愛らしい。

それに乗せられたのか、トイロの首は自然と縦に振られていた。

時間は既に夜の八時近くを回っている。キキョウシティは文化遺産である“マダツボミの塔”があるので、ポケモンセンターやフレンドリーショップの概観も薄暗くされていて、夜はどこか薄暗い少し不気味な雰囲気を漂わせていた。

「うわわ。これじゃあ確かにあの塔に幽霊がいるって言われても信じちゃうわね」

マダツボミの塔を見上げてそう呟くシレンの口端は、どこか怯えたように斜めが上がっている。

一方、トイロの表情は嬉々としていた。

「ボクはこういう夜は好きだな。うふふふ。如何にも出そうって感じがたまらないよ。」

「……すごい感性の持ち主ね、トイロ。」

二人は、ポケモンセンターのすぐ外にある練習用のバトルフィールドバトルフィールドに来ていた。ここで、コンテストの一時審査で競われる演技を魅せてくれるというのである。

「シレンのポケモンは、皆シンオウで会ったのかね？」

「そうよ。サルのすけ　モウカザルはヒコザルの頃、ナナカマド博士という方から頂いたポケモンで、もう一匹は小さい頃から一緒にいたポケモン。あとはシンオウの旅の途中でゲットした子たちよ。」
モウカザルのことをそう説明した後、別のポケモンの存在を匂わせたシレン。きっと、まだトイロの見ていないポケモンのことなのだろう。

「へええ。シンオウではまだゲットしていないのかい？」

「うん。シンオウでの仲間たちで挑みたいの。シンオウのポケモンは、シンオウやカントーではあまり見られないでしょ？　そういう新鮮さも狙ってるってわけ。」

シレンはそう言うと、腰のウエストポーチからモンスターボールを一つ取り出した。ボールは普通のもので、何故か青みを帯びている。

「あれ？　そのモンスターボール……」

「ボールカプセルよ。効果は見てのお楽しみ！　じゃ、ブイのすけ！　Let's shining！」

放たれるモンスターボール。ボールが開口した瞬間、出てくるのは翠に輝く稲妻。それと同時に、水流を纏ってブイゼルが現れた。

「ブイブイブイ！」

「わあ……！　ブイのすけ、カッコいい！」

ボールカプセルの効果　貼り付けたシールでボールをカスタマイズし、開口時に特殊な演出を見せるその光景とブイゼルの素晴ら

しい登場シーンにトイロは息を呑む。

それに気を良くしたのか、シレンの顔に笑みが浮かぶ。

「うずしお」！」

「ブイ〜！」

ブイゼルの頭上に放たれる、大きな“うずしお”。それは夕方にトイロが見たそれよりも更に大きい。

「アクアジェット”で“うずしお”を上って！」

「ブ〜イ〜！」

更に空中にとどまる“うずしお”を“アクアジェット”で上っていくブイゼル。

“うずしお”の巨大さと“アクアジェット”による素早い動きが、ブイゼルの持つ力強さを存分に際立たせる。

「フイニツシュ！ ジャンプして“かまいたち”！」

「ブイ！」

“うずしお”を上りきり、二股に分かれた尻尾で強く飛び上がったブイゼルは、空中で旋回すると“うずしお”に向けて両腕のヒレから“かまいたち”を放つ。

“かまいたち”が当たり、拡散する“うずしお”。それにより放たれた水飛沫が、見事に着地を決めたブイゼルの毛並みを美しく輝かせた。

「うわああ……！ きれい！」

はじめて見るコンテストの演技。パフォーマンス

戦い、強さを“見せた”のではない。技の迫力だけでなく、ポケモンの持つ魅力を“魅せる”。

それは確かに、トイロの心を躍動させた。

(すごい！ 世界には、こんなことをする人たちがいるんだ……！)
夢を抱いて、旅をしている人々。

今までただ父の帰りを待ち、外の世界から目を背けていたトイロが見ようとしていなかったものを見ている人々。

それは、トイロの胸のうちにある“何か”に強く響いていた。

「うん！ なかなかステキな反応、ありがとう！」

演技を終えたシレンとブイゼルがトイロへと歩み寄ってくる。と、ブイゼルはトイロの胸へと飛び込んできた。

「ブイブイ？」

トイロの胸元に抱きつき、彼女を見上げてくるブイゼル。まるで、演技、どうだった？」と訊ねてきているようだ。

だから、トイロも笑顔でブイゼルの頭を撫でてやる。

「ブイのすけ、カッコよかったよ」

「ブイブイブイ！」

トイロの感想を聞いて嬉しいのか、ブイゼルは更に鼻先をトイロの顔に擦り付ける。

「わわわ。くすぐったいのだ」

「アハハ。ブイのすけ、トイロを気に入っちゃったみたいね。少し嫉妬かも」

ブイゼルの反応に笑みを溢しながらウインクをするシレン。トイロも、シレンに笑みを返した。

「すごかったよシレン！ これならきつと勝てるよー」

「ありがと。そいえば、トイロはどうしてこの町に来たの？ コンテストを知らなかったってことは、ジム戦かしら？」

「え……」

シレンの言葉に、トイロの言葉が詰まった。

自分の旅の目的は、父を探すことだ。行方不明になった父を探す。シレンたちとは違うのだ。シレンたちのように、夢を追いかけているわけではない。

でも、そこでトイロはあることに気づいた。

(夢……？ ボクの、夢って……)

父を探すことは、決して夢ではない。

そして、トイロはシレンたちと違い、『夢』と呼ぶべきものを全く抱いていなかった。

「ぼ、ボクは……」

ブイゼルを抱きしめる腕が、少しだけ強くなった。鼻を擦りつけていたブイゼルが、トイロの異変に気づいて顔を上げる。

言葉を詰まらせたトイロに何を見たのか、シレンが両手を合わせた。

「じゃあトイロ。あなたも参加してみたら？ コンテスト！」

「……え？ ぼ、ボクが？」

シレンの突然の誘いに戸惑うトイロ。

それと同時に、一刻も早く父を見つけなければという思いが彼女の中に焦りを生む。

「で、でも、ボク、コンテストなんて初めてだし」

「あら。コンテストは明後日よ。明日、一緒に調整しましょ。やってみるだけでも絶対に価値はあると思うし！」

「で、でも、ボクは早く行かなきゃいけないところが」

そこまで言ったところで、突然トイロのトレーナーズベルトに付いていたボールが震えた。そして、ボールの中から一体のポケモンが飛び出す。

「え、リッチちゃん？」

ボールから出てきたのは、リオルだった。リオルは何を考えたのか、シレンの足元へと走り寄るとその後ろへと身を隠す。

「リッチちゃん？ 何をしているのかね？ 戻ってきたまえー」

「うー。うー」

リオルは動かなかった。しきりに首を横に振って、シレンの足元から離れない。

すると、またトレーナーズベルトのモンスターボールが震えた。

しかも、今度は二つ同時にだ。

「るりー」

「フィー」

「え、まあちゃんにアーくんまで！ ちょっと！」

ボールから飛び出したマリルとリーフィアも、リオルに倣うかのようにシレンの足元に駆け寄っていつてしまう。

そして、三匹全員でトイロをじっと見つめていた。

三匹のその様子に、トイロの頬を嫌な汗が流れる。

「ま、まさか君たち。ボクがコンテストに参加しない限り、この町から出ないでよ？」

トイロの問いかけに、同時に頷く三匹。どうやら結束は固いようだ。トイロは盛大なため息をついた。

そんなトイロたちの様子に、シレンは思わず笑みを溢す。

「決まりね。トイロ」

「……分かった。指導、よろしく願いますよ、シレン」

こうして、不本意ではあるものの、トイロは明後日のポケモンコンテストに向けてシレンからご教授を受けることとなったのであった。

P・7 魅せる者（後書き）

今回のテーマ

『新キヤラ女の子』

『魅せる技』

新キヤラ登場です。

ハーフの女の子、シレンちゃん。

トイロがあんまりに普通じゃない女の子なので、シレンには超女の子を意識して書いています。

イメージはアニメのハルカ。

ポケモンが一番のヒロインはハルカだと思っている旅がらすです。

でも、手持ちはシンオウものです。

つてか、今んとこ登場しているのはシンオウ編のレギュラーちゃんたち。

ええ、アニメを参考に書いているのモロバレな編成ですね……（汗）いや、でも出ないだけでレギュラーキャラじゃないポケモンもいますから！（滝汗）

あゝ、書くの大変そう……。

シレンの前口上「Let's shining!」

「輝いてらっしゃい！」という意味合いです。

アニメでは「Stage on!」とか「Charm up!」って言うてたので、やっぱりそういう系の言い方にしたかったなあ〜と思います、これにしました。

コンテストモロに意識したキャラです。

今回はトイロもコンテストに初挑戦!?

さてさて、旅がらすはちゃんとコンテストを書けるのかな！？（そこ！？）

…… You Tubeで研究していきます。

ってか、コンテストの書き方誰か教えてください（何）

ではでは。また次回。

P・8 世界を楽しむ(前)(前書き)

ま、まさかの前後編構成……!?

ども、旅がらすです。

予定では、一話で終わらせる気満々だったコンテスト。
まさかの前後編構成です。

あらら〜。

でも、全部書いたら一万五千文字の可能性ぐあ!
なので、泣く泣く切りました。

まずは一次審査です。

トイロたちはどの子で挑むのでしょうか。

それでは、どぞ〜。

二日後、キキヨウシティ市民公園特設会場、控え室。

「あああゝ。緊張してきたよ〜」

パイプ椅子に座りながら、トイロは不安げにため息をついた。その手には、ボールカプセルでカスタマイズされたモンスターボールが握られている。

そんなトイロの肩を優しくに叩く少女。二日前、“マダツボミの塔”の前で出会ったシレンだ。

今日はコンテスト出場のため、普段着ではなくレンタル衣装の赤いチャイナドレスを身に纏っている。ちなみに、トイロは白地に桔梗の柄が入った着物をレンタルしていた。

「トイロ。リラックスリラックス。ポケモンにまで緊張が伝わっちゃうわよ?」

シレンはそう言うと、トイロの頬をツンツンとつついてくる。

「はわわ〜。トイロのほっぺた、超やわこ〜い。マシユマロみたいで羨ましいかも〜」

「くすぐりたいよー。あんまりつつかないでくれたまえー」

緊張を和らげようとしてくれているのだろう。シレンの表情はのほほんとしている。

それにつられて、トイロの表情も柔らかくなった。

と、そこへ、

「全く、お気楽なものですな」

何処か、人を小馬鹿にしたような口調で二人に話しかけてくる人影。

トイロたちが顔を上げると、二人の目の前にはタキシードで決め

た、黒い長髪の青年がバラを片手に立っていた。

青年が吐いた言葉に、シレンの表情が険しくなる。

「何、あなた。緊張を和らげることの何が悪いのよ」

「ある程度の緊張感が必要かと思えますよ。緊張感が自己の意識を高め、更なる向上心を生み出すのです」

青年はそう言うと、手に持っていた赤いバラに軽く口づけを落とす。

そんなキザっぽい仕草が生理的に受け付けられないのか、シレンが小さくあつかんべーをした。

「ふんだ。確かに緊張感が必要だけど、過剰にはいらぬわよ。大事なものは、ポケモンとコンテストを楽しむことだわ」

「ふふふ。元気なお嬢さんだ。二次審査で会えることを期待しますよ」

青年は笑顔でそう答えると、タキシードを翻しながら、控え室の端へと去っていく。

シレンは青年が去ったことを確認すると、トイロの隣にパイプ椅子を持ってきて腰掛けた。

「トイロ。さっきの人の言葉は確かに正しいけど、過度の緊張は禁物よ。コンテストではまずポケモンと楽しむことが一番大事。それとね……」

「ポケモンの魅力が一番に理解すること、だよ。分かってるよ」

昨日、コンテストのこの字も知らなかったトイロに午前中いっぱい掛けてシレンが教えてくれたことが、トイロの脳内を駆け巡る。自分の調整もあるというのに、トイロの練習に付き合ってくれたのだ。

せめて、一次審査はちゃんとクリアしたい。そうトイロは思っていた。

「あ、始まったわよ。トイロ」

シレンの言葉に、トイロは顔を上げる。モニターとして設置されたブラウン管のテレビに、会場の様子が写しだされていた。

『皆さん！ 今日はお集まりいただき、誠にありがとうございます！ これより、ポケモンコンテスト キキョウ大会を開幕いたします！』

ステージの中央に立つ司会の女性の言葉に観衆が沸き立つ。

ジョウト地方ではつい最近始められたばかりのコンテスト。ジョウト地方には町全体が文化遺産として登録されている場所もあるため、新施設の増設が認められていない町があるのが大きな理由である。

ここ、キキョウシティもそんな町の一つであり、こうして特設会場を作ることで、協会が町に話をつけたのである。

司会の女性が、マイクを片手に再び喋りだした。

『それでは、審査員の紹介と参りましょう！ ポケモン大好きクラブ、ジョウト支部支部長のスキジさん！』

「いや〜。好きですね〜」

『キキョウシティ市長！』

「今日は楽しませていただきます」

『そして、キキョウシティポケモンセンターのジョーイさん！』

「ポケモンたちの輝く姿。今から楽しみですよ」

審査員席に座る三名の紹介を終えた司会者は、客席に視線を戻した。そして、コンテストに関する簡単な説明が行われる。

ポケモンコンテストは二部構成だ。まず、ポケモンとコーディネーターによる演技パフォーマンスの一次審査。如何に自分のポケモンを輝かせるか、美しく魅せるかがカギとなる。

続けて、その一次審査を勝ち抜いた八名によって行われる、二次審査。トーナメント方式のシングルバトルで、減点式のポイントバ

トルだ。

ここでは、ただ技を決めるだけでなく、技の美しさ。連携の仕方。また反撃を利用しての魅せ方も問われる。通常のバトルとはまた違う戦略を必要としているのだ。

『そして、見事優勝したコーディネーターには、その証としてキキヨウリボンが授与されます。まずは一次審査。ポケモンとコーディネーターによる演技です！^{パフォーマンス} それではエントリーナンバー一番の方、どうぞ！』

沸き上がる歓声。それとともに、最初のコーディネーターが会場入りする。最初のエントリーは“マダツボミの塔”の修行僧だ。

「今日は古きよき町と新しき文化が出会う記念の日。“マダツボミの塔”を代表し、坊主のモクネン、いざ、参る！ 行け、マダツボミ！」

「ツボ〜」

モクネンの掛け声とマダツボミの登場に、一気に会場がヒートアップする。

ポケモンコンテスト キキヨウ大会が遂に幕を開けたのであった。

『さあさあ、盛り上がってまいりました。一次審査！ 続いてのエントリーは何とシンオウ地方からの参加者です！ それでは、お願ひします！』

「あ、シレンの番なのだ！」

控え室のモニターを見ていたトイロは、シレンの登場に表情を緩める。

画面の向こうでは、颯爽と登場したシレンに会場が沸き立っていた。

シレンは、モニター越しに自分を見ているであろうトイロを想いながら、ボールを手に取る。

(トイロ。これが、コーディネーターとしての私よ！)

「チエリイ、Let's shining!」

シレンの手から放たれるボール。そこから大量の花弁と共に、“サクラポケモン”のチエリムが飛び出す。

「“にほんばれ”、そして“こうごうせい”！」

「チエ、リイ」

チエリムは、太陽の光を浴びることで、“ネガフォルム”と呼ばれる蓄状態から“ポジフォルム”と呼ばれる開花状態に姿が変わる、珍しいポケモンだ。このように、ある条件下で姿を変えるポケモンは、まだ数えるほどにしか確認されていない。

登場と同時に“ネガフォルム”から“ポジフォルム”に変わったチエリムは、“こうごうせい”で自身の毛づやの良さをアピールする。

チエリムの美しさに、会場から黄色い声援が沸く。

「良いわよチエリイ。続けて“ソーラービーム”を空へ！」

「チエリッ」

“こうごうせい”を終えたチエリムは、続けて球体に形作った“ソーラービーム”を空へと放つ。“にほんばれ”の効果もあって、その輝きは一層際立つ。

「フィニッシュ！ “ソーラービーム”に“マジカルリーフ”とはなびらのまい”！」

「チエリ」

空中でエネルギーを留めたままの“ソーラービーム”に、無数の

花弁と七色に輝く葉がぶつかる。“ソーラービーム”のエネルギーが霧散し、花弁と葉も合わさって花火のような幻想的な光景が会場に広がった。

「すごい……。すごい、キレイ！」

会場のシレンを見て、トイロの心はまた言いようのない感情に埋め尽くされていた。

ワカバタウンの屋敷にいた頃は感じなかった熱い感情。それが何なのか、トイロには説明できない。

だが、確かにそれはトイロの心を大きく揺さぶるものだった。

「……嫉妬してしまいそうですね」

不意に、誰かがトイロに話しかけてきた。

顔を上げると、先ほどトイロたちに話しかけてきた青年が、トイロの後ろでモニターを見ていた。

「美しい。彼女も、彼女のポケモンも。嫉妬したくなるほどに……」
「はぁ……」

シレンの演技に酔いしれているのか、青年は妖艶な笑みを浮かべている。

訳が分からずに首を傾げるトイロに視線を投げると、青年はトイロに話しかけてきた。

「君も嫉妬したんじゃないかい？ 彼女の素晴らしさに」
「……………」

青年の言葉に、トイロは視線をモニターへと戻す。既に、次の演技が始まっていた。

嫉妬。トイロの胸の中に生まれた感情は、それなのだろうか。

分からない。しかし、トイロの中には、確かにシレンに対して羨望の想いはあった。

だから、

「どうだろうねー。ボクにもちんぷんかんぷんだよー。でも、ボクもあんな風に楽しみたいなあ」

そう、トイロは答えた。

今、自身の中に生まれた感情が何なのか、すぐに答えは出ないだろう。

でも、すぐに答えを出す必要もないはずだ。今の気持ちは、ゆっくりと分かっただけいい。

だから、今はコンテストを楽しもう。シレンが用意してくれた舞台^{ステージ}なのだ。シレンが楽しんでいる場所で、自分も楽しみたい。トイロはそう思っていた。

コンテストの係員が、トイロの名前を呼んだ。もうすぐトイロの番なのだ。

「ボクは一端失礼するよー。君もコンテストを楽しみたまえー」
いつもの調子を取り戻したトイロは、青年にそう微笑むと、控え室を出ていく。

「……ああ。楽しませてもらうよ。“オトナシ博士の娘さん”」

だから、青年がそう呟いたことに、トイロは気がつかなかった。

『さあさあどんどん参りましょう！ 続いてのエントリーは、今回がコンテスト初挑戦の新米コーディネーターだ！ それでは、どうぞー！』

(来た。ボクの番！)

司会者の紹介に、トイロの身体が少しだけ強張る。

そのとき、手にしていたボールが一瞬だけ震えた。「大丈夫」。そう言ってくれているように感じた。

(うん。きっと大丈夫。シレンの言う通り、今はコンテストを楽しもう)

トイロは一度強く頷くと、舞台に飛び出した。

「お願いするよ、リツちゃん！」

トイロが選んだのは、リオルだった。カスタマイズによって飛び出す紙吹雪と共に、リオルが元気良く飛び出てくる。

「つるぎのまい」!

着地と同時に、攻撃力を格段に上昇させる舞を舞うリオル。“つるぎのまい”は、昨日シレンのモウカザルによってコンテスト風にアレンジが成されており、シールの紙吹雪も相まってリオルの可愛さの中にある凛々しさを引き立てていた。

「スピードスター」!

続けて、舞と同時に放たれる流星。これも、昨日シレンとの特訓で身につけた技だ。

リオルから放たれた流星が、会場全体に飛んでいき、真昼のプラネタリウムを作っていく。

一気に観衆の目を引くことに成功した。トイロの胸に、熱い何かが流れる。

「最後だよ! 地面に向かって“しんくうは”」!

拳を奮うことで真空の波を生み出す“しんくうは”。“つるぎのまい”の効果もあり、それは会場全体を震撼させる。

真空の波によって、霧散する“スピードスター”。星の雨が、会場全体に降り注いだとき、トイロたちの演技は終了した。

「トイロー！」

控え室に戻ってすぐに、シレンがトイロに飛びついてきた。

「わわっ。……えっと、シレン？」

「スツゴくスツゴく良かったわよ！ 練習のとき以上じゃない！」

まるで、自分のことのように喜んでくれるシレン。その姿に、トイロの口元も思わず緩む。

「あ、ありがとう。でも、シレンも綺麗だったよー」

「えへへ。ありがとう。でも、強力なライバル出現で、ちょっと焦っちゃいそう」

シレンはそう言うておどけるが、内心は確かに強力なライバルの出現に震えている。だが、それよりも何よりも、トイロの楽しそうな姿を見れたことが、シレンは嬉しかった。

『さあ、一次審査もいよいよ大詰め！ 最後のエントリーです！』

「あ、ようやく最後の人だねー」

司会者の言葉に、モニターへと視線を移す二人。

モニターには、あのタキシードの青年が写っていた。

『魅了させる、レントラー』

青年の手から放たれるボール。

ボールが開口した瞬間、会場に雷鳴が迸った。そこから飛び出すのは、“がんばろうポケモン”のレントラーだ。

『ガアアウウー！』

登場と同時に、“こわいかお”と“ほえる”を行うレントラー。沸き立っていた会場が、一瞬で静まり返った。

モニター越しに青年の演技を見ていた二人は、完全に画面に釘付けになっていた。

「今のつて……まさか！」

「わざとシールを使わずに、“じゅうでん”と“ほうでん”を行つたのだね……」

ボールから出た瞬間に进った雷鳴は、シールの効果ではない。予め、ボールの中で“じゅうでん”を行い、開口と同時に“ほうでん”で溜めた力を解放したのだ。

「何て危険な方法なの……！」

だが、それには大きなリスクも伴う。

ボールを持つトレーナーへの感電だ。

恐らく、絶縁性の手袋を付けているのだろう。だが、それでも一つ間違えば怪我どころでは済まない話だ。

「けど、効果は抜群のようだねー。会場は完全に彼らに魅せられている」

ハイリスクハイリターン。青年の魅せ方は正に それだった。

更に、“こわいかお”と“ほえる”でレントラーの獰猛さとそれでも否応なしに惹かれてしまう魅力を見事に引き出している。

『レントラー。そのまま“スパーク”』

『ガアアアッ！』

フィニッシュは、“こわいかお”と“ほえる”を維持したままの“スパーク”。

“雷鳴の王”。そう呼ぶべき畏怖と雄々しさを兼ね備えた、見るものを震え上がらせるほどに恐ろしい、だが、素晴らしい演技で一

次審査は幕を閉じた。

三十分後。控え室。

「いよいよね……」

そう小さく呟くシレンは、真剣な表情でモニターを見上げていた。もうすぐ、一次審査の結果発表なのだ。ここで選ばれた八名が、次の二次審査へと駒を進めることができる。

最後の青年の演技を見てから、シレンの表情が変わっていた。

見たことも、あんな魅せ方を想像したこともなかったのだろう。戦慄を覚えているに違いない。その証拠に、シレンの手は小さく震えていた。

「シレン……」

震える友にどう言葉をかけるべきか迷うトイロは、ただその姿を見ていることしかできない。

と、そこで、シレンのウエストポーチに入っていたモンスターボールから何かが飛び出した。ブイゼルだ。

「ブーイー！」

ブイゼルは何を考えたのか、シレンの顔に“みずでっぼう”を当てる。

案の定、心ここに在らずだったシレンは、それを避けることもできずに真正面から被ってしまった。

「きゃっ！ ぶ、ブイのすけ？」

「ブイブイ！ ブイブーイ」

まるで、ぐずつく妹を見る兄のようにシレンの足を軽く蹴るブイ

ゼル。腰に手を当てて鼻を鳴らすその様は、「もつと胸を張れ！」
と言っているように見える。

その姿に元気づけられたのか、シレンは大きく頷くと両頬を軽く
ひっぱたいた。

「そうよね！ やれることはやったもの。後は自分を信じるのみよ
！」

「ブイブイ！」

シレンの表情が元に戻って嬉しいのだろう。ブイゼルはニコニコ
顔でシレンに寄り添う。それを見て、トイロもホッと胸を撫で下ろ
した。

『さあ、お待ちせしました！ 一次審査、結果発表です！』

控え室に響く司会者の声。自然と出場者たちの視線が、モニター
に釘付けになる。

モニターの向こうでは、司会者が舞台の上に設置された更に大き
なモニターを見上げていた。そこに浮かぶ八枚のカード。

一次審査通過者を示すカードだ。

『厳選なる審査の結果、二次審査へ駒を進めるのは……』

司会者の言葉に、全員がモニターを強く睨む。

『この八名だー！』

めくられるカード。そこに写った写真の中に……、

「シレン！ シレンがいるよー！」

「トイロもいるじゃない！ やった！ 二人で二次審査よ！」

二人の写真が、あった。

二次審査に残れたことが嬉しく、二人は互いに抱き合う。

「ブイブ〜イ！」

励まされたものの、自分もハラハラドキドキだったのだろう。ブイゼルも飛び跳ねて喜んでいる。

しばらくして、トイロから離れたシレンは真剣な表情をしていた。

「本番はここから。バトルで当たったら、容赦はしないわよ？」

「それはこっちの台詞だよー。ボクだって負けないからねー」

二次審査はコンテストバトル。ここでは、二人はライバルなのだ。二人の少女の強い眼差しが交差した。

『それでは、二次審査の組み合わせを発表します！』

再び響くアナウンスの声。トイロたちは、もう一度モニターを見上げた。

『ランダムシャッフルにより決められた二次審査の組み合わせは…
…、こちらだあー！』

司会者の声と共に映し出されるトーナメント表。
そこには、

「あ……。ボクだ……」

「相手は、あの人……」

一回戦、一試合目の組み合わせ。

一次審査でレントラーを出した青年と、トイロの姿が映し出されていた。

P・8 世界を楽しむ(前)(後書き)

今回のテーマ

『技でなく演技』

『超怖いよあのレントラー』

コンテスト描写難しいよ！

想像してるときと何か違うよ！

……精進しないとだな。

シレンの四匹目。チエリムのチエリイです。

コンテストに出たら可愛いだろうなー。という妄想から仲間入りしました。

…というか、シレンのキャラが構想ノートからだいぶ外れた設定に…
…ど、どうしよう(汗)

トイロはリオルで一次審査です。

言い出しっぺですから。

水芸も草芸も被ったからリオルにしたわけじゃあないですよ!?(
滝汗)

んでもって、新キャラ……というか、本編初登場キャラ。

誰だよって突っ込んだ方は回れ右してIntervalを読んでください。

最後に出てきた兄ちゃんがレントラーのトレーナーです。

優雅さではない魅せ方。

敢えてトイロたちとは違うやり方で演技をしてもらいました。

レントラーかつこよく書いてたら嬉しいです。

次回は二次審査！

果たしてトイロとシレンの運命は!？

んでもって、今は意味不なタイトル(何)の理由が明らかに！

ではでは。

P・9 世界を楽しむ(後)(前書き)

年明け最初の更新。

今更ですが明けましておめでとございませう。

本年も『十色のキセキ』をよろしくお願いします。

では、ポケモンコンテスト キキヨウ大会、二次審査の始まり
です。

ございませう。

『皆様、長らくお待たせいたしました。ポケモンコンテスト二次審査、コンテストバトルを始めます!』

会場に響く司会者の声。舞台上立つトイロに、緊張が走る。一方、トイロの向かい側に立つレントラーのトレーナーは涼しい顔をしていた。

『二次審査は対一のポケモンバトル。制限時間の五分間で互いのポイントを削り合い、より多くのポイントを残した方が勝利となります。』

つまり、反撃するにも観客や審査員を魅了させる必要があり、ただ単に避けたり受け止めたりするだけではダメだと言うことだ。

通常のバトルよりも戦略を問われる。トイロの手に汗が滲んだ。

『それでは第一試合と参りましょう。トイロさんVSイディアさん。バトルスタート!』

「お願いするよ、まあちゃん!」

「魅了させる、ニドキング」

互いの手から放たれるボール。トイロのマリルが泡の演出で可愛らしく登場したのに対し、レントラーと同様に演出なしで登場するニドキング。

「わわわ。また最終進化系かあ。これは骨が折れそうだよ」

そう言っておどけつつも、トイロは自身の背中に伝う冷や汗を確かに感じていた。

(まずい……。どうやらレベルに差がありすぎるようだねー)

以前、ヨシノシテイでケッキングと対峙した時に感じたのと同じ

感覚。

敵わない。そう、トイロの直感が告げているのが分かった。

だが、

「るりりっ」

マリルが、トイロを振り向いた。ゆっくりと、一度だけ頷いてくる。

その力強い頷きに、トイロにも勇気が湧いてくる。

「まあちゃん、“まるくなる”から“ころがる”！」

「るりっ」

（コンテストバトルにレベルは対して関係ない。ボクはボクのやり方で戦うだけ！）

シレンから教わったこと。とにかく、マリルとともに今を楽しむために、トイロはマリルに指示を出した。

「続けて“アクアリング”！」

転がるマリルの周囲に現れる、水の輪。幾重にも現れたそれは、スパイクとして“ころがる”の威力を上げると同時に、見る者を魅了させる美しい蒼のボールにマリルを変身させる。

『おおっと、初っ端から魅せるマリル！ これでイディアさんのポイントを削ってきたあ！』

司会者の声と同時に、モニターに映された青年のポイントが少しだけ削られる。マリルの攻撃が評価されたのだ。

一方で、イディアと呼ばれた青年は静かに佇んでいた。

「……ニドキング、“さわぐ”」

「ニー、ドオオオオオッ！」

“さわぐ”と言うよりもはや“ハイパーボイス”に近い大声を発するニドキング。それを間近で聞く審査員たちや司会者、そしてトイロは思わず耳を塞いだ。

その瞬間、

「るりいっ！」

突然、マリルが“ころがる”を止めてその場にうずくまってしまった。苦しそうに、小さな手で大きな耳を塞いでいる。

その姿に、トイロはしまったと思った。

(耳の良さが、仇になったのか……！)

マリルは、水中で川の流れや外敵の位置を正確に把握できるほどの聴力を有している。

ヨシノシテイでアリアという少年からそのことを教わったトイロは、今回もそれによって危機をいち早く回避しようと考えていた。

だがしかし、今回はそれを逆に利用されてしまったのだ。攻撃自体は威力の低いとされる“さわぐ”だが、耳の良いマリルには拷問でしかないに違いない。

『おおっと！ マリル、せっかくのアピールをダメにしてしまったあ！ 一方、ニドキングは技を防ぎつつ、ニドキングの持つ雄々しさをアピールしてきたあ！ これはポイントが高い！』

司会者のアナウンスと共に、今度はトイロのポイントが大幅に減点される。

トイロは歯ぎしりをしながら、懸命に思考を働かせた。

(まあちゃんは今接型の物理アツカー。近づけないのはかなり痛いねー。何とか、あの“さわぐ”から逃げないと……)

「まあちゃん、尻尾で上に跳んで！」

「るりっ」

とにかく、まずは“さわぐ”の攻撃範囲内から抜けるためにトイロはマリルを空中に飛ばした。

だが、飛行タイプではないマリルにとって、それはある意味自殺行為に近い。攻撃する側からすれば、格好の的になるからだ。

イディアもそう思ったのだろう。口元に笑みを浮かべ、手にしていたバラをトイロに向けた。

「タイムアップなど待つものか。これをマリルへの手向けとしよう。
ニドキング、“きあいだま”だ」
「ニドオッ！」

ニドキングの手の内に収束するとてつもなく大きなエネルギーの渦。目映い程に輝く球体となったそれを、ニドキングは空に留まるマリルへと放つ。

『おおお！ ニドキング、凄まじい程に強い“きあいだま”を放つた！ 一方、マリルは空中で動けない！ トイロさん、どうするんだあ！』

かなりヒートアップしているのか、司会者の声は今までで一番大きい。ニドキングの“きあいだま”も高評価を得たらしく、トイロのポイントが再び減点される。

だが、トイロの顔に浮かんだのは、強い笑みだった。

「待ってたよ、強力な一撃！ まあちゃん“ころがる”！
「るうつ」

空中で、突然“ころがる”を繰り出すマリル。

その姿に、会場は騒然とした。

『な、なななあーんと！ トイロさん、マリルを“きあいだま”に突っ込ませる！ 一体どうする気なんだあー！』

司会者の言葉と同様に、イディアも驚きの色を隠せなかった。

（なぜ、あそこでマリルに特攻をさせる？ 何か秘策でも……………ん？）

どうい意味なのか判断しかねるイディアの視界の中で、マリルに一つの変化が現れた。

マリルの丸くて青い、特徴的な尾。
それが、蒼く輝いている。

それを見た瞬間、イディアの中に焦りが生まれた。

「まずい。ニドキング！ 下がるんだ！」

直ぐさまに指示を入れるイディア。

だが、

「遅いよ！ まあちゃん、“アクアテール”！」

「るーりいっつ！」

イディアの指示を聞き、ニドキングが動くよりも早く、マリルが蒼く輝く尾を“きあいだま”にぶつける。

落下のスピードと遠心力が加わったマリルの攻撃は、ニドキングの放った“きあいだま”を見事に打ち返した。

それと同時に、尾に溜めていた水の力が一気に四方八方へと放出され、太陽の光に反射された水の雫が美しく会場を彩る。

「ニドオオオツ！」

自分の放った“きあいだま”を返されたニドキングは、逃げ切れずにそれをモロに受け止めてしまう。

会場内に、砂埃が舞った。

『おおおーっ！ マリル、負けじとニドキングの“きあいだま”を“アクアテール”で打ち返した！ 更に、“アクアテール”の水が会場に美しく反射する！ これはポイントが高いぞおおー！』

司会者の言葉と共に、イディアのポイントが削れる。

だが、マリルはそれだけに留まらずにニドキングへと突っ込んだ。その振り上げる拳に、冷気が収束していく。いける。そう確信したトイロは、最後の一手をかけようと手を前に出した。

「決めさせてもらおうよ、 “ れいとう ” ……」

「 “ かみなり ” 」

イディアが、静かに呟いた。

瞬間、ニドキングが吠え、会場が震えた。

会場にいた、ほぼすべての人間が、何が起きたのか理解できなかつただろう。

だが、次の瞬間彼らが目にしたのは、ステージの上で雄々しく立つニドキングと、そのすぐ下でぐったりとしたまま気絶 して動かないマリルの姿であった。

「……………」

トイロは、静かにパイプ椅子に腰掛けていた。

トイロの腕には、マリルが抱かれています。シレンから貰ったきずぐずりのおかげもあって、今はスヤスヤと寝息を立てていた。

（完全に、先を取られっぱなしだったというわけだねー）

先の試合は、完全に相手のペースの中で踊らされてしまった。

バトルとは、先の読み合いだ。どれだけ相手の何手先を読み、それに対する対抗策を打ち、自分のペースに相手を引き込めるかで、ほぼ勝敗は確定する。

ましてや、コンテストバトルにはそこに伏線の張り合いも加わるのだ。ポケモンを美しく魅せ、観衆を自分たちの世界に引き込むには、技に一連の流れを作る必要が生まれる。

（ボクの伏線を、逆に利用されたというわけか…………）

あそこでニドキングの“きあいだま”に対し、そのまま“ころがる”で対抗せずに“アクアテール”を使ったのは、次の一手である“れいとうパンチ”に繋げるためだった。

“アクアテール”から空气中に拡散した水しぶきを“れいとうパンチ”に還元させ、威力を底上げしようと考えたのである。

だが、イディアはそれを逆に利用してきた。

マリルが水しぶきを拳に収束させたことで、ニドキングが“かみなり”を確実にマリルへと当てるための道標代わりにされたのである。

“毒”と“地面”という、物理主体であるはずの属性でありながら、非常に汎用性の富んだニドキング。その裏をかきにくい性質を利用した、素晴らしい戦法であった。

「……また、負けちゃった……」

旅に出てから、これで何度目の敗退だろうか。

ヨシノシテイの一件で、自分が如何に狭い世界で暮らしていたかを知ったはずなのに、このざまとは情けなさ過ぎて笑えそうになっ
てしまう。

だが、トイロの中には敗北に対する悔しさの他に、それとは相反する想いが生まれていた。

「楽し……かったな。……うん。非常に楽しかったよー」

気持ちが、高揚していたのだ。はじめて抱いた想いだった。

それと同時に、シレンに出会ってから感じ続けてきた“感情”の
答えにも、トイロは一つ近づいていた。

(ボク、今、楽しいって感じているんだ……)

屋敷では、抱けなかった想い。

独りでただ父を待つだけの生活を送っていた頃には、抱こうとす
ら思わなかった感情。

リオルと出会い、旅に出て、外の世界を知ったことで知ることが
できた想い。

それを今、トイロは実感していた。

「ありがとうね、まあちゃん」

眠るマリルの丸い肌を撫でながら小さく呟いたトイロは、ゆっく
りと顔を上げた。

視線の先にあるのは、会場を映し出したモニター。

二次審査のファイナル、トイロを負かした青年　イディアとシ
レンの試合が行われていた。

『さあ、残り一分を切ったファイナル！ 両者、激しいポイントの削り合いで、試合の行く末はまだ全く予想がつかないぞおお！』

会場に響く司会者の声。沸き立つ歓声の中心にいるのは、ステージの両端で互いに火花を散らせるシレンのブイゼルとイディアのニドキングだ。

「ブイのすけ、“みずのはどう”！」

「ブイブイツ！」

「“だいまんじ”で打ち消せ」

「ニドオツ」

ブイゼルの放った“みずのはどう”を“だいまんじ”で相殺させるニドキング。

“だいまんじ”は更に、勢いを止めることなくブイゼルへと向かっていく。

「“うずしお”よー！」

「ブーイーツ！」

巨大な“うずしお”でニドキングの“だいまんじ”を包み込むブイゼル。二つのエネルギーがぶつかり合い、ステージを灼熱の渦が彩る。

『シレンさん、魅せます！ 自身の技を防いだニドキングの“だいまんじ”を使って、更に美しい技を創り出したああ！』

テンションの上がり上がった司会者に乗って、観衆も今日一番のヒートアップを見せる。

そして、灼熱の渦は観衆だけでなく、イディアとニドキングをも魅了していた。

「これは……、美しすぎる……」

「ニドオ……」

そこで、不意に鳴るサイレンの音。試合終了の合図だ。

『おおっと、ここでタイムアップ！ 最後の最後まで白熱し続けた試合を制したのは……』

モニターを見上げる司会者。それにつられて、シレンもモニターを見上げる。

試合の結果。

激しいポイントの削り合いだった。

僅かに残ったポイントを、僅差で逃げ切ったのは……、

『優勝は……、シレンさんとブイゼルだーっ！』

シレンとブイゼルだった。

モニターに二人の顔が映し出されたとき、二人は信じられないという顔で互いを見つめ合う。

「勝った……」

「ブイ……」

「……やった！ ブイのすけ、ありがとうー！」

「ブイブイッ！」

最初は呆けていたが、今は互いを強く抱きしめ合う二人。その近くでは、うなだれるニドキングを優しく撫でるイディアの姿があった。

『優勝したシレンさんには、キキョウシティ市長よりキキョウリボ

ンが進呈されます。シレンさん、どうぞ前へ』

「はい！」

リボンの入ったケースを持つ市長の前に進むシレン。市長が、彼女にケースを差し出した。

「これからも、頑張ってください。おめでとう」

「ありがとうございます！」

ケースからリボンを受け取ると、シレンはブイゼルと顔を見合わせて観衆を振り向き、リボンを高々と上げた。

「ポケモンコンテスト キキョウ大会、完全制覇よ！」

「ブイブイブーイッ！」

こうして、ポケモンコンテスト キキョウ大会はその幕を閉じた。

「おめでとう、シレン。これで一つ目のリボン、ゲットだね」
夜、昨日と同じくポケモンセンターの一室で、寝間着姿のトイロはシレンに賛美の言葉を贈っていた。

「いやいや。でも、今回はかなり焦ったかも。イディアだっけ？」

あの人のニドキング、凄く強かったなあ」

一回戦でトイロを負かし、ファイナルまで勝ち進んだ青年。

確かに、あの青年はとてつもなく強かった。旅に出てから、トイロは既に何人かの『強者』に会ったが、彼はかなり上位に位置するような気がした。

そう、ヨシノシティで出会った、あの美しい女性くらいに。

「でもボク、あの人と戦えて、すごく良かったよ。多分、今までのバトルの中で、一番楽しかったと思う」

ただ単に、強者の放つプレッシャーに押し潰されたり、何故かよく分からないが、戦いたいと感じて戦ったときは違う。

ある目標を達成するために、必死になり、心から楽しむことができたのだ。

それは、今まで十五年もの間、夢も目標も持たずにただのうのと暮らしていたトイロにとって、はじめての経験であった。

「……やっぱり」

不意に、シレンがそう呟いた。

突然何かを納得するかのようにそう口にしたシレンに、トイロは思わず首を傾げる。

「へ？ 何が『やっぱり』なのかねー？」

「トイロってさ、特に夢とか目標とか持っていないんでしょ？」

一瞬、時間が止まったのかと思った。

続けて、愕然としていたことを理解する。

トイロの表情の変化を予想していたのか、シレンは特に驚くこともせずに話を続けた。

「一昨日、トイロにこの町に来た理由を聞いたでしょう？ そのときのトイロの顔を見て、思ったのよ。『この子、もしかして』ってね」

「……君は何者かねー？ まるで超能力者みたいではないかー」

シレンの言葉に痛々しい想いを抱えつつ、何とか自分のペースを取り戻そうとトイロはおどけた口調で返したが、シレンの眼差しは全く変わらなかった。

「トイロ。別に、夢を持たないことが悪いわけじゃないのよ。ただ、あなたは見た感じ……、見た感じよ？ ……何て言うか、『無理して頑張ろうとして切羽詰まってる』感じがする」

「……」
言い返せない。言い返したいのに、『違う』と言いたいの、何も言葉が出てこない。しっかりとシレンを見て言いたいの、顔はいつの間にか下を向いてしまう。

当たっていたからだ。

夢も目標もないトイロにとっては、父こそが世界と自分を繋ぐ唯一の『糸』だったから。

だから、シレンの言葉はトイロの中のより深い場所に突き刺さるのだ。

「私もね。フィオレにいたころは、夢も目標も持ってなかったの」
「……え？」

不意に、そう打ち明けるシレンをトイロは見上げた。

「私が夢を持つようになったのは、ちょうど六年前。十歳の頃、両親と旅行で訪れたヨスガシティっていう町で、コンテストを生まれてはじめて見たときだったの」

そのときの感動は、今でも言葉にできないほどなのだとシレンは語ってくれた。

仕事で家を空けてばかりだった両親との久しぶりの旅行で、シレンは人生を変える出会いをしたのだ。

「そのとき住んでいたフィオレ地方は、あまりトレーナーが多くなくて、ポケモンも放し飼いが基本だったし、何よりバトルって概念自体がとても薄かったの。だからだったのかな。余計に新鮮に見えたんだと思う」

トイロとはじめて会ったとき、正確には、ブイゼルの演技を見せ

たときに、トイロの中に幼い自分を見た気がした。とシレンは言った。

「……小さなときの、シレン？」

「うん。コンテストをはじめて見た私と同じ感じ。新鮮な表情だったわ。だから、コンテストの出場を勧めたの」

「へ？ どういう意味かねー？」

再び首を傾げるトイロに、シレンは笑顔を向ける。

「私の見ている世界を見てほしかったの。『楽しい世界』を」

「『楽しい世界』……」

シレンの言葉を復唱するトイロに、シレンは大きく頷いた。

「そう。『楽しい世界』。トイロ。世界ってすごく広いのよ。私がおあなたに見せたのは、そのほんの一部分だけ。そして、世界には他にも楽しいことがもっといっぱいあるの！」

「……………」

「私、まだ会って間もないから、あなたが何を抱えててどれだけ切羽詰まった想いをしているかまでは知らない。でもね、もっと肩の力を抜いてもいいんじゃない？」

「肩の力を、抜く……？」

まるで幼い子供のように、ただただシレンの言葉の端っこを真似るように繰り返すトイロの手を、シレンが優しく包み込んだ。

「もっと力を抜いて、楽しませようよ、トイロ。きっと、世界はあなたを楽しませてくれるから……」

そう優しく話すシレンの瞳を、トイロはただ静かに見つめていた。

数時間後。

既に日付も変わり、時刻はちょうど草木も眠る丑三つ時に差し掛かるうとしていた。

「……………」

春の少し冷える空気の中、シレンはこっそりとポケモンセンターの屋根に登って空に浮かぶ月を見上げていた。

シレンは、今晚見たトイロの表情を思い返していた。

嬉しいような、困ったような、それでいてどこか辛そうな表情をしていたトイロ。

一体、彼女は何を抱えているのだろうか。

『気になるのか？』

不意に、シレンの耳 否、頭の中に、声が響いた。

だが、シレンは慣れた仕草で腰のウエストポーチから一つのモンスターボールを取り出す。それが『声』の主だと分かっているからだ。

「ボールにいるときに話しかけないでって、いつも言ってるじゃない」

『あなたは目立つから出ちゃダメと言って、ここ一週間も出してくれないのは、どこの誰かな？』

「……………もしかして、拗ねてるの？」

ボールにいるときは話しかけるなど言いつつ、自分から話しかけ

ているシレン。

そんな彼女の姿に、『声』の主から小さな笑みが零れた。

『そうだな。いい加減外に出ないと、体が鈍りに鈍ってしまいそう
だ。少しでいいから、出してほしい』

「……分かったわよ」

『声』の要望に小さなため息を漏らし、辺りに人がいないことを
確認したシレンは、渋々とボールを放った。ボールから放たれた光
が、中にいたであろうポケモンの姿を形作っていく。

ボールの中にいたポケモンは、久しぶりの外界が楽しいのか、鼻
唄を口ずさみながらシレンの隣に腰掛ける。

「あら、随分とご機嫌なのね？」

『久しぶりの外、それも夜だからね。君と会うまでは嫌いなもの
だったが、今では好きなものになったよ』

「……………」

そのポケモンが言った言葉の意味が、実際にはかなり重たいもの
を含んでいることを、シレンはよく知っていた。

彼にとっては、『夜』は苦痛の時でしかなく、また、そのために
彼は孤独に生きてきたのだから。

「ホントに不思議よね。どうして私だけ、あなたの特性“ナイトメ
ア”が効かないのかしら……。ねえ、“ダークライ”」

自分の手の平に視線を落としながら、シレンは隣に座るポケモン

“ダークライ”に問いかけた。

だが、それに対し、ダークライは首を横に振るだけだ。

『私の推し量れる範囲を遥かに超えている。だが、私は君に会えて
本当に嬉しかった』

唯一、自身が傍にいても悪夢にうなされることのない存在。

それは、彼にとって孤独からの脱却を意味していた。

『君のおかげで、私は世界が楽しいと感じるようになった』

「大袈裟。それに、結局私といれても、あなたはこうして人目を盗まないと外には出られないじゃない……」

おどけつつ、だが最後は気弱な言い方になってしまふシレン。

そんな彼女に、ダークライは優しげな表情を見せた。

『それでも、私は君がいたから、あの島から外に出ようと決めることができた。確かに外に出る回数は減ったが、私の世界が広がった』

「……………」

『だから、彼女にも私と同じように世界を楽しんでほしい』

ダークライは、静かに言った。

ダークライの言う『彼女』が、トイロを指していることを、シレンは知っていた。

『彼女は『真つ白』だ。まだ何色にも染まっていない『純白』だ。

だからこそ、どんな色にも染まる』

「……………うん。そうだね」

それはつまり、善にも悪にもなり得るし、聖にも邪にもなり得るということ。

『彼女に楽しい世界を見せよう。シレン。この地で出会った、最初の友だ。楽しんでもらおう』

「……………うん」

月の浮かぶ夜空を見上げながら、シレンとダークライは微笑んでいた。

同時刻。別の場所にて。

「……イディア。命令に背きましたね？」

ポケギアから響く、少女の声。それに対し、青年　イディアは肩を竦めた。

「“強欲”には自由にさせながら、俺には縛りを与えるのかい？」

文字通りだね、“傲慢”のスペルヴィア」

『あなたこそ、文字通りの性格ですね。“嫉妬”のインウィディア。

“強欲”に嫉妬しているのでしょうか？』

挑発のつもりだったが、逆に返されてしまった。ぐうの音も出ず、イディアは下唇を噛む。

『博士の娘に接触した上に、名前を晒すとは。文字通り“醜態”を晒したではありませんか』

「待て。俺は醜態など晒していない。準優勝だ」

『負けた証拠です。誇るのであれば、完全勝利なさい』

「……………」

黙るイディアを余所に、電話向こうの声は話を進めた。

『オトナシ博士の動向を今一度探りなさい。彼こそ、今この世界で最も“世界の始祖”に近い者』

「……彼女は良いのかい？　彼女を取り巻く人間たちも、一筋縄ではいかないと思うが」

『邪魔になれば、そのときに排除します。今はまずオトナシ博士を見つけることが先決です。連絡はまた後ほどします。ルクリアもすぐに向かうはずですよ』

「……了解」

短い返事の後に続く通話切れの音。

ポケギアを閉じたイディアは、ゆっくりと空を見上げた。

「セブン・フォール」世界を今一度、創造しよう。世界から“追い出された”我ら
“七人の咎人”によって」

イディアの眩きは、夜の闇に溶けて消えた。

P・9 世界を楽しむ(後) (後書き)

今回のテーマ

『コンテストバトル』

『月夜に交錯する想い』

サブタイトルの意味が後半でようやく出せました。

ここで私事ですが、旅がらすが現在執筆休止中のもう一つのFF『魂の樹形図』では、『夢を追う少年たちの成長』をテーマに書いています。

で、逆に『十色のキセキ』は『何にもない真つ白の状態から、夢を探ったり探らなかつたりする少女』を軸に話を展開させています。

既に下書きがある状態から色塗りをするのではなく、完全に何も書いていないキャンパスに向かっている感覚です。

未だにキャラの中で一番ふらついている主人公は、書いていて一番大変ですが、楽しいと感じるときもあつたりします。

これからトイロがどんな風になるかは、お楽しみということw

シレンはしばらくの間、継続して物語に参加します。いつまでかはまだ未定ですが。

個人的に、ダークライとの会話シーンはお気に入りだったりw 旅がらすが好きなんです、ダークライ。姿とか特性とか。

んで、敵サイドのリーダーさんと組織の名前が登場。

“七人の咎人”と書いて“セブン・フォール”と読む。実際間違った英語です。

完全に響き重視で付けました。

一応、“フォール”は“咎”という意味です。文字通り七人。

部下とかはいません。七人だけの組織です。

目的、創立の経緯なんかはまた物語の方で追い追い。

今回はキキヨウシテイ編も大詰め。

キキヨウシテイに着いたら一度は必ず行くあの“遺跡”に向かいます。

さてさて、そこでトイロを待ち受けるものとは!?

では、また次回!

P.S.

アナザー版、トイロについての質問も現在募集中です。

質問にラジオネームを添えて、メッセージでお送りください。

そのほか、コラボの話なんかも良かったら……なんて(笑)

アナザー版は基本何でもありのつもりなので。

よろしくお願いしまーす。

P・10 伝える者（前書き）

今更ながら、

トイロのポケモンが三匹とも物理アタッカーだと気づかされる。
ルーくん入れたとしても同じ。ステータスが完全に物理寄り。

あー。やっちゃった……。

好きなポケモンをホイホイと選んだだけのつもりが、バランスあんまりよろしくないですね……。

本編に全く関係ない前書きだなオイ（汗）

今回はキキョウシティ編ラストです。

それではござい。

P・10 伝える者

来ルヨ。モウスグ、ココニ。

何が来ルノ？

『真ッ白』。何色ニモ染マラナイ、『真ッ白』。

……ヤット来タネ。

ヤットダネ。

ズットズット、待ッテイタヨ……。

早くオイデ、『真ッ白』……。

アルフの遺跡。

キキョウシティの南西、31番道路の入り口に位置する小さな遺跡群の名称だ。

およそ千五百年前に作られた建造物であり、海の近辺だったらしく古代の海洋ポケモンの化石が時折見つかるということだけが判明しており、そのほかのことは未だに謎に包まれた部分だけである。今日も、その謎を解明するため、考古学者たちは研究に励んでい

るのであった。

「すごいなあ。これって、何のために造ったのかしら？」

アルフの遺跡。その大広間に位置付けられている、地下に広がる巨大な空間の中で、アッシュブロードのポニーテールが特徴の少女シレンが呟いた。

今は、コンテストで着ていた妖艶な雰囲気のチャイナドレスとは打って変わって、赤いタンクトップの上にジーンズ生地ジャケットを羽織り、黄色いミニのプリーツスカートと白のスニーカーを履いている。何だか、ポンポンを持たせたらとても似合いそうだ。

音が反響しやすい造りなのか、シレンのそれは小さな呟きだったにも拘らず、かなり大きな音となってトイロの耳に届いてくる。

「集落の跡地とか、交通の跡とかではなさそうだね」。考えられるのは、何かを祈り祀っていたとか、寺院、祠、もしくは集合墓地……。はたまた戦争から生き残るために造られた砦とか？ 可能性はいろいろあるよ」

壁に描かれた壁画を見ながら、トイロが語るように流れる口調で推測を述べた。その顔は、いつも通りの緩いものではあるが、目だけは真剣な光を漂わせている。

コンテストから、既に二日が経過していた。

ジョウト地方は初めてだというシレンと一通りの観光を楽しみ、次の目的地であるヒワダタウンに向かう途中で立ち寄った遺跡。

そこで、トイロの表情が今までのものと確実に「違う」ことをシレンは感じ取っていた。

「……すごいわね、トイロ。ひょっとして、ものすごく頭の良いどこかの大学の学生さんだったりするの？」

「まさかあ。ボクは実家が考古学者の家系なんだよ。考古学の学術書を絵本代わりにして育ったようなものだからね」。自然と頭に入ってしまっただけなのだよ」

幼いころから、考古学に触れてきた。否、それにしか触れることができなかったと言う方が正しいかもしれない。

オトナシ家は、子育てをするという観点からして、あまり宜しいとは言えない環境であった。

母はトイロが生まれてすぐに亡くなったと聞いていたし、父も祖父も研究に明け暮れる毎日。自然と、トイロは父と祖父の中心にあった考古学を忌み嫌うようになっていった。

だが、確かにそれしか目の前になかったことも、また事実。

忌み嫌いなながらも、トイロは水を吸い込む大地のように考古学の知識を次々と吸収していった。

トイロのその凄まじい吸収力に気づいた祖父は、更に難解な学術書をトイロに与えた。祖父が亡くなり、代わりにエルレイドがトイロと暮らすようになるまで、トイロはそうして暮らしていたのである。

(しかし、この遺跡は本当に不思議だね。建造理由を明確に示す資料が全く無いだなんて……)

辺りを見回す。壁に描かれた奇怪な紋様と古代ポケモンをモチーフにしたらしい像以外、これと言って特筆できそうなものもない。

そもそも、トイロがここに来たのは、祖父の遺した学術書 家から持ってきた本に、ある記述があったからである。

『キキヨウシテイの外れにある、“アルフの遺跡”と呼ばれる遺跡群で“アンノーン”というポケモンを見つけた。

彼らは非常に多様な外見を持っているが、一様にしてその身体は薄く平らであり、また身体のどこかに目とも呼べそうな器官を持っている。

壁に描かれた紋様がアンノーンに似ているような気もしたが、詳細は未だに解明されていない。このことについては、これから長

い研究を要するであろう……』

続けて思い出すのは、ヨシノシティで出会った父の知り合いだと言う美しい女性が残した言葉。

『博士の行方を知りたいなら、“アンノーン”を追いなさい』

父の手がかりとなり得るかもしれないポケモン、アンノーン。アンノーンの秘密を探ることが父に繋がるのであれば、ここを調べない訳にはいかない。

それは皮肉にも、トイロが忌み嫌う考古学の知識を必要としており、トイロはふと嘲りの意を込めた笑みを浮かべた。

と、そこへ、

「ギイーツ！」

上 地上の方から聞こえてくる、聞き慣れない何かの声。続けてするのは、鳥ポケモンが羽を羽ばたかせる音。

「何かしら？ ポケモン？」

「ちよっとして行ってみようではないかー」

音に気づいて首を傾げるシレンと共に、トイロは一端、広間から外へと続く階段を昇っていく。

そのため、先ほど触れた壁の一部が青白く輝いたことに、トイロは気づかなかつた。

「わわわ！ と、トイロ、アレ！」

「これは……珍しいね。非常に珍しいよー」

広間から地上へと戻った二人を出迎えたのは、とても珍しいポケモンだった。

灰色の体躯に骨と翼膜から成る翼。大きな顎と鋭い歯は、“それが肉食であることを彷彿させる。”

古代ポケモンの一種、“かせきポケモン”のプテラだ。

「ごめんよ。驚かせたようだね」

そこへ、プテラの横に一人の青年が現れた。紺色の髪に袴姿の青年は、トイロたちより少し年上である印象を受ける。

「君がこの子のトレーナーさんかね？」

「ああ。俺はハヤト。キキョウジムジムリーダーを務めている。君たち、この間のコンテストに出ている子たちだろ？ 確か、シレンさんとトイロさん、だっけ？」

青年　ハヤトの言葉に、二人は面食らった。

「そうだけど……。貴方もコンテストを見に来ていたの？」

「いや、ちょうど挑戦者チャレンジャーの相手をしていてね。二次審査からテレビ中継していたのを観たんだよ」

「テレビ？ コンテストって、テレビ中継とかしていたのかねー？」

ハヤトの答えに、トイロは首を傾げる。テレビ中継なんてことは、一度足りとも耳にしていなかったからである。

と、そこで、シレンが「しまった」とでも言うように、顔を左手で覆った。

「そいえば、トイロには言っていなかったのよね。コンテストって、基本的にその地方の局のみだけど、テレビ放送されてるのよ。ちょっと特別な大会とか、グランドフェスティバルなんかは全国ネットになるんだけど」

「ちょ、何故それを先に言わないのかね!？」
初耳だった。そんな話を聞いていたなら、絶対に出なかったのに、
と考える。

だが、シレンの答えはまるでその考えを読んでいたかのような
った。

「だって、言ったら絶対に出るの嫌がると思ったんだもの」

(……絶対にシレンはエスパーなのだ。エスパータイプのポケモン
が前世だったに違いないのだ……!)

ただ単に、自分が非常に分かりやすい性格であることに気づけて
いないだけのトイロは、その場で頭を抱え込んだ。

あの中継を、小憎らしい幼なじみに観られていたら。と想像する。
絶対に奴は再会したときにそれをネタにして主導権を握ろうとして
くるだろう。それだけは何としても避けたいと願う、トイロであっ
た。

「あ、えっと、ハヤトさん。でしたっけ？ 貴方はどうしてこちら
に？」

とりあえず今は放っておいた方が良くと判断したのか、シレンは
頭を抱えたままのトイロを余所にハヤトの方へと話題を振った。

「え。ああ、俺は副業でこの警備員をやっている。今日は非番
なんだけど、プテラの調子を診てもらおうと思っただけ」

ここに来た訳を話しながら、プテラの顎を優しく撫でるハヤト。

プテラも気持ちいいらしく、目を細めている。

そこで、頭を抱えていたトイロが話に加わってきた。

「診てもらおうって、ポケモンセンターではダメなのかねー？」

「コイツは“かせきポケモン”だからね。ここで“ひみつのコハク
”から蘇らせたっていうのもあるけど、この時代でも体調を万全に
してやるにはこの方が資料や情報が多いんだよ」

なるほど。とトイロは思った。

彼らの元々生きていた時代は、まだ詳しく解明こそされていないが、現代とは気候などのいくつかの点で勝手が違うことが分かっている。

死んでいた 正確には、樹液に閉じ込められた蚊の体内に血液が保存されていた状態から復活させられたとき、住んでいた環境の差に対応しきれず、その場で生命を失うポケモンも少なくないと思われる。

だからこそ、古代ポケモンは健康管理に他のポケモン以上に気を遣う必要があるのだ。

最近では、時代が進むにつれ覚える必要の無くなっていた技を再び覚えて進化し、そこで激変した自身を周囲の環境に適応させられず、体調を崩しやすくなったポケモンも出てきたという話もあるらしく、携帯獣学会では『中には時代の変化に対応するため、進化を捨てたポケモンがいる』という説が浮上している。

さすがに、学会の新説までは知らないのだろう。そう考察するトイロの横では、シレンがまだ納得のいかない様子でしきりに首を傾げていた。

「ハヤトさん。準備できましたよ」

三人の後ろから、男の声がした。振り向くと、白衣を着込んだ男性が後ろにある建物から顔を出している。

どうやら、この研究員らしい。ハヤトは簡単な礼を述べると、プテラをモンスターボールに戻した。

「それじゃ、俺はこれで。君たちも、一通り見学を終えたらここに立ち寄ると良い。化石から復元されたポケモンも何匹かいるしね」

「はい。そうします」

「プテラの体調が順調だと良いね」

「ハハッ。ありがとう」

笑って二人に手を振りながら、研究施設へと入っていくハヤト。それを見送った二人は、ふむ。と腕を組んだ。

「これからどうしましょつか？」

「ボクはもう一度広間を見たいかな。それに、研究資料にも少し興味があるねー」

「私はパンフに書いてあった化石掘り体験にちょっと行ってみたいなあ。運が良かったら、ポケモンの化石が見つかって復元させてもらえるっというし」

見たいものが食い違ってしまった。

だが、トイロは逆にそれをチャンスだと感じた。

「じゃあ、一時間後にここで落ち合おうではないかー。それまでは自由行動としよう」

「ん。了解。そうしましょつか」

トイロの提案に、シレンは特に異議を唱えなかった。トイロは、心の中で小さくガッツポーズをとる。

「では、一時間後に会おう。ポケモンの化石が見つかることを祈っているよー」

「まっかせて！ よーし、頑張っちゃうわよ！」

ジャケットの袖を捲くりながら気合いを入れて化石掘りに向かうシレンを見送り、トイロは再び遺跡の中へと潜っていった。

(シレンがついて来なくて、ちょっとホツとしたねー。ここから先は、彼女を巻き込めない……)

広間に戻ったトイロは、肩に提げていたボストンバッグから一冊の本　祖父の本と小さなノート、それにシャープペンシルを取り出す。

「えっと、確かこのページだったかな……」

祖父の本を捲り、トイロは目的のページを開く。言わずもがな、“アンノーン”に関する記述のページだ。

（おじいさまの本によれば、この遺跡に“アンノーン”がいるはず。それに、パパはその“アンノーン”を追っていた）

この遺跡に、父に繋がる手がかりがあるかは分からない。だが、調べる価値は十分にある。

意を決したトイロは、本を閉じると腰のトレーナーズベルトからモンスターボールを取り出した。

「お願いするよ。リツちゃん」

宙に放ったボールから出てきたのは、リオルだった。リオルは、ボールから出た瞬間に目にした光景に、ハッと息を呑む。

「リツちゃん。もしかしたら、君はこれに近い光景を見たことがあるはずだ。何でもいい。思い出したら教えてくれないかね？ ボクはボクなりに調べてみるから」

トイロの呼びかけにリオルはコクリと頷くと、早速壁の紋様に目を走らせた。トイロはそれを確認してから、反対側の壁の紋様を手にしてたノートに正確に書き写していく。

（アンノーン。パパは“アルセウス”について研究すると同時に、彼らについても調べていた……）

幼い頃から屋敷の書物を読みあさっていたため、トイロも“アンノーン”についてはある程度の知識を持っていた。

曰く、その姿は我々が使用している言語に酷似している。

故に、アンノーンが先なのか、文字が先なのかという議論は、世界七不思議の一つにも数えられているとか。

ふと、トイロの中に一つの疑問が生まれる。

(あれ……？ どっちが先かって、じゃあ、アンノーンが生まれた意味は結局なんだというんだろう……)

アンノーンの形と規則性にヒントを得た人類がそれを元に文字が生まれたのか。

それとも、アンノーンの元となるポケモンが人類の創った文字を真似るように姿を変えたのか。

まず、前者を考えてみる。アンノーンに“規則性”があるということは、アンノーンが“規則性”を必要としたからだ。

その形に“規則性”を必要とするものは数多く存在するが、そのほとんどが“伝達手段”として用いるためにそれを要している。

つまり、アンノーンにもこれが当て嵌まると仮説立てるのであれば、アンノーンは“何かを伝えるために”生まれたということだ。

後者にも、似たようなことが言える。

何故、アンノーンは形を真似る対象に“文字”を選んだのか。“文字”とは、伝達手段だ。相手、または不特定多数に自身の考えや想いなどの“伝えたい事柄”を伝えるために、“文字”は生まれた。それを真似たということ。それが示す意味。

「……アンノーンは、“何かの意思を伝えるため”に生まれた……？」

脳裏に浮かんだ仮説。もしそれが真実というならば、ではアンノーンを用いて“意思”を伝えようとしているのは一体“何者”なのか。

考えを巡らせる。あらゆる仮説の裏付けとなる証拠を、記憶の中から探し出す。

ヒントは、とても身近な場所にあった。

「……………“そうぞうポケモン”、アルセウス！」

今胸に抱えている祖父の書物。その中の一節が、トイロの脳裏を過る。

かつて、世界は“無”であった。

何も存在しなかったそこに、一つの“卵”が現れた。

“卵”より瞬りし最初の生命いのちは、世界を創造した。

それが、アルセウス。

彼の者こそ、全てを司りし創造神。

我ら全てを創りし父。そして母。

アルセウスが全てを創ったというならば、

全ての生命を “アンノーン” を創造したというならば、

アンノーンは、アルセウスが“誰かに何かを伝えるために” 創造した。ということになるのではないか。

「じゃあ、一体アルセウスは何を……………」

伝えようとしているのか。とトイロが思った時だった。

「うー！」

突然、全身の毛を逆立たせながら、トイロの目の前で身構えるリオル。

しかし、その視線の先には特に何も見当たらない。

「リッチちゃん、一体どうしたというのかねー？」

何もない空間に向かって身構えながら、トイロを守るように前に踊り出るリオル。しかし、当の本人は、リオルが一体何を警戒して

いるかも分からず、ただオロオロとするばかりだ。

一体なんなのだと再び口を開こうとトイレが動く。

だが、それは突如トイレたちを襲った旋風によって塞がれた。

「きゃあっ!」

(風!? 何で、地下で風なんて……!?)

本来ありえない現象にトイレは言葉を失う。

異変はそれだけではなかった。トイレたちが立つ地面が、“空間ごと”歪んでいく。

「え……?」

「うー!」

予想外の出来事に、身体が反応できなかった。

そのまま、身体が“空間の歪み”へと吸い込まれていく。

ヤット来タネ、『真ツ白』……。

そんな“声”が脳裏を掠めた瞬間、トイレたちは広間から“消えた”。

「どうということだ!」

アルフの遺跡の研究施設で、ハヤトが怒鳴り声に近い声を上げる。そのすぐ近くでは、何やら不思議な画面を映すコンピュータに向かって操作を行う研究員の姿があった。

「分かりません! こんなこと、今まで無かったことなんです!」
本当に初めてのことなのだろう。研究員は慌てた様子でコンピュータを操作している。

化石掘りの途中、突然この研究施設に移動を命じられたシレンは、何人かの見学者の中に、友人 トイレがいないことに小さな不安

を抱えながら、慌てた様子の研究員たちとハヤトに視線を泳がせていた。

程なくして、一人の女性研究員が声を上げた。

「エネルギー消失を確認。同時に、力場の発生源を割り出せました。大広間です！」

「え……！？」

研究員の言葉に、シレンは言葉を失った。

大広間には、トイロがいるからだ。

研究員の報告を受けたハヤトが、もう一人の研究員からモンスターボールを受け取った。

「俺は大広間を見てきます。引き続き、解析をお願いします」

「分かりました。何か分かり次第、ポケギアに連絡しますから」

研究員の了解を得たハヤトは、見学者たちにその場に待機するよう告げると、研究施設を出ていった。

「待つてください、ハヤトさん！」

施設を出るハヤトを、シレンは追いかけた。後ろから、研究員や他の見学者がシレンを止める声が聞こえたが、それを無視してシレンはハヤトを追いかける。

案の定、追いついたときにハヤトは目を丸くさせながらシレンを見下ろしていた。

「何を考えているんだ。施設に戻っ」

「トイロがいないの！ あの子、大広間に行ったきり、戻ってきてないの！」

ハヤトの言葉に、自分の言葉を被せる。無礼だとは分かっていたが、居ても立つてもいられないのだ。

「足手まといになんかならないわ。コーディネーターだけど、普通

のバトルの心得ならある！」

連れていけ。と暗に言っていた。戻る気はないことを、ハヤトを強く見ることで示す。

ハヤトが迷ったのは、ほんの一瞬だった。踵を返したハヤトは、小さく呟く。

「もしものときは、ちゃんと逃げてくれよ」

「了解！」

二人は、大広間へと続く階段へと駆け出した。

一方その頃、

「……………」

トイロが目を覚ますと、そこは真つ暗闇の中だった。不思議なのは、周りは一寸先も闇だというのにも拘わらず、自分とポケモンたちの姿は視認できること。

「……………リツちゃん。リツちゃん。起きたまえー」

とりあえず、すぐ近くに倒れていたリオルをトイロは揺さぶった。程なくして、リオルがゆっくりとその瞼を開く。

「うっ？」

起き上がって辺りを見回したりオルは、突然の場面の変化についていけないのか、首を斜めに傾げた。

「本当に、一体ここはどこかねー？ 周りがないんにも見えないよー」

軽くおどけつつも、立ち上がったトイロは再び辺りを見回した。

(なんだろう。あるとき、ボクたちは遺跡から無理矢理ここへと引きずりこまれた”……?)

今いる空間が、遺跡とは違うことは何となくは分かっていた。だが、何故ここに来たのかも、何者によって連れて来られたのかも分からず、トイロは頭を抱える。

(それに、引きずりこまれる瞬間に聞こえたあの声……)

ヤット来タネ、『真ッ白』……。

まるで、何かを待ち侘びていたような声。

更に気になるのは、『真ッ白』という言葉。

(……ボクのこと?)

今いるメンバーの中で『白』を基調としているのは、トイロただ一人だ。しかし、自分を待っていたという存在に全く検討がつかなかった。

と、そこで、

コンニチハ。『真ッ白』。ソシテ、『波導ノ戦士』。

「っ!?!」

「うー!?!」

頭の中に、直接声が響いてきた。

慌てて辺りを見回すと、少し離れた空間に“何か”が浮かんでいた。

それは、とても奇っ怪な姿をしていた。

どこことなく、形がアルファベットの『A』に見えなくもないが、身体の中央にある円の中に浮かぶ点が、目のようにキョロキョロと動いている。

リアルよりも少し小さな“それ”は、とても平たい身体を持っていた。

「……もしかして、君が“アンノーン”？」

自分の持つ情報から、“それ”の正体を今回の目的である“アンノーン”と推測するトイロ。

すると、“それ”はまるで頷くように身体を一度だけ明滅させた。

我々ハ『創造神』ノ使イ、“アンノーン”。……ズット、君ヲ待ツテイタヨ、『真ツ白』。

「待っていた？ ボクをかね？」

アンノーンの言葉にトイロが首を傾げると、アンノーンはもう一度小さく明滅した。

君ハ、何色ニモ染マラナイ『純白』。全テノ存在ヲ等シイ視線デ見ツメルコトノデキル者……。

「……意味がよく分からないよー？」

アンノーンの言葉に、トイロの疑問は更に深まった。だが、アンノーンは構わず話を続けてくる。

君ノ世界ハ、マダ狭イ。『探究者』ヲ見ツケルニハ、マダ早イ。

『探究者』。アンノーンの言った単語に、トイロはすぐさま飛びついた。

「君は、パパの居場所を知っているのかね！？」

.....。

しかし、そこでアンノーンは喋るのを止めてしまった。ただ淡く点滅を繰り返すだけで、何も返してこない。

しばらくして、アンノーンとトイロたちの周囲にまた別の形をしたアンノーンが次々と出現した。

「な!？」

「うー！」

アンノーンの大量出現に身構えるトイロたちに、最初からいたアンノーンが再び語りかけてくる。

『世界』ヲ知ラナイ『真ツ白』ト『世界』ヲ忘レタ『波導ノ戦士』ヨ。曇リ無キ瞳デ『世界』ヲ見ルンダ。『創造神』ト『探究者』ハ、『始マリノ舞台』デ君タチヲ待ツテイル。

アンノーンがそう言い終わると同時に、トイロたちは再び空間が“歪む”を感じた。

いけない。そう感じたトイロは、慌ててアンノーンへと手を差し伸ばす。

「待ちたまえ！ パパはどこにいるというんだ！」

『真ツ白』。マタ会オウ。

「お願い、待って！」

トイロの伸ばした手は、アンノーンに触れることさえなかった。再び、トイロとリオルは空間の“歪み”に飲み込まれていった。

「トイロ！ 良かった。本当に良かったよお〜」

「あはははは。シレン、大袈裟だよ〜」

研究施設にある一室で、トイロは泣きじゃくりながら彼女に抱きつくシレンの頭を撫でていた。

アンノーンのいた空間から遺跡に戻ってすぐに、切羽詰まった様子のシレンとハヤトと再会したトイロは、自分たちのいた場所からとてつもなく大きなエネルギーの発生が見受けられたことを知らされた。

（多分、大きなエネルギーってアレのことなんだろうな……）

エネルギーの発生源にトイロは無茶苦茶に心当たりがあったが、敢えて沈黙を貫くことにしていた。

アンノーンの話は、今はまだ伏せておくべきだ。とりあえず、『何もなかった』では疑われると思ったので、『突然耳鳴りがした原因不明の頭痛に悩まされて、その場にしゃがみ込んでしまった』と嘘をついておいた。

ハヤトと研究員もそれで納得してくれたようで、今はこうして休憩室代わりにと施設の一室をトイロたちに貸してくれた。

「……………」

シレンの頭を撫でながら、トイロはアンノーンの言葉を頭の中で何度も反芻させていた。

曇り無キ瞳デ『世界』ヲ見ルンダ。『創造神』ト『探究者』

ハ、『始まりノ舞台』デ君タチヲ待ツテイル。

（『始まりの舞台』。そこに、パパとアルセウスがいる…………）

いつか、必ずたどり着いてみせる。

まだ見ぬ『創造神』と、それと共にいるであろう父に、トイロは強い想いを馳せていた。

P・i0 伝える者（後書き）

今回のテーマ

『アンノーン』

『ハヤトちよい出演』

一応、原作はゲーム版のつもりな『十色のキセキ』です。

でも、トイロの旅の目的がジム戦じゃないのでジムリーダーの出演が作りづらいんですね。

なので、敢えて副業持ちに。

いや、それでもジムリーダーだけで食って行けるはずがない気がします。

一応、ハヤトさんはまだ二十歳ぎりぎりじゃない感じの描写にしています。

ジムリーダーの年齢って曖昧だわ。

まさか、キョウさんの娘があんなにでかいとは思わなかったし。

そして、今回の主役でもあるアンノーン。

鳴き声を最初は

「@#\$ %& '()*

にしようとしてました。マジで。

何言ってるかわかんないので、ちよい電波風に。

結局、トイロに話し掛けさせるために片言風で落ち着きましたけど。

これからの旅でトイロが何を見るのかは、まだまだ分かりません。

次回からはヒワダタウン編。
またまた新キャラ登場+今度はジムリーダーも大活躍させる予定。
ではまたお会いしましょう。

P・11 幸せとは何か(前)(前書き)

お久しぶりです。

今回からヒワタウンです。

ヤドンだらけのあの村はどこか癒されますね〜w

今回は試験的にいつもより短めでお送りします。
それでは、どぞ！

暗い暗い岩場で、二人の男が一匹のポケモンを挟み打ちにしていた。

一人の男が、白い円錐状の物体を手の平で転がしている。

「楽勝楽勝。やっぱりやめらんねーな、これ」

男の笑い声に、もう一人の男も笑顔で頷いた。

「こいつら、抵抗しないもんな。ポケモン出す手間も省けたぜ」

「楽して大儲け。これこそ最高の商売だ」

一頻り笑った後、男たちは挟み打ちにしていたポケモン “まぬけポケモン” のヤドンを見下ろした。

「じゃーなヤドン。テメエの尻尾、俺たちが有効活用させてもらっぜ」

男たちはそう言って去っていく。

男たちが挟み打ちにしていたヤドンは、尻尾の先が不自然に平たくなっていた。

まるで、ナイフで先を斬られたかのように、平たくなっていた。

人々とポケモンが素朴に暮らしている町、ヒワダタウン。

森の中にひっそりと佇む、長閑で静かな田舎町。

それが、ヒワダタウンの第一印象だ。

「久しぶりなのだー。あんまり変わってないねえ。ヒワダタウン」
「キキヨウシテイを旅立って早三日。トイロとシレンは“つながりの洞窟”を抜け、ようやく次の町であるヒワダタウンに到着した。
町の入り口で伸びをするトイロの横で、シレンがリュックを片手に首を傾げる。」

「あら。トイロ、ここに来たことがあるの？」

「おじいさまに連れられて一度だけねー。七年ほど前になるよー」

ヒワダタウンの西に広がる森 通称“ウバメの森”には、ある
“伝説のポケモン”に関する伝承が遺っている。それを研究するため、祖父や父もこの地は何度か訪れていたのである。

「この名物はヤドンパフェだねー。あと、ヤドン焼きやヤドン煎餅、ヤドン饅頭なんかもなかなかの美味だよ」

「……なに、そのヤドンオールスターズ？」

トイロの挙げたヤドン名物に、シレンは口許を引き攣らせた。

「どうやら、この“看板ポケモン”を知らないらしい。トイロは先ほど自分たちが入ってきた町の入り口の方角を指差した。」

「ここに来る手前に、井戸があったよね。あれは“ヤドンの井戸”。昔、人々が日照りに苦しんでいたときにあの井戸に住んでいたヤドンの欠伸で雨が降り、人々を救ったという伝説が残っているのだよ」

それから、この町ではヤドンを最愛の友として丁寧に扱っており、それに乗じた何代か前の町長がヤドングッズをご当地土産として売り出すようになったのだという。

「かと言って、ヤドンばかりに頼るだけでなく、元々の伝統もしっかり受け継がせている辺りは凄いいよね。古き町並みをしっかりと根づかせている良い町なのだ」

ヒワダタウンには、伝統工芸がいくつもある。

その中でも特に代表的なのが、モンスターボールと木炭だ。

ウバメの森で採れる質の良い木炭に適した木材から作られる“もくたん”は、炎タイプのポケモンとも相性がいい。ヒワダタウンの“もくたん”は、炎タイプの技の威力を底上げすることもできるのだ。

また、ジョウト・カントー地方に群生する“ぼんぐり”と呼ばれる手の平程の大きさの木の実は、中身をくり抜いてそこに特殊な装置と虫ポケモン（特にイトマルやトランセルなどのさなぎポケモン）が吐き出す糸を網状にしたものを組み込むと、モンスターボールと同じようにポケモンを収容することができるようになる。

これらの伝統技術が、これまでこの町を支えてきた。

まさに、人とポケモンが見事に互いを支え合っている、と言う訳だ。

「へえ〜。だから、“人々とポケモンが素朴に暮らしている町”なのね」

トイロの説明に、シレンが感心したように頷く。ヒワダタウンはこの地方有数の技術の町である上に、ポケモン　ひいては自然との共存を見事に成し遂げているのだ。

これほどまでに心が穏やかになれる場所も、今ではそう多くはない。

「では、まずはヤドンクレープとカモノネグチユロスを食べに行こうではないかー。確か、ガイドブックにはヤドン公園の屋台で売っていると書いてあったよー」

「……もう、ネーミングについては敢えて突っ込まないわ……」
嬉々とした表情で歩き出すトイロの後ろを、シレンもため息をつきつつ着いて行く。

はじめてあった頃より幾分か自然に笑うようになったトイロに、ため息をつきつつもシレンは笑みを浮かべていた。

ヤドン公園。遊具や噴水、果ては入口の柱にある銅像までもがヤドンという、まさにヤドン尽くしのヒワダタウン市民公園。

その一角に止められたワゴン車の近くのテーブルで、二人の少女が名物の甘味物に舌鼓を打っていた。

「はわ〜、美味しいのだ〜。リツちゃんもそう思うであろう?」
「うー!」

白いチュロスにチーゴの実チョコレートをかけてネギを模した“カモネギチュロス”を頬張るトイロの隣で、モモンの実を使ったシヤーベットとモーモーミルクのアイスでヤドンの尻尾を形作った“ヤドンアイス”を美味しそうに食しているのはリオルだ。更にその横では、マリルが季節のフルーツとモーモーミルクを使った生クリームをモモンの実を混ぜたピンク色の生地で包んだ“ヤドンクレープ”を、そしてリーフィアがリオルと同じく“ヤドンアイス”をこれまた美味しそうに食している。

トイロの向かいでは、シレンが白いロールケーキにチーゴの実を使ったソースをかけた“カモネギロールケーキ”を美味しそうに食べていた。

「確かに美味しい! チーゴの実って苦いイメージあったのに、ロールケーキの甘さがそれとマッチしてる〜」

「ウキッ」

「みみい〜」

「ブイブイ〜」

「チエリイ〜」

シレンのポケモンたち　モウカザルにミミロル、ブイゼル、そしてチエリムも、ヒワダタウンの名物スイーツを堪能している。

(……シレン)

と、ふとシレンの頭にダークライの声が響いた。シレンはトイロにばれないように小さく肩を竦めながら、小声でウエストポーチの中にあるまだ開口していないボール　ダークライのモンスターボールをつつく。

(なあに?)

(あ、いや、その……。非常に言いにくいのだが……)

(……?)

珍しく、ダークライが言葉を詰まらせていた。シレンが頭にクエスチョンマークを浮かべながら再びケーキを頬張ったとき、ダークライはようやく口を開いた。

(……後で食べたいから、ロールケーキを買ってくれないか?)

「……………」

呆気にとられてしまった。ダークライとは五、六年近い付き合いになるが、初めてのセリフだった。

そうか、彼は甘いものが好きだったのか。

「……ふふっ」

思わず、笑みが溢れる。それが少し不服なのか、ボールがカタカタと震えた。

「シレン、いきなり笑ったりして、どうしたのかねー?」

「え?」

いきなり笑ったシレンを不思議に思ったのだろう、トイロが小さく首を傾げている。シレンはあー。と心の中で頭を抱えつつ、言い訳を探す。

「んー。トイロの笑顔、可愛いなー。なんて思ったらつい?」

ちょっとした、口から出まかせ。疑われないよう、自然に言った

つもりだった。

すると意外なことに、目の前の白髪ボブカット少女は顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまった。

「なっ、何を言うかねキミは。からかいはよしたまえー」

……意外と効果はてきめんだっただらしい。照れる少女があまりにも可愛らしくて、シレンは更に笑みを深くした。

もちろん、目の前で照れる少女はそれに対して不服そうに頬を膨らませる。

「こらー。笑うなー！」

「ダメ。それ、まったく逆効果」

これが所謂“ツンデレ”なのかと心の中で呟きつつ、シレンは更に笑みを深めた。

と、そのとき、

「誰か、誰か助けてー！」

公園に響き渡る、助けを呼ぶ声。そのただならぬ気配に、トイロたちの顔から笑みが消える。

「今の声……」

「川の方だ。みんな戻って！」

すぐさま立ち上がり、マリルたちをボールに戻すと、トイロは声のした方へと駆け出していく。

「あっ、待って、トイロ！ みんなも戻るのよ！」

その後ろを、シレンが慌てて追いかけた。

川で悲鳴を上げていたのは、まだ十になったかならないかくらいの少女だった。

彼女の目の前に広がる川には、数匹のヤドンが泳いでいる。

「ヤドン、ヤドンが！ 誰か助けて！」

その中の一匹、少女の目の前で川に先ほど入ったヤドンの様子が、尋常ではなかった。

溺れているのだ。まるで泳ぎ方を忘れたように、ヤドンは川の中で必死にもがいていた。

「あ、あ……」

助けに行きたい。そう 思いはしたが、川はヤドンたちのために深く造られている。少女の身長では足が着かないのだ。

「誰か、誰か……！」

故に、少女に今できることは必死に叫び、助けを呼ぶことのみであつた。

しかし、そうしている間にもヤドンの体力は奪われていく。川の流れに逆らう力を失いかけたヤドンの体が、徐々に下流へと流されていく。

「あ……、ヤドン、ヤドーンっ！」

もうダメだ。少女が思ったそのとき、

「アリアドス、“いとをはく”でござる！」

「キヤタピー、お前も“いとをはく”だ！」

「シャッ」

「ピー！」

背後から少年の声が二つ。それと同時に、少女の隣に赤と黒の縞模様の体躯にこれまた黄色と紫の縞模様をした四本の脚を持つ蜘蛛

“あしながポケモン”のアリアドスと、緑の体躯に赤い角、大きな丸い目をした芋虫 “いもむしポケモン”のキヤタピーが現れ、それぞれにヤドンに向けて糸を吐いた。

二匹の吐いた何重もの太い糸が、ヤドンを捕らえる。

「よし、引き上げるでござるよ！ ツクシ殿！」

「うん！」

二匹のトレーナーが糸の端を掴んだ瞬間、ようやく少女は安堵のため息を漏らした。

「あら？」

「んー。どうやら一足遅かったようだねー」

トイロたちが川に着いた頃には、ヤドンは既に助けられた後だった。おそらくは溺れていたのであろうヤドンに絡み付いた糸を、赤茶色の長髪の少年と薄紫をした髪の少年が二人で剥がし、またおそらくは助けを呼んだと思われる少女が、ヤドンの頭を優しく撫でていた。

そのうち、薄紫の少年を見遣って、トイロは小さな笑みを零した。（……どうやら、懐かしい顔に出会えたようだねー）

「あれって……、ヤドンよね？ どうして溺れたりなんてしていたのかしら？」

懐かしい顔を見つけたトイロの隣で、シレンが頭にクエスチヨンマークを浮かべた。

ヤドンは、“まぬけポケモン”というあまりよろしくない呼ばれ方をされているポケモンだが、れっきとした水タイプのポケモンだ。

まず、水棲の彼らが溺れるということ自体、有り得ない。

すると、トイロは特に迷うことなくヤドンの“尾”の方を指差した。

「多分、原因はあれだねー」

「え？ ……あ」

トイロの指差した先を見て、シレンは言葉を失った。

ヤドンの尻尾が、失くなっていたのだ。

正確には、尻尾の先数センチほどが真っ平になっていたというベ
きか。

「え……」

そのあまりに非情な光景に、シレンは愕然とした。

水棲生物にとって、尾とは所謂“舵”の役割を果たす大事な部分だ。舵を無くした船がどうなるかは説明するまでもない。水棲生物にとって、尾を失うということはつまり、“泳げなくなる”ということ。

それは、生きる力を失ったとも言える。

ヤドンの尾は、まるでナイフで切られたように真っ平になっていた。僅かに見える肉が、痛々しさと生々しさを感じさせる。

「そんな……。でも、どうして……」

「ヤドンの尻尾は珍味として有名だからね。おそらくは密猟だろう」
シレンの問いに答えるように、トイロが小さくため息をつきながら言った。その表情は、どこか冷めた印象を受ける。

トイロはそのまま、ヤドンの元へと歩み寄った。足音に気づいたのか、赤茶髪の少年がトイロの方を振り向く。

「あなたは……」

赤茶髪の少年の声に、もう一人の少年もトイロの方を振り向き、目を丸くさせた。

「トイロちゃん！」

「感動の再会……とは言い難いシチュエーションだね、ツク坊」

薄紫髪の少年　ヒワダタウンポケモンジムジムリーダー・ツクシに、トイロは淡い笑みを見せた。

ヒワダタウンポケモンジム、温室

「……………というわけ。今月に入って、四匹目になる」
エキスパートタイプ
専門が虫タイプであるツクシが独自に作り上げた温室の中で、トイロとシレンはツクシから今回の“事件”について話を聞いていた。今月に入ってから立て続けにヤドンの尻尾が切られる事件が起こった。ヤドン自体がとてつもなく鈍感なため、発見が遅れてしまい、正確にはいつ切られたのかも分からない。また、一度に複数が被害に会うのではなく、間を置いて一匹ずつ被害に会っているのだという。

「なるほど……………。犯行がばれにくくなるように、わざと時期をずらしているというわけか。ま、褒められることではないが、判断は間違っていないね」

擦り寄ってきたコンパンの頭を優しく撫でつつ、トイロは感心したように頷く。その隣では、シレンが顔を真っ赤にして憤慨していた。

「信じられない！　自分の利益のために、罪のないポケモンを傷つ

けるだなんて！」

シレンの出身地であるフィオレ地方は、野生のポケモンと人が協力あつて暮らしていることで広く知られている。そういつた環境で育ったが故に、今回のことは本当に信じられないのだろう。

憤慨するシレンに同意するように、ツクシもまた頷いた。

「町を守る義務を持つジムリーダーとしても、これ以上の被害はなんとしてでも防ぎたい。だから、とある筋の人に協力を仰いだんだ」
ツクシはそう言うと、自分の隣に座っている赤茶色の髪の少年に視線を移した。先ほど、溺れたヤドンをツクシと助けていた少年だ。

少年の恰好は一言で言えば、少し妙だった。

肩甲骨辺りまで伸びた赤茶で剛毛のツンツンロングヘアをうなじで一つにし、額には鉄板製のヘッドギアを鉢巻きのように着用している。着ているのは柿色の所謂『忍び装束』と呼べそうな和服で、背中に何と刀まで背負っている。履いているのももちろんスニーカーではなく草鞋だ。

トイロとシレンの第一印象、

「誰かね、この痛々しい忍者マニアは……」

「ジャパニーズ・ニンジャ……。はじめて見たわ……。ってふざけるんですかあなたは！」

当たり前のように愕然とした。シレンに至ってはノリツッコミのオマケつきである。

だが、その忍者マニアの少年は至って真面目な顔をしていた。ツクシもまた同様である。

忍者マニアの少年は、一度だけ小さく咳ばらいをすると、小さく頭を下げた。

「某、^{それがし}チヨウジタウンのサイガ マサムネと申す。この度はヒワダ
タウンポケモンジムリーダーのツクシ殿より依頼を受け、ヤド
ン傷害事件の犯人を捕らえるべく派遣された甲賀忍者の忍でございます。
以後、よろしくお願い申す」

なんだか少し面倒な相手と知り合いになってしまったらしい。

真剣に自身をそう紹介する少年　マサムネに対し、トイロとシ
レンは呆気にとられたように瞳をパチクリとさせていた。

P・11 幸せとは何か（前）（後書き）

今回のテーマ

『ご当地スイーツ』

『忍者マニア？登場』

ポケモンの世界のスイーツを妄想もとい想像してみました。自分で書いておいてなんですが、超食べてみたい……。ポケモン世界の木の実の味を再現してくれ株式会社ポケモン！（何）

ダークライの甘党発覚は書いてて楽しかったです。

ああいうキャラこそ甘党っぽい。

更に、新キャラマサムネくんの登場。

これで構想ノートに作っていた主要キャラが全員集合です。

あとはまたちらほら生まれたキャラがぼちぼち登場予定。

マサムネくんは『忍者』キャラ。どんなキャラかは次回のお楽しみです。

また、今回はいつもより文字数少なめです。

旅がらすはいつも8000〜9000文字を目標に書いているのですが、今回は5000文字程度にしました。

読者さまはどちらの方が読みやすいでしょうか。

よかったら、感想欄なりメッセージなりで教えてください。

では、今回はここまで。

また次回！

追記という名の宣伝

アナザー版にてバレンタインスペシャルを投稿しました。
よかったらそちらも是非お読みください。

P・12 幸せとは何か（後）（前書き）

ども。旅がらすです。

今回は、忍者のマサムネくんが大活躍……？

忍者キャラはいろいろとツッコミが満載だと今回の話を書いて実感した旅がらすですorz

それでは、どぞ〜。

夜。ヒワダタウンの外れ、“ヤドンの井戸”

奥の天然洞窟に続く梯子を降りたツクシは、小さなため息をついた。

「どうしてトイロちゃんたちまでついて来るのさ……」

「いいではないか」。ボクたちも犯人捕獲に協力したいのだ。むしろ感謝したまえ」

うなだれるツクシとは正反対に、胸を誇らしげに張るのはトイロ。青のベレー帽が頭の上で小さく揺れる。

だが、そんなトイロに対し、再び舞い降りたのはため息であった。

「いくらツクシ殿の昔馴染みとはいえ、一般人には変わりない。足手まといになったら即刻置いていくでござるよ」

そう言うのは、赤茶色の髪に臙脂色の忍装束を着た自称忍者マサムネだ。歳はツクシと同じくトイロたちより幼いようだが、どこか大人びた雰囲気纏っている。

「それにしても、本当に今日、犯人は現れるのかしら？」

最後に梯子を降り終えたシレンが、小さく首を傾げる。そう、四人がここにやって来た目的はただ一つ。ヤドン傷害事件の犯人を捕まえるためなのだ。

シレンの問い掛けに、マサムネがゆっくりと頷いた。

「ジョーイさんから教えていただいたヤドンの傷の具合によれば、犯人は四、五日に一回、ヤドンの尻尾を持ち去っているでござる。今日助けたヤドンの傷は、おおよそ四日ほど前にやられたもの。今日犯人が尻尾を調達しに来る可能性は高いでござるよ」

「おお。見た目は真実、と言うことかね？　しつかり調べをつけてはいたのかー」

マサムネの説明に、トイロが小さく拍手を送る。トイロはしつかりと賛辞を送ったつもりだったのだが、マサムネはトイロの偉そうな口調が少し苦手のようなうだ。マサムネは呆れたような顔つきでツクシに視線を移した。

「本当に、ツクシ殿の昔馴染みなんでござるか……？」

「あはは……。七年前もこんな感じだったから、何か気にならなくなっちゃったよ……」

「ボクとしては、ツク坊がジムリーダーなんてやっているから、びつくりしたけどねー」

かつて、まだトイロの祖父が生きていた頃。

祖父に連れられてやって来たヒワダタウンで、祖父の友人の孫として紹介を受けたのが、ツクシであった。

当時より虫ポケモンに対する博学さは見え隠れしていたが、まさかここまでの“大物”にまで成長するとは思いにも寄らなかつた。

感心したように言うトイロに、ツクシが笑顔で答える。

「ありがとう。そういえば、この間ワカバタウンから着たって言うお兄さんがジム戦に来たよ。多分、トイロちゃんと同い年の」

「むむ。ガーディを連れた黒い無造作ヘアの男で間違いなければ、ソイツはボクの幼なじみなのだ。ツク坊。もちろんこてんぱんにしてやったのだろう？」

「それが……」

「今は昔馴染みとの話に花を咲かせている場合ではないでござるよ。先に行くでござる」

すっかり脱線してしまったトイロとツクシに、マサムネがピシヤリと言い放つ。

それで我に帰ったのか、ツクシは少し気恥ずかしそうに頬を掻いた。一方のトイロは、まだ話し足りないらしく小さく口を尖らせている。

「マサムネはけちんぼなのだー」

「貴女という方は……っ!」

「す、ストップストップ! トイロ、話は後でできるんだし、とにかく先を急ぎましょ!」

怒りに背中 of 刀へと手を伸ばしたマサムネに焦りを覚えたシレンが、慌ててトイロを宥める。どうやら、平常心を保つ能力はまだ年相応のようだ。

シレンに宥められ、トイロも「仕方ないねー。行くとしようかー」と再び上から目線の口調で前へと歩き出す。その姿をイライラとした雰囲気ですぐマサムネにシレンとツクシは苦笑いを浮かべつつ、二人の後を追った。

天然洞窟の入口を抜けた四人を、ヤドンではない二匹のポケモンが出迎えた。

「キシッ」

「ぴかぴっ」

四人を出迎えたのは、アリアドスと“ねずみポケモン”のピカチユウだった。黄色い体躯に頬にある赤い蓄電袋、それに雷を模した尾を持つそのポケモンは、女性に大人気の可愛い姿をしている。

「アリアドス、ピカチュウ。ご苦労でござる。準備は万端でござるか？」

「キシーツ」

「ぴっかちゅ〜」

「うむ。よくやってくれたでござるな」

どうやら、二匹はマサムネのポケモンのようだ。マサムネは二匹の力強い返事に、それまで頑なだった表情を和らげて二匹の頭を優しく撫でている。

マサムネの“準備”という言葉に、トイロが反応した。

「マサムネ。準備とは何のことかね？ 説明したまえー」

「アリアドスの“糸”を洞窟の床中に張り巡らせたのでござる。“糸”はすべてアリアドスの針に集合している故、犯人がどこにいうと追跡が可能なんでござるよ」

ピカチュウを肩に乗せ、マサムネが淡々と説明をする。が、“ヤドンの井戸”はかなりの広さを有する。口で言うだけなら簡単だが、その作業はかなりの時間を要しただろう。

だから、

「二匹とも、マサムネのことが好きなのだね〜」

トイロは、自然にそう言っていた。好きだから、大変な作業を頼まれても頷ける。そう思ったのだ。

その言葉に気を良くしたのか、ピカチュウがマサムネの肩から降り、トイロに駆け寄ってくる。

「ん？ どうしたのかね、ピカチュウ」

「ぴっか、ぴかぴっ」

首を傾げるトイロの足に、尻尾をくつつける仕草を取るピカチュウ。その姿にトイロが更に首を傾げると、マサムネが笑顔を浮かべ

た。

「ピカチュウの友好の挨拶でござるな。トイロ殿を気にいったよう
でござる」

「うわぁ。嬉しいのだ。ボクたちこれで友達なのだね」

「ぴっかちゅ」

ピカチュウからの嬉しい挨拶に、その小さな両手を取って笑顔で
頷くトイロと笑顔を返すピカチュウ。その様子を微笑ましい表情で
見守るマサムネに、シレンが小さく笑った。

「マサムネくん、やっと笑ったわね」

「え？」

突然のシレンの言葉に、マサムネが目を丸くする。シレンは更に
言葉を続けた。

「さっきからずうつと気張ってたでしょ？ 確かにヤドンを助ける
ために気を張るのも分かるけど、もう少し肩の力を抜きましようよ」

「……」

シレンの言葉に、マサムネはほんの少しの間だけ呆気にとられて
いた。が、すぐに表情を最初のころと同じように真剣なものにする。

「某は忍でござる。忍は余計な感情は仕事に持ち込まないでこそ一
人前。本来ならば、貴女方を巻き込むことすらご法度なのでござる」

「……？ あの、言っている意味がよく分からないのだけど？」

「し、仕事の時は真剣になるのが普通でござる！ 余計な気遣いは
無用。早急に依頼を解決するでござるよ！」

顔を赤らめつつ、洞窟の奥へと進んでいくマサムネ。シレンは相
変わらず首を傾げていたが、犯人に見られてもまずいのでマサムネ
の後を追いかけて行った。

数十分後。ヤドンの井戸、地下一階。

「ええ〜！ ツク坊、サトルのバカに負けてしまったのかね!?」
トーンを落としてはいるものの、それでも少しだけ響く声でトイ
口は小さな叫び声をあげた。

その声を慌てて塞ぎつつ、ツクシが小さく頷く。

「うん。あの人のガーデイ、結構強かったよ」

「ああ〜。相性負けしてしまったのだね〜。それは気の毒だ」

「……………結局また話してるとは……………!」

「ま、マサムネくん。怒っちゃダメよ?」

先ほど止めたにもかかわらずマイペースに話をするトイ口とその
ペースに吞まれているツクシに、マサムネが静かに怒りを込み上げ
る。それを、シレンがどうどうと抑える縮図が出来上がっていた。

「キシシッ」

と、そこで、アリアドスが小さく鳴いた。続けて、ピカチュウも
耳をぴくぴくと敬て始める。

その様子にいち早く気づいたマサムネが、二匹に語りかけた。

「捕捉したでござるか?」

「キシッ!」

「ぴっか!」

マサムネの問いに、力強い頷きを返す二匹。すると、二匹はその
まま洞窟の奥の方へと向かって駆けだした。

「追っでござるよ!」

マサムネも、その後に素早く続く。慌てて、他の三人もマサムネ
たちを追いかけた。

「……けほっ……ぜえっ……」

「シレン、大丈夫かね？」

数分後、三人はようやく立ち止まったマサムネと二匹に追いついた。シレンは体力がそんなに無いのか、息を切らせている。

その背中を擦るトイロに、マサムネが黙るように自身の唇に人差し指を当てた。

「ビongoでござる」

四人が隠れる岩陰の向こうで、二十代前後に見える二人の男が一匹のヤドンを囲っていた。

「さあて、今日も一仕事やりますかね？」

男の一人が、ヤドんにナイフを向けて笑った。

「……あいつらが、今回の事件の犯人……！」

怒りを覚えているのだろう。ツクシは握り拳を作っていた。今にも駆け出していきそうなツクシを、マサムネが制する。

「畏は既に作動しているのでござるよ」

そう言っただけから小さな笛を出すマサムネに倣い、再び男たちへと視線を戻す。

不意に、ナイフを持っていない男が不思議そうな声を出した。

「……にしても、今日はやけに床が水浸しじゃね？」

「あ？ 井戸って言うくらいだし、普通だろ？ つつーか、とつとと終わらせて、ネットに載せよーぜ」

ナイフを持つ男は、いつもと少し違う雰囲気、特に違和感を示さなかった。それにつられ、訝しがっていた男もヤドんに視線を戻した。

男たちの後ろには、ヤドンたちの住み処でもある地底湖が広がっている。

その地底湖から、男たちに向かって“何か”が泳いできた。ヤドンではない、白い毛並みが地底湖の水面に浮かぶ。

「……？」

地底湖の白い影にいち早く気づいたトイロが目を凝らす横で、マサムネが笛を吹いた。

ッ！

笛から、音は聞こえない。

だが、それを合図にしたかのように、トイロたちの目の前で“それ”は一気に起こった。

「な、なんだあつ！？」

「あ、ああ足が！」

洞窟に木霊する男たちの悲鳴。その足は“氷”によって地面に固定されていた。

男たちの前に、一体のポケモンが現れる。滑るような白く輝く毛並みに、頭頂部に控えめに生えた角。円らな瞳となだらかな流線を描く容姿は、まるでお伽話に現れる“人魚”のようだ。

“あしかポケモン”、ジュゴンである。

「氷遁“縛”」

マサムネがそう呟くのと同時に、ジュゴンが男たちに向かって吐息を吹きかけた。男たちの全身がみるみる内に凍りついていく。

「え、ちょ、まっ」

「さ、さささ寒いー！」

何が何だか分からない内に身動きの取れなくなった男たちに、ジユゴンが更なる追撃に蒼く輝いた尾を振りかぶる。“アクアテール”で足元の氷を砕かれて痛い想いをした上に抵抗すらできない男たちは、そのまま仰向けに倒れた。氷で覆われたおかげか頭こそ打ってはいないが、それでも相当の振動があったらしく男たちからはうめき声が漏れる。

「いっつ〜」

「げほっ」

呻き咽せる男たちを頭の方から覗き込むように、今度は別のポケモンが現れた。

黒くしなやかな体躯にラグビーボールを細長くしたような形の耳と尾。瞳は紅く、身体の所々に浮かぶ黄色い輪っか模様が闇の中に浮かんでいる。

“げっこうポケモン”のブラッキーだ。ブラッキーは男たちを静かに見下ろしていた。

「幻術“怪視^{あやし}ノ月光”」

マサムネの声と同時に、紫色の輝きがブラッキーから放たれた。

思わず目を瞑ったトイロたちが目を開けたときに見たのは、ピクピクと痙攣する男たちと、ブラッキーの隣に立って男たちを見下ろすマサムネの姿だった。

マサムネが、懐から何か手帳のようなものを取り出し、男たちに向けてそれを開く。トイロたちの側からは見えなかったが、そこにはマサムネの写真と思いがけない彼の“肩書き”が記されていた。

「某、名をサイガ マサムネと申す。国際警察、特殊任務班所属の忍でござる。この度はそなたらをヤドン傷害並びにヤドンの尻尾密

売による罪で検挙させていただくでござる」

「こ、国際!?!」

「けーさつうー!?!」

シレンとトイロの間の抜けた驚愕を最後に、今回の“ヤドン傷害事件”は幕を閉じたのであった。

一時間後。

(マサムネくんって、国際警察の人だったんだ……。びっくりしたー)

ポケモンセンターの屋上に続く階段を昇りながら、寝間着姿のシレンは小さく息をついた。

その後、犯人の男たちはマサムネとツクシが然るべき場所 要は警察署へと連れていった。“ヤドンの井戸”で二人と別れたシレンとトイロは、ポケモンセンターで休むことにしたのである。

そしてシレンは、久しぶりにダークライを外に出そうと屋上に向かっていた。

「あら……」

「シレン、眠れないのかねー?」

屋上には、先客がいた。トイロである。

シレンは小さく頷くと、トイロが座るベンチに腰掛けた。心の中で、ダークライに謝る。さすがに、トイロの前でダークライを出すわけにはいかない。

「シレン、幸せってなんなんだろうっねー」

不意に、トイロがそう話しかけてきた。シレンは、言葉の意味をすぐに飲み込めずにトイロを見る。

「どういうこと？」

「んー。あの人たちが今回の事件を起こした理由について、考えていたのさー」

あの人たち。ヤドン傷害事件の犯人のことだとはすぐに察しがついた。シレンは腕を組んで小さく唸る。

「なんでって……」

「お金を得ることなんだよね。じゃあ、どうしてお金が欲しかったのか……。幸せになるためなんだよね？」

トイロの言葉に、シレンは口を噤んだ。

幸せを得るため。そう言われて、苦い想いを覚える。そんなシレンに気づかずに、トイロは話を続けた。

「私が幸せになったとき、その後ろでは誰かが泣いている」。昔読んだ本に、そう書いてあったのを思い出したよー」

「……幸せになったら、誰かが泣く……」

トイロの言葉で思い出すのは、かつて自分がある“選択”を迫ら

れたときのことだ。

そいつと共に行けば、お前は独りになるんだぞ！

あるとき、大切だった二つの内、片一方を諦めなければならなかった。

行くな、シレン！

混血であった自分を、船乗りの多いあの町で、船乗りを誘惑し、その船を海の底に沈めてしまう堕ちた女神の名を持つ彼女を、最初に『シレン』と呼んだ人。

シレンは、彼を選ばなかった。

もう一方との幸せを手にするために、それまでの幸せを自ら手放したのだ。

(ダイチ……)

トイロの静かな問い掛けに、シレンは答えることができず、ただかつて自分から手放した“大切だった存在”を思い出していた。

P・12 幸せとは何か(後) (後書き)

今回のテーマ

『ポケモン忍術』

『幸せと悲しみ』

ポケモン忍術。

ぶっちゃければ、

『氷遁“縛”』 二つこえるかぜ

『幻術“怪視ノ月光”』 あやしいひかり

うん。実はただの技なんです。

あはは(笑) オイ

ただ、あくまで“忍術”なので、バトルでは言いません。要はTP
O次第?(何か違う)
これからもマサムネくんのポケモン忍術は、あんな感じで展開して
いきます。

そして、もう一つのテーマ。

『幸せ』

宇多田ヒカルさんの『誰かの願いが叶うころ』という歌の一節を聞
いて思いついたエピソードなのですが、

私の涙が乾くころ、あの子が泣いてるよ

みんなの願いは同時には叶わない

旅がらずが書きたいテーマの一つでもあります。

願いを叶えるために、切り捨てなければならぬものもある。

それは、意識せずともそうなっているんだと私は考えています。

今回の場合は、犯人が幸せになるために、ヤドンが犠牲になりました。

シレンが何を犠牲にし、何を選んだのかはまた後ほど。

トイロやサトル、マサムネにもいつかその選択をするときが来る…

… かもしれない。

今回は、トイロが初のジム戦に挑戦！

トイロは勝てるのか、そして、初登場するトイロの新たな“仲間”とは!?

頑張つて書きます。

では！

今更ながらに気づいたこと。

キキョウジムのハヤトさん、かなりの空氣的扱いだった！！？？

いや、キキョウシティではコンテストがあっただし……。

べ、別にハヤトさんが嫌いとかそういうんじゃないですよ！？

確かにバトル前のあのモーションはどうかとめちゃくちゃに思っていたりはしますけど……。

いつか、どこかで活躍……は考えていないので無理ですね。

あくまで原作キャラはゲスト扱い……だとしたら、ツクシはかなり優遇されてますけど。

これからは結構活躍する予定のリーダーもいますけど。

……ハヤトさんが好きな方、今更ですが何かごめんなさい（滝汗）

今回は初のジム戦ですよ。

タイプで有利なポケモンのないトイロは虫使いのツクシにどう挑むのか？

では、ごうごう。

ヒワダタウンポケモンジム、バトルフィールド

虫ポケモンが最もその力を発揮できるよう工夫が成された、温室を用いたバトルフィールドのトレーナーゾーンに立つツクシの姿を、向かい側のトレーナーゾーンからトイロは笑顔で見つめていた。

「おお。そうしていると、本当にジムリーダーみたいだね、ツク坊」

「だから、僕はジムリーダーだってば。トイロちゃん……」

呑気に言うトイロに、虫カゴを掲げて虫取り網を手にしたツクシが小さくため息をつきながら答えた。本来ならば捕まえた虫を入れるカゴの中には、二つのモンスターボールが入っている。

「ファイト、トイロ！ 負けるなトイロ！」

「ぴっか、ぴかか、ぴっぴかちゅー！」

「みみみ」

「チエリチエリ」

「ブイブイ！」

「キッキー！」

バトルフィールドの脇、審判の後ろにある観覧席代わりのベンチでは、シレンがどこからそんなものを調達したのかは一切不明だが、白とピンクを基調にしたチアガールの衣装と黄色いボンボンを手に、トイロにエールを送っている。シレンのミミロルとチエリムも同じようにボンボンを振り回し、ブイゼルとモウカザルは頭に鉢巻きを締めていた。その横には、何故か『TOIRO』と書かれた旗をパタパタと振るピカチュウの姿が。

「し、シレン殿！ そんなに足を上げてはなりませんぞ！ み、見えたりしたらどうするのでござるかー！」

シレンの横で、一際大きな叫び声が上がった。国際警察、特殊任務班に所属する若き忍者 マサムネである。今は、『BUSID OH』と書かれた白のTシャツに柿色と黒の上着を羽織り、くすんだ深緑のズボンと黒のスニーカーを履いている。

昨日の忍装束とは打って変わって現代的でラフな格好をした思春期真っ只中の少年は、ベンチの上で足をこれでもかと言わんばかりに上げるシレンを、顔を真っ赤にしてベンチから引きずり下ろそうとしていた。

「平気よ。スパッツ中に履いてるもの。もしかして、ちょっと期待しちやったりしてた？」

「ば、ばば馬鹿を言わないでください！ 某、女性の着物の下をのぞき見しようなどと不埒な考えは持っていないでござるよー！」

「あの……。そろそろ始めたいんですけど……」

あわあわと両手を振り回して叫ぶマサムネを面白そうに見下ろすシレンに、審判を任された虫取り少年が呆れたように言う。それに対し、二人はバツが悪そうな顔をして大人しくベンチに腰掛けた。

二人がベンチに腰掛けたことを確認した虫取り少年が、バトルフィールドに向き直る。

「それではこれより、バツジを賭けたジム戦を開始します。形式はシングルバトル、使用ポケモンは二体。なお、ポケモンの交替はチャレンジャーのみに認められております！」

審判の言葉を聞いたトイロは、準備運動をするかのように大きく伸びをした。

「……さて、頑張ろうかねー。ボクが勝ったら、ウバメの祠の調査をさせて貰うよー」

「うん。分かってるよ、トイロちゃん」

交わされる二人の会話。

そもそも、トイロがジム戦をすることになったのには、ある“理由”があった。

ウバメの森。

昼間でさえ、鬱蒼と生い茂る木々によって日光を遮られた、ヒワダタウンとコガネシティを繋ぐ薄暗い森である。

国の指定を受け、“もくたん”の材料となる木を採取する以外では無用な伐採を禁じられた広い森には、自然と時間を司る“護り神”がいると語り継がれている。

キキョウシティから、まっすぐに神が奉られているとして有名な町、エンジュシティに向かわず、わざわざこの町を迂回しようとした理由が、この“ウバメの森”であった。

父の手がかりを得るには、“神”と呼ばれる存在について知識を深める必要がある。

そう考えたトイロは、通常では調べることのできないその“護り神”が奉られている祠を調査すべく、ヒワダタウンのジムリーダーであり、またウバメの森の管理者としての役目を持っているツクシに協力を要請したのだ。

それに対し、ツクシが提示したのはジム戦であった。ツクシ曰く、ポケモンバトルをすれば、その人間がどのような考えを持つ人物かが自ずと分かるのだと言っ。

「では、バトル始めっ」

「行くんだ、バタフリー！」

「行きたまえ、アーくん！」

開始の合図と同時に、二人の手からモンスタールボールが放たれる。ツクシのボールから出てきたのは、紺色の体躯に赤くて大きな眼と白い羽根を持つ虫ポケモン。 “ちょうちょポケモン” のバタフリーである。

一方、トイロが放ったボールから飛び出したのは、草タイプのリーフィア。 “虫” と “飛行” タイプであるバタフリーとはかなり相性が悪い。

「アーくん？ てつきり “ころがる” を使えるまあちゃんだと思っ
てたのに」

トイロの選択に、ボンボンを持ったままのシレンが驚きの声を上げた。 “岩” タイプの “ころがる” ならば、理論上ではバタフリーに四倍のダメージを与えることができるのだ。

「……………」
一方、マサムネは黙ってトイロたちの試合を見つめていた。

「まずは小手調べだよ。バタフリー、 “かぜおこし” ！」

「フリーイイ！」

「 “でんこうせっか” ！」

「リーフィ！」

バタフリーが羽根を激しく羽ばたかせ、風を巻き起こす。リーフィアはそれを素早い動きで避け、バタフリーの目の前に現れた。

「アーくんの素早さを舐めないでくれたまえー。 “アイアンテール” だよ！」

「フリーイイ！」

リーフィアのしなやかな尾が、トイロの声に応じて銀色に輝く。
だが、

「そっちこそ！ バタフリー、“おいかげ”！」
「フリー！」

ツクシの声に、バタフリーが羽根を更に羽ばたかせる。急に強くなった風に、リーフィアが弾き飛ばされ、後退を余儀なくした。

「……厄介だ、非常に厄介だよー」

“おいかげ”。背後から吹いてくる風に乗って、一定時間自分の素早さを倍にする補助技だ。いくらバタフリーがリーフィアより遅いとは言え、倍になってはそれも覆されてしまう。

戦局は、ややツクシに傾いていた。

「更に行くよ、“しびれごな”！」

「フリー！」

バタフリーが、風に自身の鱗粉を混ぜて飛ばしてくる。その中に含まれるのは、強力な麻痺毒。

「“にほんばれ”！」

「ファイ！」

鱗粉が到達する寸前、突然温室の中がそれまで以上に明るくなった。リーフィアの“にほんばれ”で日光が強く射すようになったのである。

だが、ツクシはそれが何を意味するのか分からないでいた。そもそも、“にほんばれ”は炎タイプの補助技なのである。

「バタフリー、そのまま“しびれごな”を撒くんだ！」

「フリー！」

そのまま勢いに任せて“しびれごな”を撒き散らすバタフリー。
だが、

「……ファイ？」

“しびれごな”を被っても、リーフィアはあっけらかんとしていた。まるで「で、なに？」とでも言うように、首を傾げている。

首を傾げたいのは、ツクシもまた同様だった。

「え？」

「ツク坊。虫ポケモン好きなのは良いが、他のポケモンの知識も深めなければダメだよー」

呆けるツクシの耳を、トイロの笑い声が叩く。

「アーくんに、状態異常は通用しないよ」

「リーフガード”でござるな……”

「え？」

マサムネの呟きに、シレンはマサムネの方を振り返った。

「リーファイアの特徴でござる。“陽射しが強い”状態において、光合成を活発に行うことで状態異常を瞬時に無効化する特性でござるよ」

つまり、今のリーファイアにはバタフリーの得意分野である“ちよ
うおんぱ”や“しびれこな”等の鱗粉攻撃は通用しないのである。

トイロはそれを見越して、わざとリーファイアを選んだのだ。タイ
プの相性ではなく、戦略の一つとして。

更に、

「“でんごうせつか”!!」

驚き、動きを止めたバタフリーの背後をリーファイアが取る。

「しまった!!」

「“おいかぜ”、利用させてもらっよ。“アイアンテール”!!」

「ファイイ!!」

「フリティッ!!」

背後を取ったことで、逆に自身の素早さを上げたリーファイアの“

アイアンテール”がバタフリーを捕らえる。

地面に打ち付けられたバタフリーは、フラフラとしながらも再び上昇した。

「バタフリー、“ぎんいろのかぜ”！」

「突っ切って！ “ずつき”！」

「フリーイイ！」

バタフリーの“ぎんいろのかぜ”がリーフィアへと襲いかかる。だが、悲しきかな。リーフィアにそれが当たるまでに、バタフリーが最初に放った“おいかぜ”が“ぎんいろのかぜ”の威力を半減させてしまっていた。

「フリーイ！」

リーフィアの“ずつき”が、バタフリーの腹部に命中した。会心の一撃だったようで、バタフリーが力無く地面に倒れる。

バタフリーのダウンを認めた審判が、片手を上げた。

「バタフリー、戦闘不能！ リーフィアの勝利！」

「アーくん、よく頑張ったよ！」

「フイ〜」

駆け寄るリーフィアの頭を、トイロは優しく撫でてやる。

一方、バタフリーをボールに戻したツクシは、虫カゴに入っていたもう一つのモンスターボールを取り出した。

「おめでとう、トイロちゃん。でも、コイツはもっと手強いよ。行け、ストライク！」

ツクシの手から放たれるボール。そこから現れたのは、黄緑色のスマートな体躯に鎌を模した両腕が特徴的なポケモン、“かまきりポケモン”のストライクであった。

ストライクから発している闘気ブレイシャーに、トイロとリーフィアは再び構える。

審判の虫取り少年が、上げた右手を振り下ろした。

「試合、始めっ！」

「アーくん、“でんこう”……」

「遅い、“しんくうは”！」

「フイイイ！」

先制を仕掛けようとしたトイロに対し、更に素早く先制を仕掛けたツクシ。リーファイアが、ストライクの放った“しんくうは”にいつも簡単に吹き飛ばされる。

ツクシが、小さく笑みを浮かべていた。

「ストライクの素早さについて来られる？ ストライク、“むしくい”だ！」

「ストライツ！」

距離にして、約五メートル。その距離をストライクが一気に詰めってくる。リーファイアは先の攻撃からまだ立ち上がれていない。

「戻って、アーくん！」

すかさず、トイロはボールを取り出した。間一髪のところ、リーファイアがボールに収容される。

「良い判断だね、トイロちゃん」

「危なかったよー。もう少しで負けるところだったのだー」

おどけつつ、トイロは思考を開始した。

どうやら、ストライクはツクシにとって“切り札”のようだ。威力の弱い“しんくうは”で防御に定評のあるリーファイアをあそこまで退かせたことが、何よりの証明である。

悔しいが、あのスピードには勝てない。リオルではまず相性で分が悪いし、有効な技を持つマリルでも、あの攻撃力にまず耐えられるか分からない。

と、そこで、腰のトレーナーズベルトに提げたボールが震えた。

マリルでもリオルでもない、別のボール。「そろそろお披露目してよ」とでも言うように、ボールはもう一度震える。

(……そうだね。そうしよう)

トイロの口許が緩んだ。確かに、お披露目には最高の舞台だ。華々しいデビュー戦といこうではないか。

トイロは、震えるモンスターボールを手に取った。

「では、行きたまえ。ゴーくん！」

放たれるボール。だが、ボールが開口したにも拘わらず、そこからは何も出てこない。

「……え？」

「ストライク？」

案の定、ツクシは目を丸くした。ストライクも同様に動きを止める。

と、不意に、ストライクの影が“歪んだ”。

「ストライツ!？」

ストライクが驚く間もなく、影から飛び出した“手”がストライクの両腕を掴む。

そして次の瞬間、

「ゴースゴスゴスゴス！」

ストライクの影から飛び出てきたのは、紫色の影。目一杯に裂けたような口と、宙に浮かぶ“手”。

“ガスじょうポケモン”のゴーストである。

ゴーストの突然の不意打ちに、ストライクの動きが鈍る。

「ストライク、“こつそくいどう”！」

だが、素早いツクシの判断に、ストライクはきちんと動いた。“でんこうせっか”をも凌ぐ早さで、ストライクはゴーストの腕から

脱出する。

一方で、ゴーストを出したトイロはにんまりと笑みを溢していた。「このゴースト……ゴークンは、“マダツボミの塔”でゲットした子なんだ。さて、この実体の無い相手にどう立ち向かうかね？ ツク坊」

ゴーストのタイプは“ゴースト”と“毒”である。ストライクの得意分野である物理攻撃の中でも特に強力なノーマルタイプの“きりさく”や、先ほど放った格闘タイプの“しんくう”はゴーストには通用しない。また、虫タイプの技も、この二つのタイプの組み合わせに対しては通常の四分の一程度のダメージしか与えられないのである。

今度は、トイロに戦局が傾いたかのように見えた。だが、

「……トイロちゃんこそ、学が足りないんじゃない？」

「……？ どう言う意味かね？」

ツクシが見せたのは、微笑だった。まるで、『逆に有利なのは自分である』と言わんばかりの笑みを見せたツクシに、トイロは首を小さく傾げた。

「確かに、ストライクの攻撃はゴーストにはほとんど通用しないかもしれない。でも、ストライクはこういう技だって覚えるんだよ……

…。“つじぎり”！」

「ゴークん、“かげぶんしん”！」

「ストライック！」

「ゴースー！」

ストライクが黒い闘気オーラを纏わせた鎌を横薙ぎに振るう。とっさに“かげぶんしん”を命じたトイロだったが、横に薙ぐ鎌の軌道にゴ

ーストは避けきれず、横つ面に鎌を食らってしまい、バトルフィールドの端まで吹き飛ばされた。

「ゴークン！」

「ゴーストは特殊攻撃や素早さに定評があるポケモンだっていうことは僕も知っているよ。でも反面、その防御力はとてつもなく低いタイプ一致でないとは言え、今の攻撃はかなり効いたはずだよ」

ツクシの指摘通り、ゴーストはたった一撃食らっただけで、既にふらふらの状態だった。次に同じ攻撃を食らえば、瀕死になってしまっただろう。

それでも、トイロは笑みを消さなかった。むしろ、更にその微笑みは深まったとも言える。

「ゴークン、“シャドーパンチ”！」

「ゴースゴスゴス！」

「ストライツ！」

ゴーストの手が、ストライクの鳩尾を捕らえる。ふらつきながらも、ゴーストは陽気に笑いながら再び浮上した。

ふわふわと自分の横まで飛んできたゴーストの頬に、トイロは手を寄せた。

「この子はね、ボクととっても“相性”が良いんだ」

「え？」

トイロの言葉に、ツクシが目丸くする。

トイロは、不敵に笑いながら左手を腰に添え、ゴーストを撫でていた右手でツクシを指差した。

「来たまえ、ツク坊。次が最後だよ」

トイロの口から紡ぎ出された“予言”。その真意をはっきりと掴める者はいなかった。

ツクシも、トイロに合わせるかのように不敵に笑う。

「じゃあ、行くよトイロちゃん！ ストライク、渾身の“つじぎり

”！」

「ストライクッ！」

再び、黒い闘気を鎌に纏わせたストライクがゴーストに突っ込んでくる。一方、ゴーストは体力が限界に近いのか、両手を地面に向けてだらんとさせていた。

（トイロちゃんには悪いけど、ここは勝たせてもらおう……！）

ストライクの鎌が、ゴーストに迫る。トイロは、俯いたまま何もゴーストに命じない。ゴーストもまた、微動だにしない。

トイロたちの様子にツクシが勝利を掴んだと確信し、シレンとマサムネもまた、ゴーストが負けるのでは。と感じたその瞬間だった。

ゴーストとトイロが、同時に顔を上げる。ゴーストの両腕が開かれ、その大きな口がぱっくりと開かれた。

「みちづれ”にしたまえ、ゴークン”」

トイロの一声に最初に気づいたのは、もちろんツクシだった。

「なっ……、ストライク、止まれ！」

「ストライクッ！」

慌ててストライクに攻撃の中止を命じたが、既にストライクは加速を終え、ゴーストに斬りかかる直前まで来ていた。さすがにその状態で主人の言うことを聞くことは叶わず、ストライクの鎌がゴーストを捕らえる。

一方、ゴーストはこの瞬間を待っていたとでも言うように、ストライクの胸を両手でがっしりと掴んだ。

ストライクの鎌が、ゴーストを切り裂く。だが、それと同時に、ゴーストはガス状の体でストライクをすっぽりと覆った。

数秒の間、二匹はそうしていた。誰もが、次の瞬間にどうなるかをしっかりと見届けようとバトルフィールドに視線を向けたまま動かない。

しばらくして、ゴーストがストライクの体をすり抜け、その背後に力なく倒れた。戦闘不能であることは、目を回していることから一目瞭然である。

続けて、鎌を横に薙いだ状態のまま動きを止めていたストライクが、膝をついた。そのまま、こちらも力なくフィールドにうつ伏せに倒れる。ストライクは、ゴーストと同様に目をぐるぐると回していた。

審判の虫取り少年が、トイロの方に手を上げる。

「両者、戦闘不能。現時点で戦闘可能なポケモンはチャレンジャーのリーファイアのみ。よって、このバトルはチャレンジャーの勝利となります！」

虫取り少年のコールを聞いて、ツクシは小さくため息をつきつつも、穏やかな表情でモンスターボールを前に掲げる。

「戻れ、ストライク。……トイロちゃん、一杯食わされちゃったみたいだね」

「相手の油断を誘い、奇襲を狙うのがボクの主な戦法だからね。」

「言ったであろう？」「この子はボクととても相性が良い」と

ツクシと同じようにゴーストをボールに戻しながら答えるトイロ。その顔は得意げな笑みに満ちている。

ツクシはトイロまで歩み寄ると、ズボンのポケットから小さな丸い銀色の物体を取り出した。

「はい。これがヒワダジムを制覇した証。インセクトバッジだよ。」

これをウバメの森に入る前に警備員さんに見せて、祠のことを話して。僕もこの後すぐにゲートの方へ連絡を入れておくから。博士のこと、僕も調べてみるよ」

「了解したよ。ありがとうね、ツク坊」

ツクシの言葉に頷きながら、トイロはツクシの手からインセクトバッジを受け取った。

そして、それをベンチからこちらを見つめているシレンたちに見せる。シレンは今すぐにトイロに飛びつきたいのだろう。わなわな

と震えている少女と安堵したような表情のマサムネに、トイロは満面の笑みを見せた。

「インセクトバッジ、ゲットなのだ〜」

のんびりとしたトイロの声が、温室に響き渡った。

今回のテーマ

『セオリーにない戦略』

『トイロ、初勝利！』

有利じゃない立ち位置のバトルの方が、トイロは書きやすいと改めて思った今回の話でした。

リーフィアの“リーフガード”とゴーストの“みちづれ”が一番書きたいバトル描写だったりしました。

バトルシーンは、組み合わせだけ考えます。どうバトルが運ぶかは書きながら考えます。

伏線とかはほぼ直感でやってますね。

ストーリーとバトルシーンはほぼ別物です。書き方がまず違う。

最近のポケモンの技は効果があんまりよく分からないものが多いですね（オイ）

いつの間にか知らない技がいっぱいになっています。

“おいかげ”だって、HG・SSでその存在を知った旅がらすです（何）

そしてそして、やっと書けたトイロの初勝利。

多分、これまでの道のりでいろんな方とバトルして勝ったりしていはずなんですけど、ストーリーの中ではつきり『勝利』であると書いたバトルは今回が初です。

それと、新しい仲間・ゴーストのゴーくん。

トイロのパーティーで唯一と言える特殊アタッカーです。

そして、おそらくトイロのバトルスタイルに最も適したポケモン。

“のろい”や“みちづれ”、それに“うらみ”なんかはトイロのこれからのバトルに大きく貢献してくれるはず。

実は、ゴークくんはマダツボミの塔の話を書こうかどうしようか悩んでアイデアだけ残して掲載を止めた話でゲットしたポケモンなんです。

掲載しなかった理由は、トイロがその話でびーびー泣くからです（え）

当初、やたらと泣いてばっかだったトイロをまた泣かせるのか！？となってしまう、あんまし泣かせてはっかでもなあ。となって掲載するのを止めました。

もし、二人の出会いが読みたい！。という方がいましたら感想なりメッセージなりで教えてください。

番外編で検討してみます。

そういえばもうすぐひな祭りですね。

旅がらすの実家は桃の節句が四月の地域だったので、すっかり忘れていました。

ひな祭りスペシャル現在計画中??

では、また次回!!

Interval 物、者、もの（前書き）

次話投稿中に、いきなりログイン初期設定された……。

久しぶりのIntervalです。

主人公は先にコガネシティに向かったアイツ。

さてさて、どんな珍道中が待っているのかな！？

では、どしどし。

Interval 物、者、もの

人とポケモンが行き交う発展の大都会、コガネシティ

「ちつくしよーが！ また負けたー！ー！」

コガネシティポケモンジムの前で、オレ ヤマシロ サトルは頭を掻き毟った。背後から響くのは、ムカつくが確かにダイナマイトでプリティなギャルの高らかな笑い声。

「残念やったなあ〜。ま、うちは逃げも隠れもせえへんから、また挑戦しに来いや〜」

真つ赤な髪を二つに結え、ミニスカートから覗く足とそりやもう涎もののダイナマイトボディを見せつけてくれるこいつの名前はアカネ。数年前、トレーナーになってからたった数カ月でジムリーダーを務めることになった所謂『天才』である。

そして、ここ一週間の間にこのオレを三回負かしている張本人。

「だーっ！ 次はぜってー負けねえし！」

「相変わらず威勢だけはええなあ。ま、嫌いじゃあらへんけどね。ほな、またな〜」

アカネはひらひらと手のひらを振ると、ジムの中へと戻っていく。なんとも悩ましい悩殺スタイル 否、アカネが消え、オレは近くに設置されていたベンチにどっかりと座りこんだ。

「……………くそがっ」

最近、どうも調子がよろしくない。この町に来て早速ジムに挑戦し、一匹目のピッピを倒したまでは順調だったのだが、アイツの切り札とも言えるポケモン ミルタンクに、オレは連戦連敗を強いられていた。三回目の今回も、奴の“ころがる”攻撃に苦戦し、結局負けてしまったのである。

「チコ〜」

オレの足元で、大きな葉っぱを頭頂部に生やした黄緑色の体躯に真っ赤で大きな瞳が特徴のポケモン “はっぱポケモン” のチコリータがすり寄ってきた。こいつは、旅立ち前に知り合いであるポケモン研究家のウツギ博士から、餞別として譲ってもらったポケモンだ。ちなみに性別はメスである。

それでもって、今回のバトルでミルタンクに負けてしまったのはコイツ。一回目はガーディで、二回目はウパー。手持ちが現在三匹のオレの最後の手札だったんだけど……。結局だめだった。

チコリータは、自分のせいでオレが不機嫌になっていると思っているのだろう。いつもならもっと積極的により寄り寄ってくるのに、今日はどこか脅えた様子でぎこちない。

(…………… やっちまった)

チコリータの不安そうな様子に、オレは自分を心の中で罵った。責めるべきはチコリータでなく、オレ自身なのだ。オレが的確な指示ができなかったせいで、こいつらの力を出し切ることができなかった。

これではトレーナー失格だ。そう思ったオレは、チコリータを抱き上げて膝の上に乗せた。

「ごめんな、チコリータ。別にお前は悪くねえよ」

「…………… チコ？」

あー、こういうとき、ポケモンの言葉が分かる機械とかマジで欲しくなる。オレを不安そうに見上げながら「本当に？」と訊ねているようなチコリータに、オレは力強く頷いた。

「焦ったってしゃーねーよな」

とりあえず、ジムに挑戦するのはちょっとお預けにしよう。今やらなければならぬことは、こいつらとオレ自身のレベルアップなのだ。

チコリータの頭を一撫でしてやると、オレは足にぐっと力を入れ、ベンチから立ち上がった。

「よっしゃあ！ やるぞチコリータ！ オレは必ずやってやる！」
「チッコ。チコ〜！」

オレの雄叫びに、チコリータが笑顔で頭の葉っぱを振る。どうやらチコリータの方もやる気十分のようだ。

「じゃ、まずはポケモンセンターに行って回復な。明日からぶちかましていくぜ！」

「チコッ！」

オレも腹が減ったし、ちょうど良いだろう。それに、今日は多分さっきのバトルのことがちらついて特訓もあまり成果が上がらないかもしれない。それを危惧したオレは、とりあえず今日は休戦日にすることを決め、チコリータと共にポケモンセンターへと向かって歩き出した。

「うっわ。これ結構ムズいな……」

午後、ポケモンたちをジョーイさんに回復してもらい、昼食を済ませたオレは、気晴らしのつもりでコガネシティのゲームコーナーでスロットに興じていた。

最初は、ただ単に『777』を揃えるだけの単純なゲームだと思っていた。だが、コイツが意外とタイミングを合わせるのが難しい。更には、

「ガウツ」

「ガーディ、今はお手する必要ねえだろ！」

何故か、オレ以上にスロットにハマりつつあるガーディのイタズラによつて、なかなか『777』を当てられずにいた。良くて、マリルが関の山。といった具合である。

(マリルかあ……。多分、トイロならこんなゲーム楽勝かもなあ……)

膝の上にちょこんと座るガーディによつて再び揃ったマリルを見て、オレは愛しき幼なじみのことを思い出した。

なんでだかはよく知らんが、アイツは異常なまでに『目』と
言うより『動態視力』が良いのだ。アイツに羽根つきや卓球で勝つた奴を、オレはまだ見たことがない。

昔、スクールの演習授業で誰だかがふざけてアイツに“タネマシンガン”をぶつけたことがあるのだが、アイツはそれを何と“全弾” 躲しきつたのである。

その時アイツが言った言葉を、オレは今もはっきり覚えている。

『遅い。非常に遅いよー。止まって見えたほどだ。……それで本気なのかね？』

不敵にそう微笑んで、マリルの“きあいパンチ”でバトルを終わらせたアイツ。当時、一年目にして既にスクールの卒業に必要な教^{カリキュラム}育課程の単位をすべて修得していたアイツは、この演習授業を機にスクールを事実上“卒業”した。

……思えば、あれからだっただ。アイツ トイロが、本格的

に町の子供たちから遠ざけられるようになったのは。

「何で返品できないんですかー！」

ゲームコーナーに突然響いた怒号に、オレは回想を止めた。たまにたま一番端の席で怒号の聞こえた先　コイン交換所に近い場所にいたオレとガーディは、何かと交換所の方を覗くように首を向けた。

コイン交換所では、随分と恰幅のいい　ぶっちゃければメタボリックな男が交換所のおねーさんに食ってかかっていた。

おねーさんは、グイグイと詰め寄る男にしどろもどろしている。

「で、ですから、一度交換されたものは返品できない決まりになってるんです……」

「そんなー！　でもでもこんな不良品渡されたばくの身にもなってほしいんですけどねー！」

どうやら、景品に何か問題があったらしい。唾を吐きながらおねーさんに詰め寄る男は交換し直せと更におねーさんに顔を近づけた。さすがに、結構美人なおねーさんを脂混じりの唾塗れにさせるのは男として許せなかったオレは、交換所に歩み寄った。

「おにーさん」

一言、オレはメタボリックなそいつを呼ぶ。メタボ（以下略）は、呼ばれたことに気づいたのかオレの方をくるりと振り返った。

「な、なんなんですかチミはー！？」

「いちいち絶叫すんなって。周りにメーワク。ついでに、おねーさんの言い分は正しいだろ？　ルールはルールなんだし」

オレが冷静に突っ込むと、メタボは首をブンブンと超ハイスピードで横に振った。……こいつ、人間か？

「不良品は交換し直すのがちゃんとしたアフターサービスだと思っんですけどねー！　これは正当だとぼくは思うんですけどねー！」

あら。意外とまともな意見。確かに、技マシンや道具が不良品だったら使い物にならない。……って、ちょっと待て。それ以前に、こいつは一体“何”を交換し直すつもりなのだろう。

オレが思案しているうちに、メタボは再びおねーさんに詰め寄った。

「さあさあさあ！ 早くこの“ミニリュウ”をもっと強い個体と交か

「させるかこのクソメタボ！」

一瞬の出来事だった。無意識のうちに、オレはメタボの横っ腹に蹴りを入れてしまっていた。

おねーさんの悲鳴がゲームコーナーに響く。オレはそれを無視して倒れた男を見下ろした。

男は何故自分が蹴られたのか全く分からないらしく、ぎゃーぎゃー喚いている。

「ほ、骨が折れたかもしれないんですけどー！」

「そうしたいのは山々だったがためえの脂肪に阻まれて無理だったぜクソメタボ。っつか、まじ騒音。黙れ」

「グルルルル」

オレの足元にいるガーディも、歯を剥き出しにしてメタボに威嚇している。二つの怒気に当てられたメタボはすっかり萎縮していた。

「表出る」

「……え？」

先程までとはまるで違う、命令に近い口調のオレの言葉に、メタボは目を点にした。

「てめえのミニリユウを賭けて、バトルを申し込む。オレが負けたら、倍のコインを渡してやる。オレが勝ったら、潔く諦める」

いつの間にか、ゲームコーナーはしんと静まり返っていた。

コガネシティゲームコーナー前の広場

オレは、目の前に立つメタボをギツと睨んだ。メタボは一瞬だけ怯むが、自身を奮い立たせるように、ブルブルと超ハイスピードで身震いする。……さっきも思ったが、コイツ本当に人間か？

「話は聞いた。このバトル、私が審判を務めよう！」

どこから颯爽と現れたのは、マジシャンのような格好をした審判^{ジマン}。この人たちも、本当に神出鬼没だよな……。

「ルールはシングルバトル。使用ポケモンは一体。それで良いよな？」

「構わないんですけどー！ チミなんてギッタングッタンのバトルンパソコンにしてしまうんですけどー！」

その言葉、そっくりそのまま返してやる。

審判が、両腕をクロスさせ、それを一気に振り下ろした。

「ではっ、バトル始めっ！」

「ぶちかませ、チコリータ！」

「行くんです、ミニリュウ！」

「チッコ！」

「リュウ……」

オレが出したのは、チコリータ。対してメタボが出したのは、青く細長い体躯の蛇のようなポケモン。何と、ミニリュウだった。

「な、お前、なんで」

「何を出そうとボクの自由ですけどねー。ミニリュウ、“まきつく”攻撃！」

「っ、躲して“つるのムチ”！」

「リュウ」

「チッコ」

メタボの選択に驚きを隠せないオレに、メタボのミニリュウが迫る。慌てて命じてしまったが、チコリータは華麗にステップを踏み、“つるのムチ”でミニリュウの動きを止める。

「リュウ……」

「ムキー！ この役立たずー！」

ミニリュウは簡単に捕まり、動けなくなっていた。向こうでメタボが何か喚いているが、無視してオレはミニリュウを見た。

「リュウ……リュウ……」

ミニリュウの息は、どこか荒い。よく見ると、所々に傷が見えた。

「……おい。てめえ、こいつを一度でも、ポケモンセンターに連れていったのか？」

ミニリュウが衰弱していることをはっきり見てとれたオレは、メタボにそう訊ねていた。

それに対し、メタボは首を横に振った。

「ジョーイさんの笑顔は確かに萌え〜ですけど一度も連れていってませ〜ん！」

「……きずぐすりは？ ちゃんとバトルの後、休ませたりは？」

「時間とお金の無駄なんですけどー！ というかぼくの所有物にチミが口出しする権利なんてないんですけどー！」

……ああ、そうかそうかよそういうことか。

ダメだ。なんか、我慢の限界？ 堪忍袋の緒が切れたってやつ？

「チコリータ。ミニリュウを降ろしてやれ。んで、“伏せ”だ」

「チッコ」

オレの言いたいことが分かったらしく、チコリータは静かにミニリュウを降ろし、その場で伏せの体勢をとった。観客がどよめいているのが分かる。

「リュウ？」

ミニリュウも、どうして自分が降ろされたのか分からないようだった。不思議そうな瞳^めで、オレとチコリータに交互に視線を移している。

「ミニリュウ！」

オレは、ミニリュウの名前を呼んでいた。恐らく、既にミニリュウにとって『名前を呼ばれる＝嫌なこと』だという認識でもあるのか、ビクツとその身を震わせた。

そんなミニリュウに、オレは自分ができる中で一番優しいであるう笑みを浮かべて話しかける。

「オレはお前と戦いたくない。もし、お前もそうなら、チコリータ

とおんなじ姿勢をとってこないか？」

再び、観客がどよめいた。中には、こちらに向けて罵声を浴びせる声もする。ま、興が冷める発言なのはよく分かってるけどな。

もちろん、罵声を浴びせる声の中には、当の本人でもあるメタボも含まれていた。

「ミニリュウ！ ぼくの所有物がそんな奴の言うことを聞くなあ！」
「リュ？ リュ？」

^{メタボ}主人の言うことを聞くべきか、オレの言葉に耳を傾けるべきか、ミニリュウは酷く迷っているようだった。深い葛藤の中にいるのか、その円らな瞳は涙でいっぱいになっている。

「ミニリュウ！ 戦え！」

メタボの怒声が響く。ミニリュウの身体が再び大きく震えた。

「リュ……」
ミニリュウの視線が、チコリータを捕らえる。チコリータはただ、小さく頷いた。
そして、

「リュ」

ミニリュウは、伏せた。

「み、ミニリュウー！」

メタボの悲鳴が、辺りに響き渡る。そんな悲鳴を無視して、チコリータが頭の葉っぱをミニリュウに翳してやっていた。甘い香りを嗅いでいるのだろう。ミニリュウの顔は随分と穏やかだ。

ホッと胸を撫で下ろすオレと今だ絶叫し続けるメタボに、どう判断を下すべきか迷う人間がいた。もちろん、審判である。

「あの、これはどうすれば……」

「あ、オレの棄権っつーことにしてくんね？ 先に“伏せ”したの、チコリータの方だし」

オロオロとしている審判に、オレは右手をひらひらとさせながらそう答える。ミニリュウの倍のコインって、何枚だっけかなー。と既に脳内では考えを巡らせていた。

が、突然メタボが絶叫を止め、腰のトレーナーズベルトから取り出したモンスターボールを投げた。

「生意気な所有物にはお仕置きなんですけどー！ グランブル、“こおりのキバ”！」

「グランブル！」

メタボが出したグランブルが、凍てつく牙でチコリータとミニリュウに襲い掛かる。まずい、二匹ともあの攻撃は効果抜群だ！

「チッコ！」

チコリータが咄嗟に“つるのムチ”をグランブルの口に巻き付けた。拮抗する二匹。だが、単純な力では、チコリータはグランブルに敵わない。

「あんのクソメタボ！」

怒りに震え、オレがガーディとウパーのボールに手をかけた、そのときだった。

「リュウー！」

ミニリュウの口から、青紫色の炎がグランブルに向かって放たれ

た。ドラゴンタイプの攻撃技、“りゅうのいかり”だ。

「ぐ、グラーン！」

突然のミニリュウの攻撃に、さすがのグランブルもビビる。と言っても、グランブルはその凶暴そうに見えた目とは裏腹に、非常に臆病なポケモンなのだ。既にグランブルからは戦意を感じられなかった。

(……よし)

オレは一息つくくと、メタボに向かって歩き出した。途中、チコリータとミニリュウがオレを不思議そうに見上げていたが、オレは構わずメタボに歩み寄る。

メタボは、グランブルがミニリュウにやられたことが余程ショックだったのか、情けなく放心していた。こりゃあいいと、オレは両手をバキバキと鳴らす。

「てめえ、さつきから五月蠅いんだよ……」

「ふえ……つてぎゃあ！」

左手で、メタボの胸倉を掴んだ。右手は既に準備万端である。

オレが次に起こすであろう行動が分かったのか、メタボは慌てふためいた。

「え、ちよ、まっ……」

待たねえよ、バーカ。

「ポケモンは、“物”じゃねえ！」

次の瞬間、頬っ面に真っ赤な拳の跡をつけたメタボは、そのままパタリと気を失ってしまった。

夕方。コガネシティ警察署。

「ねー、ジュンサーさん。カツ井まだなの？」

「君、ドラマの見すぎ。そんなものは出ません」

おどけながらそう言うオレに、女性巡査官 通称ジュンサーさんがため息混じりに答える。その手には、今日オレがやった“犯行”の詳細が書かれたクリップボードがあった。

簡潔に結論を言おう。

オレ、傷害事件の犯人になっちゃいました。

まあ、真昼間の街のど真ん中で人を殴れば確かに捕まるわな。

でも、あそこにはギャラリも多く、また、メタボがバトルの終了した後にはグランプルをけしかけたことは一目瞭然だったため、オレを擁護してくれる人はたくさんいた。

そんなこんなで、一応“マジで危害を加えた”唯一の人間であるオレにどう処分を下すべきか、警察も迷っている。という話なのだ。そしてもう一つ、警察はこれからの処置を考えなければならぬ存在を抱えていた。

「リュ、リュ」

そう、今オレの隣でキョロキョロと取調室を物珍しそうに見上げているミニリュウ。

あの後、正式にメタボのポケモンではなくなったこのミニリュウ

は、何故かパトカーに乗せられるオレについて来たのである。

……ちよつと狭かったなあ。いや、でもおかげでジュンサーさんと急接近しちゃって良い香りを嗅げたんだけどね。

「待たせた。ようやく決まったよ」

そこへ、如何にも『刑事』みたいな雰囲気を書わせたダンディーなオッサンが部屋に入ってきた。

「かつちよいー。オレもいつかこうなりたいですわ……」。

そんな風に考えていたオレに、ミスターダンディーが話しかけてきた。

「とりあえず、君は罰金。それと二日間ポケモンセンターで謹慎してもらおう。食事はラッキーが運んでくれるそうさ。そこで、みっちり反省してもらおう。いいね？」

「まじ？ そんなんで良いんすか？」

意外だった。多分最低でも留置場に送られると思っていたので、予想外の軽い刑罰にオレは面食らった。

それに対し、ミスターダンディーはニカツと笑う。

「ああ。ミニリュウと一緒に、しっかり反省するんだぞ」

「……………へ？」

オレは、更に面食らった。え、今この人なんて言いましたか？

戸惑うオレに、再びミスターダンディーが言う。

「ミニリュウを連れていきなさい」

「え、でもオレ」

「ポケモンセンターから留置場に、ラッキーから超汗くさいゴリーキーに変更しようか？」

……うわ。『有無を言わせぬ勢い』ってこういうこと言うんだ。

観念したオレは、まだキョロキョロと辺りを見回すミニリュウを

見た。オレの視線に気づいたらしく、ミニリュウもこつらを見る。

「えーと、これからよろしくな。ミニリュウ」

「……リュウ！」

少し恥ずい気持ちを抑えつつ言ったオレに、ミニリュウが擦り寄ってくる。

そして、

「……へ？」

「あら」

「おっ」

その場にいた全員が、オレの頬に淡く口づけたミニリュウに驚いた。一方、当の本人であるミニリュウは、ちよつと嬉し恥ずかしながら、顔を真っ赤にさせて丸くなってしまふ。

と、そこで、オレの腰のトレーナーズベルトでモンスターボールが二つほど激しく揺れた。開閉スイッチを押しでないにも関わらずそこから飛び出すのは、チコリータとウパー。

「チ〜コ〜」

「ウパー」

……ちよい待て。何故二匹とも、なんか超怖いオーラを放っているんだよ。

顔を引き攣らせるオレに、事情を理解したらしいミスターダンディイーがグツと親指を立てた。

「少年。モテる男は辛いな！」

冷静にかつちよいー笑顔で言うな！　ってか、助けてくれ！
チコリータとウパー
二人の女に詰め寄せられたオレは、ガーディのボールの開閉スイッチを押しした。

ガーディは出てこない。

う、裏切り者！

「ちょ、ま、ぎゃあああああああああああああああああああ！」

その日、オレは女の嫉妬の深さを思い知り、また一つ大人になるのであった。

Interval 物、者、もの（後書き）

今回のテーマ

『物か者か』

『女の嫉妬は何よりも恐ろしいのだ』

裏テーマ

『メロメロボディ 体質少年・サトル』

『人間スーパーカーメラ・トイロ』（逆輸入設定）

コガネシティと言えば、ゲームコーナー。

というわけで、できたお話です。

何もみんながああいう考えではないと思いますが、あの場所では少しそうだった部分があるのかなー。とも思いました。

旅がらすもミニリユウあそこでゲットしましたが。

今は立派なカイリユウになっています。

もう一つのテーマは、裏テーマとリンクしています。

普通の少年。のコンセプトで作られたキャラ。それがサトルなのですが、

如何せん、個性が足りない（爆）

動態視力のずば抜けたボクっ娘主人公に、ナイトメア打ち消し体質のハーフ少女、更には国際警察の忍者少年という、あまりにアクの強すぎるメンバーの中で、彼が空気にならないにはどうするか……。。

で、思いついたのが、

メロメロボディ体質

……憐れ、サトル。

ガーディ以外はみんな女の子なサトルの手持ち。
ポケモンのメスに異様に好かれる体質。

トイロLOVEな彼には辛い体質……か？

書いてて楽しいから良しとしましょう(笑)

次回からはウバメの森編。

さあ、トイロは祠で手がかりを得ることが出来るのか？

そして、そこで出くわした人物とは……！？

では、また次回！

P・14 小男と巨漢（前書き）

予定していた者と若干違う運びとなってしまいました。
う。予定が一話ずれる。

そして会社では大規模な工事があるからこれから忙しくなるのに。

頭の中にあるものを今日中に吐き出してしまいたいです。

そう、体があと三つは欲しい！ ていうか、手があと八本欲しい！

……完全化け物ですね。でも、そんな気持ちです！（笑）

そんなこんなで久しぶりの投稿！

では、どうぞ！

旅に出てから、あの屋敷を出てから、一か月が過ぎようとしている。

旅に出た直後は、ずっと一人で歩いて行くのだとばかり思っていた。

自分は、あまりにもひねくれ者だ。友人だって、たった一人しかないし、その友人も既に近くにはいない。旅に出ても、こんな性格では友人などできるわけがないと思っていた。

だが、キキョウシティで一人の少女と出会った。

自分よりも一つ年上でいくらか旅に慣れていた彼女は、心がやたらと広いのか、トイロの性格を難なく受け入れた上に共に行くことまで誘ってくれた。彼女の不思議と断らせることを考えさせない物言いに、自分は珍しいことにあっさりと頷いていたのだった。

そして、ヒワダタウンのポケモンセンターで、トイロは新しい“仲間”を得た。

「トイロ殿　いや、考古学の権威、オトナシ家嫡子、オトナシトイロ殿。これより某、サイガ　マサムネは貴女様を護る刀として、貴女様に仕えるでござる」

忍者少年、サイガ　マサムネ。

トイロの旅に加わった、幼き国際警察である。

時渡る神の住まう森、ウバメの森

昼間だというのに、鬱蒼と生い茂る木々によって陽光が阻まれた薄暗い森。

時 時代を旅すると謳われる“ときわたりポケモン”セレビィを祀るその森で、トイロは分厚い本とノートを片手に小さな祠とにらめっこをしていた。

「時を渡るポケモン、セレビィ。世界に広がりし時の波紋のエネルギーを感じ取り、その流れに乗る精霊か……」

本と祠とを交互に睨み、小さく息をつく。ツクシから了承を得て、普通なら触れることも許されない『時渡りの祠』と呼ばれる石造りの建造物をスケッチしていくトイロの手は、実に滑らかな動きで祠を書き写していた。写真とほぼ変わらないそのスケッチに、横でそれを見ていたシレンが思わず感嘆の声を上げる。

「トイロ、勉強だけじゃなくて絵も描けるんだ。羨ましい〜」

「そういうシレンは、コンテストがすごく上手ではないか。それに、ボクとしてはそのスタイルの方が羨ましくてならないよ〜」

白のロングTシャツの上に青いチエックのベストを羽織り、ハーフサイズで薄色のダメージデニムを履いたトイロは、自分の身体を見下ろし、小さくため息をついた。その身体は、服に包まれているためはつきりとは分からないものの、かなり貧相な 単純に言えば“寸胴”な体つきである。

一方、赤いタンクトップの上にジーンズ生地ジャケット、黄色いミニのブリーツスカートで決めているシレンのスタイルは、モデル体型と言っても良いほどであった。胸も豊満であるし、しっかりとウエストが括れているから、おそらく本来の大きさよりも大きく

見えているはずだ。ヒップも大きすぎず、かと言って小さすぎるわけでもない。足だってまるでポニータのようだ。

スタイルのことを（トイロとは全く真逆の意味で）気にしているらしいシレンは、そのことを指摘されて顔を真っ赤に染めた。

「そ、そんなことない！ 胸あつたつて肩が凝るだけだし、お尻だつて大きいから洞窟探検で何度もつかえちゃつてブイのすけに何度笑われたことか……」

「……ごめん。僻みだつて分かつているよ、分かつているんだけど……。その悩みはちよつとイラツとくるものがあるよ」

どうやら、その方面ではシレンとトイロは分かり合えないらしい。トイロが再び小さくため息をついたそのとき、今度は近くの茂みが小さく揺れ、茂みから一人の少年が飛び出してきた。

「姫！ ご報告したいことがあるでござるー！」

「ぴっか！ ぴかぴ！」

茂みから飛び出してきた赤茶色の長髪で『BUSHIDOH』と書かれた白のTシャツの上に柿色と黒の上着を羽織り、くすんだ深緑色のズボンを履いた少年 マサムネと、そのポケモンであるピカチュウがトイロに向けて頭を垂れる。

トイロは苦虫を噛むように表情を歪めると、自分へと頭を下げるマサムネを見下ろした。

「ねえマサムネ。本当にボクのことをその呼称で通すつもりなのかね？」

「当たり前でござる！ 某が父上より課せられた次の任務は貴女の護衛。ならば、任務を全うするまでは貴女は某の主君でござる！」

女子の主君を『姫』と呼ぶのは別におかしくないでござるよ」

「ぴっかぴっかちゅ〜」

おかしいのはマサムネの頭の中だ。と突っ込みたい気持ちを抑えつつ、真面目に答えるマサムネとそれに頷くピカチュウを見下ろし

たまま、トイロは本日何回目になるか分からないため息をついた。

オトナシ家の嫡子、トイロ嬢を護衛せよ。

ヒワダタウンで起きたヤドン傷害事件を片付けたマサムネが、次に課せられたという任務がそれであった。

といつても、今回は“国際警察”としてではなく、“チョウジタウン、サイガ家の忍者”としての仕事なのだ。マサムネは言っていた。

依頼人は不明。先日、色違いの“ふくろうポケモン”ヨルノズクがサイガ家にそんな手紙を持って降り立ってきたのだと言う。

『色違いのヨルノズク』　そう聞いて、トイロは依頼人が誰であるかのある程度の予測がついた。

トイロの知り合いで、ヨルノズク、それも色違いの個体を持っている人間は、ただ一人であったからだ。

それは、他の誰でもない、父　オトナシ　カズヒコその人であった。

ヨルノズクは、手紙をマサムネの父に託した後、どこかへと飛び去っていったと言う。その話を聞いて、トイロは安心した反面、嫌な予感を同時に抱えていた。

父は生きている。ただし、その命は今も危険に晒されている。

そして、トイロ自身もまた、何者かに狙われている可能性がある。

トイロの脳裏を過ぎったのは、一ヶ月前にヨシノシティでリオルを狙って現れたゴスロリ少女であった。

もしかしたら、彼女が父の失踪に関わっているのかもしれない。

だとしたら、また、そう遠くないうちにトイロは彼女と戦わなければ

ばならないだろう。むしろ、今まで一ヶ月間も無事だったことが意外に近い。

もし彼女と再び対峙したとき、自分は彼女を退けることができるだろうか。難しいかもしれない。確かにこの一ヶ月の間に強くなっただという自身はあった。トレーナー戦も数多くこなしてきていたし、先日はヒワダタウンのジムリーダー、ツクシに勝利を収めることもできた。

だが、おそらく彼女の腕前はトイロよりも遥かに高い。今のままでは、今度こそリオルを奪われる。

マサムネがついて来てくれると聞いたときは、正直にホッとした。マサムネは国際警察に所属している。となれば、実力も折り紙つきのはずだ。トイロ一人よりも、助かる確率はぐんと高くなる。

と、そこで、トイロはマサムネの言葉を思い出し、我に返った。

「呼称についてはまた話そうか。で、報告したいこととは何なのかねー？」

「某、この辺り一帯を見て回ったのでござるが、妙なことにポケモンが一匹もいないのでござる」

「……へ？」

マサムネの言葉に、トイロは驚きを隠せなかった。同じ気持ちだったのか、シレンもきよとした表情でマサムネに訊ねる。

「一匹も……って、虫ポケモンや鳥ポケモンもいなかったの？」

「はい。ここは虫ポケモンに草ポケモンの宝庫。それなのに、“この一帯にのみ”ナゾノクサすら見当たらないのでござる」

マサムネの言葉に、十色は眉を顰めた。

いくらなんでもそれはおかしい。大体、何故“今”そんな現象が起きている。

嫌な予感が過ぎったトイロは、パタンと手にしていた本を閉じた。「調査は終わりにしよう。念のため、ここから離れた方が良さそうだしね」

そう言つて、キャメルのポストンバッグに本とノートをしまつ。それに頷いたシレンとマサムネがそれぞれに立ち去る準備を始めたときだった。

「びっ?」

歩き出した三人の後ろで、マサムネのピカチュウがふと後方を振り向いた。耳を欹て、後方の茂みを見つめる。

突然、幾つもの紫色をした球体がトイロたちに向かって飛び出してきた!

「びっか!」

ピカチュウが、瞬時に頬の蓄電袋に溜めていた電気を“10まんボルト”として放出した。“10まんボルト”が飛び出してきた球体とぶつかり、相殺して空中で弾ける。

「っ!?!」

最初に気づいたのは、マサムネであった。ピカチュウの鳴き声とほぼ同時に後方を振り返り、突然の攻撃を知ったマサムネは、すぐさまピカチュウに次の指示を送る。

「茂みに“でんじは”!」

「ちゅー!」

続けて放たれるのは、先ほどの黄色い閃光と違う、青白い雷いかすち。ダメージこそ与えられないが、強い麻痺作用のある“でんじは”だ。

だが、それは再び茂みから飛び出した球体とぶつかり、空中で爆ぜた。

「あれれ? 話が違つんだな。一人増えているんだな」

のんびりとした口調で茂みから出てきたのは、小さな男であった。

童顔で、マサムネよりも少し小柄なその男の隣には、紫色の布を頭からすっぽりと被ったようなフォルムに円らな瞳、黄色いひげと胸の辺りに浮かぶ黒いダイヤの模様が特徴の“どくぶくろポケモン”マルノームがいる。

おそらく攻撃を仕掛けてきたであろうその男を、マサムネが強く睨む。

「お主、何者でござるか！」

「ん〜。おいら、君には用がないんだな〜。そこをどいて欲しいんだな〜」

トイロたちを守るように男の前に立つマサムネに対し、男はそれを片手で払うような仕草を見せた。男の目は、マサムネの後方トイロたちを見据えてくる。

「はじめまして。“オトナシ博士の娘さん”。一ヶ月前は、アセデイアがお世話になったんだな〜」

「っ！」

男の言葉に、トイロは目を見開いた。それと同時に頭の中を駆け巡る一ヶ月前の記憶。

- 間違いない。この男は、あの子のゴスロリ少女の仲間！

そう判断するやいなや、トイロは腰のトレーナーズベルトからマリルのボールを取り出し、中に放った。

「“アクアテール”！」

「るりいっ！」

開口したと同時に尾の先端を蒼く輝かせ、男のマルノームに突貫するマリル。

だが、

「たくわえる”なんだな”」

「のむ」

男ののんびりとした口調に答えて、マルノームが大きく身体を膨らませる。マリルの尾はマルノームに見事ヒットしたが、大きく膨らませたマルノームの腹はいとも簡単にマリルの尾を弾いてしまった。

「まあちゃん！」

「るう」

弾かれて戻ってきたマリルにトイロは駆け寄る。マリルはと言うと、一ヶ月前の記憶が戻っているのか苦々しい顔つきでマルノームと男を睨んでいた。

マリルの視線を受けても尚、全くと言っていいほどに動じていない男は、続けてトイロの隣で呆然としているシレンに視線を移す。シレンはと言うと、自体をうまく飲み込めていないのか、男と目が合ってもただおろおろとするばかりであった。

男は、シレンを見て微笑んだ後、再びトイロに視線を戻す。

「自己紹介がまだだったんだな。おいらはグーラ。よろしくなんだな」

「ボクは絶対に君とは仲良くなんてなりたくないよー。言うておくが、次は容赦しない。痛い目を見る前に帰りたいまえ」

笑顔で挨拶をして生きた男　グーラに向けて、トイロは怒気のコモった言葉を放つ。そして、腰のトレーナーズベルトから取り出した二つのボールを放つ。ボールから出てきたポケモン　リーフイアとゴーストが、マリルの横に並んでグーラを睨みつけた。

と、そのとき、グーラが出てきた茂みから、一人の男が出てきた。

「おいコラこのクソグーラ！ てめえオレ様を呼び出しておいて一人先にノコノコとどっかに消えるとはいい度胸していやがるじゃねえか！」

茂みから出てきたのは、グーラとは全く真逆と言っていいほどに大きな男であった。身長は絶対に一八〇センチ以上はあるだろう。鍛えられた男の大きな胸板が、男の巨大さをより際立たせている。男はかなり怒っているのか、かなり口汚い言葉をグーラに向けて放っている。一方、グーラはと言うと、ただボケーンとした表情で巨漢を見上げていた。

「あんまり怒つてばかりいると、血管切れるんだな。ほどほどがちょうどいいんだな、イラ」

「知るか！ てめえが呼び出すからわざわざチヨウジから文字通り飛んできたんだろうが！」

のんびりと言うグーラに対し、イラと呼ばれた巨漢はまだ怒りが収まらないようであった。額に青筋が入っている辺り、本当にいつ血管が切れてもおかしくないように思えてしまう。

と、そこで、トイロの隣にいたシレンが息を呑んだ。右手で口を押さえ、青ざめた顔で突然現れた男をじっと見つめている。

「シレン？ どうしたのかね？」

シレンの異変に気付いたトイロが、シレンの名前を呼んだ。と、今までぎゃあぎゃああとグーラを怒鳴りつけていたイラが、やっとこちらに視線を向けて来た。

シレンとイラ。二人の視線が重なる。

先に表情が変化したのは、イラの方だった。それまでグーラに向けていた怒りの感情をすべてシレンに向けたように、ただ口の両端を上吊り上げる。

「ハッ。五年振りか。イイ女になってんじゃねえか、シレン」

「……ダイチ……」

嬉しそうに言葉を放ったイラに対し、シレンの声はとても震えていて、またとても小さかった。

心なしが、その瞳には涙が溜まっているようにも見えた。

今回のテーマ

『女の子のスタイル論議』

『姫!』

女の子のスタイルって、一体どっちが良いんでしょうね。

胸だけでピクアップして言えば、

貧乳の意見 『胸があつた方が見栄えが良いし、男受けだつて良いじゃない! 水着だつてあつた方が綺麗に見えるもん!』

巨乳の意見 『大きな胸は肩こりの原因なのよ! 胸のせいで気に入つた服が着れないことだつてあるんだから! あつても得しないよ!』

結局、その意見つて当事者にしか理解できない! 互いに共有できない! 理解し合えないじゃないか!! ってなります。

旅がらすは『ぶっっちゃけどっちでも良くね? 知らんがな』派です。この手の議論は自分もたまに参加しますが結局尻すぼみで常に終わっています。永遠に終わらないテーマの一つです。

大丈夫さトイロ! キミはまだ十五才なんだから! これからきつと……、どうなるのかなっ!? (オイ)

もう一つのテーマ。

マサムネと言うキャラを作ったときからやりたかつたネタです。絶対に『姫』とか『若君』と誰かを呼ばせたかつた。

そして、白羽の矢が立つたのはもちろんトイロ。トイロ自体は若干嫌がっていますが、書いていて何故かしっくりきています。十中八九、あの口調のおかげでしょう。

そしてそれを違和感なく聞き流しているシレンはすごい娘だと思っ

ています。十中八九、『これがジャパニーズ主従関係なんだね！』と頭の中で片づけてしまっているのじゃうね。というか、私の脳内でシレンがそう考えています。

次話は、シレンとイラの関係がちょっと明らかになります！

そして、『十色のキセキ』初（本編では）のコラボが入ってきます

！ 誰が登場するかはお楽しみと言っことでw

ではでは。また次回ww

P・15 三日月と最強（前書き）

ああ、やっと書きたかったところの最初にたどり着いた……。

ども。旅がらすです。

ようやく、ようやく書き切りました！

考案から二ヶ月。相手の作者様を、大変待たせる結果になってしまいました。何とかスタートを切れました。

そんなこんなでP・15。

『十色のキセキ』本編初のコラボです。

それでは、どぞ〜。

大好きな人がいました。

セイレーン？ 長いな。“シレン”じゃダメなのか？

世界で一番、大好きでした。

シレン。いつか二人で旅に出ようぜ。お前はトップコーディネーター。俺はトップブリーダーだ。

……大好き、だったんだよ。

シレン！ そいつから離れろ！

大好き、だったのに……。

シレン。俺たちは、もう、戻れないんだな……。

私は“彼”を。あなたは“彼女”を選んだの。

次に会ったら、俺たちは“敵”だ。

後悔は、していない。

でも、たまに考えてしまう。

……あなたを選んだ、今を。見ることでできない、未来を。

シレンの体は、震えていた。まるでお化けを怖がる子供のように、ガクガクと震えていた。

一方イラはというと、嬉しそうに、だが、その身には怒気を纏わせてシレンを見ていた。グーラが、不思議そうな顔でイラを見上げる。

「あの娘、イラの知り合いー？」

「敵だ。何が何でも潰さなきゃならない、敵だ」

イラの声が、はつきりとそう告げる。その言葉に、シレンの瞳から涙が溢れた。

「キーツ！」

誰もがただ佇む中で、突然、シレンのウエストポーチから一匹のポケモン　モウカザルが飛び出した。

「キーツ！」

モウカザルは、イラに向かって力強く吠えたと、一瞬でその身を紅蓮の炎で包みこんだ。炎タイプの物理技、“かえんぐるま”だ。

モウカザルの姿に我に返ったトイロは、すかさずポケモンたちへと指示を出す。

「サルのすけを援護するよ！　まあちゃんは“れいとうパンチ”、アーくん“アイアンテール”、ゴーくんは“シャドーボール”！」

「るりっ！」

「リーファイ！」

「ゴース！」

マリルの凍てつく拳が、リーファイアの鋼の尾が、そしてゴーストの放った漆黒のエネルギー体が、モウカザルに続いてイラたちに向かつていく。

そこで、シレンの悲痛な叫びが一带に響き渡った。

「みんな、だめ！ 戻ってえ！」

その叫びに、イラの顔が変わった。何か^いに怒る^がように目を吊り上げ、腰につけたポーチから一つのモンスターボールを取り出す。

「“じしん”だ」

短く言い放つイラの声。そして、ボールから一匹のポケモンが飛び出した。

「ドダイー！」

一瞬のできごとだった。

ボールから飛び出した、大樹を背負った亀のようなポケモン

“たいりくポケモン”のドダイトスが吠え、前脚で地を踏み締めた瞬間、大地が激しく揺れたのだ。

「きゃっ」

「くっ」

思わず、トイロとマサムネもその場でバランスを崩ししやがみ込む。トイロたちが顔を上げたときには、マリルにリーフィア、そしてモウカザルがドダイトスの目の前で目を回して倒れていた。唯一残ったのは、マサムネの頭の上にあったピカチュウと、特性“ふゆう”で“じしん”を無効化したゴーストのみであった。だが、

「 ウッドハンマー 」

「 ドダイツ！ 」

「 ゴスツ …… 」

「 ゴーくん！ 」

間髪入れずに、ドダイトスの追撃がゴーストを襲った。得意の“みちづれ”を使う隙もなく、ゴーストは呆気なく地に伏せる。

（ そんな …… ）

トイロは、呆気にとられることしかできなかった。

まだ、これほどに実力差があったただなんて。

容赦しないなどと、言っている余裕すらなかったただなんて。

立ちすくむトイロの隣で、マサムネが腰のモンスターボールから一匹のポケモンを出した。

「 バクフーン！ 」

「 バクウ！ 」

マサムネの声に応え、ボールから飛び出した、クリーム色と紺色の毛並みを持った大きなイタチのようなポケモン “ふんかポケモン” のバクフーンが、首の周りから炎を吹き出させる。

マサムネは、袖の裏の隠しポケットから片手に四枚ずつ 計八枚の手裏剣を取り出し、イラたちに向けて放った。

「 火遁・曼珠沙華！ 」

「 バクツ！ 」

マサムネがそう言うと同時に、バクフーンが手裏剣に向かって“ひのこ”を放つ。瞬間に、手裏剣が炎を新たな刃として纏い、イラたちに襲い掛かる。

そこで、いつのまにかマルノームをボールに戻していたグーラが、別のボールを宙に放った。

「みずでっぼう”で迎撃なんだな」
「へり」

のんびりとしたグーラの声。ボールから出てきた“みずどりポケモン”ペリッパの放った“みずでっぼう”がマサムネとバクフーンの攻撃をすべて打ち落とす。

だが、マサムネの攻撃はそれだけではなかった。“火遁・曼珠沙華”を放ったその足で、常に隠し持っている忍者刀を抜き、イラたちの方へと駆け出していた。

ピカチュウを頭に寄せたまま、マサムネはイラたちの目の前で上へと高く跳躍し、忍者刀を振りかぶった。

「雷遁・飯綱落とし！」
「ぴっか！」

振り下ろされる忍者刀。その一瞬後に、ピカチュウの“かみなり”がイラたちに襲いかかる。

周辺一帯が、ピカチュウの“かみなり”が落ちたことで生じた土煙に包まれた。

「姫、シレン殿を連れて先へ！　ここは某がくい止めます故！」

叫ぶマサムネ。

だが、

「……ざけんなよ、シレン」

トイロたちの耳を叩いたのは、静かな、だが怒りに満ちたイラの声だった。

驚き、顔を上げる。土煙が晴れたところで、目の前に現れた“それ”に、シレンの動揺が今までで一番大きくなった。

「あ、あ……」

シレンが言葉にならない声を上げる。じりじりと後ろへ下がる彼女の顔には、今までトイロが見たことのない、恐怖に怯えた表情が浮かんでいた。

なめらかな流線を描く身体は、ところどころに三日月の意匠を携えている。薄い紫色の羽は、まるで昔話に出る天の羽衣のように美しい。

『久しぶりね、新月に魅入られし少女』

「クレ……セリア……」

イラの前に現れた“それ”が、微笑むように言った。だが、シレンを見るその目は全くと言っていいほどに笑っていない。一方シレンは、震える声を搾り出すように、“それ” “クレセリア”の名前を呼んだ。

今日の前に広がる光景に誰もが言葉を詰まらせる中、やはり最初

に口を開いたのはイラであった。

「あいつ”を出せ、シレン”

有無を言わせる気など毛頭ないように、一言だけ言うイラ。それに対し、シレンは震えながらも首を横に振った。

「いや……」

「……変わんねえな、シレン。相変わらず、てめえは甘いままだつてか！」

拒絶の意を唱えたシレンに、イラが怒号を上げる。クレセリアはというと、ただ二人を見守るように佇むだけである。

「だめ、戻つて”だと？ 五年前と全く同じかよ……てめえは、結局甘ちゃんのまま、ただのうのうと生きてきたってことかよ！」

怒りに任せ、近くの樹に裏拳を叩き込むイラ。ミシリ。と嫌に軋む音がする。

「てめえは“あいつ”を選んだ！俺と“敵”になる道を選んだんだ！」

「違う！それは違うの、ダイチ！」

イラの怒号に、シレンが涙目で強く訴える。

「私は、あなたと敵になりたかつたんじゃない……」

搾り出すように、そう言うシレン。イラの表情が歪む。

いきなりどんと二人だけで話を進めていくシレンとイラに、

誰もが口を挟むことができずにいた。

だが、二人の間に走った沈黙は、ほんの一瞬であった。

『……いい加減にしなさい』

静かに呟く声に、シレンの体が大きく震える。

声の主　クレセリアが、シレンを強く睨んでいた。

『私と“彼”は、決して相容れない存在。貴女が望む未来など決して有り得ない……。五年前のあの日、私は確かにそう伝えたはずよ。』

「……………」

クレセリアの言葉に、シレンは口を嚙む。体は震えたまま、拳を強く握りしめていた。

しばらくして、シレンは顔を上げ、クレセリアを強く睨んだ。

「私は……、私は、絶対に諦めたくない」

『……………」

再び降りた、沈黙。ただ睨み合うシレンとクレセリアのあまりの真剣な眼差しに、誰も言葉を発することができなかった。

先に沈黙を破ったのは、クレセリアだった。

『……何も分かっていない小娘が……！』

瞬間、クレセリアの内から発せられた怒気に、シレンが逡巡した。その隙を、クレセリアは見逃さない。

『痛い目に会わないと、気が済まないようね！』

クレセリアの身体を淡い薄紫色のオーラが包む。何か来る。そう、
トイロが思った次の瞬間だった。

「きゃっ」

シレンの小さな悲鳴が辺りに響く。慌てて視線をシレンに向けた
トイロは、目の前に広がる光景に目を丸くした。

「……………う、あっ……………！」

「ぴい……………」

「マサムネ、ピカチュウ！」

シレンが立っていたはずの場所で、クレセリアが纏っているのと
同じ光に包まれた“マサムネ”と“ピカチュウ”が苦悶の表情を浮
かべながら、“宙に浮いていた”。そのすぐ横で、尻餅をついたシ
レンが、青ざめた顔でマサムネを見上げている。

クレセリアの残念そうな声が、トイロたちの耳を叩いた。

『あら……………。でも、これはこれで、いい牽制にはなりそう……………ねっ
っ！』

語尾に気合いを入れたクレセリア。すると、マサムネの身体が目
にも留まらぬ速さでトイロたちの視界から消える。

「が……………はっ……………」

「ぴっ……………」

気づいた時には、マサムネたちの身体はすぐ近くの樹木に減り込
んでいた。

スローモーションのようにゆっくりと地に伏せるマサムネとピカチユウ。

「マサムネくん！」

『“アイツ”を出しなさい。シレン』

叫び、マサムネたちの元に駆け寄ろうとしたシレンであったが、クレセリアの言葉に足を止める。震える拳を抑え、シレンは顔を俯けた。その姿に、シレンの変わらぬ意志を読み取ったのだろう。クレセリアの表情が一気に怒気を纏った。

『ならば、ここで果てなさい！』

そう声を荒げるクレセリアの身体から幾重もの薄紫色の三日月状の刃 エスパークタイプの物理技、“サイコカッター”だ が現れ、シレンに向かって飛んでいく。

「シレン！」

トイロは、駆けた。

間に合わない。と心の中で誰かが呟いた。だが、走らずにはいられなかった。

誰か、助けて！

親友を救う手立てを持たない自分を恨めしく思いながら、トイロが心の奥で叫んだそのときだった。

「ハク、“エアスラッシュ”だ！」

聞こえたのは、男の声。男の声が聞こえた次の瞬間、シレンのすぐ先まで迫っていた“サイコカッター”は、真空の刃 “エアスラッシュ” によって、完全に相殺、空中に弾けて消えた。

「っ！」

最初に反応したのは、イラだった。すぐさま、出したままだったドダイトスに指示を出す。

「前方に“リーフストーム”！」

「ドダイツ！」

ドダイトスが、トイロたちに向けて木の葉の混じった突風を起こす。突如霧散して消えた“サイコカッター”に足を止めていたトイロは、慌てて前方をガードするように両腕を顔の前で交差させる。

だが、トイロの前に現れた影によって、トイロたちに“リーフストーム”が届くことはなかった。

「出てこい、クロ！」

影が地面に向けてモンスターボールを放る。ボールが地面に当たった瞬間、影を中心に激しい“砂嵐”が舞い起こった。

「なにっ!？」

「イイ大人が、子供相手に何やってんだよ」

驚きの声を上げるイラに、先程聞こえてきた声がそう言った。無意識のうちに目を閉じていたトイロは、恐る恐る目を開き、前を見

る。

トイロの前に立っていたのは、長身の男だった。野生味を感じさせる無造作に生えそろうたグレーの髪に、黒のライダーズジャケットと黒いズボン、黒の編み上げブーツと正に黒一色のファッション。トイロに背を向けているため、顔は伺えない。

だが、青年の姿以上に、トイロは彼の隣に立つ“ポケモン”に、目を奪われていた。

「漆黒の……バンギラス……」

男の服以上に黒く染まった腕が、空を切り裂く。それは、一瞬にして自分で巻き起こした“すなあらし”を掻き消した。

そう、それは世にも珍しい、“色違い”の“よろいポケモン”バンギラス。

砂嵐が消えると、視界も完全に晴れた。少し離れた場所で、シレンの隣に卵形の胴体から一對の翼を生やした“しゆくふくポケモン”のトゲキッスが佇んでいるのが見える。

シレンの無事を確認し、ホツと胸を撫で下ろしたトイロであったが、すぐに視線を目の前の青年と漆黒のバンギラスに戻した。

トイロを守るように立つ青年に、イラが怒りの眼差しを向ける。

「てめえ……何者だ？」

「俺か？俺はただの、旅するポケモントレーナーさ」

イラの怒気に当てられて尚、平静を保ったまま静かに答える青年。イラは、いらついたように小さく舌を打った。

「どきな。用があるのはそのガキ共だ。てめえじゃねえ」

「ハツ。お前らに用が無くても、こつちにはあるんだよ。なあ、“セラ・フォル七人の咎人”の第三位・“憤怒”のイラに、第六位・“暴食”のグーラ」

「!?」

青年が発した単語に、イラの目が見開かれた。

驚きを隠せないイラの隣で、クレセリアが青年と漆黒のバンギラスを睨む。

「貴方が何者であつて、私たちをどうして知っているかなんて、知ったことじゃないわ。でも……、私の邪魔をするというなら、容赦はしないわよ……！」

「ハツ。オレの知るクレセリアは、もう少し柔らかい頭の持ち主だつたぜ？」

「クレセリアすべてが寛容な心の持ち主な訳ないでしょう。私はただ、イラの弊害となる存在を、消したいだけよ」

青年の軽口を流し、クレセリアはシレンを睨んだ。逡巡するシレンを守るように、トゲキツスがシレンの前へと出る。

青年から再び、余裕のある声が響いた。

「やれるモンなら、やってみな」

「後悔しても、知らないわよ！」

青年の挑発に乗り、マサムネを飛ばした時と同様に身体の周りに薄紫色のオーラを纏わせるクレセリア。

だが、そこで間の抜けた欠伸がクレセリアのすぐ傍から聞こえてきた。

「ん〜。止めた方が良いと思うんだな〜」

欠伸を發したのは、グーラであった。もちろん、その空気の読めない発言にいの一番に怒りの声を上げたのは、イラだ。

「ああ！ てめえグーラ！ 何考えてやがんだあほんだら！」

「だって、ルクリアの情報が正しいなら、多分そいつは“リュウマ”なんだな〜」

胸倉を捕まれ、半ば宙づりとも言える状態にされながらもペースを保ったままに答えるグーラ。グーラの放った言葉に、イラは首を傾げた。

「は？ 誰だそいつ」

「ここから少し離れた場所 アトラス地方の最年少チャンピオンなんだな〜。異名は『頂点に立ちし者』。多分、おいらたちの中でも立ち向かって無事でいられるのなんて、リーダーと“強欲”の二人くらいだと思っただな〜」

淡々と話すグーラだが、その話にトイロは自分の耳を疑った。

最年少チャンピオン？ 『頂点に立ちし者』？

そんなに強いポケモントレーナーが、何故、ここに。

何故、トイロたちを助ける？

何故……、こいつらを“七人の咎人”と呼んだ？

疑問が幾度もトイロの頭を駆け巡る中、リュウマと呼ばれた青年が、一歩前に出た。

「やるのか、やらないのか？ ま、どちらにしろオレはアンタらに聞きたいことがあるから、逃がしはしないけどな」

「やゝ。そこは是非とも見逃してほしいんだな」

不敵に笑うリュウマに対し、グーラはへらへらと笑いながら、胸倉を捕まれたままの状態でベルトからモンスターボールを取り、宙に放った。

中から出てくるのは、先程も出てきた、ペリッパーである。

「しろいきり”なんだな”」

「ペリッ」

ペリッパーが、のんびりとした口調で口から白い霧を吐く。

一瞬のうちに、辺り一面が真っ白になった。リュウマが、大きく舌打ちをする。

「逃がすか！ ハク、“きりばらい”！」

「キツス！」

どこからか、トゲキツスの鳴き声が響き、瞬時に霧が晴れる。

だが、その時には既に、グーラはペリッパーの足に肩を捕まれ、イラはドダイトスとクレセリアをボールに戻し、自分は“かえんポケモン”リザードンの背に乗ってかなり上空からトイロたちを見下ろしていた。

「な………！」

「あははゝ。それじゃあ、おいらたちは失礼するんだな。またね」

驚くりュウマにのんびりと笑いながら、最後にそう残してグーラとペリッパーは飛び去っていく。

一方、イラはリザードンに跨がったまま、リュウマでもトイロでもなく、シレンを見下ろしていた。シレンもまた、イラを見上げる。二人の視線が交わされたのは、ほんの一瞬のことであった。

「……じゃあな、シレン」

小さく聞こえた、イラの呟き。シレンも何か言おうと手を伸ばしたが、イラとリザードンはすぐに踵を返し、グーラが飛び去った方向へと飛んでいった。

しばらくして、シレンはその場にへたり込み、声にならない泣き声を上げて泣いた。トゲキッスが元気づけるようにシレンの周りをふわふわと飛び回っても、シレンはなかなか泣き止まなかった。

トイロとリュウマ、そしてリュウマのバンギラスは、シレンが泣き止むまでただただ立ち尽くしていた。

イラとリザードンがグーラたちに追いつくまで、もの一分も掛からなかった。

イラが、面白くなさそうに舌を打つ。

「おい、くそグーラ」

「ん〜。なんなんだな〜？」

ここまであからさまな態度を取っても、グーラからのほほんとした笑みは消えない。

そのことに更に苛立ちつつ、イラは言葉を続けた。

「てめえ、シレンを知らないふりしやがって。俺様を呼んだ理由、アイツがいたからだろうが」

「テレビで見たし、イディアから話を聞いていたんだな〜。知ってる？ あの娘、コンテストのときブイゼルでイディアのニドキングを動かしていたんだな〜」

「ケツ。そーかよ」

それだけ分かれば十分。そう言うように、イラは強制的に話を終わらせた。それから、腰のモンスターボールを二つ、手に取る。中に入っているのは、ドダイトスとクレセリアだ。イラの手持ちの中で、唯一“五年前”を知るポケモンたち。

ふと、イラは自分たちに立ち向かってきたモウカザルを思い出した。あのモウカザル　サルのすけもまた、シレンの手持ちの中で唯一“五年前”をその身で覚えているポケモンだ。

（ただ甘いまま、のうのうと生きていた訳じゃないっーことか…）

あのときのサルのすけの激昂、そして、シレンが見せた強い眼差しが、イラの頭から離れない。

諦めたくない。そう強く言った彼女の瞳が、網膜に焼き付いていた。

自分は、既に五年前に諦めたというのに。

(……ふんっ。あのケツキング娘じゃないが、めんどくせえぜ、ほんと……)

ただ黙ってため息をついたまま、イラは前に向き直った。

かつて、互いに想い合いながら、結局は互いの運命に逆らえなかった少女を想い、イラは少し傾きつつある太陽を仰いだ。

今回のテーマ

『意外な組み合わせ（イラ&クレセリア、イラ&グーラ）』

『すなおこし』で“リーフストーム”防御』

そしてもちろん、

『コラボ』

はい。『十色のキセキ』初コラボのお相手は、赤神 零先生の『ポケットモンスターX ～Destiny～』より、最強のポケモントレーナー、リュウマくんでした！
拍手〜！

2月末に先生にアポを取り、それから幾度かメッセージを交わし、今回のコラボとなりました。

赤神 零先生にはこの場を借りて、深くお礼申し上げますw

今回はほとんど触り程度の描写となってしまうましたが、リュウマくんはコガネ編までお付き合いいただく予定です。

これからの間、リュウマくんの魅力をきちんと描写していけるよう、頑張っていきます。

赤神先生、リュウマの口調などで何かありましたら、いつでもツッコミにきてくださいw

今回のテーマについて。

キャラ的にあのイラのパートナーにクレセリアを置いたのは、最初は若干ミステイクかな。と自分でも思いました(何)

でも、クレセリアが意外と短気キャラになってくれたおかげで問題解消w

一つ弁解しますが、決してクレセリアは悪者じゃありません。彼女はイラが一番大事なだけなんです。そこは、シレンの黒騎士(笑)と似てます。

イラとグーラの組み合わせも、自分でツボりましたw
これからも書いていきたいコンビですw

もう一つのテーマ。
前回は“たくわえる”で“アクアテール”を防御しましたが、今回は技ですらありません。特性です。

たかが砂嵐で草タイプ最上位に位置する“リーフストーム”を防げてたまるか！ という意見が来そうですが、両方“あらし”だから多分いける。それに、“いやなおと”すら攻撃に転じさせるクロなら、自分の特性も武器にするはず！ ということでできた描写。

戦わずしてその強さを見せつけることができないか。という挑戦でもありました。

次話からはリュウマを交えた四人旅。
自身の秘密を明かすシレン。一方マサムネは、癒えぬ身体に鞭を打ち、リュウマにバトルを申し込む!? (未定) 未定かよ!

ウバメの森編、中盤戦！

頑張って執筆しますので、しばしお待ちを。
では。

P・16 新月と弱者（前書き）

お久しぶりです。

今回は前半をコメディーちっくに仕上げてみました。

ああ、彼らのキャラがどんどん崩壊していく〜（笑）

そんなこんなで第16話ですw

「マサムネ。これを、君にあげる」

そう言つて、彼らは今よりも幼い　十歳を迎えたばかりのマサムネに、不思議な“石”を渡してきた。

幼いマサムネは、父に連れられやって来た、故郷より離れた都でできたはじめての“ともだち”からのプレゼントに、心を躍らせた。

「ありがとう！……でも、これ、何でござるか？」

掌にちょうど収まる大きさの、灰色の中に淡い瑠璃色の輝きを持つたそれをしげしげと眺めながら、マサムネは首を傾げた。

人影の一つが、にこりと微笑む。

「それは、内緒。でも、それがあれば、僕たちはまた出逢える」

「これがあれば？」

更に不思議そうにするマサムネに、今度は別の人影が笑いかけた。

「うん。君が私たちと逢いたいって思えば、いつだって。だから、なくさないでね」

「分かったでござる。某、これを宝物として、肌身離さず持ち続けるでござるよー！」

笑顔で、渡された石を胸に抱えるマサムネ。人影たちが微笑みを浮かべると、遠くからマサムネを呼ぶ父の声が聞こえてきた。

その声を聞いて、一つの人影から小さなため息が漏れる。

「……じゃあ、さよならだね……って、痛っ」

悲しげにそう言った人影だったが、もう一つの人影が頭に繰り出してきた平手打ちに打たれた頭を押さえた。一方で、もう一つの人影から笑い声が零れてくる。

「そんな淋しいこと言わないの。こういうときは“またね”でしょう？」

そうだよな？ とマサムネに笑みを向けて言う人影に、頭を押さえていた人影が顔を綻ばせた。

「そう……だね。そうだよな。マサムネ、また会おう。必ず」

「もちろんでござる！ 某たちは、ずっとずっと友達でござるよ！」

差し出されたその手を、マサムネはすぐに握りしめた。

「……ん……」

マサムネは、後頭部に柔らかな感触を覚えていた。

（あれ？ この心地好い感触は、一体……）

暗闇の中、マサムネは思考する。確か自分は、クレセリアとかいうポケモンがシレンに放った“サイコキネシス”をピカチュウと共に代わりに受け、樹に身体を思いきり強くぶつけられたのだ。

それからの記憶は、ない。あの後、何がどうなったのかをマサムネは知らない。

（い、いけない！ 姫とシレン殿が！）

慌てて、マサムネは飛び跳ねるように身体を起こそうとした。

起こそうとして……、

柔らかな“何か”に、思いきり顔を突っ込んだ。

「…………ふえ？」

思わず奇妙な声を上げる。そこでようやく、マサムネは自分が目を閉じていたことに気づいた。
恐る恐る、目を開ける。

マサムネの左側の視界が、真っ赤な“布地”で覆われていた。

(な、何でござるか、これは…………)

左側の視界を覆う“布地”の正体分からず、マサムネは呆気にとられていた。
すると、

「マサムネ、おはー」

視界の右側に、トイロが入ってきた。元気そうな彼女の様子に、マサムネは安堵を覚える。

「姫、ご無事でし」

たか。と言いたかった。だが、

「ブーイッ！」

「がっ」

突然現れたオレンジ色の何かが腹に突っ込んできたせいで、最後まで言うことはできなかった。咄嗟のことに対応しきれず、マサムネは少しだけ吹き飛ぶ。

「げほっ。げほっ、げっ……」

「ブイ、ブイブイブイ！ ブイブブイ！」

腹を抱えて咳き込むマサムネの視界に、オレンジ色の毛並みをした獣の足が入る。マサムネに向かって何やら抗議らしき声を上げているのは、“うみイタチポケモン”のブイゼルであった。

「こ、こら、ブイのすけ！ マサムネ君になんてことをするの！」
続けて、ブイゼルの後ろからその両脇に手を添えてひよいと抱え上げる手が見えた。顔を上げると、ブイゼルを抱きかかえてしゃがみ込んだシレンが心配そうな表情でマサムネを見下ろしている。

「マサムネ君、大丈夫？ どこか痛いところとかはない？」

「……いえ、特にはどこも……」

呆気にとられつつ、マサムネが首を横に振るとシレンは嬉しそうに微笑んだ。

「良かったあ〜！ ホントに良かった！」

「……………」
「喜ぶシレンを、マサムネはただ見上げる。彼女の“服装”を、じっと見上げる。」

彼女の服装は、初めて会った時と同じだった。赤いタンクトップの上にジーンズ生地ジャケット。黄色いミニのプリーツスカートと白のスニーカー。

シレンが着ている“赤い”タンクトップ。

それは、先ほどマサムネの視界の左側を覆っていた物と全く同じ“赤色”であった。

「……………」

マサムネは、瞬時に理解した。

自分がどこで横になっていたのか。
自分が先程ぶつかったのが、“何”であったのか。

そんなマサムネの動揺などいざ知らず、シレンがマサムネの顔を覗き込んできた。

「マサムネくん？」

「どうしたのかね、マサムネ」

いつの間にか、にやにやとした表情のトイロまでもがシレンの隣でマサムネの顔を覗き込んでいた。

もちろん、動揺するマサムネがそんな二つの視線に耐えられるはずもなく、

「……………うっ」

「うっ？」

「うっ？」

「……………うにゃあああああああああ！」

結果、

プチ発狂してしまった。

もはや人間の言葉ではない叫びを上げて、マサムネはすぐ近くの樹の上に飛んで逃げた。

エイパム並の運動神経である。

「ま、マサムネくん！」

「これはこれは……、マサムネからあんな声が聞けるとはね」

二人の声を耳に入れつつ、マサムネは恥辱に駆られたまま、枝の上で体育座りになり樹の幹に寄り掛かっていた。

国際警察特殊任務班所属にしてサイガ流忍者のサイガ マサムネ。

その素顔は、どこにでもいる普通の十四歳の男の子であった。

十分後。

まだマサムネは樹の上で体育座りをして己を恥じていた。マサムネの下では、トイロとシレンが楽しそうに談笑している。その会話の中に、男の声が混じっている。しばらく聞いて分かったことは、男の名前はリュウマ。そして、彼こそがマサムネが気を失った後にトイロたちを助けてくれた恩人であるということであった。まだ少しトイロたちに顔を合わせるのが恥ずかしいマサムネは、再びトイロたちの会話に耳を傾けた。

「ブーイ。ブイブイ、ブイブブーイ！」

「えつと……？ ああ、やっぱり私には分からないなあ」

ブイゼルの声と、それに対し少し残念そうに答えるシレンの声がマサムネの耳に届く。

続けて聞こえてきたのは、“リュウマ”と名乗った青年の笑い声だった。

「ハハハッ。ブイのすけだったか？ そいつ、本当にシレンが好きなんだな。『あのエセ忍者、ブイのすけ様のシレンによくも〜！』」
だとさ」

（……アトラス地方の“頂点に立ちし者”。まさか、本当にポケモ

ンの言葉を理解するとは……)

実を言うと、マサムネはリュウマのことを“知って”いた。マサムネは国際警察として、様々な地方の情報を頭に叩き込んでいた。その中に、“リュウマ”という名のトレーナーについての情報もあったのである。

ポケモンと心を通わせ、且つその言葉を理解する者。初めて聞いたときは、はつきり言って眉唾物であると思っていた。

だが、こうして直に目にし、理解した。あの話は本当であったのだと。

そこで、今度はリュウマとは違う、別の聞き慣れない声がマサムネの耳を叩いた。

『まったく……。ブイのすけ、いつからシレンがお前のものになったんだ……』

少し低い、男性の声だった。ただ不思議なことに、その“声”は耳から入ってくるのではなく、頭に“直接”響いてくるような感覚を覚えた。

続けて、トイロの笑い声が聞こえてくる。

「ふふつ。ダーちゃんだって、ブイのすけがシレンの胸にダイブしようとしたら怒っていたではないかー」

『あ、あれはブイのすけが悪ふざけをするからだ！ というより、その恥ずかしい呼び名はやめてくれ!』

余裕たっぷりのトイロのからかいに焦ったような声を出す“ダーちゃん”なる存在。一方でトイロはその反応に不満そうに言葉を続けた。

「可愛い呼び名だと思っけどね。ね、みんな」

「う、うん……。可愛いよね……。ぷっ」

「ああ。最高のネーミングだと思うぜ……。くっ」

『その二人！ 最後完全に吹いただろ！』

「ブフフウツ。ブ、ブブブフウツ！」

『ブイのすけ、貴様はあからさま過ぎるぞ！』

(……………一体誰が何でここまで怒っているのござるか……………?)

もう恥ずかしさも薄れつつあったマサムネは、“ダーちゃん”なる存在に少し興味を抱き、両膝を枝に引っ掛けて逆さまになる形で木陰から顔を出した。

そして、その“存在”を目にし、本日何度目になるか分からない驚きを覚えた。

マサムネの視界に入ってきたのは、漆黒のポケモンだった。首が位置するであろう箇所周りに赤い牙のような突起物が生えており、頭頂部からは白い毛のような霧が生えている。霧に覆われ、顔の右半分は伺えない。

驚きで目を逸らせずにいると、視線に気づいたららしいそのポケモンがマサムネを振り向いた。

『ん。もう大丈夫のようだな』

「……………」

至極あっさりと言われ、今度は呆気にとられた。樹から下りると、黒いポケモンの言葉に反応したシレンがマサムネに微笑みかけてくる。

「マサムネくん、紹介するね。彼は私の最初の仲間……………パートナーダークライ

」

『よろしく頼む』

「は、はあ……」

あまりにあっさりし過ぎる紹介に面食らいつつも、マサムネはダークライに軽く頭を下げる。

すると、ダークライはすまなそうに片側だけ見える目を細めた。

『私のせいで、君には悪いことをした……』

「え？」

ダークライの言葉に、マサムネは顔を上げて不思議そうに首を傾げた。するとそこで、灰色の髪に黒ずくめの服装の青年　リュウマが口を挟む。

「クレセリアが言っていた“アイツ”ってのが、このダークライのことなのさ。ダークライは別名“新月の化身”とも呼ばれる稀少なポケモンなんだよ」

「クレセリア……っ！　そうだ、彼らは一体！」

そこでマサムネはようやくイラたちのことを思い出した。すると、それまで笑っていたトイロの表情が少し険しいものになる。

「そのことも含め、少しリュウマから話を聞いていたところだよー。シレンの知り合いが関わっている以上、ボクもすべてを話す必要があるみたいだからねー」

「私も……。ダイチとクレセリアがトイロを狙う“何か”に関わっているなら、もう隠し事はできない」

「はあ……」

なんだか、知らないうちに話が進んでいたようだ。またも呆気に

とられているマサムネに、リュウマが苦笑混じりに声をかけた。

「とにかく、腰を下ろせよ。話はそれからだ」

話は、まずシレンから始まった。

「私とダーククライが出会ったのは、五年前。父の仕事の関係でシンオウのミオシテイに越してから少し経った頃のことよ。ダイチ……イラと出会ったのも、同じ時期だったわ……」

ゆっくりと、シレンは話した。

ミオシテイではあまりよろしいとは思われていない、船乗りを魅了しその船を沈める精霊の名前を持つ彼女に、“シレン”という愛称を与えてくれた青年　ダイチのこと。

同じ時期、同じ年の子供たちからのいじめで新月島に行かされ、そこでダーククライと出会い、自分が彼の特性“ナイトメア”を打ち消す体質であることを知った。

ダーククライとのことを秘密にしつつ、ダイチと二人で過ごした日々。幸せだった時間。

だが、それは互いの“秘密”を明かしたときに、簡単に壊れてしまった。

シレンとダイチ。ダーククライとクレセリア。互いに相反する存在であることを知ってしまった。

ダイチとは、そこで別れた。シレンは夢を叶えるため、そして

う一度ダイチと会うために、旅に出た……。

「……少し端折ったけど、これが私の秘密。ダイチとはそれっきりでどれだけ探しても見つからなかったのに、まさかジヨウトではじめてできた友達を襲っている人たちの一員になっていたなんて……」

シレンが辛そうにそう言うと、トイロが小さく息をついた。

「ボクもそれには驚きだったよー。シレンを巻き込む気なんて全然なかったのになあ……」

「トイロはダイチたちのこと、何か知らないの？」

「あまりね。分かっているのは、彼らがパパのリオル　リツちゃんを狙っていることくらいだよー」

リオルの入ったボールを手の中でいじりながら、トイロは再びため息をついた。

と、そこで、それまで黙っていたリュウマが話に入ってくる。

「そのことなら、俺が説明しよう。奴らは“七人の咎人”^{セブン・フォール}という名前の団体だ」

「セブン・フォール？」

聞き慣れない単語にトイロが首を傾げると、リュウマは小さく頷いた。

「ああ。平たく言えば、闇組織をターゲットにした“人材派遣団体”だ。俺も存在を知ったのはつい最近なんだが、どうやらかなりのネットワークを持っているらしい」

リュウマの話では、彼らはそれぞれに“七つの大罪”を二つ名とし、様々な闇組織に手を貸しているらしい。

現在、リュウマはとある組織を追っており、“七人の咎人”の話聞いて、追っている組織と繋がりがあるのではないかと考えジョウトまで足を運んできたのだと言う。

「しつつかし、そいつらがまさかオトナシ博士の娘とポケモンを狙っていたとはな」

「ボクだって、まさかパパがアトラス地方の元チャンピオンと知り合いだつたなんて知らなかったよー。パパ、どれだけ人脈があるんだろう……」

「かなりアクティブでアウトドアな人だったからな。あ、そういや娘自慢もかなりのものだったぜ」

「……………なんかヤだな、非常にヤだよー」

少し話が脱線してしまったが、とりあえずこれで三人の話が繋がった。

これまでトイロを襲ってきた彼らが所属する団体の名前が分かったということだけでも、トイロにはかなり大きな収穫であったろう。

そんな中、マサムネは一人、話を聞く傍らである事を考えていた。リュウマに座るよう促されてから、彼はその事ばかり考えていた。

(某は…………… 姫たちを守れなかった)

たった一撃。たった一撃喰らっただけで、自分は気絶してしまっ

た。もし、すぐにリュウマが来なかったら？ そう考えるだけで恐ろしくなる。

鍛練なら、ほかの誰よりも積んでいるつもりだった。だが、それでも自分はイラたち“七人の咎人”には手も足も出なかった。

(某は、弱い……！)

今までになく強く感じた敗北感。マサムネは知らず知らずの内に拳を強く握りしめた。

不意に、マサムネはゆっくりと立ち上がった。徐に、リュウマの近くに歩み寄る。

「リュウマ殿」

「ん？」

マサムネの呼びかけに、リュウマは腰を下ろしたまま答えた。自分を見上げてくる青年の背後に、マサムネは“強者”が放つ“闘オーラ気”を感じ取る。

強く、なりたい。

そんな想いが、マサムネの口を突いた。

「貴方に、ポケモンバトルをお願いしたい」

数分後、四人は“時渡りの祠”から少し離れた、森の中でも比較的開けた場所にいた。

距離を置いてマサムネとリュウマが向き合い、その間に審判を任されたトイロが立つ。シレンはダークライと一緒にトイロから少し離れた場所に腰を下ろしていた。

向き合う二人を交互に見た後、トイロが口を開く。

「ルールは完全交替制、三対三のシングルバトル。先に二勝した場合も三回戦目は行う……で良いんだよね、マサムネ」

「はい。リュウマ殿、この度は某の申し出を快く受けてくださり、感謝いたす」

「カタくなんなよ。国際警察の“隠し玉”と呼ばれる奴とバトルできる機会なんて滅多にないからな。こちらとしても嬉しい限りっつーことさ」

マサムネがリュウマに感謝の意を述べると、リュウマはそれに笑って返した。どうやら、リュウマもマサムネのことを“知って”はいたようだ。

二人がボールを手にしたことを確認し、トイロは真剣な面持ちで前を向いた。

「では、一回戦。……尋常に始めっ！」

「行け、シロガネ！」

「ビビバー！」

先にボールを放ったのは、リュウマの方だった。ボールから出てくるのは、少し楕円に近い形状の巨大な“じしゃくポケモン”コイルの両脇に小さなコイルが一匹ずつ合体したようなポケモン、“じばポケモン”のジバコイルだ。

「行くでござる、フカマル！」
「フッカー！」

対して、マサムネが繰り出したのは、ブルーグレーの体躯に大きな顎が特徴の“りくザメポケモン”のフカマル。フカマルは元氣良く飛び跳ねた後、目の前に立ちはだかるジバコイルを見上げた。

フカマルを見て、リュウマが小さく口笛を鳴らす。

「フカマルか。珍しい奴を持っているな」

「初任務でシンオウに赴いた際、仲間になったのでござる。フカマル、“りゅうのいかり”！」
「カフツ！」

説明もそこそこに、フカマルに指示を出すマサムネ。一方、リュウマは動揺の表情など一切見せずに右手を前に出す。

「“ソニックブーム”だ！」
「ジジ！」

リュウマの指示に答え、ジバコイルが両脇のU字型磁石から鋭利な真空の刃を放った。それぞれの技が空中でぶつかり合い、霧散し、辺りに土煙を舞い上げる。

その土煙の舞い様に審判役のトイロが思わず両腕で前を覆ったときだった。

「フカツ！」
「ジビツ!?!」

いつの間に接近していたのだろう。フカマルがジバコイルの目と鼻の先とも言えるほどに近い位置にまで迫っていた。

技がぶつかり霧散してからほんの一瞬しか経っていなかったという事実にも、さすがのリユウマも少しだけ目を剥く。

「んなつ、シロガネ！ “バリアー”だ！」

「“りゅうのいぶき”！」

「ジジッ」

「フカーッ！」

ジバコイルに向けて零距离で放たれる青白い炎。だが、間一髪ジバコイルの前に不可視の盾が出現し、直撃を免れる。

「……ちっ」

「カッ」

後退を余儀なくしたフカマルと同調するように、マサムネは小さく舌を打った。

（“りゅうのいかり”を“とっしん”しながら放つまでしか成功しなかったでござるか……）

耐久型であり遠距離攻撃型のジバコイルに対し、フカマルは物理系の近距離攻撃型。不意を突いて接近したまでは良いものの、肝心の攻撃は防がれてしまった。

それに、最初の打ち合い。

本来、威力だけなら“りゅうのいかり”の方が上位に位置する。フカマルのレベルは決して低くはない。進化していないだけで、かなり育て込んでいるつもりであった。

だが、そんなフカマルの一撃も、威力としては半分であるはずの“ソニックブーム”に打ち消されてしまった。

（なるほど……。これが、最強）

相対して、ようやく実感した。強いと謳われるトレーナーと、自分との差を。

（負けは確実。しかし、ただ負けるつもりはないでござるよー！）

マサムネは、再びフカマルに指示を出すべく、声を張り上げた。

今回のテーマ

『やっぱり男の子（笑）』

『ダーちゃん』

『強者との差』

はい。前半はマサムネとダークライのキャラを壊してみました。二人とも、本当は真面目なキャラのはずなんですがね。

ダークライの『ダーちゃん』は、とある場所にて生まれた完全な弄りネタです（笑）
恐らく、ここまでダークライのキャラを虚仮にしている作品はあまりないでしょうなww

弁解しますが、旅がらすはダークライ大好きです。好きだから、あそこまで弄るんです（何）

また、だいぶはしりましたが、シレンの過去を公開。文はあれだけですが、トイロたちにはしっかり話してます。
これは、後々外伝的なあれで公開する予定です。

また、マサムネとリュウマのバトルも少しだけですが展開しました。最初はグライオンにしようかな。とも思ったのですが、マサムネとリュウマの差を明確にすべく、固定ダメージ技を放て、尚且つタイプの組み合わせ的にグライオンと近いフカマルを起用しました。
国際警察の“隠し玉”などと呼ばれているようですが、マサムネは

まだまだリュウマには及ばないのです。

今回はバトルの続きを書こうかリュウマとトイロたちのポケモンの面白可笑しい触れ合いを書こうか現在悩み中です。

バトルの結果をチュートリアル的に簡略化して書いて、さっさと次に進めようか、じっくりバトルを書いていこうか……。

い、いや、別にバトルシーン書くの苦手とかめんどくさいとか、そういうのじゃないですよ？（何）

何かご意見ありましたらよろしくお願いします。

では、また次回〜ノシ

P・17 温泉と悲劇（前書き）

お久しぶりです、旅がらすですw

ホワイトとブラック。発売が少しずつ見えてきましたね。

とりあえず旅がらすは両方買う予定です。レシラムに惚れました。既にメインはブラックにする予定です。

妹がミジュマルを気に入ったようです。自分はツタージャに一目惚れでしたww

そんなこんなで十色のキセキもウバメの森編がこれで最後になります。

実は、コラボを書く上で一番楽しみにしていた部分でもありません。ちよつと地の分よりも会話メインの文章となってしまうましたが、ご了承ください。

それでは、第17話をお楽しみくださいww

遠い。

一撃を与える。それだけのことが、とても遠い。

こんなに精神を削られるバトルははじめてだった。だが、ここまですて熱くなったバトルもまた、はじめてだった。

一回戦。フカマルはリュウマのジバコイル シロガネに決定的なダメージを与えられず、スタミナ負けとなってしまう。 “あなをほる” を使ったの奇襲も試してはみたが、 “でんじふゆう” で難無く躲されてしまい、最後は “ラスターカノン” で決められてしまった。

二回戦。リュウマはミロカロスのソウを、マサムネはアリアドスを繰り返した。 “ふしぎなうるこ” の発動を懸念し、マサムネは糸を用いた戦法でミロカロスを捕縛し一時は優位な展開を見せたが、 “ギガドレイン” を行おうとして近寄った瞬間、糸を破ったミロカロスの “アクアテール” と “ハイドロポンプ” の連続攻撃をもろに喰らってしまった、瀕死となってしまった。

攻撃が、届かない。爪の一つさえかすりもしない。

だが、必死に食いついていかねばならない。

これから戦わなければならない相手を想定して。

もう二度と、負けないために。

そして、三回戦。

「クレナイ、 “メガホーン” ！」

「 “かげぶんしん” で攪乱、それから “のろい” ！」

最後のバトルが、ギャロップのクレナイとブラッキーによって繰

り広げられていた。ギャロップが額の角をブラッキーに向けものすごいスピードで突進する。だが、ブラッキーは五体の分身を瞬時に作り出し、その中に身を潜める。

“のろい”は本来ゴーストタイプのポケモンが自身の体力を犠牲に相手ポケモンの体力をじわじわと奪う技である。だが、ゴーストタイプ以外がこれを使うと、何故か素早さを代償にして物理攻撃および物理防御のステータスを向上させることができるのである。

「“だいもんじ”！」

「“ふいうち”！」

「ラキッ！」

「ヒビインッ！」

ギャロップが大きく息を吸い込んだところに、ブラッキーの“ふいうち”が決まる。既に六回の“のろい”によって限界にまで高められた攻撃が、ギャロップの腹部を見事に捕らえ、ギャロップは後退を余儀なくした。

「クレナイ、大丈夫か？」

自分のすぐ近くまで退いてきたギャロップにリュウマが問いかける。小さく嘶いたギャロップに満足そうに頷くと、リュウマはマサムネに向き直った。

「今までの二匹……フカマルとアリアドスもなかなか良い動きをしていたが、そのブラッキーは段違いだな」

「ブラッキーは、某の最初の相棒でござる。イーブイの頃より数々の苦難を超えてきました。こやつは手強いでござるよ！」

「確かにそのようだな。クレナイが攻撃型のスタイルに対し、そこらは耐久型ってところか。おもしれえ。クレナイ、“にほんばれ”

「ヒインッー！」

リュウマの指示に、ギャロップが高く嘶く。すると、それまで陽の射すことがなかったウバメの森が、少しだけ明るくなる。大技で一気にケリを付ける気なのだと、マサムネは判断した。

ギャロップの体を炎が纏ったのと同時に、ブラッキーからも凄まじいエネルギーが放たれる。

「ブラッキー、“ギガインパクト”！」

「クレナイ、“フレアドライブ”！」

二匹の凄まじいエネルギーのぶつかり合い。余波として漏れ出たエネルギーが、小さな爆発をフィールドに起こした。

砂煙もようやく収まった頃、二匹はフィールドの真ん中で対峙していた。ギャロップはまだ少し余裕がありそうだが、ブラッキーの息は荒いものになっている。おそらく、“ギガインパクト”の反動であろう。

試合を続行させようかトイロが決め兼ねていると、先にマサムネが片手を上げた。

「降参、致す」

「ブラッキー!？」

マサムネの言葉に、ブラッキーが驚くように声を上げた。まだまだ自分はやれる。そう言いたそうにマサムネを見上げるが、マサムネは首を横に振った。

「無理をするな。おぬしは良くやった。だから、休め」

「……ブー」

明らかに不満そうにブラッキーは頬を膨らませたが、大人しくマサムネの元へと戻った。

それを見て、リュウマもギャロップをボールに戻す。最後に、トイロが右手を頭上に上げた。

「決着！」

こうして、マサムネとリュウマの三回勝負は、マサムネの全敗という形で幕を閉じたのであった。

数時間後、トイロたち一行は再び祠の調査を再開し、あらかた調べ終えた頃、リュウマの提案で『とっても良い場所』に連れていかせてもらうことになった。

その『とっても良い場所』とは……、

「うわっっ！」

「素敵！ 温泉だわ！」

そう、『温泉』であった。

トイロとシレンの反応に、リュウマが気を良くする。

「昔、旅で通った時に見つけた温泉なんだ。所謂『秘湯』ってヤツ

だな」

二人が喜ぶ姿に顔を綻ばせるリュウマの隣で、マサムネも感嘆のため息をついていた。

「確かに、疲れを癒すにはとても良い場所でござるな」

「だろ？ さすがに炎タイプは入れないが、他のポケモンたちなら大丈夫のはずだ」

「はい。みんな、出てきなさい！」

「ボクも〜。みんな、ゆつくり癒されたまえ〜」

リュウマの言葉に頷きながら、シレンとトイロはモンスターボールを放る。中から出てきたポケモンたちも、温泉に歓声を上げて喜んだ。

ポケモンたちが喜ぶ中で、リオルが物珍しそうに温泉を眺めている。トイロは淡く微笑みながらリオルのそばにしゃがんだ。

「リツちゃん。これは『温泉』と言っただよ〜」

「……………う？」

「温泉はね、入るととっても気持ち良くて、疲れが一気に吹き飛んでしまうのだ〜」

「うー？ ……………う！ うー、うー！」

トイロの言葉に頷きながら、リオルは温泉に恐る恐る手を入れた。だが、熱いことを予想していなかったのか、驚いたように入れた手をすぐさま引っ込めるとトイロに飛びついた。

リオルの反応に、トイロは笑いながらリオルの頭を優しく撫でた。

「熱くてびっくりしたのかね？ でもね、この熱さが体にとっても良いんだよ〜」

「うっ？」

トイロの言葉に納得がいかないのか、リオルはしきりに首を傾げている。

そんな姿を見て、リュウマが驚きの声を上げた。

「そいつ、喉が悪いのか？」

「うん。ボクもちゃんとは知らないんだけど、リツちゃんはうまく話すことができないんだよー」

「あー、なるほど。道理でな……」

トイロの答えに納得がいったのか、リュウマは一人で頷いた。おそらく、“聴こえた”声に何かあったのだろう。だが、トイロにとつてそれは大した問題でもなかったため、特に追求するのは止めた。リュウマもそれ以上何かを言う気はなかったのだろう。気を取り直すように、「うっっ」と小さく頷いて指を軽く鳴らした。

「じゃ、ここはレディーファーストっーことで、トイロたちから先に入れよ。俺らはその後入るから」

リュウマの紳士の申し出に、もちろんトイロは諸手を挙げて喜んだ。

「わーい！ ではハクちゃんとクロくんも一緒に入ろうではないかー」

「チョゲ、チョゲキッス！」

トイロがそう言いながらトゲキッスのハクに飛びつくと、トゲキッスも嬉しそうに鳴いて答えた。

だが、

「……………バーン」

バンギラスのクロは、一度だけ首を横に振った。その頬は、若干赤い。

そんなバンギラスの反応に、トイロは頬を膨らませた。

「むー。入るの！ クロくんが入らないならボクも入らないー！」
「……………ギー」

その場でじたばたと喚く駄々っ子と化したトイロを見て、バンギラスは実に面倒臭そうにため息をつきながらリュウマたちに視線を投げた。

さすがに哀れに思ったシレンが、助け舟を出そうと口を出す。

「じゃ、じゃあトイロ。ダークライが代わり……………はダメかな？」
「わ、私か!？」

もちろんシレンはそんなつもりは実際にはなかったのであるが、よほど驚いたらしく突然の指名を受けたダークライが顔を真っ赤にしながらか声を上げた。

しかし、トイロは数秒ほどダークライを見た後、首を横に振った。

「ダーちゃん、今シレンの艶姿を想像したと思うからダメ」

『んなつー!』

「ぶっ!」

「あ、ああ艶すすす〜!」

「ブフウツ! ブ、ブブ……………イ」

トイロのトンデモ発言にリュウマが吹き、マサムネがプチ発狂しかける。なぜか、シレンのブイゼルまで地面に伏せて昇天した。

……まあ、アレだ。みんな健全な男の子なのである。無理はない。決して彼らの評価を下げてはいけない。

しかし、世の一般的思考を持った女子は、そうは割り切れなかったようだ。

「……ダークライのすけべ」

『誤解だああああ！』

ダークライの悲痛かつ切ない叫びが、ウバメの森に木霊した。

数分後、

「ん〜。癒される。極楽だ。この上ない最高の極楽だよ〜」

『はふうう〜。チヨー気持ちいい〜』

『ほど。きもち……』

温泉に浸かりながらゆっくりと伸びをするトイロの横で、マリルとトリオルが至福の表情を浮かべていた。

もちろん、トイロの耳には「るりる〜」とか「うー」という鳴き声しか聴こえてはいない。だが、マリルの表情で大体の意味を捉えたらしく、トイロはマリルたちの頭を優しく撫でた。

「気持ちいいよね、まあちゃん。それにリツちゃん。ハクくんもそう思うのであるっつ〜」

『思つのだつ。温泉最高なのだつ!』
『ぼくもおもーう。ハクにいとおんなじー』

トイロの言葉にトゲキツスとトイロのリーファイアが答える。その横では、リュウマのリーファイアとミロカロス、それにシレンのミミロルが何やら会話をしていた。

『ソウさんとリョクさんってすごくすごーく綺麗! リョクさんの毛並みはまるでビロードみたいだし、ソウさんの鱗もすごくすべすべの滑らか〜。羨ましい〜』

『あら、素敵な褒め言葉、ありがとう。ふふ、一応気をつけてはいから、そう言っただけだと嬉しいわ』

『ありがとうなのです。ミミイさんも、毛並みが綺麗なのです。さすがはコーディネーターのポケモンなのです』

『そ、そっかな〜? えへへへへ。ちよつと照れちゃうかも〜』

照れて変な動きをするミミロルの後ろで、“ネガフォルム”のチエリムが小さくため息をついた。

『チエリイさん、どうしたのです? 元気がないのです』

『あ、チエリイはあれが普通なの。あの子、“ポジフォルム”ならすぐ元気なんだけど、こんな陽が射さない場所だと無口な“ネガフォルム”のままなの。きつと太陽の光を浴びたいんだと思うわ』

『では、私の“にほんばれ”で』

『野生ポケモンの体内時計が狂うから、それはやめなさい、リョク』

長い尻尾で“にほんばれ”をしようとしたリュウマのリーファイアを軽く小突くミロカロス。

またまたその隣では、シレンが伸びをして温泉を満喫していた。

「リュウマさんに感謝しなくちゃね。ほんとに気持ちいい……」
「……さっきはああ言ったけど、ダーちゃんたちの気持ちから
ないわけではないね……。……羨ましい」

気持ち良さそうに頬を緩めるシレンを、トイロは羨ましそうに見
つめる。もちろん理由は、自分にはない豊かな胸元だ。

トイロの視線に気づいたシレンは、すぐさま胸元に両手をやって
そこを隠す。

「こ、こら！ 見世物じゃないわよ！ っていつか、そんなにジッ
と見ないで！」

「む〜！ ソウちゃん、シレンを押さえたまえ〜。あの豊かな胸、
マサムネだけに堪能させるなんてすぎる！ ボクもまふまふす
るのだ〜！」

『しょうがないわね……。ごめんなさいね、シレン』

「ええ！ ね、ほんとに押さえないでよ！？ やあっ！ くすぐっ
たいってば！ トイロやめて〜！」

「まふまふ〜！」

「きゃああああ！」

そんなこんなで、女子たちは一名を除いて楽しく温泉を満喫して
いた。

そしてそれを、オレンジの物体が草の茂みからこっそりとのぞき
見をしていた。

『くうっっ！ やっぱしシレンのダイナマイトボディは何度見ても
飽きねえぜ！ にしても、トイロちゃんほんとに胸ないんだな……。』

ちゃんと栄養取ってんのかアレ」

『ビビ。ブイのすけサン。何ヲシテイラツシャルノデスカ?』

茂みから温泉をのぞき見るオレンジの物体　シレンのブイゼルに、ジバコイルのシロガネが話しかける。

ブイゼルは茂みから顔を出してジバコイルを見上げると、素敵な笑顔を浮かべながらグーサインを出した。

『ハツハー。シロガネ、お前はそれでも漢おとこか!?　女子が温泉に入っている間にすることといやあただ一つ。そう、ザ・のぞき

”だぜ!”』

『……私ハ正確ニハ性別不明デスノデ。ソレニ、ソノ行為ハ完全ニ犯罪カト……』

呆れるジバコイルを余所に、ブイゼルは嘆くように天を仰いだ。

『ああ、神よ!　この世に生んでくれたことに今感謝しよう!　湯けむりの中に浮かぶヴィーナス、そう、シレンを生んでくれてマジ感謝!』

『……(伝説ノポケモンヲ散々コケニシタ上ニ、自ラ率先シテ自分ノトレーナーノ入浴ヲ覗クブイゼルナント、ハジメテ見マシタ……)』

完全にただの阿呆と化しているブイゼルを見ながら、ジバコイルは大きなため息をついた。

そこへ、今度は炎ポケモンたちのブラッシングを終えたリュウマがやってきた。

「ん?　お前ら、そこで何をやっているんだ?　……ってか、ブイのすけは何故天を仰いでいるんだよ?」

『ア、リュウマ。実八……』
『おう、リュウマじゃねえか！ お前も漢なら興味はあるだろう。共に樂園へといざ参ろうじゃあねえか！』

リュウマが来たことに気づいたのか、ブイゼルはすぐさま目線を天からリュウマに直し、胸を張ってなんとも阿呆な提案をする。

しかし、リュウマの反応はイマイチであった。

「いや、樂園つて意味分かんねえし」

『かーっ！ 察しろよ。ここはどこだ？ 目と鼻の先には何がある

！？ それを前にして漢がすることなんて一つしかねえだろ！？』

『……モウ付キ合イキレマセン……』

あの表現でまず一から十まで理解しろというのが難しい。それで伝わらなかったことに苛立つブイゼルの横で、ジバコイルが小さくため息をついた。

そこで、ますます訳が分からずに首を傾げるリュウマの耳に、温泉でくつろぐ少女たちの会話が飛び込んできた。

「うわわ〜。シレン、ほんとにおっきいだね〜。ねね、何を食べたらこんなに大きくなるのかね〜？」

「いや、特に何も気をつけてないけど……。あ、でもさすがに今のままだと近い将来垂れる可能性があるって本で読んでからは、胸筋を鍛えるストレッチとかやってるかな。なんて言うの？ 『まずは土台作りから』みたいな」

「ほうほう。では、ボクにもそれを教えてはくれないかね〜？」

「あ、うんいいよ。まずはね……」

温泉で何やらストレッチ講座を始めだしたシレンたちに、ブイゼルは茂みの向こうから必死にツッコミを入れはじめた。

『でえええ〜!? そりゃシレンみたいにダイナマイトなボディも良いが、トイロちゃんのお乳もそれはそれで萌えポイントなんだぞ! シレン、教えるな、教えるんじゃないやねえ!』

(……コイツ、本当にブイゼルか? 実は後ろにチャックでも付いているんじゃないやねえだろうな……)

(……モウ、私たちノ想像ヲ遙カニ超エテイマスネ……)

さすがに、リュウマも理解できたらしい。ジバコイルと同様に呆れた視線をブイゼルに投げやりながら、リュウマはその場に腰を下ろしてブイゼルの首根っこを軽くつまんでひょいと持ち上げた。

「ブイのすけ。戻るぞ」

『ダメだダメだダメだ! 楽園はすぐそこだ、漢には危険を冒してもやり遂げねばならんことがあるんじゃない!』

「いやいや。言ってることはカツコイイが、中身は相当不純だぞお前」

ついつい苦笑い混じりに突っ込みを入れるリュウマの耳に、またまた少女たちの会話が飛び込んできた。

「ねね、そのメロンみたいな胸、触ってはダメなのかね〜? 是非ともあやかりたいよ〜」

「メロン言うな! って、さっきから何度もダメだって言ってるでしょうが!」

いかにも羨ましそうなトイロの声とシレンの焦り声に、リュウマの耳が微かにピクリと動いた。

続けて、リュウマのリーフィアとミロカロスが口を開く。

『……メロンというより、私にはカイスの实に見えますのです』
『リヨク、それは大きすぎない？ でも、人間ってどうして胸の大きさにこだわるのかしら？』

『シレンちゃんと比べると確かにトイロちゃんは小さいのさっ。それに“大は小を兼ねる”って聞いたことがあるのさっ』

(……し、シレンの奴そんなにでかいのか！ 反面、トイロは小さい……って、何考えてんだ俺は！)

脳内でちよつとした葛藤を繰り広げるリュウマを余所に、温泉の楽しい会話は続く。

『あらハク。それはあたしの可愛いトイロちゃんの悪口と取っついていかしら？ この場であんただけ氷づけにしてくれようか！』

『びえええ〜！ まあねえが怖いよトイロちゃん！』

『……おんせ、きもち……』

『いやリツちゃん。そこはどこ吹く風じゃダメじゃない？』

(……カイスの实は確か二十センチ近くあったよな……って、やめろやめろやめろ！ 想像するな俺！)

『……リュウマってさ、ひよつとしてムツツリ？』

『ブイのすけサンハドコデソナ言葉ヲ覚エルンデスカ……？』

必死に自身の欲望と戦うリュウマを横目に流しながら、ブイゼルは再び茂みから温泉の方を見る。

ジバコイルはもう付き合いきれないのかそれまでで一番大きなため息をついていた。

と、そこへ、

「……リュウマ殿は一体何をそんなに必死になって悩んでいるのでござるか？」

『まさむー、リュウマが変わ。クロりんは何でか分かる？』

『クロりん！？ おい、ピカチュウ！ 俺はクロだ！ そんな風に変な呼び方をするな！』

ピカチュウを肩に乗せたマサムネと、バンギラスのクロがリュウマたちの元へとやって来たのだ。

ちなみに、マサムネのピカチュウはおっとりとした性格の男の子である。『まさむー』はマサムネのあだ名である。当の本人は、ピカチュウからそんな風に自分が呼ばれていることなど全く知らないのであるが。

『……で、シロガネ。リュウマは何やってんだ？』

『そうそう。シロりん教えて』

『エエ、ソレガダスネ……』

嘆息をつきつつも、シロガネがこの場で起こっているあまりに馬鹿馬鹿しい事柄について二匹に説明しようとした矢先であった。

『お前たち、そこで何をやっている？』

おそらく、今一番ここに来てはいけない存在ヤツが来た。

そう、シレンの一番最初の仲間ポケモン　　ダークライが。

『あ、ダーちゃんだ』

『む、ダークライでござるか』

『……もう、ノーコメントで行くことにするよ』

「？」

「ダークライはピカチュウの発した『ダーちゃん』に対してそう言ったのだが、ピカチュウの言葉が分からないマサムネは、ダークライの言葉の意味が判らず首を傾げた。

一方のリユマは、まだ悩んでいるらしくうんうんと頭を抱えている。だが、それもほんの一瞬のことであり、すぐにガバツと起き上がった。

「だ、だめだだめだ！ ブイのすけ、やっぱ止める！」

「ああ？ てめえマジでそれでも漢かよ？ ブイのすけ様は止めねえぜ！ 例えあのムツツリダーちゃんがやって来ようとな！ ガハハハハ！ ダーちゃん程度なら、“アクアジェット”で一発だぜ！」

リユマの制止も聞かず、ダークライが後ろにいることなど全く気づかずに、ブイゼルは高笑いをする。

もちろん、その場にいた全員が真っ青になっていたことも、彼は全く気づいていなかった。ブイゼルの言葉を理解できないマサムネでも、何故か彼がダークライを馬鹿にしていることはダークライの様子からすぐに理解できたらしかった。

『……………クロス』

ダークライが放ったのは、その一言だけであった。

どこか微妙に片言っばかったことは、どこかに置いておこう。

だが、ブイゼルの反応は意外なものだった。

『……………殺せるものなら殺してみな？ ムツツリダーちゃん』

このブイゼル、恐るべし。

そう全員が思った矢先であった。

『貴様、またやっておるのだなあああ！』

『やっているさ何が悪い！！』

ダークライの“あくのはどう”がブイゼルに向けて飛んでいく。それに対し、ブイゼルは“かまいたち”で応戦をした。

そこからは二匹の技の攻防が更に激しさを増していった。呆然とその攻防を見つめるリュウマたちの元へと、今度はシレンのモウカザルがギャロップのクレナイに跨ってやってくる。

『何か騒がしいと思ったら……。主様、これは一体どういうことですか？』

「おお、クレナイか。いや、俺にもなんだかさっぱりな状況になってきてな。説明しづらい」

『……はあ？』

頭をぼりぼりとかきながら答えるリュウマにギャロップが首を傾げると、ギャロップの背から飛び降りたモウカザルが暢気に欠伸びしながらギャロップの戸惑いに答えた。

『大方、シレンの風呂をブイのすけが覗いてダークライに怒られるんだろ。いつものことだよ。……あ、止めるのは危険だよ。とばつちりを受けるから、やめといた方がいい』

『私ハアノ中二飛ビ込ムノハ絶対二嫌デス』

『俺も嫌だぜ。さすがにあれは無理だ』

『ク口までそういうのであれば、確かに危険ですね。止めておきま

しょう』

「そうだな……絶対にダメだな」

モウカザルの忠告を、リユウマたちは素直に聞いて未だ続く二匹の攻防を見つめる。

だがここに、そんな忠告を聞かない 否、聞けない人物が、一人だけいた。

「に、二匹とも！ こんなところで暴れてはダメでござるよ……！」

そう、マサムネである。

マサムネは、慌てて二匹の中を仲裁しようと駆け出す。

『うわわわわ！ まさむーダメだよ……！』

さすがに焦って叫ぶピカチュウであったが、そんなピカチュウの言葉もマサムネには届かない。

そして、二匹の中にマサムネが割り込む一瞬前で、

それまでぎゃあぎゃああと騒いでいた二匹が、全く同じタイミングでマサムネを睨みつけた。

二匹の全く同じ鋭い視線に、マサムネも思わずその場に立ち止まる。

そこからの二匹の連携は、目を見張るものであった。全く同じタイミング且つ全く同じ姿勢で、ブイゼルは“みずのはどう”、ダイクライは“シャドーボール”の構えを取る。

「ブイブイ……（てめえは……）」

『すっこんでろ……！』

その言葉と同時にマサムネに放たれる、二つの技。

この二匹。何だかんだ言って素晴らしいコンビネーションである。

「んなっ！ ゲフウウッ！」

二匹の技が、マサムネに綺麗にヒットした。マサムネの小さな体が、宙に吹き飛ばされる。

『わあああああ！ ま、まさむー！ このままじゃ、このままじゃああああ！』

マサムネの肩にしがみついたピカチュウの悲鳴が、その後の展開を見事に示していた。

『……あーあ。可哀想になあ、あいつ』

『……哀れだな』

『彼二罪ハアリマセンノニネ……』

『主様がとばつちりを受けなかった。彼には悪いが、私は少しホッとしている』

「……マサムネ」

マサムネの落ちていった方角を見て、小さくため息をつく男性陣。数秒後、大きな音が温泉の方で鳴り響いた。

更に数秒後、

「うにゃあああああああああああああああ！」

「きゃあああああああああああああああ！」

「あー！ マサムネずるいー！ ボクもまふまふしたいのだ〜〜」

「！」

実際に楽しそうなトイロの声、リュウマたちの耳に届いてきたと言っ。

今回のテーマ

『温泉ネタと言えば覗きネタでしょう（何）』

『リュウマとポケモンたちの会話』

『意外と気の合うあの二匹』

サブテーマ

『哀れマサムネ（いろんな意味で）』

どうしても書きたかったコメディネタでした。

最終的にとぼつちりを受けたのはマサムネでしたが、ダーちゃんもかなり弄られていました。

そして、リュウマもたくさん葛藤していましたww もちろん、このネタについては赤神先生から了承をもらった上で書いています。

リュウマの『ポケモンと会話ができる』という能力を生かす場面をこの程度しか思いつかない自分も自分ですが、書いていてとても楽しかったです（オイ）

そして、何故かトイロのポケモンたち以上にたっぷり活躍しているオレンジのあいつ。

最初はそこまで大活躍させるつもりはなかったアイツが、ここまでこの話で大暴れするとは思いませんでした。

彼には『自由』の二文字が誰よりも似合うと思います。

さて次話ですが、コガネ編に入る前にまたまたIntervalを挟む予定です。

こちらはこの話よりも先に出来上がっているので、あと少しだけ推敲をした後、なるべく早いうちに更新しようと思います。

それでは、またお会いしましょう。

Interval ビジネス(前書き)

今回は早くに更新できました。

いつもこの位の速さで書き上げられたら楽なのに……(オイ)

今回は旅がらすはじめての試みに挑戦しています。

そして、トイロたちにとっての敵サイドがメインのお話。更に、そのリーダーが登場です！

では、ウバメとコガネを繋ぐInterval、どうぞお楽しみくださいw

Interval ビジネス

ジョウト地方 シロガネ山

霊峰と呼ばれる、この国で最も高い山。そのシロガネ山の麓に広がる森の中に、一軒のログハウスが建っていた。

ログハウスの上空から、風を切る音が響く。音はログハウスの上空で停滞すると、滑らかな音に姿を変えてログハウスの目の前に降りてくる。

風を起こしていた元 “かえんポケモン” リザードンの背中から、大きな紙袋をいくつも抱えた大男が降り立った。黒く逆立った短髪に、薄い桃色のポロシャツとジーンズを着た姿からでも肉体の屈強さが窺える巨漢 闇組織をターゲットに暗躍する人材派遣団体“七人の咎人”の第三位、“憤怒”のイラである。

イラはリザードンをモンスターボールに戻すと、紙袋を抱え直してログハウスの玄関に続く小さな階段を上っていく。両手塞がりなので、ノックをするようにドアを足で何度か蹴った。

少し経って、ドアノブがガチャリと回った。少し後ろに下がってドアが開くのを待っていると、ドアがイラの方へと向かってきた。人間が開けているには少しゆっくり過ぎるその動きを見つめていると、反対のドアノブに引っ付くようにしてぶら下がっている青い体躯の小さなポケモン “ペンギンポケモン”のポツチャマと目が合った。

「んあ？ なんだぼちかよ。てめえの主人は一体どうしたんだ？」

「ポチャ。ポポチャ、ポチャマツ！」

てつきり“彼女”が開けてくるのだと思っていたイラは、予想が外れたこととドアを開けてきたのが“彼女”のポツチャマであった

ことに少し驚きの表情を見せた。一方、ぼちと呼ばれたポツチャマはドアノブから飛び降りると玄関に揃えられた靴を一瞥し、フンツと鼻を鳴らす。その姿は、どこか不機嫌そうであった。そもそも、彼は^{ぼち}プライドが高すぎる故、機嫌の良い時よりも悪い時の方が多かったりするのではあるが。

ポツチャマの視線を、イラも追いかける。ポツチャマが軽く蹴りを入れた黒い男物の革靴に、イラもポツチャマの不機嫌の理由が分かった。

(珍しいな。直接来るとは……)

革靴の持ち主に心当たりのあったイラは、小さくため息をつきながらイラは靴を脱いで玄関に上がる。そのまま、リビングへと続くドアの前に立つと、ポツチャマを一瞥した。

ポツチャマはイラの視線に気づくと、小さく鼻を鳴らしつつもリビングへと続くドアのドアノブに飛びつき、器用に体を使って回す。イラは行儀が悪いということを一切無視し、ポツチャマの開けたドアを足で前へ押した。

「あら、おかえりなさい。イラ」

「……ああ」

イラとポツチャマをリビングで迎えたのは、十代半ばくらいの少女であった。流れるような黒髪を肩の辺りで揃え、白いリボンでハーフアップに纏めている。白いブラウスに薄桃色のカーディガンとベージュのロングスカートを身に付けた少女は、ソファに座って紅茶に口をつけていた。

イラは、少女の言葉に短く返すと少女の向かい側のソファに座る男性 革靴の持ち主だ の方へと視線を移し、それが自分の予想と合致したことを知って落胆のため息をついた。

「なんでてめえがここに居やがる」

「……随分な挨拶じゃないか。これまで多くの仕事を共にしてきた仲だというのに」

イラの無礼極まりない物言いに、男は小さく肩を竦めた。三十代の半ばに入ったように見える眼鏡をかけた男は、羽織った白衣を正すと紅茶に口をつける。

さすがにイラの言葉に失礼なものを感じたのであろう、男と向き合っていた少女がイラを見上げ、苦笑いを浮かべる。

「イラ。ナトロンさんはビジネスの話をしにいらしたのよ。失礼な言い方はやめてちょうだい」

「ビジネスねえ……」

闇組織をターゲットにした人材派遣。

それが“七人の咎人”の“商売”である。

無論、これは“仮の姿”だ。彼らの本来の目的は別にあり、ただ生きていくため、力をつけていくためにこの仕事をやっているにすぎない。

しかし、たまたま強力で曲者揃いのトレーナーの集まりだったことが幸いしたのか、この商売は概ね繁盛していた。リーダーである“傲慢”のスペルヴィアも、趣味の一つとして挙げている“人間観察”がたっぷりと堪能できて大いに結構。と喜ぶ始末だ。

（まったく……。 “強欲”の野郎も面倒な提案しやがって……）

この提案によって最も大きな“とぼっち”を受けているイラは、今はここにいない提案者である“仲間”の顔を思い浮かべ、小さくため息をついた。

「ポチャーツ！ チヤマ！ ポチャマツ！」

不意に、ポツチャマが大きな声で鳴いた。自分を無視して話が進み始めたことに怒りを覚えたのであろう。すると、少女が小さく微笑んでポツチャマを見やる。

「ごめんなさい、ぼち。別に貴方のことを蔑ろになんてしていないから、安心してちょうだい」

「ポッチャッ？」

「本当かよ？」とでも言うように、自身の主人である少女をポツチャマは見上げる。その表情は明らかに不機嫌そのものであったが、少女は別に気にすることなく傍まで歩み寄ってきたポツチャマを抱き上げて膝の上に座らせた。

ようやく機嫌を良くし、少女の膝の上でふんぞり返るポツチャマを見て、ナトロンと呼ばれた男が紅茶のカップから口を離した。

「……話を戻して構わないかね？ スペルヴィア嬢」
「構いませんよ、ナトロンさん。……イラ」

ポツチャマの頭を撫でつつ、少女がイラに声をかけてくる。ちょうどリビングのすぐ目の前にあるキッチンに紙袋を置こうと動き始めていたイラは、少女の声に背後を振りかえった。

「んあ？」

「荷物を置いてからでいいから、貴方も座ってちょうだい」
「……また俺様かよ」

客がナトロンであったことから大体は予想していたものの、ちょっとは違うことを期待していたイラは少女 “七人の咎人” のり

「ダーであり、第一位“傲慢”のスペルヴィアの言葉に大きく肩を竦めた。

しかし、イラはスペルヴィアの言葉には逆らえない。手早く荷物をキッチンまで運ぶと、すぐに二人の元へと戻りスペルヴィアの隣にドカツと腰を下ろした。

「……で、今回は何の用だ。いつもなら手紙やら電話やらで話をつけるアンタが、直々にここまで来るなんて珍し過ぎるだろ」

「まあ、たまにはこういうのも良いと思ったただだよ。やはりビジネスの話は互いの顔を直接見てする方が良いからね」

「あー、そうですか……」

自分から振っておきながら、興味なさそうにイラは答える。しかし、ナトロンはそんなイラの反応に対しても嫌な顔一つせずにスペルヴィアに再度視線を戻した。

「今回も、彼とクレセリアに力を貸してほしいと思っている」

「ええ。またいつものように、そちらの研究成果を報酬として受け取らせていただきますね」

二つ返事で依頼を承ったスペルヴィアに対し、ナトロンの表情が少しだけ緩む。

「実は、今回はちょっと面倒なことをお願いしようと思っている。だから、報酬にも色をつけよう」

「……面倒だあ？ てめ、いつ面倒じゃない依頼をこっちにしてくいたつつうんだよ」

「よしなさい、イラ。……ナトロンさん。いくら報酬に色がつくとは言え、イラは私の“所有物”です。依頼の内容によっては、イラを貸し出すことはできかねます」

ナトロンに咬みつくイラを宥めつつ、スペルヴィアはナトロンをじっと見つめる。イラを“仲間”と呼ばずに“所有物”と呼ぶ辺りが、二つ名の“傲慢”を如実に表していた。

スペルヴィアの言葉に、ナトロンは「確かにその通りだ」と答えた。

「だが、決して危険なことではない。それに、“追加報酬”もスペルヴィア嬢を必ず満足させるはずだ」

「勿体ぶらないで教えてくださいな。私、そこまで気の長い方でもないですよ？」

まだイエスと答えていないものの、スペルヴィアが多少乗り気になり始めたことに気付いたのだらう。ナトロンは小さく微笑むと今回の“依頼”と“追加報酬”について話を始めた。

数分後、スペルヴィアが満足そうに何度か頷いた。

「確かに、危険度はこれまでと比べて段違いに低い上に、その追加報酬はとても魅力的です。……いつ、イラをお貸しすればよろしいのかしら？」

「できれば、今すぐ。クレセリアに“あの子”のことをきちんと知ってもらわねばならないしね」

「承りました。……ということではイラ。しばらくは向こうで頑張っ

「てちょうだいね」

「……………」

正直、イラは断りたい気持ちでいっぱいだった。

まず、イラはナトロンがあまり好きではなかった。彼が依頼してくる仕事は常にどこか血生臭い匂いがついて回っていたし、そのせいで見たくもない現実を何度か目の当たりにしたこともあった。

それに、五年振りに再会したシレンのことが、イラの脳裏を過ぎった。彼女はこのジョウト地方にいる。今ここでナトロンの依頼を受ければ、しばらくはジョウトに戻ってはこられないだろう。それは少し嫌だった。

しかし、

「……………分かったよ」

イラは、スペルヴィア彼女には逆らえなかった。

五年前、大切な存在を奪われ、自身の運命に絶望し、“世界”から逃げだしたイラに手を差し伸べてきた人物。共に新たな“世界”を形成しようとする声をかけてくれた人物。まさに、“恩人”とも呼べる存在に逆らおうとするほど、イラは無礼者ではないつもりでいた。イラの答えに満足したのか、スペルヴィアが淡く微笑む。

「交渉成立ですね。では、早速向かわれますか？」

「ああ。イラ、私たちのアジトの場所は知っているだろう？」

「一応はな」

頭を切り替え、一旦ジョウトのことは忘れて“仕事”に行こうとイラは決める。

(次に戻ってきたとき……、そのときに、アイツから答えを聞き出してやる)

最後にかつて互いに想い合っていた何よりも大切な少女の顔を思い浮かべた後、イラはナトロンと共にログハウスを出て行った。

イラとナトロンがログハウスを出て行ってからしばらくして、スペルヴィアはポツチャマを抱いたままソファから立ち上がった。そのまま、ゆっくりとテラスへと続く大きな窓に向かって歩いていく。

「……信じる、という行為は、とてもハイリスクな行為だわ」
「ポチャ？」

スペルヴィアの言葉に、ポツチャマが小さく首を傾げる。スペルヴィアは微笑んでポツチャマの頭を優しく一撫ですると、窓を開けてテラスへと出た。眼前に広がるシロガネ山を望みながら、スペルヴィアは言葉を続ける。

「信じれば信じた分だけ、裏切りを受けたときの精神へのダメージはとても大きい。信じることは、裏を返せばいつか裏切られると言うこと。それが意図的でないとしても、それをどう受け止めるかは相手次第。それがどんな形であれ、裏切ると言うことはその人の信頼を壊すと言うこと」

「……チャ？」

スペルヴィアの言っていることがいまいち分からないのか、ポツ
チャマはしきりに首を傾げるばかりだ。

だが、それでもスペルヴィアは構わず言葉を続けた。

「激しい憎悪に駆られ、復讐を心の奥底に隠した者よ。自身を救い、
自身の心の支えであると信じ続けたものこそが復讐の対象であると
言われたとき、貴方の心はどんな壊れ方をしたの？ 私はそれが知
りたい。心の支えが復讐となった瞬間に貴方が何を感じたのかを知
りたいわ。そうすれば……」

そうすれば、私はもっと人間あなたたちを知ることができるもの。

スペルヴィアのそんな呟きが、シロガネ山麓の空気に溶けて消え
た。

Interval ビジネス(後書き)

今回のテーマ

『リーダー登場』

『信頼するということ』

サブテーマ

『同時投稿』

“七人の咎人” リーダーのスペルヴィアが遂に登場です。

彼女も偉そうですが、それよりも彼女のポツチャマの方がかなり偉そうですね。アニメのポツチャマ以上をイメージしてキャラメイクしております。

ただし、彼の名前は『ぼち』です。そう、『ぼち』。

重要なので二回書きました(笑)

もう一つのテーマ。

『信頼と裏切り』とも取れます。

あれは一つの考え方であり、決して全てがそうではない。という前提で読んでいただければなと思います。

信頼することと裏切りが必ずしも表裏一体ではなく、ただそうなりやすい。という考えです。できればそうでないことが一番望ましいですね。

そして、今回はプラネット先生との同時投稿コラボですw

赤神先生とのコラボがまだ続くので単発ですが……。

是非、プラネット先生の『ポケモンレンジャー フィーリントー』

の方も読んでみてください。ぼちがこちら以上に偉そうて可愛いで
すw(何)

しかし、こんなに私の作品がコラボ祭で良いのだろうか……。しか
も、人気作品と休みなしに続けてとは……！ 自分でもビックリし
てます(何)

が、がんばります！(滝汗)

次回からはコガネ編！

最近出ていなかったあの『猛 獣』が満を持して登場……！？ ト
イロ、逃げる、逃げるんだー！(笑)

では、また次回〜ノシ

P・18 最悪な再会？（前書き）

お久しぶりです。ずいぶん長くかかってしまいました。

いや〜。楽しいですね、ポケパークWii!!
ピカチュウの可愛さに癒されまくっております。

そして、難しいですね、ゼルダの伝説!!

まだ序盤だと言つのに諦め始めているチキンでございます。

……遊んでばっかですみません。

そんなこんなですが、今回からコガネ編です！ それでは、どうぞ！

P・18 最悪な再会？

人は、増えすぎた。

人は、発展しすぎた。

人は、進化をしすぎた。

人は、自分しか見ていない。

何と、愚かなことか。

何と、哀れなことか。

人とポケモンが行き交う、発展の大都会・コガネシティ

昼前にウバメの森を抜けたトイロー行は、森の出口から出る定期馬車に乗って34番道路を超え、遂にジョウト地方一の大都市であるコガネシティに到着した。

……のであったが……。

「おっ。なかなか似合ってますね、リュウマさん。じゃ、次はこれ、

お願いしま〜す」
「……またかよ」

コガネーのショッピングセンター、通称コガネデパートの中にある、とある有名洋服店の試着室にて、一人の少女に着せ替え人形と化せられた男たちがいた。

「っていうか、俺、あんましこういうのは……」
「だーめーでーすー！ 会った時から思ってたけど、リュウマさん黒ずくめ過ぎです！ せつかくカッコいいスタイル持ってらっしゃるんですから、お洒落しなくちゃ！ はい次はこっちのカットソーですよ〜」
「……………」

小さくため息をつきながら渡された服を手に試着室のカーテンを閉めたのは、灰色の髪に紫色の瞳を持った青年、リュウマ。ここ、ジョウト地方から遠く離れたアトラス地方の元・最年少ポケモンチャンピオンの称号を持つ彼を見事説き伏せて試着室に押し込めたのは、現在ジョウト地方でポケモンコンテストに挑戦中のポケモンコ―ディネーター、シレンであった。
と、そこへ、うなじで一つに結わえた赤茶色の長髪にヘッドギアのような額当てが特徴の少年 マサムネがやって来る。その両手には、色々な形の箱やら袋やらが抱えられていた。

「し、シレン殿。まだ買い足りないのをごさるか……？」
「だってだって！ 超格安セールなんだよ！ 今のうちに狙いをつけていた洋服買わないと、また高くなっちゃうじゃない！ 私のコンテスト衣装もそうだけど、リュウマさんの服も、みんなの服もここで買っちゃいましょう」

「いや、俺の服は良いからマジで……………」

シレンの言葉に静かに突っ込みを入れながら、リュウマは彼らの後ろにある幟のぼりを見て小さくため息をついた。彼らが今こうしている理由、『本日限定！ 全店半額セール！』の幟を見て。

が、そこでリュウマは、仲間が一人足りないことに気づいた。

「おい、マサムネ。トイロはどうしたんだ？」

「あ、姫なら先に屋上のフードコートで休憩をしたいと言うことで上へ上がられました。某も行こうとしたのですが、リュウマ殿だけにシレン殿を任せるのは可哀想だから残れと姫に言いつけられました……」

マサムネの現在の主君であり、リュウマの知り合いのとある考古学者の娘　トイロがいないことに気づいたリュウマが訊ねると、マサムネは苦笑いを浮かべながらそう答えた。

ちなみに、『姫』とはトイロのことである。

マサムネの発言に、シレンが頬を膨らませた。

「何よそれ〜！　まるで私がリュウマさんに迷惑かけているみたいじゃない！」

そんなことないもん。とそっぽを向くシレンであったが、男性陣の表情は冴えないものであった。

(……………突っ込みづれえな)

(……………突っ込み辛いでござる)

兎にも角にも、早いところこの長い買い物が終わることを祈るばかりの二人であった。

時を同じくして、コガネデパートの屋上では……。

「ん〜。やっぱり『シロガネ山麓のおいしい水』は格別だね〜。五臓六腑に染み渡る。とは正にこのことだよ〜」

「るりる〜」

「カー！」

屋上の端にあるパラソルの立てられた席に座って缶の清涼飲料水を飲むのは、太陽の光を受けて煌めく白髪が印象的な少女 オトナシ トイロ。いつもは白のロングTシャツに蒼いチェックのベスト、そしてハーフトイプのデニムパンツを身に着けている彼女だが、今日はずいぶん様変わりした格好をしていた。

「確かにボクは旅立つ前はこういう格好が主流であったけど、改めて着てみると少し不思議な感じだね〜」

そう言っって自分を見下ろすトイロ。彼女が今着ているのは、薄桃色からサーモンピンクへと変わるグラデーショナルの入ったマキシ丈のキャミワンピと白いサマーニットのカーディガン。靴もいつものトレッキングシューズではなく、白のパンプスを履いている。

所謂『森ガール』と称されるファッションに身を包んだ少女は、いつもとは少し違う雰囲気を感じていた。

もちろん、これの犯人もシレンである。

「頭もいつもと違うし、違和感ありありなのだよ〜」

「る〜り〜?」

「フカ?」

薄桃色に白のレースがあしらわれたシュシュでお団子に纏められた髪にそつと触れながら、トイロは再び缶に口をつけた。その様子を、『おいしい水』の入った缶を持ったマリルとフカマルが不思議そうに見上げている。

少し慣れない髪形が気になるのか、トイロはキャメルのボストンバッグから小さなポーチを取り出すと、その中に入れてある手鏡で自分の顔を確認した。シレンの手で薄くメイクまでされてしまい、トイロはイメチェンした自分に少しだけドキドキしていることに驚いていた。

(まさか、メイク道具一式買い替えされるとは思わなかったよ〜。でも、こういうのも悪くはない……のかな?)

少しだけ変わった自分を見て、トイロの脳裏にとある少年たちが思い浮かんだ。もう一人は、不器用ながらに真っ直ぐとした目を持った幼馴染。

そして、もう一人は……。

「そ、そこの森ガールちゅわん!!」

「へ?」

二人目を思い浮かべた矢先、突然近くで奇声を発する何かによって、トイロの脳内は掻き乱されてしまった。反射的に顔を上げると、油ギツシュでメタボリックな男がトイロをジッと見つめていた。

男のどこか気味の悪い視線に、トイロの背筋に寒気が走る。それを感じ取ったのか、マリルとフカマルが男を強く睨みつけた。が、

男はその視線に全く動じず、堂々とトイロに歩み寄ってくる。さすがに危険を感じたトイロは、男に向けて恐る恐る口を開いた。

「な、何なのかね？」

それが、いけなかった。

男はまるで、雷にでも打たれたかのように突然直立不動の体勢を取ると、一気に鼻息を荒くしたのである。

「ズツキユーーーーン！ その上から目線な言い方！ 森ガールフアッション！ どこか無垢で且つ穢れていない雰^{オーラ}囲気！！ 正にぼくのどストライクのだ真ん中なんですけどー！ 是非とも一緒にコガネ巡りをおおおお！」

ものすごいナンパであった。

ナンパされたのも初めてであれば、またサトル以上に堂々とした猛烈アピールに面食らってしまったトイロは、阿呆みたいに口をぽかんと開けたまま微動だにしない。

だがしかし、トイロの全身の神経は完全にこの男を警戒していた。

これ以上こいつを自分の元へと近づけてはいけない。

それは分かっていたものの、ここはデパートの屋上でトイロが座っているのはちょうど出入り口であるエレベーターから遠く離れた場所。逃げようにも距離があるし、何より道程の真^{ルート}前に男がいる。ポケモンで逃げようかとも考えたが、今は昼時で客も多い。マリルやフカマル、それに他の手持ちたちでは他の客にも迷惑がかかるかもしれない。

だがしかし、トイロは全身全霊でこの男を拒絶していた。気にしなければ良かった。男のことなど視界に入れなければ良かった。い

やむしろ、一人でここに来ていなければ、こんなやつが来ていても声はかけられなかったかもしれない。

(危険だ。非常に危険だ。正に八方塞だよ)

暢気にそう考えつつも、男を拒否しようと少しだけ後退った瞬間、男が目にも留まらぬスピードでトイロの元へと駆け寄り、何とその手を取ってきた。

トイロの口から、無意識のうちに小さな悲鳴が漏れる。

「ひいっ！」

「さあさあ！　まずはコガネ遊園地へゴーゴーですー！」

「る、るりっ！」

「カッファーー！」

男がトイロを引っ張り、男のスピードに呆気に取られていたマリルとフカマルがようやく我に返って動き出した、正にその瞬間であった。

「チセ。“ねこだまし”」

静かに響いた、声。

刹那、トイロたちの目の前で突然、大きな破裂音のような音が鳴り響いた。

「きよああああー！」

「きゃっ」

破裂音に驚き、男は情けない悲鳴を上げながらトイロの手を振り払うように離す。その勢いでトイロは思わず後ろに転びかけたが、誰かが後ろからふわりとそれを止めてくれた。

「……僕の大切な人に、手を出さないでもらえるかな？」
(……え?)

後ろから聞こえてきたのは、先ほどと同じ声だった。その声がいっつの間にか自分の後ろにいたことにも驚いていたが、その声が“知っている声”であったことにも、トイロは驚きを隠せなかった。慌てて、後ろを振り向く。そこには、先ほどサトルと同じように思い浮かべていた少年がいた。

「久しぶり、トイロ」

薄茶の短髪に鳶色の瞳を持った、優しげな雰囲気少年。花咲く町、ヨシノシティで出会い、そして別れた少年　　アリアが、そこに立っていた。

数分後。

「びっくりした。まさかキミがここにいるだなんて」
「僕もびっくりした。いろんな意味でね」

先ほどと同じ席に座り、コーヒーフロートのアイスを頬張りながら、トイロは淡い笑みを浮かべていた。向かいの席では、アリアがハーブティーの入ったポットをカップへと傾けながら同じように微笑んでいる。

あれから、怯んだまま呆けている男をアリアのフライゴンで地上へと運んだ後、トイロは再び席へと戻り、アリアをお茶に誘ったのである。助けてくれたお礼をしたいと言うのもあったが、また再び同じことが起こらないようにしたいと言うのも本音の一つであった。

「さつきはありがとうね。えっと……チセ？」

「エパツ。エイパツ」

トイロがアリアの肩に乗っているポケモン 藤色の胴体に先が手のような形をした長い尾を持つ“おながポケモン” エイパムに声をかけると、エイパムは満足そうに微笑んだ。先ほどトイロを救った“ねこだまし”は、このエイパムの技なのである。

エイパムはアリアの肩から降りると、マリルとフカマルに挨拶をしているようだった。どうやらエイパムはかなり気さくな性格のようで、マリルたちもすぐに笑顔になり、エイパムに挨拶を返している。マリルは長い尾を持つことで親近感が湧いているのか、楽しそうに飛び跳ねてもいた。

「アリアもここで買い物かね？」

「うん。半額セールは食いつかないわけにはいかないよ。携帯食料とか、ポケモンの道具とか、どっさり買い込んだじゃった」

微笑みを絶やさず答えるアリアの傍らには、確かにそのような物が入った紙袋が二つほど置いてある。自分たちとは違い、実に実用的な買い物に、トイロは思わず小さく吹き出した。

トイロが吹き出した理由を彼女の格好で理解したのか、アリアも

同様に小さく吹き出した。

「でも、さっきは本当に驚いた。あのナンパの仕方は無いよね」

「ナンパと言うより、人攫いに近い印象を受けたがね」

話はいつの間にか、先程のナンパ男の話になっていた。トイロの言葉にアリアは小さく頷きつつ「でも」と言葉を続けた。

「彼の気持ち、分からないわけじゃないかなあ」

「ふえ？」

アリアの意味深な発言にトイロが小さく首を傾げると、アリアの双眸がトイロをしつかりと捉えた。

「今のトイロ、すつごく可愛いし。ビックリした。攫いたくなる気持ちも分かるくらいに」

「……っ!?!」

思わず、言葉を詰まらせ、頬張っていたアイスクリームを喉に詰まらせるところだった。咽そうになるのを何とか堪えて、トイロはアリアを見る。アリアの不思議と強い光を湛えた瞳から、目が離せなくなる。

心臓の鼓動が、今まで生きてきた中で最高潮にまで跳ね上がっていた。自然と頬が赤らむ。どうすれば良いか分からなくなる。こんなこと、家で読み漁ったどんな書物にも書いていない。

顔を真っ赤にさせてもじもじとするトイロを、マリルとエイパムが面白そうに、フカマルが不思議そうに見上げていることにも気づかず、トイロはただただ何と言葉を発すれば良いのか懸命に考えていた。

と、そこへ、

「き、きつちやま~~~~~!!」

再び、あの奇声が屋上のフードコート中に響き渡った。アリアは顔色一つ変えず、一方トイレは先ほどまで赤らめていた顔を一気に青ざめさせて、声のした方向へ視線を移す。

先ほど、トイレをナンパしてきた男が、息を切らせて仁王立ちしていた。

男の姿に反射的にイスごと後退るトイレとは真逆に、アリアは微笑を崩さずに男を見やる。

「しつこい男は嫌われるんじゃないかな？」

「五月蠅いんですけどー！　そ、その子は僕が先に声をかけたんですけどー！」

「嫌がってたじゃないか」

「黙れ黙れ黙れ！　こうなったら実力行使なんですけどー！　グランプル、ユンゲラー！」

最早、大人しく話を聞いてもらえるような状況ではなかった。男は錯乱したように腰のベルトからモンスターボールを二つ、放る。中から出てきたのは、薄紫色の身体に大きな牙が特徴の“ようせいポケモン”グランプル。そして黄色い体躯と大きな黄色い尻尾、それに片方の手にスプーンを持った姿が印象的な“ねんりきポケモン”ユンゲラーだった。

「なっ。まあちゃん、フカマル！」

「るうっ」

「フカーツ！」

男が完全に臨戦態勢に入ったのを見て、トイロは声を上げた。即座にマリルとフカマルが応答し、前へ出ようとする。

だが、それを一本の腕が制した。アリアだ。

「あ、アリア……?」

「僕に売られた喧嘩だ。僕が買う」

「エパーッ!」

見ると、既にアリアのエイパムが前へと躍り出ていた。やる気満々のエイパムに微笑みながら、アリアは男に再び視線を戻す。

「さあ、かかってきなよ」

「む、ムキーッ! そんなチビ一匹で僕のグランブルたちを倒せるとか思ってるんですかー!」

馬鹿にされたと思ったのか、男が更に激昂する。だが、アリアはそれを笑って受け流した。

「さつきそのチビちゃんに驚かされて呆けてたのは、どこの誰だっけ?」

「エパパッ。エイパッ」

「……ぷっ」

アリアの言葉に、思わずトイロの口からも小さな笑いが零れた。そんな二人の様子に、遂に男のボルテージがマックスになる。

「僕の森ガールちゃんと仲良くしないで欲しいんですけどー! 行けっ! グランブル、ユンゲラー!」

「グランーン!」

「ユンッ!」

男の声に、グランブルとユンゲラーが駆け出した。グランブルの牙が凍てつき、ユンゲラーの両手の中で輝く球状のエネルギー体が生まれる。

特攻をかけてくる二匹に、エイパムが尻尾を構えた、その時だった。

「ベイリーフ、“つるのムチ”！ ミニリュウ、“でんじは”！」

「ベイッ！」

「リュウ！」

突然、後方から現れた二本のツルがユンゲラーを絡め取り、同じく後方から出現した紫電の塊がグランブルに当たって弾けた。予想だにしない攻撃にユンゲラーの動きが止まり、また“でんじは”の直撃を受けたグランブルの動きが鈍る。

その場にいた、全員が、何事かと眉を顰めた次の瞬間、

「んでもってだあれが『僕の森ガールちゃん』だこのクソやるおおおおおおお！」

「へぶぎゅぼあああ！」

男が、横から現れた“何か”によって、吹っ飛ばされた。と同時に、男が先ほどまで立っていた場所に、男を吹っ飛ばした“何か”

否、男を蹴り飛ばした少年が現れる。

少年は、ベイリーフを隣に携え、またミニリュウを身体に巻きつけていた。何故か二匹とも、少年をいたく慕っているのかやたらベタベタと少年に擦り寄っている。ミニリュウにいたっては顔を頬に擦り付ける始末だ。

だが、そんな二匹のすり寄りには特に何も応じず、少年はただ自分が蹴り飛ばした男を睨みつけている。

一方、男の方は少年に見覚えがあるのか、完全に縮み上がっていた。

「ち、チミは！」

「お、覚えてたのかちつとも嬉しくないがそっちの方が話は早い貴様オレのトイロに何しようとしてくれやがったんだごるああ!？」

「……誰? あのこ」

突然割り込んできた少年を見て呆けるアリアを他所に、トイロは盛大なため息をついた。その手にはいつの間にか、一つのモンスターボールが握られている。

「……あの、大馬鹿者が」

「トイロ？」

トイロが、静かにボールを落とした。そこから飛び出てくるのは……、

「次はてめえを警察に突き出してやるから観念し」

「したでなめる」

「ゴース！」

“ガスじょうポケモン”のゴーストが、少年の背後から大きな舌で彼を一舐めする!

「\$# !?」

「ベイ!？」

「リュ!？」

突然の不意打ちに誰も対応ができなかった。少年が奇声を上げてその場にガクガクとした動きで倒れこむ。慌ててベイリーフとミニリュウが心配そうに彼を覗き込むのを、戻ってきたゴーストの額を優しく撫でながらトイロは見下ろした。

「とりあえず、礼だけは言っておこうかね。ありがとね、馬鹿サトル」

麻痺してその場に気絶する少年　サトルを見下ろしながら、トイロはそう言って微笑んだのであった。

P・18 最悪な再会？（後書き）

今回のテーマ

『イメチェン』つまりは着せ替え人形（笑）』

『いろんな意味でいろんな再会』

コガネ編。ということ、ようやくあの猛獣ことトイロの幼馴染、サトルが登場です。

これで、投稿開始前に作り出したメインキャラの四人が勢ぞろいする運びとなりました。

これから、サトルがどんな風にトイロのたびに関わっていくかはこれからの楽しみでありますw

最後の“したでなめる”はトイロとサトルの間にあるある種の信頼から生まれた奇抜な挨拶とも思ってくださいw（何

もう一つのテーマとして、トイロにちょっとしたイメチェンを施してみました。

旅する前のお嬢様の雰囲気が出ていたら良いかな。と思っております。

……というか、今更ながらにコラボ相手であるリュウマくんが冒頭のみ登場でしかもシレンの着せ替え人形状態って、いいんだろうか……（滝汗

リュウマくんとは後ほんの少しのお付き合いですが、次話では大活躍の予定ですので、赤神先生&リュウマファンの読者様、しばしのお待ちをおお！（汗

シレンが意外と頑固で意固地な一面を見せております。って、ウバメでも見せていたような……、気にしてはいけません（何

今回は、復活したサトルがリュウマとバトル！？

いやいや、普通のバトルではありませんよ、一風変わった決戦を行いますw

それでは皆さん、また次回〜ww

P・19 押し合い 圧し合い ポケスロン！（前書き）

ども。二ヶ月ぶりの投稿となってしまいました。旅がらすです。

いや、面白いですね、ポケモンブラック&ホワイト！！

旅がらすは現在ブラックは一応クリアしてホワイトが現在進行形で
す。

完全新作でポケモンも完全に一新されたため、新しいポケモンを捕
まえるたびに新鮮な気持ちになりますw

そんなこんなで今回はポケスロン編！

出場するのは誰なのか&優勝するのは誰なのか！？

それではP・19をお楽しみくださいww

P・19 押し合い 圧し合い ポケスロン！

コガネシティは、ジョウト地方一の大都会だ。

ここには、コガネデパートやコガネ遊園地など、様々な娯楽施設並びに観光施設が存在する。

そんな中、トイロたちはつい二、三年前にできたばかりの観光名所、ポケスロンドームへと足を運んでいた。

「さあーて、みんなのお手並み拝見と行くこうではないか？」

「フイッ」

「るりるッ」

ポケスロンドームの中央に位置するメインフィールドを上から見下ろす形で立てられた観客席。その中央寄りの席で、トイロは頭にリーフィアを、膝にマリルを乗せて、にやにやと楽しそうに微笑んでいる。その隣では、チアガール姿のシレンが黄色いボンボンを両手に興奮した様子でフィールドを見つめていた。

「プログラムを見る限り、次がサトルくんたちの出番よね！」

「そのようだねッ。リョクちゃん、もうすぐ君のご主人様の登場だよ。とても楽しみだねッ」

「リーフィッ」

シレンの問い掛けに答えつつ、トイロは頭に乗せたリーフィアの喉を優しく撫でる。どうやら、このリーフィアはトイロのリーフィアではないようだ。だが、トイロに触れられてもリーフィアは嫌な顔一つせず、むしろものすごく喜んだ様子で喉を鳴らしている。

と、そこで、ドーム内のライトが全て消えた。それと同時に、観客席も一気に静まり返る。

十数秒後、フィールドの真ん中にライトが落とされた。ライトのど真ん中、少し高めの大きな白い台の上で、何とも言い難い白い全身レオタードマッチョマンが観客席に向けて手を振っていた。

「みなさん、こーんにーちはーっ！ みんな元気にポケモンとエンジョイしているかなーっ？ 本日のポケスロンも元気なポケモンたちがいっぱい、お兄さんはとっても嬉しいでーっす！」

「……一日中見ていたせいでもう慣れたけど、やっぱり異常な高さのテンションだねー」

「アレで一日中過ごして、疲れていないお兄さんが一番凄いわよね……」

レオタードマッチョマンの最初から一切変わっていない凄まじいハイテンションさに驚きを隠せない二人。だが、その視線はそれでもしっかりフィールドに注がれていた。

レオタードマッチョマンは、一度だけ咳払いをすると真剣な顔をしてマイクスタンドを握り締める。

「さあさあ、お次はこの四人の対戦だああ！」

続けてライトアップされるフィールド。そこに立つのは、サトル、アリア、マサムネ、そしてリュウマの四人だ。

レオタードマッチョマンが、四人の登場を確認してマイクを持っていない方の手で四人を紹介する。

「右からサトル選手、アリア選手、マサムネ選手、そしてリュウマ選手！ さて、四人が選んだコースはスピードコース！ 一体誰が栄光を掴むのか！！ それじゃあ行くよ、レッツ……」

「ポケスロン！！！」

レオタードマッチョマンと観客席の声が重なり、開催の合図がフィールド上に響き渡る。

ポケスロン スピードコースが始まった。

時間は戻って昨日の夜のこと。ポケモンセンターに隣接された宿泊施設にて。

「はああ。コーディネーターに忍者小僧、それにアトラス地方の元チャンピオンねえ……。お前、一体全体どういう旅をしてきたんだ？」

「特に目立ったことのない普通の旅だよ。そんなに珍しいこともないであろう？」

「いや、流石にこのメンバーで旅をしている女の子はとても珍しいと思うけどね」

トイロたちの寝室に集まった人物を見回し、サトルは目を丸くしながらトイロに話しかける。だが、トイロは小さく肩を竦めてそう答えただけであった。そこに、アリアが笑いながら突っ込みを入れ

る。トイロが「ええ〜？」と言いながら首を傾げると、隣で座ってそのやり取りを見ていたシレンもクスクスと笑いだした。

「えっと、とりあえず、自己紹介をしましょう。私はクロイワシレン。シンオウ地方から来たコーディネーターよ」

「某はサイガ マサムネ。現在は姫にお仕えしている忍でござる」

「俺はリュウマ。さっき言われたとおり、アトラス地方出身のトレーナーだ」

シレン、マサムネ、そしてリュウマが自己紹介をすると、サトルとアリアも佇まいを少しだけ正して三人に向き合った。

「オレはヤマシロ サトルだ。ワカバタウン出身のトレーナー。ついでにトイロの幼なじみだ」

「僕はアリア。ホウエンから来たトレーナーだよ。トイロとはヨシノシティで逢ったんだ」

それから、しばらくの間は談笑が続いた。サトルは自身の武勇伝を聞かせて笑いを誘ったし、アリアも聞き上手で質問されたことも大概の事にはきちんと答えていた。

どれだけ話していただろう。突然、「そうだ！」と叫びながらサトルが立ち上がった。

「リュウマ！ オレと決闘しようぜ！」

「……へ？」

いきなり名指しでそう言われ、リュウマが目を点にした。だが、そんなことなど気にせず、サトルは続けてマサムネとアリアを指差す。

「お前らもだ。オレと決闘だ！」

「……ちよつと待つて。話がまつたく見えないよ？」

「某もでござる。一体何の話でござるか？」

続けて名指しされた二人もまた、きよんとした表情でサトルを見上げる。するとサトルは、得意げな顔でフフンと鼻を鳴らした。

「にじししし。ここコガネシティで『決闘』と言えば……ポケスロンの事に決まつてんだろ！！」

こうして、半ば強引に、四人のポケスロン出場がサトルの手によって決められたのであった。

「まつたく……。何が『決闘』と言えばポケスロンなのかね。奴は相変わらず自論ばかりで生きているのだね。」

「でも、楽しい人だね、サトルくん。見事に彼のペースに嵌っちゃったわ。」

小さく肩を竦めるトイロの横で、シレンが笑顔を向ける。確かに結局のところ皆が同意したということはそういうことなのだろう。全く、全員ノリ過ぎである。とトイロがため息をついていると、フィールドにハードルトラックが現れた。続けて、サトルたちとそのポケモンたちが出てくる。

「さあ、第一種目はダッシュハードル！ ポケモンとトレーナーの息の合った掛け合いが勝負を握るよ！」

司会のマッチョマンが競技の紹介をする中で、サトルたちトレーナーがルームランナーに乗り、ゴーグルのようなものを掛ける。ポケモンたち サトルのガーディ、アリアのエイパム、マサムネのピカチュウ、そしてリュウマのギャロップの側頭部にも、何か装置のようなものをつけている。

と、トラックにあったはずのハードルが地面に埋まっていく。ポケモンたちが、スタート位置についた。

「それでは始めるよ。ダッシュハードル……、スタートッ！」

鳴り響くピストル。それと同時に、ルームランナーが動き出し、サトルたちとポケモンたちが駆けだした。

しばらく走っていると、ルームランナーで走っていたトレーナー四人が突然ジャンプをした。と同時に、彼らの足元からそれまで地面に埋まっていたハードルがせり出してきた！ だが、ポケモンたちはその手前で全員しっかりジャンプをしていたので、一匹も躓かずに更に先へと走り抜けていく。

「おおー！ 最初のハードルは全員クリアのようだね。でもまだまだ、みんなガンバだよー！」

「……なるほどね。最初の台詞はこういう意味だったのだね」

マッチョマンの言葉の後に、トイロは感心したように頷く。ポケモンとトレーナーの息の合った掛け合いが必要。確かにその通りだとなると、ここで有利となるのはやはりポケモンとの触れ合いが一番長いであろうリュウマだろう。

戦況は、リュウマのギャロップとマサムネのピカチュウが一位争

いを繰り広げつつ、アリアのエイパムとサトルのガーディがそれを追いかける形となっていた。

「ふふふ。結構面白いね、この競技は」

「うん、そうね！ ……みんな、頑張ってる！」

トイロがほくそ笑む横で、シレンがフィールドに向けて声援を送った。

と、そのとき、

それまでギャロップとかなりいい勝負をしていたピカチュウが、突然走るのを止め、

「ぴっかぴっかちゅ〜。ちゃあ〜」

観客席に向けて投げキッスを放った。

「だああああ！ ピカチュウ、走るでござるよー！」

もちろん、マサムネが声を上げる。だが、ピカチュウは聞こえていないのか主人の声など全く気にせず観客席にアピールを続けている。その横をアリアのエイパムとサトルのガーディが軽快に走り去っていった。

「おおっとピカチュウ！ まさかのリレー放棄か！？ でもお客様たちに見せる姿はとっても愛くるしいね！ そんなこんなで順位が入れ替わったよー！」

「ぴ、ぴかちゅう……」

「にじししし！ だっせーの〜マサムネ！」

実況があまりに空しい（マサムネにとって）戦況を伝える中、サトルが大声で笑いながらルームランナーを駆ける。

だが、そんな彼も、落ち込みつつもしっかりルームランナーを走るマサムネに視線が行っていたせいで……。

「あべしっ！！」

ルームランナーから足を踏み外し、豪快に転んでしまった。とほぼ同時に、

「キャンッ」

ガーディが競り上がってきたハードルに勢いよく突っ込み、頭を強く打ち付けてしまっていた。

「あらら〜！ ガーディは思いつきりハードルにぶつかっちゃったね〜。これは完全にトレーナー側のミスだああ！」

「……あの阿呆め。人を笑うからあんな目に遭うのだよ〜」

「ピカチュウ……。あの子、本当にマイペースなのね……」

二人のあまりの情けなさに揃って肩を竦めるトイロとシレン。一方、ギャロップとエイパムはラストスパートに入っていた。

「さあさあ残りのハードルもあと半分を切った！先にゴールを決めるのは果たしてどちらの選手かな！」

軽快に駆けていく二匹。と、リュウマがニヤリと笑った。

「クレナイ、駆ける！」

「ヒインツ」

リュウマの声に、ギャロップが大きく嘶く。と、突然ギャロップは猛スピードで駆け出した。

「おおっと、リュウマ選手のギャロップ、ラストスパートをかけた！だがこのスピードにトレーナーは対応が取れるのか！？」

確かに、ギャロップのスピードは速い。ぐんぐんとエイパムを引き離していく。だが、マッチョマンの言うとおり、リュウマがあのスピードに対応しきれなければハードルにぶつかってしまう。と、

「うおおおおっ！」

リュウマがルームランナーの上で飛ぶ。そして、

「ヒヒインツ」

ギャロップが、“跳んだ”。
それも、残りのハードル全て　およそ二十メートル近い距離を
一気に　であった。

静まる観客席。ゴールにたどり着き、誇らしげに鼻を鳴らすギャ
ロップ。止まったルームランナーの上で、ゴールを外してガッツ
ポーズを取るリュウマ。

瞬間、観客席から大歓声が沸いた。

「す、すごいぞリュウマ選手とギャロップ。ギャロップのスピード
に対応したリュウマ選手も凄いが、残ったハードルを一気に飛び越
えたギャロップも凄い！」

実況のマツチヨマンも、声を大きくして大絶賛をしている。少し
遅れて、アリアのエイパムが二着で到着し、更に遅れてようやくや
る気を出したピカチュウが三位でゴールインをした。

「第一種目のダッシュハードル。結果は一位がリュウマ選手とギャ
ロップ。二位はアリア選手とエイパム。三位はマサムネ選手とピカ
チュウだよ！ サトル選手は今回は残念ながら失格とさせてもらっ
たね。ルームランナーから落ちちゃったしね」

それでは第二種目の開始までちょっとだけ待っててね。とマッ
チヨマンが言うと、フィールドは再び暗くなった。

ポケスロン・スピードコースの第二種目は『ステイルフラッグ』。砂場の上に次々と投げ入れられるフラッグをどれだけ多く集められるか、また、どのタイミングでポケモンをチェンジするがポイントの鍵となる。

この競技でも、リュウマのチームが見事堂々の一位を飾った。砂場でも自由に動けるトゲキッスとジバコイル、そしてバンギラスの組み合わせが良かったようだ。鮮やかに見事七十本近いフラッグをかき集めた。

次点は同じ四十五本を集めたマサムネとアリア。マサムネは先ほどのダツシユハードルがトラウマになっているのか、ピカチュウを起用していなかった。

そして、サトルはと言うと……。

「べ〜い。ベイべ〜い！」

「又オ〜、又オ〜！」

「リユーー！ リュリユリユーー！」

「だああああああ！ は な れ るおおおおお！」

……どうやら、競技どころの話ではなかったようだ。ポケモンたちが競技そっちのけでサトルにじゃれついていたため、記録は何と史上最低前代未聞のゼロだったと言う……。

そうして遂に、最終競技の準備が始まった。

最終競技は『チェンジリレー』。五分間の制限時間の中で三匹のポケモンを順番に出し、障害物が転々と配置されたトラックでより長い距離を走ったチームにポイントが与えられる。

現在、残り時間は半分を切り、戦況は完全に横並びの状態となっていた。

「さあさあ、ポケスロン スピードコースもいよいよ大詰め！ 戦況は現在横並びのかなりいい勝負になっているね！ この競争を最初に抜け出すのは一体誰だああ！？」

実況のマッチョマンが、ヒートアップした様子でマイクを握り、激しい実況を続ける。サトルのガーディが一步先んじたかと思えば、マサムネのバクフーンが前へ出る。と思いきや、今度はリユウマのリーフィアが一步先へ抜けようとスピードを上げる。

フィールドの白熱した空気に当てられたシレンも、興奮したようにボンポンを上下に振っていた。

「すごいすごい！ これぞポケスロンって感じよね！ ああもう誰が勝つのかしら！？」

「うん、そうだね、誰だろう……」

だが、その一方でトイロは不安な目でフィールドを見つめていた。彼女の目が捉えていたのはただ一点 アリアのグレイシア、イコ口の不審な様子であった。

つい先ほどから、イコ口の動きがどこかぎこちないものになっていた。それは、通常の間人ではおおよそ見切れることは難しい僅かな変化であったが、トイロは元々動体視力に優れていたし、また数多くの傷ついたポケモンの面倒を見てきていた。それ故、アリアのグレイシアが見せたその僅かな変化に気づくことができた。

だが、それに気づいているのはトイロだけではなかった。グレイシアのトレーナーであるアリアもまた、彼女の変化に気づいているようだった。少し苦い表情でグレイシアを見つめる彼の横顔が、トイロの中で何かを大きく脈動させる。

(……………つて……………)

トイロの中で、“それ”は大きな感情の波となって、彼女の中を揺さぶっていた。その“何か”が言葉になってトイロの口から溢れ出ようとしますが、それをどんな言葉にすればいいのか、トイロには思いつかなかった。

やがて、グレイシアが失速し始めた。少しずつ歩みも覚束なくなり、今にも倒れそうなほどにふらつき始めている。アリアが慌ててモンスターボールを掲げ、グレイシアを回収した。だが、次に出すポケモンに何か迷いがあるのか、アリアはなかなか最後のポケモンを出そうとしない。そうしている暇にも、他の三匹との差はどんどんと開いていく。

「おおーっと！　ここでアリア選手のグレイシアがダウン！　さてアリア選手、どんどん引き離されていくが、次に出すポケモンは決まっていらないのか!？」

実況の声が、アリアの状況を空しく伝える。少しだけ熱気が冷めた観客席が、アリアの次のポケモンを待っているようであった。

トイロは、もう居ても立ってもいられなかった。逸る気持ちを抑えるように、勢いよく立ち上がって観客席の一番前まで駆け下りる。

「ちよ、と、トイロ!??」

シレンが慌ててトイロを止める声も、前にいた観客がざわめく音も、最早トイロの耳には届いていなかった。

ようやく形を　輪郭を得た言葉が、今か今かとトイロの口の中で発せられるのを待ち望んでいることを、トイロは全身で感じていた。

分かった。自分の中で生まれた言葉が一体なんだったのか。それを出す、一番良い方法も。

観客席の一番前の柵に掴まって身を乗り出したトイロは、精一杯、自分の出せる限りの声で大きく叫んだ。

「頑張つて、アリアー……！」

自分のか細い喉が絞り出した声が、フィールドにいる彼らに届くかは分からなかった。

しかしトイロは、叫ばずにはいられなかった。

叫んだ後、トイロは思わずその場で咳き込んでしまった。こんなに声を張り上げたのは、感情を表に曝け出したのは、初めてのことであった。

届いただろうか。ほんの少しでも、彼にこの言葉が届いたのだろうか。そう思いながら、不安げに顔を上げたトイロの双眸が捉えたのは、トイロに向けて淡い微笑を浮かべたアリアであった。

「ありがとう、トイロ」

アリアがそう言って、一つのモンスターボールを宙に放る。中から出てきたのは、ホウエン地方に住まう、黄緑色の体と大きなシダ科植物を思わせる尻尾が特徴のポケモン “みつりんポケモン” のジユカインだ。

「疾駆しろ……、ニタ」

フィールドに下りたジユカインに向けて、アリアはただ一言、それだけ放った。

そして、次の瞬間、

「ジユカツ！」

ジユカインが、一気に駆けた。

その速さ（スピード）は目にも留まらず、一気に半周近くあった差を詰め……。

なんと、一気にトップへと躍り出た。

「おおっ！ なんとアリア選手のジユカインが半周あったレース差を一気に詰めたああ！ ジユカイン、このままタイムアウトまでやり過ぎせるのかな!？」

一気に白熱した観客席とますますヒートアップする実況。制限時間を示す電光掲示板が、遂に三十秒を切る。ジユカインのスピードは落ちることなく、その上更にキレが増すばかりであった。

（頑張っ……。頑張っ……!）

トイロは、自分でも気づかぬうちに両の拳を強く握って戦況を見つめていた。息をすることも忘れてしまいそうだ。たった三十秒がこんなに長く感じたのは生まれて初めてのことであった。

残り十秒。ポケモンたちがジュカイン目掛けて追い上げを図ってきた。

残り五秒。ジュカインも負けじとスピードを更に上げ、縮まった差がまたほんの少しだけ開く。

三秒。早く、早くタイムアウトになって。トイロの頬を、冷や汗が撫でる。

一秒。ジュカインが、地を蹴った。

鳴り響くサイレン。競技終了の合図。

思わず誰もがメインディスプレイを見上げる。そこに書かれていた数字。そして選手の名前は……。

「結果は……、なんと、最後にジュカインを投入したアリア選手が第一位！ 最下位からの猛ダッシュが素晴らしかったね！ 二位は僅差でリュウマ選手！ マサムネ選手とサトル選手は同率で三位となったよ〜！」

結果を告げる実況の声。トイロはその声を聞いたと同時に、空へ向けて高々と両手を挙げていた。

こうして、ポケスロン・スピードコースは幕を閉じたのであった。

「ヌオー、 “マッドショット” だ！」
「クロ、 “ストーンエッジ” で迎え撃てー!!」

場所は変わって、ポケモンセンターの裏手に作られたバトルフィールド。そこで、サトルとリュウマがポケモンバトルに勤しんでいた。

ポケスロンの結果は、言わずもがなりユウマの圧勝であった。最後の『チェンジリレー』ではアリアが勝ったとは言え、総合得点ではリュウマのほうが遥かに上回っていたのであった。ちなみに、当たり前のことであるが、言いだしっぺのサトルは見事に最下位であったと言う。

「楽しかったわね、ポケスロン」
「う、うん。そうだね」

リュウマとサトルのバトルを隅のベンチで見学しながら、トイロとシレンは今日のポケスロンを振り返っていた。だが、それは実際にはシレン一人だけであり、トイロは少し別のことを考えていた。

(……どうしちゃったんだろう、ボク。家にいた頃はこんな風じゃなかったのに……)

初めてだった。あんなに感情を曝け出すように動いたのは。

屋敷にいた頃、トイロはあんなにも感情を表に出したことがあったのだろうか。

自分に現れた小さな“変化”に、トイロはほんの少しだけ不安を覚えていた。

「やあ、トイロ」

そこへ、トイロたちの元にアリアがやって来た。いつものようににこやかな表情で二人を見下ろしてくる少年を、トイロはゆっくりと見上げる。

「アリア……。その、今日は残念であったね」

「ん〜、そうかな。まあ、アトラス地方の元リーグチャンピオンと戦える機会なんてそうそうあるわけじゃないし、良い経験になったと僕は思っているけど？」

『残念であった』そう言ったトイロに対し、アリアは小さく首を横に振った。どうやら、この少年はそこまで勝ち負けにこだわる性格ではないようだ。

そんな少年の様子にトイロは何も言えず、ただ俯くことしかできなかった。

ところが、

「でも、嬉しかったよ。君が応援してくれて」

「……………え？」

アリアの次の言葉に、トイロは目を丸くした。思わず首を上げると、淡く微笑んでいるアリアと目が合う。

「トイロが応援してくれて、嬉しかった。だから、最後に頑張れた」
「……………」

見る見るうちに、自分の顔が赤くなっていることが分かってしまった。何故、こんなにも胸が高鳴り、頬が熱くなるのか、トイロには全く理解できなかった。

トイロが返答に困っているのを知ってか知らずか、アリアはのんびりと伸びをする。

「えっと、それじゃあ僕はコレで。これから次の街に向かうことにするよ」

「あら、もう行っちゃうんですか、アリアくん」

顔を真っ赤にしたまま呆けてしまったトイロに代わり、シレンがおどけたように言うと、アリアは小さく首を縦に振った。

「うん。ちよつと急用で、人に会わなくちゃいけなくなっちゃってさ。待たせるとすぐ怒るから、早く落ち合わないといけなくって…」

「そうなんですか。ハウエンのこととか色々聞きたかったのに、ちよつと残念です」

笑顔で会話を交わす二人の間に挟まれ、トイロは何を言おうか言葉に迷っていた。「また会おうね」といった、別れの挨拶ですら、どう発音すればいいのか何故か戸惑っている自分がいた。

「それじゃあ、またね、トイロ」

結局、アリアに先を越され、トイロは反射的に頷いただけで終わってしまった。少年の微かな笑い声がトイロの耳を叩く。アリアが踵を返し、立ち去っていく音が、ただ静かに響いた。

「トイロ。君は僕のものだ。誰にも渡さない。そう、あの“彼”にも。誰にも……ね」

アリアのそんな呟きが風に乗って消えたことなど、誰一人として気づいてはいなかった。

今回のテーマ

『白熱！ ポケスロン』

『トイロに小さな変化が』

『言いだしっぺが負けるのはよくある話』

今回は金銀のみのサブイベント、ポケスロンを用いたお話でした。金銀リメイク記念作品。と銘打った小説なので、やはりこれは必須かと思い、書き上げたお話でもありません。

でも、小説にすると一気に難しくなりますね、コレ。

コンテスト描写よりもこっちの描写の方がレベル高いと感じました。白熱した会場をどう読者に伝えるのか、言葉選びに少し慎重になりつつ、これでいいのか？ と不安に思ったりしております（笑）

それから、言いだしっぺが大抵負けるというのは、実は旅がらす個人のジंकクスであつたりします。「じゃんけんで決着だ！」と私が言うと、大体私が負けるんですよ。不思議です。

トイロもトイロで、感情爆発していましたね。

彼女は今までの世界があまりに狭く、それで全ての人格を完成させた人間ですので、世界を広げたとき、彼女にどう影響が及ぶのかを考えるのも大変です。

でも、それが今作のテーマ一つでもありますので、これからも徐々に小出しにして行こうかなと考えておりますww

今回はちよつと早めのIntervalを挟んでコガネ編後編に移る予定です。

リユウマとの旅も明日で終わり。短い夜にポケモンたちが語るお話

とは？

次回は完全ポケモンメインでお送りします。

それでは、また〜ww
ww

P・20 別れる者、動き出す者（前書き）

お久しぶりです。またまた一ヶ月近く経つての更新。読者の皆様大変お待たせいたしましたm（| |）m

今回はIntervalの予定でしたが、文字数と前回からの間隔を考えて普通の話数えで行きます。遂に訪れたりユウマとの別れ。別れの朝を前に、ポケモンたちのした会話の一部分を切り取りました。

それでは、第20話です。どぞ〜w

ポケスロンに参加した日から、既に一週間が経っていた。

サトルの特訓にリュウマが付き合い、それにマサムネも時折参加し、シレンはシレンでコンテストの修行に励み、トイロはと言えばシレンの練習に付き合ったり自分で野生のポケモンとバトルをしたり、サトルからのセクハラまがいな猛アピールをマサムネを使って避けたりリュウマに頼んで蹴散らしてもらったりしていた。

昨日はサトルが遂にコガネジムを制覇しその証であるレギュラーバッジをゲット。続いて今日はシレンがコガネの自然公園で開かれたポケモンコンテストで優勝。二つ目のリボンをゲットした。

そうして二人の祝賀会をしていたその夜、夕食の席でリュウマが言った。

「わりい、トイロ。俺が付いてってやれるのは、ここまでだ」

話を聞くと、ジョウトにいる知り合いから呼び出しを受けたようだ。詳しい理由は教えては貰えなかったが、リュウマにも事情があることを察したトイロは二つ返事で了解の意を述べた。

「短い間だったけど、楽しかったよ。次の場所での幸運を祈っているよ」

「ああ、サンキューな。お前らも頑張れよ」

夕食のオムライスを頬張りながら答えるトイロの頭を、リュウマががしがしと撫でる。その横で、シレンが残念そうに息をついた。

「あーあ。まだリュウマさんに着せたい服がたっくさんあったのに……。とても残念です」

「リュウマの方は逆にホツとした顔になってんけどなー」

シレンの言葉に動きを止めたリュウマを見て、サトルが意地の悪い笑みを浮かべる。リュウマが罰の悪そうな顔でサトルの頭を叩いた。

その微笑ましい光景に他の皆で笑っていると、リュウマも照れ臭そうにサトルの叩いた頭を今度はがしがしと撫でる。ただし、先ほどトイロにしたように優しくではなく、まるでタワシで擦るかのように激しく、であった。

「いでええええ！ おいリュウマ、いてえから止せよ！ つつか、それ以前に恥ずいって！」

「お前は一言余計なんだよ。つたく、その癖、直した方がいいぞ」

サトルの抗議も無視し、更に頭を強く擦るリュウマ。その光景に笑わずにいられない他の面々。

リュウマと過ごす最後の夜は、そうして静かに過ぎて行った。

一方その頃、ポケモンたちはポケモンセンターの裏庭で思い思いに過ごしていた。バトルをしていないときでも、リュウマのポケモンから何かを吸収させたいと頼んだマサムネの意向である。

裏庭の池の真ん中辺りで、トイロのマリルがぷかぷかと浮かびながら物思いに耽っていた。

(強くなりたい……。でも、具体的に何をすれば良いのかしら……)

最近のマリルの悩み。それは、強くなるにはこれから何をやっていくべきか。であった。

強くなりたい。トイロと共に、強くなっていきたい。そう思っただけでも、具体的に何をすべきなのか、マリルはそれを見出せずにいた。

『よ、まあちゃん！ お前、何をらしくない感じにポケッツとしていやがるんだ？』

『まあ、ぼーっとしてる……。又オーみたい』

そこへ、同じく池で遊んでいたシレンのブイゼルとサトルの又オーがやってくる。

呑気な奴ら……。そう思いながら、マリルは二匹を軽く睨んだ。

『何だっついていいでしょ……。あんたらは悩み無さそうでいいわよね』

『ハッ。悩むなんてメンドクせえこと、ブイのすけ様はしないのさ』

『オレ様最強！ ガツハッハ！』

『……。又オーはサトルが好き。それだけで良い』

……。皮肉で言っただけなのだが、この二匹には全く意味を成さなかったらしい。素晴らしいポジティブシンキングだなあと思いつながら、マリルは盛大にため息をついた。

と、そこへ、

『まあちゃん。ため息なんてついたら幸せが逃げていってしまうわよっ』

リュウマのミロカロス ソウが、ゆっくりと水面から現れた。月光に照らされた鱗が美しく輝いている。だが、そこには美しさだけがなくそこはかとなない“強さ”も感じられた。

そうだ、彼女になら。そう思ったマリルは、体を反転させてミロカロスと向き合った。

『ねえ、ソウ。強くなるには、どうすればいいの？ 私、強くなりたいの！』

『え？ 強く？』

いきなり話を振られて、ミロカロスも少し驚いたようだった。何かを思案するように目をしばらく泳がせた後、ミロカロスは『そうねえ』と小さく呟いた。

『貴女の描く“強さ”ってどんなものなの？ 例えば、バトルで連勝したいとか、そういう具体的なイメージはあるかしら？』

ミロカロスに問われて、マリルは体を縦に振った。もちろんある。マリルにとって、それは何よりも具体的なイメージとしてあった。

『トイロちゃんをどんなものからでも守れる強さ。それが私の望む“強さ”よ』

そう答えたマリルの瞳を、ミロカロスは静かに見つめる。そこに宿る強い想いを読み取ったミロカロスは、フツと小さく笑った。

『ウフフ。貴女“たち”はとってもステキなパーティなのね』

『……………へ？』

ミロカロスの『貴女“たち”』という言葉にマリルがどういう意味かと面食らっていると、

『……やっぱり、ばれていたのですね』

『うっわあ。ソウねえってすごおい！ 後ろに目があるみたい』

『ケケケケケ！ 強い奴のポケモンで言うのはやっぱりすげえのな！』

『……まあ、じぶだけ、ずる』

ソウの後ろにある木陰から、リュウマのリーフィア、リョクにトイロのリーフィア、それからゴーストとリオルが出てきたのである。

さすがにトイロの手持ち全員がその場にいたことなど想定外であったのだらう。彼らを目にしたマリルは目を点にして驚いていた。

『あ、あんたたち……！』

『おいおいまあちゃんよお。オイラ達だって気持ちはおんなじなんだぜえ？ だったら抜け駆けとかすんじゃねえよ！』

絶句するマリルに陽気なゴーストがけらけらと笑いながら近寄る。リーフィアたちも、池のすぐ傍まで駆け寄ってきた。

『ゴーにいにさんせーさんせー！ ぼくたちだって、トイロちゃんを守りたいもん！』

『まもられ……や……。とろちゃ、まも！』

続けて、リーフィアとリオルもゴーストと同じように強く頷く。みんな同じ想い。そう感じたマリルは、改めてミロカロスとリュウマのリーフィアを見つめた。

『お願い、私たちに強くなる方法を教えて!』

再びそう懇願されたミロカロスとリーフィアは、互いの顔を見て小さく微笑むと、マリルたちに向き直った。

『私たちが教えられることは今は少ないわ。……まず、貴女たちに必要なのは、個々のレベルアップと、技の切れを鋭くすること。特にアーくん以外はまだ進化が残っているから、そっちもオススメするわ』

『そうです。アーくんについては、とにかくバトル慣れすることと、主人の言葉だけでなく自分でも臨機応変に対応する術を身につけることです』

『ほへえ〜。なんだか大変そう〜。僕にできるかなあ』

『進化……』

相変わらずのほほんど呆けるリーフィアの隣で、マリルはミロカロスの言葉を自分の内で反芻させていた。

言われてみれば、当たり前のことであった。確かに、自分にはまだ進化後という姿がある。進化すれば能力も格段に上がり、技の威力も増す。その道が残っていることを、マリルはすっかり忘れていた。

それに、とミロカロスは更に言葉を続けた。

『貴女は自分の体のことをもつとよく理解すべきだわ』

『私の……体?』

ミロカロスの放った言葉に、マリルは首を傾げる。すると、ミロカロスは尾を水面に出して言った。

『“きあいパンチ”とか“れいとうパンチ”と言うからって、別に

誰も“必ず拳で出せ”なんて言っていないでしょう?』

意味ありげにそう微笑むミロカロスを、マリルはただ、黙って見ることしかできなかった。

そうして『強くなるためには』という話題で盛り上がる一同を見ながら、ただため息をつくポケモンが一匹だけいた。

『ったく、強くならなかつて……。ブイのすけ様は強いんだっての……』

ブイゼルはそう言いながら、池の中にその身を沈めるのであった。

同じ頃、裏庭の林の中では、

『おらおらおら! 逃げてばっかいんじゃねえぞ!!』

『ひゃああああ。ぶらたんこわ〜いよ! もっとにこやかに行くってば〜』

マサムネのブラッキーとピカチュウが追いかけてこ 多分そう思っているのはピカチュウだけだろう に興じていた。

『ぶらたん』というあだ名がどうしても気に食わないのか、ブラッキーの形相が一気に激しいものになる。

『てめえのその性根、叩きなおしてやるよ!』
『いやあ〜ん。くろりんお助け〜』

およそ男の子の発するものとは思えない言葉を発しながら、ピカチュウはリュウマのバンギラス　クロの後ろに隠れた。

『だからピカチュウ！　俺の名前は“クロ”だ！　くろりんなんて呼ぶんじゃない！』

『ジジジ。トテモ可愛イ名前ダト思イマスヨ……プツ』
『シロガネ、お前なあ……』

意外にもお茶目なことを言ったりリュウマのジバコイル　シロガネに、バンギラスは呆れたようにため息をつく。ブラッキーはとうと、バンギラスの後ろでようやく捕まえたピカチュウの頭にかぶりついていた。

『おりゃおりゃおりゃ！　ろつらまいっらか!!!』

『いったあい〜！　ぶらたん野蠻〜!』

『だから“ぶらたん”って呼ぶなあああ!』

どうも、この二匹は根本的に馬が合わないようだ。バンギラスとジバコイルが二匹の喧嘩（ただし怒っているのはブラッキーだけ）を見ていると、そこへリュウマのギャロップ　クレナイと、サトルのガーディ、それにマサムネのバクフーンがやって来た。

『おや……、喧嘩ですか?』

『こんな夜中によくやるなあ』

『いや、あれ多分ブラッキーが一方的に怒っているだけだから』

ギャロップとガーディが目の前で繰り広げられている仁義なき戦

い(？)に呆気に取られている中、バクフーンだけは『またか』とでも言うように呆れ帰っていた。

『ビビビ。アノ二匹ハヨク喧嘩ヲスルノデスカ？』

『マサムネの目を盗んでは頻繁にやってるぜ。ピカチュウはかなりおちゃらけたというか、人やポケモンを食ったような性格しているからなあ。ブラッキーは口悪いけど真面目な奴だから、ああいうのが大の苦手なんだよ……』

『それは……苦労していますね、彼も』

バクフーンの説明に苦笑いを浮かべた面々の下へ、まるで何事もないかのようにピカチュウが歩み寄ってくる。ブラッキーの方を見ると、周囲の地面に焦げ跡を付けてピクピクとしている。どうやら電撃を喰らったらしかった。

『あー、れなたんとかーたんとかたんも来てたんだ。みんなやっほ〜』

『れ、れなたん！？ 私はクレナイです！ 決してそんな女子おなごのような呼び方をしないでいただきたい！』

『が、がーたん？ それってオレのこと？』

『……よお。ピカチュウ』

呼ばれなれないあだ名で呼ばれ、驚愕するギャロップとガーディに対し、もう慣れたよ。と言うようにバクフーンだけは小さくため息をつきながら対応をした。

そこで更に、ピカチュウは話を続けた。

『今日のポケスロン、とつても楽しかったよね。れなたんすつごく速かったし！ あ、でも最後のリレーはみ〜んな惜しかったよね』

ピカチュウとしては、楽しかった思い出をただ語っているだけなのだろう。その目はキラキラと輝いていて、まったく邪気など伺えない。

だが、その言葉に一匹だけ暗い反応を示した者がいた。サトルのガーディだ。

ガーディの纏う空気が一変したのに周りの全員が気づく中、一匹だけそれに気づいていないピカチュウは話をどんどん進める。

『最初のハードルだっけ？　がーたん惜しかったよね。あそこでサトルくんが転ばなかったら失格しなかったのに』

ピカチュウが、触れてはいけない話題に触れた。誰もがそれ以上は止めた方がいい。と思った矢先に、ピカチュウが止めの言葉をガーディに放った。

『負けても気にしちゃだめだよ！　次がんばろ、がーたん』

ブチブチブチイッ！

何かが、思い切り切れる音が聞こえたような気がした。

全員がため息を盛大につく中で、ガーディがピカチュウを睨みつける。

『お前にだけは……、あそこで投げキッスやったお前にだけは言われたくないぞー！』

『へ？　……きゃああああ！　あつい、熱いよがーたん！！』

いきなり自分に向けて“かえんほうしゃ”を放ってきたガーディに、ピカチュウは何事かとただ驚くばかりであった。だが、決して

言われたくない一言を一番言われたくはなかった相手に言われたガ
ーディは、ようやく復活したブラッキーの元へと歩み寄る。

『おいブラッキー。あのピカチュウを消すの、オレも手伝うぜ』

『……一応話だけは聞いていたぜ。協力しよう』

『げげっ。ぶらたんもう起きたの!?!』

さすがに二匹同時は太刀打ちできないと感じたのか、ピカチュウ
の頬に冷や汗が垂れる。

『だから、“ぶらたん”って呼ぶんじゃないやねえええ!』

『覚悟しやがれ、ピカチュウ!』

『ひゃああああ! まさむー助けてええ!!!』

それぞれの想いを叫びながら、三匹はどこかへと走り去っていつ
た。

それを見ながら、バクフーンは思いつきり頂垂れる。

『……まったく、あいつらは……』

『おい、バクフーン。ちょっといいか?』

と、バンギラスがバクフーンに声をかけてきた。バクフーンが顔
を見上げると、そこには先ほどとは打って変わって真剣な表情をし
たバンギラス、ギャロップ、ジバコイルがいた。

先ほどとは完全に空気が変わったことを察知したバクフーンもま
た、真剣な表情で三匹に向き直る。

『……何だ、いったい』

『俺たちは、もうお前たちとはお別れだ。だからその前に、ちょっ
とayingっておきたいことがあったからな』

『言っておきたいこと……？』

バンギラスの言葉にバクフーンが首を傾げると、ギャロップが話を続けた。

『先日いなくなった、あのアリアという男のことだ。……あの者が次現れたら、気をつける』

『……どうということだ？』

『アノ男、ソシテ彼ノポケモンカラ何カ“違和感”ヲ感じタト、リユウマガ』

ギャロップ、そしてジバコイルの言葉に、バクフーンは息を呑んだ。それは、バクフーンの相棒であるマサムネもまた、小さく呟いていたことだからである。

あの者、一体“誰”でござるか……？

確証を持たず、とりあえずは保留としていた疑問を、リユウマと彼のポケモンたちもまた、抱いていたということか。

『確証はねえ。物的証拠もだ。だけど、あいつをこれ以上トイロたちに近づけることは勧められない』

『人間たちに言えば、逆に警戒を強めすぎて向こうに違和感を抱かせるだけだ。だから、本性が掴めるまでは泳がせるべき。ポケモンだけで警戒すべきであると、主様は判断した』

『ヨロシク才願イシマスヨ、バクフーン』

三匹の助言を頭に入れ、バクフーンはゆっくり、だが確かに強く頷いたのであった。

バクフーンたちの会話を、ダークライは木の天辺で静かに聞いていた。

(やはり……と言っべきか。あの青年もまた、勘が鋭いようだな)

ダークライもまた、アリアに対して違和感を感じていた。ただ一つ、彼が他のポケモンたちと違っていたのは、それをシレンにだけは打ち明けていたことである。

シレンは、それでも自然に振る舞うことに徹底した。トイロにも、何よりアリアに違和感を与えないために。

(とりあえずは皆の言うように、泳がせるべきか……)

木の天辺で月を仰ぎながら、ダークライはそう結論づけた。月は、美しい三日月だった。

(……………)

三日月は、あまりに辛い記憶の断片を思い出させる。

初めて愛した存在を、決して泣いて欲しくない存在を、他ならぬ自分自身で泣かせた記憶だ。

これが運命の悪戯というなら、これほど酷い運命もないわね。

自分の“裏側”たる存在の言葉が脳裏を過ぎる。誰よりも何よりも惹かれ合っていた二人を、自分は引き裂いた。

(それでも……私は運命を振曲げたい。この運命を変えたい……)

決まった運命レールの上を、二人にこれ以上歩ませたくはなかった。今でもまだ、敵対していると認識してしまっている今でもまだ、互いに想い合っている二人のためにも。

そして何より、自分自身のためにも、ダークライは運命を変えたいと願っていた。

『ばあ〜っ！ なのさっ！』

考え事に耽っていたダークライの目の前に、突然白い卵状の物体リュウマのトゲキッスが現れた。だが、考え事をしつつもかなり前から彼が後ろにいたことを知っていたダークライは、特に驚きもせずにトゲキッスに話しかける。

『……ハク。子供と言われたことがあるだろうか？』

『むむっ！ 僕は子供じゃないのさっ。僕は立派な大人なのさっ』

ダークライの言葉にトゲキッスは頬を膨らませて反対するが、その仕草は逆に彼の子供っぽさというか、愛らしさを十二分に引き出すだけであった。胸を張って『立派な大人だ』と答えるトゲキッスに、ダークライは思わず笑みを溢す。

『君は……少し、ブイのすけに似ているな。自信満々なところとかは特に』

『そう言うなら、ダーちゃんこそブイのすけに似ているのさっ！』

シレンちゃんを好きなのところとか特になのさっ』

『なっ！ お、おいつ！』

冗談で言ったつもりなのに、笑って返された上にこちら側の反応の方が過敏になってしまった。何とも恥ずかしい有様だ。しかも、改めて他人から言われると恥ずかしいことを言われてしまった。

だが、赤面するダークライを他所に、トゲキッスは笑顔で話を続ける。

『二匹とも、本当にシレンちゃんのことを大好きだっってよく分かるのさっ』

『あー……』

繰り返す言葉が見つからない。どうにかして話題を変えたかったが、話題に乏しい自分では難しい。

言葉に詰まったダークライに、トゲキッスは更に話を進めた。

『ダーちゃんはシレンちゃんと恋仲になりたいのさっ？』

『ブフウッ！ こ、こここ恋仲だと！？ いやいやいや、ありえん

！ あり得るはずがない！！』

トゲキッスの問いかけに、ダークライは全身全霊で否定した。だが、トゲキッスの方はキョトンとした表情でダークライを見つめている。

『そこまで一生懸命に否定しなくても良いと思うのさっ』

『いや、しかし、私はポケモンでシレンは人間だ……。ポケモンと人間は、そんな風な関係になるはずがない』

確かに、シレンのことは強く愛していた。だが、その愛情は、決

して叶えてはいけない。叶うはずのないものだ。
そう、ダークライは思っていた。

『誰がそんなことを決めたのさっ？』

しかし、トゲキツスは更にそう問いかけてきた。ダークライは、驚きながらトゲキツスを見遣る。

トゲキツスは、ニコニコとした表情で口を開いた。

『ソウが前に言っていたのさっ。』ポケモンも人間も関係ない。大事なものは、私がリュウマを想っている。それだけよ』って。だから、ダーちゃんも自信を持てばいいのさっ』
『……………』

思わず、呆気にとられてしまった。大事なものは、想いがそこにあること。

(そうかもしれない……。だが、それでも私は……………)

トゲキツスの言葉と自分の想いを胸の内で反芻させながら、ダークライは再び夜空を見上げたのであった。

同時刻。シロガネ山麓のログハウスでは、黒髪の少女が楽しそうに微笑んでいた。

「そう、貴方が“そう”なのね……」

黒髪の少女 “七人の咎人”セブン・フォールのリーダーにして第一位“傲慢”

のスペルヴィアの向かいに立っているのは、仮面を付けた男だった。口元のみを晒した仮面のせいで、男の表情は伺えない。

スペルヴィアは、微笑みながら男に歩み寄った。その後ろを、威嚇するように全身の毛を逆立てたポツチャマが付いていく。

スペルヴィアの両手が、男の頬を包む。男はピクリとも反応しなかった。

「顔が見れないのがとても残念ね。その仮面を取ってはくれないのかしら」

「……断る」

はじめて、男が口を開いた。そこから聞こえるのは、無機質で低い、でもよく通る声。少年なのか、青年なのか、それともかなりの年齢なのか、まるでそれを“悟らせないように”しているような、そんな声だった。

しかし、男の答えに特に不満を見せず、スペルヴィアは男の両頬から手を離れた。

「まあ、そんなことはどうでもいいのかしら。でも、こうしてここにいる以上、今の貴方は私の“所有物”よ。仮面以外の命令は、必ず聞いてもらうわ」

「分かっている。そういう契約だからな」

あまりにあっさりとした男の返事に、スペルヴィアは淡く微笑んだ。

「良い返事ね。それじゃあ、早速だけ行ってほしい場所があるの」
「……………」

スペルヴィアの言葉に、男の口元が不思議そうに揺れる。一方で、スペルヴィアは微笑みを崩さないままに、ジョウト地方のタウンマップを横に置いたテーブルに広げた。更にその上に二枚の写真を乗せ、マップ上のある一点　コガネシティを指し示す。

「明日、この写真の二人はコガネのレンジャースクールに行くわ。貴方は、この二人を襲ってほしいの」

「……………なぜ、そいつらがレンジャースクールに行くの？」

スペルヴィアの言葉に、男が疑問を投げかけた。だが、それに対してスペルヴィアは全く動じずに静かに目を閉じる。

「私の“所有物”の一つが、未来を見る力を持っている。それだけよ」

「……………了解した」

スペルヴィアの答えに納得いつていないのだろう。仮面のしたから覗く瞳は疑いの眼差しをスペルヴィアに向けたが、男は淡々と了解の意を示した。

男の返事に、スペルヴィアは満面の笑みを浮かべる。

「頼むわね、キル」

男の名を初めて口にしながら、スペルヴィアは自分がタウンマップの上に投げた写真の縁をなぞった。

写真には、トイロとシレンの顔が、写っていた。

P・20 別れる者、動き出す者（後書き）

今回のテーマ

『みんな同じ想い』

『無邪気とは罪なり』

『やっぱり振り回されるダーちゃん』

『新たに動き出した者』

Interviewにするつもりが思った以上に筆が進み、Interviewとは言い難い長さになったので通常の話扱いになった第20話でした（何

でも、ポケモンたちの会話を書くのはとても楽しかったので良し）

・b

リュウマとはここでお別れ。

リュウマの生みの親である赤神先生には、感謝しても仕切れません。コラボをここまで長引かせた私をお許しください（土下座

最強というキャラが表立って出てこない本作ではメインキャラたちにとって非常に素晴らしい相手でした。多分コラボの話がなかったらマサムネの成長シーンを書けなかったです（本当に）

読者の皆様に赤神先生の『ポケットモンスターX』Destiny』を読んでらっしゃらない方は是非一読してください。なかなか読み応えのある作品ですw

赤神先生、本当にありがとうございました！

さてさて、そして実は今回のお話は次なるイベントへと進むお話であることは明確ですが、ここで新キャラ キルの登場です。

一体彼が何者で、スペルヴィアが彼を使って何を企んでいるのかは、次回のお楽しみ。

さてさて、トイロたちの明日は一体どうなる！？

そんな感じで、今回はここまでで失礼します。

それでは、また次回お会いしましょうw

P・21 救済と復讐（前）（前書き）

お久しぶりです。

ようやく書きあげました。

さてさて、コガネ編もラストスパート。

リュウマと別れたトイロたちが向かった先にあったものは???

P・21 スタートですw

朝は、必ず誰にでもやって来る。それが必然だ。

だが、それが常に同じ朝とは限らない。これもまた必然。

ポケモンであろうと、人であろうと、そして神であろうと、それを覆すことなどできはしない。

それが世界。常に変革し、停止することのない、世界の理ことわりなのだ。

チヨウジタウンへと向かったリュウマを見送った後、ラジオ塔の近くにあるカフェで昼食を取っているトイロたちにサトルがある『提案』をしてきた。

「レンジャースクール一日体験教室？」

サトルのその『提案』に、トイロはクラブハウスサンドを頬張ろうとしていた手を止める。一方で、カルボナーラをフォークで器用に纏めて口に頬張ったサトルはトイロの言葉に首を大きく縦に振った。

「そうそう！ 今、コガネにあるレンジャースクールでレンジャーの授業がどんなもんか、一般のトレーナーも体験できる一日教室が開かれてんだよ。オレさ、レンジャーの仕事にちよっただけ興味あるんだよね。後学のためにも、行ってみねえか？」

今日なら午後の部から参加できるぜ。とサトルはサラダを口にし

ながら、一冊のパンフレットを取り出してトイロに差し出した。受け取ってみると、可愛いイラストと一緒に『ポケモンレンジャーの仕事体験してみよう!』の文字がトイロの視界に飛び込んでくる。

早速、シレンがその提案に楽しそうに了解の意を示すように首を縦に振った。

「面白そう! レンジャーの本場、フィオレ地方の出身としても、こっちのレンジャースクールでどんな授業をやっているかはすごく興味があるわ!」

「ふむ。レンジャーの一日体験でござるか。某もこれからの経験値の一つとして、レンジャーの技術はしかこの目に焼き付けておきたいでござるな」

どうやら、マサムネもこの提案には賛成のようだ。尤も、彼は国際警察。似たような仕事を知ること、自らを高めたいという気持ち強いのだろう。それに、ここ最近の彼は酷く『強さ』というものに貪欲である。吸収できるものはどんどん吸収しておきたい。ということだろうか。

一刻も早く父の安否を知るためにも、そして伝説のポケモンのことを調べるためにも次の町であるエンジュシティに急ぎたいトイロであったが、民主主義たすけつには勝てなかった。それに、本音を言えばレンジャーという仕事に興味があることも嘘ではない。

「む。皆がそこまで言うのであれば、ボクも行くつもりではないか」
「素直じゃねえな。どうせ、エンジュに行きたいのが半分で実はちやっかり自分も興味があるのが半分なんだろ?」

「うぐ……」

小憎たらしい幼なじみに心の中を完璧なまでに読み取られたトイロは、思わず言葉に詰まる。ごまかすようにクラブハウスサンドを頬張ったが、サトルの表情はニヤニヤとしていた。

「ほんじゃま。腹ごしらえしたらレンジャースクールに行ってみようぜ。確か、ここからそう遠くないはずだしな。……マスター、ナ

ポリタン追加でよろしくう！ もち大盛りでな！」

「サトルくん、すつごく食いしん坊ねえ。これで何皿目かしら？」

「次のナポリタンを食べたらちようど十皿目でござる。そしたら料金はタダでござるな」

『パスタ大盛り十皿食べたなら料金全部キャッシュバック！ 集え、大食いの勇者たち！』

そんな張り紙の張られたカフェで、タダの一言に惹かれてその挑戦に乗った無謀な馬鹿のチャレンジをトイレたちが呆れた目で見守る中、サトルはマスターの痛々しい叫びをバックに十皿目のパスタにフォークを刺していた。

三十分後。トイレたちはコガネシティの外れにあるレンジャースクールに足を運んでいた。サトルが体験入学の希望者であることを受け付けの事務員に説明すると、事務員はすぐに放送機器を使ってクロエという人物に呼び出しを掛けた。

そして数分後、

「んにやにや？ 君たちが体験をキボーしているって子たちかな？

アタシはクロエ。サキサカ クロエっていうんだよん。よろしく

ね〜ん」

「にゃんにゃあ」

とんでもなく不思議なテンションの電波娘がトイロたちの前に現れた。彼女の隣では、同じようにテンションの高そうなピンク色の毛並みと細い目が特徴の“こねこポケモン” エネコがくるくると回っている。

トイロたちが呆気にとられ、すでに慣れているらしい事務員が盛大にため息をつく空気の中で、クロエと名乗った電波娘はベリーシヨートでパーマのかかった亜麻色の髪を揺らして楽しそうにニコニコと微笑んでいた。そうして、事務員が手渡してきたトイロたちのトレーナーライセンスのコピーをふむふむと眺める。

数秒後、

「うん。とろろにしれしれ、さとるんにまさむーだね！　しっかり覚えてよん」

コピーから目を離して満面の笑みで言ったクロエに対し、

「「「「お、覚えてねえええ！」「」「」」

全員が口をそろえてそう言ったのであった。

そうして体験入学の担当職員であるレンジャー　クロエに連れられ、トイロたちはコガネビーチの一角　レンジャースクールが貸し切っている自然なままの形を残した砂浜へと足を運んでいた。

「はい。これがキャプチャ・スタイラーだよん。これを使えば、ど

んなポケモンとも心を通じ合わせることができるとわねん」

ビーチに到着すると、クロエは腰に提げた小さなポーチから、手のひら大で丸みを帯びた銃身の無い拳銃のような形をした道具をトイロたちに見せてきた。その先からベーパーゴマのような物体を取り出すと、クロエはそれを指差して説明を始めた。

「使い方はちよー簡単。スタイラーのスイッチを入れてポケモンに向ければ、スタイラー内のセンサーがポケモンを認識してこのキャプチャ・ディスクがスタイラーから飛び出す。手首のスナップを利かせてスタイラーを回転させればディスクが回転するから、それがポケモンに触れずに一周すれば、キャプチャの成功だよん」

説明しながら、クロエはディスクをスタイラーに戻して装着すると、海岸でのんびりとしていたキャモメに向けて放つ。キャプチャ・ディスクがキャモメの周囲を一周すると、キャモメは一目散に飛んできて、まるで自分のトレーナーであるかのようにクロエの肩にゆっくりと止まった。

本物のレンジャーの鮮やかなスタイラー捌きに、トイロたちは思わず感心の声を上げた。クロエが誇らしそうに笑顔を見せると、彼女の横でエネコも誇らしげに鼻を鳴らした。

「レンジャーのお仕事は幅広くって、密漁者に襲われたポケモンの救助や災害が起きた際にこうやってポケモンの力を借りて被害を最小限に防ぐこと、それに警察と協力してポケモンに害を為す悪い人間を懲らしめたりすることなんだよん」

キャモメをリリースしながら、クロエはポケモンたちが戯れるビーチをとても楽しそうに見つめた。その瞳からは、本当にポケモンが大好きで、自然が大好きであることが良く見て取れた。

「ほいじゃま、習うより慣れる、練習あるのみ！！ ってなワケで、実際にキャプチャを体験してみよっか」

そう言って、クロエは持ってきたポーチから出したキャプチャ・

スタイラーをトイレたちに渡してきた。トイレたちがそれを腕に装着すると、今度は浜辺をうろついている“さわがにポケモン”のクラブや時折水面から顔を覗かせる“くらげポケモン”のメノクラゲたちに視線を投げる。

「装着できたら早速キャプチャキャプチャ！ 初めてだからちよつと大変かもだけど、ウチが説明しながらやればきつとダイジョーブ！ ほんじゃ……」

いってみよー！ という元気な掛け声は、突然起きた爆発音によって掻き消された。目の前で巻き起こる砂煙。続けて聞こえてくるのは、ポケモンたちの悲痛な叫び声。

「えっ……？」

「な、なんだなんだ！」

戸惑うシレンとサトルに対し、マサムネの動きは素早いものだった。瞬時に四人の前に躍り出て背中中のベスト裏に隠していた忍者刀を抜刀し、更に腰のベルトからピカチュウを展開させる。

「“でんげきは”！」

「ぴかっ！」

ピカチュウの蓄電袋から放たれる青白い雷^{いかずち}。砂煙に向けて放たれたそれは、砂煙の向こうで弾けて飛んだ。

間髪入れずに、マサムネはもう一つモンスターボールを放る。ボールから出てくるのはアリアドスだ。

「“サイコキネシス”で煙を払え！」

「キシーツ」

マサムネの言葉に呼応して、アリアドスの目が光る。一気に晴れた視界の向こうから、一人の男がストライクを携えて現れた。

男の姿は、レンジャースクールではかなり浮いた姿であった。黒と紫が基調のぴったりとしたボディスーツに黒のマントとロインク口ス。極めつけは、その顔の大半を覆う仮面だ。何を考えているか

がまったく分からない。ただ、男の放つ“殺気”はトイ口たちの背筋を凍らせるに十分な威力を持っていた。

「エネエネ、みんなを守るよ！」

「にゃあつ！」

男の殺気に怖気づくことなく、クロエがエネコを前に踊り出させて構える。エネコも臨戦態勢に入り、男とストライクを睨みつける。

だが、それに対し男の口から洩れたのは、嘲笑であった。

「雑魚か……。そんなもの相手にしたってなあ……」

「なんなんですってー！ エネエネ、アイツをとっ捕まえちゃうよ！」

“おうふくビンタ”！

「にゃにゃつ！」

エネコが、男に向かって駆ける。その前に、ストライクが立ちはだかった。

「エネエネ、そのままストライクをぶっ飛ばしちゃえ！」

「にゃあつ！」

「……ストライク、その雑魚を潰せ」

叫ぶクロエとエネコに対し、男はただ一言だけ、そう呟いた。男のストライクも、ただ静かに両腕の鎌をエネコに振り上げる。

両腕の鎌が振り上げられた瞬間、マサムネが目を剥き、即座に叫んだ。

「アリアドス、“いとをはく”！」

「キシッ！」

マサムネの叫びに呼応し、アリアドスがエネコを吐いた糸でがんじがらめにした。

「にゃつ？」

エネコの戸惑いを余所に、マサムネはエネコに巻きついた糸を思い切り引っ張る。間一髪で、ストライクが振り下ろした鎌が先ほどまでエネコがいた位置に振り下された。

戻ってきたエネコに絡みついた糸を剥ぎながら、クロエがマサムネを強く睨む。

「ちよつとまさむー！　なんで邪魔したのん!?」

「奴の鎌には猛毒が仕込まれているでござる！　迂闊に近寄るのは危険ですぞ！」

いつものマサムネからはあまり考えられない大きな声に、トイロたちは思わず目を剥いた。慌ててストライクの鎌を見やると、ストライクが鎌を振りおろした地面が腐敗臭を漂わせながら細く煙を吐いていた。驚愕する一同を余所に、マサムネは男から目を離さないまま、トイロに話しかける。

「姫。みなさんと共にお逃げください。ここは某が引き受けるでござるー！」

「え、ちよ、マサムネ!?」

トイロの制止も聞かないまま、マサムネはピカチュウを肩に乗せて男に向かって駆けだした。その手に握られているのは、四本のクナイと四枚の手裏剣。

「雷遁・雷刃牙^{らいじんが}」!

「ぴかつ！」

男とストライクに向けて放たれたクナイと手裏剣に、ピカチュウの“10まんボルト”が重なる。雷を帯びた刃^{しりげ}と牙が、男たちに襲いかからんとする。

だが、

「……………くだらないな」

男が口にしたのは、ただ一言だけだった。男が片手を軽く上げただけで、ストライクが両の鎌から旋風を巻き起こした。“かまいたち”である。

「ちっ！」

「ぴいつ!?」

ストライクの“かまいたち”と相殺して男たちに届く前に地に落ちた手裏剣とクナイに、マサムネが思わず舌打ちをする。ピカチュウ

ウの方はよほど技に自信があつたのか、防がれたことに大変驚愕していた。

男は、そんなマサムネにすら、目もくれない。

「……ターゲットは二人。二人程度なら、片手だけで十分だな」

「？ なんのことでござるか？」

男の発した言葉に、マサムネが問い返す。トイロたちは足が竦んでいるのか、まだマサムネの後ろにいるようだ。時間を稼ぐために話に反応したマサムネは、男が先ほど上げた手の手首に巻かれた“それ”に目を剥いた。

「お主、それは、まさか……！」

驚愕するマサムネの表情に何を感じたのか、男の口端が笑うように上がった。

「……堕ちろ」

宣告するように呟く男の声。それと同時に、男の手首から何か小さなものが三つほど飛び出した。

その飛び出した“何か”に、今度は全員が驚愕した。

「おい……、アレ、キャプチャ・ディスクじゃねえか!？」

サトルが“それ”　キャプチャ・ディスクを指差して叫んだ。

確かに、トイロたちの目の前に現れたそれは、今彼らが手首に装着しているものと全く同じ形をしていた。違うところがあるとすれば、色。トイロたちが付けているディスクが鮮やかな青を基調としているのとは対照に、男の手から飛び出したディスクは漆黒に塗りたくられていた。

次に起きたことは、トイロにも説明がつかなかった。男の手から

飛び出したキャプチャ・ディスクがその場にいた野生のキャモメやメノクラゲを囲み終えたと思ったのも束の間、突如ポケモンたちがトイロに襲いかかってきたのだ。

「なっ！」

慌てて、ポケモンたちの攻撃を避ける。ポケモンたちは野生で、その上本来群れない者と共にいるにもかかわらず、まるで最初から仲間であったかのような見事な連係プレーでトイロたちに襲いかかる。

「姫！」

トイロたちが攻撃されている様子に、マサムネも慌てて駆けだした。

だが、

「お前の相手は……コイツだ」

「っ！」

仮面の男の声が、マサムネの動きを止める。そして更に、ストライクの鎌が容赦なくマサムネに襲いかかってきた。

「ちいっ！ “リフレクター”！」

「キシッ！」

すぐさま、マサムネはアリアドスに防御技を命じた。ストライクの鎌とマサムネの間に、不可視の盾が生まれ、ぎりぎりのところでマサムネは後ろに下がった。

「見たところ、厄介なのは貴様一人のようだからな。だから、お前には行かせない」

「……………」

仮面の男は、相当キレ者のようだった。猛毒の鎌を避けながらトイロたちを助けに行っても、その鎌がトイロたちを襲っては意味がない。マサムネは覚悟を決め、忍者刀を握り直した。

「……一つ、聞かせるでござる」
「……？」

静かに、マサムネは男に訊ねた。後ろから、トイロたちがポケモンを展開させて野生ポケモンたちに対抗している音が聞こえる。トイロたちを信じ、また男の気を自身に向けるためにも、マサムネは言葉を続けた。

「お主の雇い主を言え。それから……何故、姫とシレン殿を狙うのか、答える」

マサムネの質問に、男は少し驚いたように表情を強張らせた。だが、それもつかの間、男は口元を歪めるように吊り上げる。

「……ふうん。気づいたのか。国際警察は伊達じゃないということか」

「仮面と言えど、視線を追うのは容易いこと。お主の視線は……あの二人だけを捕らえているでござる」

マサムネの推理に、男は小さく笑い声を上げた。少し楽しそうだが、そこにあるのが喜びではなく憎悪であることを読み取ったマサムネは、男に戦慄を覚える。

少し間を置いて、男は口を開いた。

「知るか、クソが」

そう言った男の手首から、再び何か飛び出し、それはまっすぐとトイロたちに向かって飛んで行った。

そう、ようやく野生ポケモンたちを全部追い払うところまで行っていた、トイロたちの元へと。

「しまっ！」

「お遊びはここまでだ。……俺はただ、全てに復讐し、全てに絶望

を与えるのみ」

男の言葉だけが、荒々しい雰囲気、砂浜で、静かに聞こえた。

今回のテーマ

『変なレンジャー、登場！』

『そして謎の男も登場！』

新キャラが一気に二人登場ですw

まずは一人目。ちよっぴり不思議な口調が特徴のレンジャー、クロエちゃんです。

クロエのキャラは、レンジャーを登場させようと考えたときに突然どこからともなく降臨してきました（マジで

トイロに負けず劣らずの不思議口調の使い手。こういう口調もなかなかないかと思われませう。極めつけはセンスがよく分からないニツクネーム。

エネコをパートナーにしたのはあののほんとした雰囲気やクロエにマッチしていたからです。クロエはレンジャーなので所持ポケモンはエネエネですが、レンジャーらしくいろいろな野性ポケモンの協力を得た活躍を書いていけたらなと思っております。

そして、もう一人の新キャラ。謎の仮面男。

目的のみマサムネによって判明しましたが、それ以外は一切不明。彼の素性は次回にほんの少しだけ明かされる予定です。

彼についてはまだまだ話すことが少ないので、こちら辺で。

彼のこれからの動きにも注目してもらえたらなと思っておりますw

次回、仮面男の放ったキャプチャ・ディスクが襲ったものとは！？

そして、彼の仲間も登場！ その意外な人物とはいかに！？

では、また次回お会いしましょうw wノシ

P・22 救済と復讐（後）（前書き）

えー、長らくお待たせいたしました。

ようやくトイロ更新です！

挨拶は短めに、では、どうぞ！

野生ポケモンたちは、何とか追い払うことができた。

ただ妙だったのは、彼らの雰囲気とまるで一つの軍隊を相手取っていたようにも思える連帯感。

目は虚ろなのに、トイロたちだけを敵であるとはつきりと認識していたような彼ら。それはまるで、彼らを誰か第三者が操っているようにも見えた。

「姫！」

最後の一体だったメノクラゲを、マリルの“すてみタツクル”で何とか蹴散らしたトイロの耳を、マサムネの声が叩いた。次の瞬間、トイロの視界にあの“黒いキャプチャ・スタイラー”が飛び込んでくる。

「りるっ!?!」

「まあちゃん、戻るんだ！」

すかさずトイロは、マリルをモンスターボールに戻した。黒いキャプチャ・スタイラーが、つい先ほどまでマリルがいた砂浜に埋まる。それが放った黒い火花のような線に、トイロは思わずぞっとした。

（これが、ポケモンたちを操っていた元凶というわけか……）

尚も激しく回転し砂浜に減り込む“それ”を改めて目の当たりに

し、トイロは寒気を覚えた。“黒いキャプチャ・スタイラー”から出る黒い火花のような閃光が、今マサムネが対峙している男から放たれる殺気と共鳴しあっているような感覚だった。

そんな風に考えていた矢先、トイロの背後で激しい水飛沫が立つ音が響いた。

「きゃああああ！」

続けてトイロの耳を叩いたのは、シレンの悲鳴だった。

「シレン！」

慌ててシレンの声が聞こえた方を振り向く。トイロの視界に飛び込んできたのは、蹲るシレンとそれを見下ろすように立つバイゼル。

そのバイゼルは、まさしくシレンのポケモン　　バイのすけだった。

「何してんだバイのすけ！　そいつはお前のトレーナーだろ！」

シレンたちのすぐ傍にいたサトルが、激昂しながらモンスターボールを展開させる。出てきたのは、ベイリーフだ。

「“つるのムチ”でバイのすけを止めるんだ！」

「ベイ！」

ベイリーフが首の付け根にある葉っぱ状の突起物の二つを“つるのムチ”に変えて、バイゼルへと伸ばす。

だが、すぐにその場を冷気が包み込み、それがベイリーフの動きを止めた。バイゼルが放った“ここえるかぜ”だ。

「ベイリーフ！」

「……ブイツ」

続けて、バイゼルの尻尾から二つの真空波　　“かまいたち”がサトルとベイリーフを襲う。サトルがすぐさまモンスターボールを出したので、ベイリーフは直撃を免れたが……、

「うわあっ！」

「サトル！」

後方にいたサトルは、“かまいたち”の余波を受けて吹き飛ばされた。怪我はないようだったが、サトルは倒れたまま動かない。気を失っているようだった。

そこでトイロは、ブイゼルの様子に変なことに気づいた。目が虚ろで、息も絶え絶え。更には、ブイゼルの体を時折黒い閃光が走っている。

「まさか……！」

「……ちっ。キャプチャできたのは、一匹だけか」

トイロの焦りが混じった声に、男のため息が重なる。間違いなかった。ブイゼルは、男が放った“黒いキャプチャ・スタイラー”に捕らえられたのだ。

「そんな……。こんなの、キャプチャじゃないよん！」

男のため息に、クロエがすかさず反発した。その顔には、トイロたちにキャプチャを教えたときには全く浮かんでいなかった怒りの感情が露わあらになっている。

キャプチャとは本来、“キャプチャ・スタイラー”という“媒体”を用いて、ポケモンと心を通わせる動作だ。

だが、男の言う“キャプチャ”は、それとは完全に掛け離れた行為だった。あれでは、ブイゼルと“心を通わせた”と言うより、“ブイゼルの体の自由を支配した”と言った方が近い。それほどに、ブイゼルの様子は異常だった。

「無理矢理言うこと聞かせるなんて、許せないよん！ エネエネ、ブイのすけちゃんを止めるよん！」

「にやにやあっ」

クロエの強い言葉に、エネコが応える。

だが、

「ブイゼル、“うずしお”を使え」

男の声が、静かに砂浜に響いた。

「ブイツ」

男の言葉に応えるかのように、ブイゼルが巨大な“うずしお”を造り上げ、クロエたちに向けて投げつけた。

「そんなの、弾いちやうよん！ エネエネ、“10まんボルト”！」
「にやあつ！」

クロエの声に、エネコの体から電流が迸る。それは、前方からやって来た“うずしお”と激しくぶつかり合い、相殺したかに見えた。

だが、あるうことがブイゼルの“うずしお”はエネコの放った“10まんボルト”を突き破り、且つ全く威力を衰えさせずにエネコとクロエに襲い掛かった！

「にやああつ！」

「ひゃああん！」

「クロエ！」

“うずしお”に巻き上げられ、砂浜に落ちるクロエとエネコ。双方大きな怪我はないようだが、それ以上に精神へのダメージが大きかったようだ。クロエの方は、砂浜に落ちたときの打ち所が悪かったのか、ぐったりとして動かない。

倒れるシレンの元へと辿り着いたトイロがクロエを心配そうに見ると、視界の端で男の口元が笑みを浮かべるのが見えた。

「ポケモンレンジャーも、国際警察も、所詮はその程度か」

クロエの気絶に気づいたらしく、男の声はほんの少しだけ高揚しているようにも聞こえた。

マサムネは、まだストライクに苦戦しているようだ。マサムネが苦戦しているということは、男のストライクのレベルは相当のもの

なのだろう。

サトルは、まだ意識が戻っていないようだ。クロエもまた、同様であった。シレンも、水浸しになって気を失ったままだ。全員回復するには、まだ時間がかかる。

男が仕掛けてきたいくつかの攻撃で、男の狙いがシレンであることはトイロも見抜いていた。だが、普通の女の子であり、旅するポケモンコーディネーターであるシレンを狙うなど、想像もつかない。

そう、彼女が“ダークライ”を所持していることだけを除けば。

だが、シレンはダークライを手持ちに入れていることは徹底して隠しているようだった。コンテストなどの公の場にも、ポケモンたちのトレーニングを行うときにも、彼女はダークライを決して出していないかった。

だから、彼女がダークライを持っている事を知っているのは、トイロたちを除いてただ一人しかないはずであった。

(だとすれば、やっぱりボクのせい……)

トイロの脳裏に、暗い考えが過ぎった。トイロを狙う集団の中にいる、シレンの幼馴染だというクレセリアを連れた青年。

男をここに導いたのは、十中八九“七人の咎人”^{セブン・フォール}の者だろう。“七人の咎人”の狙いは、トイロだ。シレンは偶然にもその中に知り合いがいただけで、偶然にも彼らの狙いであるトイロと知り合ってしまったただけなのだ。

自分と関わらなければ、シレンは今もコーディネーターとして平和な一日を過ごしていたはずなのに。

どうすればいいのか分からない。マサムネの必死な叫びがトイロの耳を叩いているようだが、今のトイロにはそれがただの振動とし

てしか伝わってこなかった。

今、自分が成すべき事は何なのだろう。友を守りたい。夢がない自分とは違い、夢を見て、その夢に向かって邁進する友を。小憎らしいが、でもいつだって自分の味方であり続けてくれる頼もしい幼馴染を。ただ自分を守ると、それが自分の使命であると力強く言葉にできる強い友を。そして、夢を叶え、更にその夢の本質であるものを心に生きる友を。

弱い自分にできることは何か。

大切なものを傷つけず、誰も傷つけさせないために自分ができることは何か。

シレンを砂浜にゆっくりと下ろすと、トイロは静かに立ち上がった。

トイロが動いたことに、男も微かに反応した。男とトイロの視線が重なる。

トイロは静かに一度だけ息を吐くと、迷うことなく自分の腰からモンスターボールを付けたトレーナーズベルトを外して後方に投げた。

「姫、何を！」

マサムネの怒号が、はっきりと聞こえた。マサムネが怒るのも無理はない。今のトイロの姿は完全に丸腰であり、また自らそれを行ったのであるから。

けれど、トイロはそれでもその場から動かなかった。男が右手を腰に沿え、小さく首を傾げた。

「何の真似だ」

「君の狙いはボクのはずだ。なら、ボクだけを狙いたまえ。他の人に手出しをするなら、ボクはどんな手を使ってでもそれを止める！」

男に向かってそう言いつつも、トイロの足は大きく震えていた。ブイゼルも、まだこちらを敵視しているし、何より男の放つ“殺気

”と“憎悪”にトイロは当てられ過ぎていた。おそらく、今ここで男がサトルやクロエに手を出しても、トイロはこの場から動くこともできず、ただそれを絶望を抱えて見ることにしかできないだろう。それでも、トイロは恐怖に震える自分の中に熱く燃える“怒り”を抱えている自分がある事を認識していた。

だが、男の表情はトイロを愕然とさせた。

男は、笑っていたのだ。仮面をつけていても明らかにそうであるとは分かるほど、明確に。

「くだらねえ。くだらねえよ、お前」

男の冷ややかな言葉が、トイロに突き刺さる。

「な……」

「ブイゼル。その女に“みずのはどう”だ」

「ブイツ」

ブイゼルの両手に水の球体が現れる。“みずのはどう”は、相手を水の球体に閉じ込めたり、波動を衝撃波として相手にぶつける技だ。どちらにしても、あれを喰らったらトイロは無事ではすまない。

「姫、逃げてくださいえ！」

うずくまりながらも叫ぶマサムネの声が、砂浜に響く。だが、既に心を男に踏みにじられたトイロの足は、一ミリたりとも動かなかつた。

「姫え！」

マサムネがモンスターボールを放ろうとするが、それを男のストライクが阻む。アリアドスがそれを補助しようとして“いとをはく”で応戦したが、ストライクの鎌はそれを難なく切り裂いた。

「……堕ちるがいい、女」

男の声を合図に、ブイゼルから“みずのはどう”が放たれる。
トイロは、ただ呆然と立ち尽くしていた。

『……ブイのすけ、なにをやっている』

トイロに“みずのはどう”が届く直前、そんな声が砂浜に落ちた。

続けてトイロの後方から黒い線状の波 “あくのはどう”が伸び、“みずのはどう”を相殺する。トイロが呆けたまま力を失った両足を崩れさせると、背中を誰かが支えてくれた。

『すまない。人前には決して出ない。そう、シレンと約束していたものでね』

「……ダー、ちゃん？」

トイロの背中を支えていたのは、ダーククライだった。ダーククライは無言でトイロを砂浜に座らせると、ブイゼルの前へと躍り出た。

『だが、もうそういうわけには行かないようだ』

ダーククライの後姿は、戦場と化した砂浜には場違いなほどに落ちて着いており、また悲しげな雰囲気を持っていた。彼が今、何を考えているのか、トイロには分からなかった。

一方、ダーククライを目の前にして、仮面の男から先ほどの笑みが消え去った。男の表情は相変わらず仮面のせいで読みづらいが、ダーククライを目にした瞬間、男の口元が歯軋りをしているのが見えた。

「てめえは……!!」

『状況はすべてボールの中から見ている。そのブイゼルは私の友だ。返してもらおうぞ』

「何が友だ! ざけたことぬかしてんじゃねえぞ! ブイゼル、アクアジェット”を使え!」

「ブイブイツ!」

男の怒りに呼応するかのように、ブイゼルの体を激しい水流が包み込む。水流を身に纏ったブイゼルは、そのまま勢いをつけてダークライに突っ込んできた。

『ブイのすけ、目を覚ませ!』

ブイゼルがぶつかってくる一瞬前に、ダークライの両爪が鋭くなる。ダークライは虫タイプの物理技“シザークロス”でブイゼルを受け止め、そのまま砂浜に叩きつけた。

「ブイツ……」

ブイゼルが苦しそうな声を上げる。その声に、ダークライの表情が苦悶のものへと僅かに変わった。

砂浜に叩きつけられたまま、ブイゼルは動かなくなった。どうやら気絶したようだ。ダークライの表情が少しだけ和らぐ。

と、そのとき、

「ぐあつ!」

「マサムネ!?!」

トイロたちから少し離れた場所で、マサムネの叫び声が鳴った。

マサムネが腹を抱えてうずくまっている。どうやら、ストライクの“みねうち”をモロに喰らってしまったようだ。アリアドスの方はマサムネの後方で目を回していた。

ストライクの鎌が、マサムネの頭上に振り上げられる。鎌から滴る液体は、猛毒だ。

『……すまない、シレン。約束をまた破る』

ダークライの静かな声と共に、その右手に黒い球体が出現した。
『間に合え！』

ダークライの声を合図に、黒い球体が右手からストライクに向かって飛んでいく。球体はちょうど鎌を振り下ろそうとしたストライクに当たり、一瞬のうちにストライクを中心に広がった。

「あの、技……」
『“ダークホール”という。私たちダークライだけが使える、相手を強制的に眠らせる技だ』

ダークライの言葉の通り、ストライクがぐったりと砂浜に倒れこむ。ストライクの口から、苦悶の鳴き声が聞こえてきた。

ストライクの苦しげな鳴き声に、ダークライの表情がまた苦しげに歪んだ。

『私は結局、変わらないままなのか……』

「ダーちゃん？」

ダークライの呟きに、呆けたままだったトイロは小さく首を傾げた。

そのとき、仮面の男が一步前に出た。

「何感慨にふけていやがる！ まだ俺は倒れてねえぞ！」

仮面の男の言葉に、トイロは思わず身構えた。そうだ、確かに男のストライクを眠らせたことで、戦力を削ることができたが、男にはまだ“黒いキャプチャ・スタイラー”が残っているのだ。

仮面の男が、ダークライとトイロに一步步み寄る。

「さあ、どうするつもりだ！ と言っても、俺を止める方法がもう一つしかないことは分かっているんだろうが！」

仮面の男が、それまでトイロとシレンにしか興味を示していなかった男が、今はダークライだけを見ていた。

男の言うことは確かに頷けることだった。今、男を止める方法は、恐らくたった一つだけしか残されていなかった。

ダークライの“ダークホール”で男を眠らせる。

一時的ではあるが、ダークライの“ダークホール”の威力は絶大だ。トイロたちが安全に逃げおおせるには、それが一番いい方法だろう。

だが、ダークライは首を横に振った。

『断る』

ダークライが言ったのは、それだけだった。仮面の男がまた強く齒軋りをした。

「あ、どうした？ 放ってこないのか？ 俺をまた潰しに来ないのかよ？ おい、どうなんだよテメエ」

どうやら、仮面の男はダークライを別の個体と勘違いしているようだった。仮面の男の口ぶりに、トイロは小さな違和感を覚える。

（この人、前に“ダークホール”を受けたことがあるのか……？）

疑問を抱くトイロを守るように、ダークライがトイロと仮面の男の間に立ちふさがった。

『私は、もう誰にも悪夢を見せたくないんだ。だから、断る』

ダークライの言葉は強い響きを持っていた。だが、仮面の男は静まるどころか逆に高揚したように両手を広げる。

「だったら……、テメエも今すぐ墮ちるがいい！」

仮面の男の両手から、また“黒いキャプチャ・スタイラー”が飛び出した。飛び出した二つの“黒いキャプチャ・スタイラー”が一直線にダークライへと向かってくる。

ダークライが再び“シザークロス”で迎撃しようと両手の爪を光らせた、そのときだった。

「やめろ、キル」

聞き覚えのある、男の声が頭上から響いてきた。それと同時に、

“黒いキャプチャ・スタイラー”の動きがピタリと止まる。

「っ！」

『……………クレセリアか』

目の前で動きを止めた“黒いキャプチャ・スタイラー”を前にして、ダークライは空を仰いだ。

トイロたちの頭上に、クレセリアを携え、リザードンの背に乗った大柄な男 “七人の咎人”第三位・“憤怒”のイラが、いた。

イラは、特にダークライには目もくれず、視線を仮面の男へと移した。

「キル。てめえ、もう少し静かに行動できねえのか。上からでもかなりでかい音が聞こえたぞ」

「ああ！？ 俺が言われたのは、その女どもを襲えっただけだ！ それ以上のことなんか知るかよ！」

イラの苛立ちが込められた声に、仮面の男 キルが怒鳴るように答える。自分の予想が当たっていたことと、更にイラの登場によって形勢が完全に不利となったことに、トイロは焦りと不安を覚えた。

だが、イラは小さくため息をつくとき、リザードンの首を軽く叩いた。すると、リザードンは滑らかな滑空でキルの真上へと降りて彼の腰を両腕で掴んだ。

「な、何すんだよ！」

「今日のところは引き上げだ。さっき、レンジャースクールから何人かがこっちに向かってくるのを見た。連中に捕まるのはごめんだ」
『賛成ね。私たちは別に連中に姿を晒したくて、ここに来たわけじゃないもの』

面倒くさそうに言うイラに、クレセリアがにこやかに賛同の意を述べた。キルは、その言葉を聞くと何故か黙り込み、ただ小さく舌打ちをした。それを確認したクレセリアが“サイコキネシス”でキルのストライクを浮かせると、そのまま自分の背中にストライクを乗せる。

そこで、クレセリアとダークライの視線がはじめて交錯した。双方、言葉は一切交わさなかった。だが、クレセリアはそんなことなど全く気にも留めていないかのように、ダークライとトイロの前を堂々と素通りしてイラの横に並んだ。

『それじゃあ、私たちはコレで帰るわね。後の処理、よろしくお願
いするわ』

クレセリアのその言葉を最後に、イラとクレセリアはキルを連れて海の彼方へと飛んでいってしまった。それと同時に、後方から何

人かの人の声が聞こえてきた。

『……まいったな。もう、隠し事も続けられなくなってしまった』

そんなダークライの諦めに満ちた弦きが、ようやく静けさを取り戻した砂浜に落ちて掻き消えた。

今回のテーマ

『トイロ、怒る』

『ダーちゃん、解禁』

キルクんの怒り様があまりに凄いため、イラが可愛く見えた旅から
すです（撲殺）

今回も、ポケスロンに引き続きトイロが感情を強く表に出します。
世界を知ること、それまで向き合うことのなかった自分と向き合
うトイロを、これからも見守ってくださいm（ー）m

そしてそして、ついにダーちゃんが人前に姿を現しました。
シレンと交わした約束を破ってまで仲間を救おうとしたダーちゃん、
そして、そんなダーちゃんと五年ぶりの再会を果たしたクレセリア。
二体の間にある話はまだ伏せますが、これからシレンと共に数々の
壁を超えようと頑張るダーちゃんやブイのすけたちにも注目です。

さてさて、今回は久しぶりのInterval。今回はシレンの手
持ちたちをアップしながら、敵勢力に対応しようとして模索する人々を
描く予定です。
秘密を知られたシレンと、自身の弱さを嘆きながら、強さを求める
ポケモンたちが出した答。

暖かくなってきたので、より一層頑張って書いていきます。
では、また〜。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4885i/>

十色のキセキ

2011年10月3日19時23分発行